魔法少女リリカルなのは～Last Wizard～

Theater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～Ｌａｓｔ　Ｗｉｚａｒｄ～

【Ｎコード】
Ｎ８４６６Ｔ

【作者名】
Ｔｈｅａｔｅｒ

【あらすじ】
永遠となったあの日から、出会いと別れを繰り返す青年と、魔法に出会った少女の物語。

プロローグ（前書き）

初めまして、Ｔｈｅａｔｅｒと言います。

　これが初投稿になります。原作知識は、あまりありませんし、文章を書くのも初めてなのでどうなるかわかりませんがなんとか頑張っていきたいと思いますのでどうかよろしくお願いします。

プロローグ

薄暗い部屋の中で一人の青年が溜息をついていた。

「はぁー退屈だな」

だるそうに椅子に座りながら遠くを見つめていた。

＜　マスター、なにをそんなに溜息をついているのですか？　＞

青年の首元から女性らしい声が聞こえた。

「ああ、最近やることがなくて暇なんだよ。」

青年は、その声に溜息の原因を言った。

＜　そうですか。それなら、どこかへ出かけてみては？　＞

声の主はそう答えた。

「そうだな。よし、久しぶりにあの世界に行ってみよ。」

青年は立ち上がり目的地へと旅立って行った。

プロローグ（後書き）

主人公の名前は次話でわかります。
次話は主人公が小さな頃の彼女に出会います。まだ原作には、行きませんのでオリジナルなことになると思います。

第1話　「青年と少女の出会い」（前書き）

第1話です。無印前なのであまり長くはないはずです。

第1話　「青年と少女の出会い」

第９７管理外世界＜地球＞ここに一人の青年が降り立った

「懐かしいなぁ。久しぶりにきたけど結構街並みが変わってるな。」

＜　そうですねマスター　＞

青年の首元から十字架の形をしたネックレスが話し出した。

「さて、まずは住む所を探さないとな、インフィどんな所がいいかな？」

＜　あまり長く滞在しないならマンションでいいかと思います　＞

インフィと呼ばれたそのネックレスは青年のデバイス＜インフィニット＞である。

「そうだな。じゃっいろいろ回ってみるか。」

いろいろ物件を見て回って、ある１つの高層マンションに決めることになった。

「なかなか良い部屋だな、広いし眺めも最高だな。」

青年は決めた部屋に満足がいったのかご機嫌な様子あった。

＜　マスター、そろそろ街に出てみましょう　＞

「ん、ああそうだな街を探検にしに行ってみるか。」

青年とインフィニットは、街に出て周辺を散策することにした。
近くのスーパーや雑貨店など生活に必要になるような店などを確認していきそろそろ休憩しようと近くの公園のそばに来ていた

「あれ？」

＜　どうしましたマスター　＞

急に主が立ち止ったのでインフィニットは何事かと思い声をかけた

「なにか聞こえる、これは泣き声か？」

青年は、泣き声らしき声を聞き急ぎ足で公園の中に入って行った

「ひっぐ・・・えっぐ・・・」

公園の中に入ってみると5歳ぐらいの女の子がブランコに乗って泣いていた。青年はそっと女の子に近づき優しく声をかけた

「どうしたの?なんで泣いているの。」

「ふぇ！」

突然声をかけられたからか女の子はビクッとして振り向いた

「どうして泣いてるの?もしかして迷子にでもなったの。」

「ううん、違うの、なのはは1人で良い子にして遊んでいるの。」

「（泣きながら遊んでいる奴なんか見たことないよ。）」

青年はそんなことを考えながらとなりのブランコに腰を下ろした

「遊んでるはいいとして、泣いている理由はなんなの?」

「お父さんが怪我して入院してるの。それでお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもお店が忙しくて、だからなのはは良い子にしてきゃ

いけないの。」

「そっか・・・・」

青年はその話を聞いてしばらく考え事をしていた。そして何かを思いついたのか女の子に向かって言った

「それじゃ、俺と一緒に遊ぼう」

「ふぇ！」

「だから、俺と一緒に遊ぼ、1人で遊ぶより2人で遊んだほうが楽しいよ。」

「で、でも」

「いいからいいから、ほら立って立って。」

青年は少女の手を掴み強引にブランコから立たせた

「俺の名前はレイリス、レイリス・ユースティアだ。」

「なのはは、高町なのはなの。」

「よし、なのはたくさん遊ぶぞ。」

「うんなの。」

そうして3時間が経ち2人ともくたくたになるまで遊び尽くした

「ん、もうこんな時間かなのはそろそろ家に帰る時間だ。今日はここまでにしよう。」

日が傾き始めたのでレイリスはなのはに帰るように言ったがなのはは

「やなの、帰りたくないの。帰ったらなのはまた1人になっちゃうの。」

帰りたくないと駄々をこねるなのはにレイリスは優しく語りかけた

「大丈夫だよなのは。なのはは1人じゃない俺がいる、それにお母さんたちもきっと心配してるだから帰ろう・・ね」

「わかったの、でも明日も一緒に遊んでほしいの。」

「うん、わかった明日の一緒に遊ぼう。」

そうしてレイリスとなのはは別れた。その帰り道レイリスはなの

はのことを考えていた

「遊んでいる途中で気付いたけどなのはすごい魔力の持ち主だな。」

なのはに魔力があったのに気付いたレイリスは不敵に笑った

「ふふ、これからなんだか退屈せずにすみそうだな。」

これから先のことを考え楽しそうにしているレイリス、けれど物語はまだ序章、始まったばかりこれから起こることはまだ誰にもわからない

第1話　「青年と少女の出会い」（後書き）

第1話でした。主人公の名前が出てきました、その名はレイリス・ユース
ティアです。名前は適当につけたのでその辺は勘弁してください。
さて2
話では高町家をだそうと思うのですがどうやってやろうかまだわかりま
せん。拙い文ですがどうか見守ってください。それでは、また2話で会い
ましょう。

第2話　「青年と高町家」（前書き）

第2話です。これで高町家が勢ぞろいします。口調とかがあっているか不安ですが、あまり気にしないことにします。

第2話　「青年と高町家」

次の日、レイリスは公園でなのはを待っていた

「レイお兄ちゃん。」

しばらく待っていると公園の入り口からなのはが走ってきた

「おお、なのは待ってたぞ。」

「へへ？」

「じゃ、さっそく遊ぶか。」

「うんなの。」

レイリスとなのはは、遊び始めた。鬼ごっこやかくれんぼなどいろいろ遊んだ。

「お、そろそろお昼だな。なのは一度家に帰ってお昼ごはん食べてからまた遊ぼう。」

「それなら、レイお兄ちゃんも家のお店で一緒に食べればいいの。」

「お店？」

「そうなの、翠屋って言うの。」

「（なのはのところの店か。ちょうどいいし家族の顔でも見ておくか。）」

「よし、じゃ行こうか。」

「うんなの。」

レイリスとなのはは高町家が経営している翠屋へ向かった。

―翠屋―

「ここなの。ただいまなの。」

なのはが、扉を開けて中に入っていくと奥の方から1人の女性が

出てきた

「あら、なのはお帰りなさい。」

「ただいまなの。」

「（なのはと同じ栗色の髪に顔立ちが似ているな。歳は17、8といったところかお姉さんかな？）」

レイリスが、そんなことを思っているとその女性がレイリスに気付き話しかけてきた

「えっと？あなたは・・・」

「あっ初めまして俺はレイリス・ユースティアといいます。えっと、失礼ですけどなのはのお姉さんですか？」

「まぁ？お姉さんだなんてお上手ですね。私は高町桃子、なのはの母です。」

「（えっ・・・・。えええええええええええええええええええええええ）」

レイリスは信じられないといった顔をして心の中で驚いていた

「（えっマジでうそだろ。お母さんだって、どう見たって高校生にしか見えないんだけど）」

「もしかして、あなたがなのはと一緒に遊んでくれったいうレイ君？」

「あっはいそうです。」

「そう、ありがとうなのはと遊んでくれて、夫が入院していてここが忙しくてなかなかなのはにかまってあげられなくて。」

「いえ、俺でよければいつでもなのはの相手をしますよ。」

レイリスと桃子がそんな話をしているとまた奥から人がきた

「お母さんどうしたの？」

「母さん誰か来たのか。」

来たのは1人の女性と1人の青年でだった

「ああ、昨日なのはが言っていた一緒に遊んでくれたっていう男の子よ。」

「初めまして、レイリス・ユースティアです。」

「初めまして、私は高町美由希です。」

「俺は、高町恭也だ。」

3人がお互いに自己紹介したあとなのはが話しかけてきた

「レイお兄ちゃんも一緒にごはん食べるためにつれてきたの。」

「あら、そうなのじゃあ腕によりをかけないと。」

そうして桃子は厨房に向かって行った。そしてごはんを食べた後
5人で談笑をしていた

「レイ君ってどこ出身なの。」

興味津々に美由希が聞いてきた

「えっと・・・イギリスです。」

「そうなんだ、じゃあいつこっちにきたの。」

「えーーと、昨日です。」

「えー、そうなの。」

「それにしては日本語がうまいな?」

「小さいころに住んでいたことがあるので。」

レイリスは、恭也の疑問に咄嗟にそう答えた。それから、しばらく時間がたった頃レイリスがなのはに向かって言った。

「そうだ、なのはこれからお父さんのお見舞いにいこうか。」

「ふぇ」

「なのはのお父さんにも挨拶しておきたいしさ」

「うん、わかったの一緒にいくの。」

「それじゃあ、桃子さんこれで失礼します。」

「ええ、これからはいつでも来てくださいね。」

「それじゃ、いってくるの。」

―病院―

レイリスとなのははは、なのはのお父さん高町士郎のお見舞いのために士郎が入院している病院にきていた

「お父さんきたの。」

なのはは、士郎の下に駆け寄り最近の出来事などを話し始めた

「お父さん、あのねなのは新しいお友達ができたの。レイお兄ちゃんっていうの。」

「初めまして、士郎さんレイリス・ユースティアといいます。」

レイリスは、ベットで眠る士郎に自己紹介をした

「（この人がなのはのお父さんか。本当に地球人か？なんか一般人とは思えないオーラが感じられるんだが。）」

「レイお兄ちゃんどうしたの？」

「い、いやなんでもない。」

「（ふぅー、さて高町家のみんなにはよくしてもらったし少し恩返しするか。）」

そう言うとレイリスは、指をパチンっと鳴らした

「うっううん、ここは？」

「ふぇ？お父さん」

「ん？なのは」

「お父さ～～～～ん、うわぁぁぁぁぁぁぁん」

なのはは士郎が突然目を覚ましたので泣きながら抱きついた

「おいおい、なのは一体どうしたんだ？」

突然、娘が泣きながら抱きついてきたので士郎は困惑していると
見知らぬ青年が話しかけてきた

「ずっとあなたが眠っていたからですよ。」

「えっと・・・君は？」

「初めまして、俺はレイリス・ユースティアといいます。なのはの
友達です。」

「そうなのか、それより何故このようなことになっているのか教えてもらってもいいかな。」

「ええ、実はですね。」

レイリスは、士郎に士郎が眠っている間になにがあったのかを説明した

「なるほど、そんなことが・・・」

「はい、俺も桃子さんに今日聞いたばかりですが。」

「うん、みんなには心配をかけたみたいだな、ちゃんと謝っておかないと。」

「そうですね、じゃあ俺はそろそろお暇します。なのは帰ろうか。」

「うんなの。お父さんまた来るの。」

「ああ、それじゃ。」

レイリスとなのははは、士郎の病室から出て翠屋に向かっていた

「なのは、よかったなお父さん目をさまして。」

「うん、本当によかったの。」

なのはは、すごくうれしそうに笑っていた

「（ふふ、なのは本当にうれしそうだ。やっぱりなのはには笑顔が一番似合う。）」

レイリスは、そんなことを考えながらなのはと一緒に帰路についた

それから数年の時が経った、公園で泣いていた少女はある一つの出会いを果たし不思議な力を手にする
それは、偶然か必然か少女を大きく成長させる。出会いと別れ、青年と少女たちの物語が始まります

第2話　「青年と高町家」（後書き）

これで序章は終了です。次回からは無印のスタートです。最後に少女たちとしましたがヒロインは、なのはとは決めていないからです。誰になるかはまだ未定です。それでは、第3話で会いましょう。

第1話　「少女と魔法、それは不思議な出会いなの？」（前書き）

無印編の第1話です。ほとんど原作どおりでオリジナル感はあまりないです。

第1話　「少女と魔法、それは不思議な出会いなの？」

暗い森の中で1人の少年が、傷つきながら何かと戦っていた

「はぁはぁはぁ、くっ！」

少年の背後から黒い塊が飛び出してきた。すると少年は、赤い宝石のようなものを前に向け魔法陣を展開し呪文を唱えた

「聖なる響き光となれ　許されざるものを封印の輪に　ジュエルシード封印」

魔法と黒い塊がぶつかり黒い塊が吹き飛ばされた、すると黒い塊は傷ついた様子でその場を逃げて行った

「に、逃がしちゃった。お、追いかけなきゃ」

少年はその場に倒れた、そして誰かに助けを求めるかのようにつぶやいた

「誰か・・僕の声を聞いて、力を貸して、魔法が力を」

すると、少年の体が光だし動物の姿に変わった

―レイリスの家―

レイリスが自分の家でくつろいでいると何かの気配を感じた

「ん、何だこの感じは・・・魔法？いやここは管理外世界だ魔法があるわけがない。」

＜　ですがマスター、これは確かに魔法の力を感じました　＞

レイリスの疑問にインフィニットが答えた

「そうか・・・・しばらく様子を見ることにしよう。」

レイリスは、しばらく様子を見ることにした

ー高町家ー

「♪♫♪♫♪」

携帯のアラームが鳴りその持ち主の高町なのはが眠そうに止めた

「ふぁあ、なんか変な夢見ちゃった。」

なのはは寝ぼけ眼でそう言った、そして窓のほうを見て

「んーーー」

大きく背伸びをした

ー聖祥小学校ー

「将来かぁ？」

なのははお弁当を食べながらさっきの授業のことを考えていた

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるだよね？」

一緒にお弁当を食べている親友のアリサ・バニングスと月村すずかに聞いた

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃくらいだけど。」

アリサはそういうとすずかの方を見た

「私は、機械系が好きだから、工学系で専門職のほうがいいかなって思ってるけど」

「そっか、２人ともすごいね」

「でも、なのはは喫茶翠屋の２代目じゃないの？」

「うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど、やりた

いことは何かあるような気もするんだけど、まだそれが何なのかはっきりしないんだ。私、特技も取柄も特にないし。」

なのはは、そう自虐的に言ったすると

「バカチン、自分からそういうこと言うんじゃないの」

「そうだよ、なのはちゃんにしかできないことときっとあるよ。」

アリサとすずかは、なのはにそう言った

「それにあんた理数成績あたしよりいいじゃないの、それで取柄がないとかどの口が言うの」

アリサはそう言うとなのはの口を引っ張った

「だって、なのは文系苦手だし体育も苦手だし」

そうなのはも反論した

―放課後―

「今日のドッチボール、すずかすごかったよね。」

「そうだね。」

「そんなことないよ。」

3人は、今日の体育の話で盛り上がりながら塾へと向かっていた

「あっこっちこっち、ここを通ると塾へ行くのに近道なんだ。」

「ああ、そうなの」

「うん、ちょっと道悪いけどね。」

3人はそうして近道を歩いて行った、そしてしばらく歩いたころなのはが何かに気付いた

「ここ昨夜、夢で見た場所。」

「どうしたの？」

「なのは？」

「あっううん、なんでもない」

また、歩きはじめると次は何か声が聞こえてきた

〈たすけて〉

なのははそれに気づき立ち止った

「今、何か聞こえなかった？」

「何か？」

「何か声みたいな」

「別に」

「聞こえなかったかな」

なのは周囲を見回した、そして声が聞こえる方に走り出した。

そして声が聞こえた場所には小さな動物が横たわっていた

ー動物病院ー

3人は近くの動物病院に来ていた

「怪我はそんなに深くはないけど、ずいぶん衰弱してるみたいね。きっと、ずっとひとりぼっちだったんじゃないかな。」

「院長先生ありがとうございます。」

「「ありがとうございます。」」

3人は先生にお礼を言った

「先生これってフェレットですよね？」

アリサが聞いた

「フェレットなのかな?変わった種類だけど、それにこの首輪についているのは宝石なのかな?」

先生が宝石?に触ろうとするとフェレットが起きだし周りを見た後なのはを見つめた。そうしてしばらく見た後フェレットは、また眠りについた

「しばらく安静にしたほうがいいからとりあえず明日まで預かっておこうか?」

「「はい、おねがいします。」」

ー高町家ー

なのはは塾で、誰がフェレットを預かるかアリサとすずかと考えていて家で預かえるか家族に相談していた

「というわけでね、そのフェレットさんをしばらく家で預かることができないかなぁって」

なのはがそう言って士郎に相談すると桃子、恭也、美由紀はなのはが自分で世話ができるならと賛成してくれたのでフェレットは高町家で預かることになった

『アリサちゃん、すずかちゃんあのこは家で預かれることになりました。明日、学校帰りに一緒に迎えにいこうね。なのは。』

なのはは、アリサとすずかにそうメールを送った

「あっそうだ、レイお兄ちゃんにもメールしなくちゃ」

―レイリスの家―

「♪♫♪♫♪♫♪」

携帯が鳴りレイリスは、携帯を開いた

「おっなのはからメールか」

『怪我をしたフェレットさんをひろったの。それでねしばらく家で預かることになったの。』

メールにはそのようなことが書かれていた

「フェレットか、それはまた。」

ー高町家ー

「よしっと」

なのははレイリスにメールを送ったあとそろそろ寝ようかと思っ

たとき急に頭の中に声が聞こえた

〈聞こえますか?僕の声が聞こえますか?聞いてください、僕の声が聞こえるあなたお願いです僕に少しだけ力を貸してください。お願い僕のところへ、時間が危険がもう〉

なのはは、その声を聞くと急いで家を飛び出した

ーレイリスの家ー

レイリスが部屋でくつろいでいると頭の中に声が聞こえた

〈聞こえますか?僕の声が聞こえますか?〉

「んっ!念話」

急に聞こえてきた念話にレイリスは驚いた

〈お願いです僕に少しだけ力を貸してください〉

「なんで念話が！」

〈時間が危険がもう・・〉

そこで念話は切れてしまった

＜　マスターどうしますか？　＞

インフィニットが聞いてくる

「危険とまで言われたらな、しょうがない行くか。」

そう言いレイリスは、家から出ていた

ー動物病院ー

なのはは動物病院へと急いでいた

「はぁっはぁっふぅ」

なのはが動物病院についた直後、周囲の空気が変わった

「あっあれは」

フェレットが黒い塊に追われていた。フェレットはなのはを見つけるとなのはに向かって飛び込んだ

「何、なんなの？」

「来てくれたの？」

そうすると急にフェレットがしゃべりだした

「しゃ、しゃべった」

フェレットがしゃべったことに驚いていると黒い塊が襲ってきた

なのははフェレットを抱いたまま逃げていた

「ううん、その何が何だかわかんないけど、いったいなんなの何がおきてるの。」

「君には資質がある。お願い僕に少しだけ力を貸して。」

「資質？」

「僕は、あるも探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕、１人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから、迷惑とわかってるんですが資質を持った人に協力してほしくて。お礼はします、必ずします。僕の持ってる力をあなたに使ってほしいんです。僕の力を魔法の力を。」

「魔法？」

すると黒い塊が上空から突撃してきた

「お礼は必ずしますから。」

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ。どうすればいいの？」

「これを。」

フェレットは、首輪の宝石をなのはに渡した

「暖かい」

「それを手に目を瞑って心を澄ませて、僕の言うことを繰り返して、いい行くよ。」

なのはは覚悟を決めて言う

「我使命を受けし者なり。」

「我使命を受けし者なり。」

「契約の下その力を解き放て。」

「えっと、契約の下その力を解き放て。」

「風は空に星は天に。」

「風は空に星は天に。」

「そして不屈の心は。」

「そして不屈の心は。」

「「この胸に。」」

「「この手に魔法を。」」

「「レイジングハート、Ｓｅｔ　ｕｐ!」」

＜　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ!　＞

赤い宝石がしゃべると光の柱が上がった

「な、なんて魔力だ。」

フェレットはなのはの力に驚いていた

「落ち着いてイメージして、君の魔法を制御する魔法の杖の姿をそして、君を守る強い衣服の姿を。」

「そんな急に言われても、えっとえっと、とりあえずこれで。」

なのははそういうと光に包み込まれ光が止むと小学校の制服に似た服と杖を持っていた

「成功だ。」

「えっえっうそ、なんなのこれ」

なのはが驚いていると黒い塊が雄たけびをあげてなのはをにらんでいた

魔法を手に入れた少女、そして共に戦う青年の物語が今始まった

第1話　「少女と魔法、それは不思議な出会いなの？」（後書き）

主人公が全然出ていない。レイリスを絡ませる予定が全然できなかった。でも次はたくさん出すつもりなので何とかがんばります。それと参考にしたいので感想を頂けるとうれしいのでおねがいします。それでは次は無印編第2話で会いましょう。

第2話　「少女と不屈の心、魔法の呪文はリリカルなの？」（前書き）

無印第2話です。ここからバトルシーンがっと思ったんですが書けませんでした。

いつか書けるようにしたいです。

それでは、どうぞ。

第2話　「少女と不屈の心、魔法の呪文はリリカルなの？」

なのはは、聖祥小学校の制服に似た服と杖を持ち黒い塊と対峙していた

「え、えーこれ何？」

自分の状況が掴めていないなのはにフェレットが言った

「来ます」

黒い塊が上空に飛び跳ねなのはに向かってきた

「きゃっ」

なのはが悲鳴を上げながら杖を前に出したすると

＜　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.　＞

レイジングハートが、プロテクションを張り黒い塊を吹き飛ばした

「ふぇ、ふぇー」

なのはが驚いていると

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだ‘プログラム’と言われる方式です。そして、その方式を発動させるのに必要なのが術者の精神エネルギーです。そして、あれは忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです。」

フェレットは、なのはに抱えられ逃げながら、魔法と黒い塊が何なのかを説明した

「よくわかんないけど、どうすれば？」

「さっきみたいに攻撃や防御のような基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな魔法を必要とする場合は呪文が必要なんです。」

「呪文？」

「心を澄ませて、心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです。」

なのははそう言われると目を瞑り心を澄ませようとした、その時

「グォォォォォォ」

黒い塊がなのは目掛けて攻撃をしてきた

「ああっ」

なのはは防御をしようとし、レイジングハートを前に向けるが間に合いそうになく目を瞑ってしまった

「んっ」

やられそうになるのを覚悟したなのはだったが、その時

《アイギス》

突然、誰かがなのはの前に立ち黒い塊の攻撃を防いだ

「ったく、小学生がこんな時間に何してんだよ。」

どこかで聞いたことがある声になのははは目を開けた

「ふぇーー。な、なんでレイお兄ちゃんが？」

なのははは、自分のよく知る人物が目の前にいたので驚いた

「今はそんなこと、どうでもいい。まずは、あれを何とかしないとな。俺が抑えとくから早く封印をしろ」

「う、うん。わかった。」

なのははそう言われると、目を瞑り心を澄ませた、そして浮かんだ呪文を言い黒い塊を封印した

「リリカル・マジカル、ジュエルシード・シリアル・？？？。封印。」

封印が終わった後、その場所には青い宝石が落ちていた

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

「う、うん」

なのはがレイジングハートで触れるとジュエルシードはレイジングハートの中に入っていった。そしてなのはの体が光ったと思ったら元の服に戻っていた

「終わったか？」

レイリスがそう聞くと

「は、はい終わりました。」

フェレットがそう答えると倒れてしまった

「あっちょっと大丈夫？」

なのはが心配そうに言うと

「なのは、それより早くここから逃げるぞ。」

レイリスがそう言うと、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。周りを見てみると壁や電柱が壊れてたりしていた

「ご、ごめんなさーーい」

ー公園ー

なのはとレイリスは、公園にきていた

「ここまで、来れば大丈夫かな。」

レイリスは安心したように言った

「さて、なのはこんな夜遅い時間に何してたんだ。」

「え、えーとその」

なのはがどう言ったらいいか困っていると

「僕が呼んだんです。」

フェレットが答えた

「僕、１人じゃあれをどうにかできなかったから・・・」

「はぁー、まぁ過ぎたことはいいそれよりおまえ怪我してるみたいだけど大丈夫か？」

「怪我は大丈夫です。もうほとんど治っていますか。」

フェレットが包帯を取ると怪我の痕がほとんどなくなっていた

「それじゃあ、自己紹介していい？」

なのはがそう言った

「そうだな、じゃあまず俺から、俺はレイリス・ユースティア、こいつの友達だ。」

レイリスが自己紹介をしながらなのはの頭をぐりぐり撫でた

「ううう、お兄ちゃんやめてよ。それじゃあ次は私。私は高町なの

は、小学校3年生、家族とか仲良しのお友達はなのはって呼ぶよ。」

「僕は、ユーノ・スクライヤー。スクライヤーは部族名だからユーノが名前です。」

「ユーノ君か、かわいい名前だね。」

自己紹介が終わるとユーノが俯き始めた

「すみません、2人を巻き込んでしまいました。」

ユーノがそう言うと

「ああ、その私、たぶん平気。」

「俺もだ、これぐらい大したことじゃない。」

なのはとレイリスはユーノにそう言った

「それに、そろそろなのはは家に帰らないとな。」

「あ、うん。ユーノ君怪我してるしここじゃ落ち着かないよね」

「ああ、あとのことはそれから話すといい」

―高町家―

なのははそっと門の扉を開け中に入った瞬間、急に声をかけられた

「おかえり」

なのははビクっとし声のする方を見た

「お、お兄ちゃん」

「こんな時間にどこにお出かけだ」

「あの、その、えっと」

なのはが、迷っていると

「ちょっとこの子が心配で様子を見に行ったんですよ。」

レイリスが、ユーノを見せながら言った

「レイリス？なんでおまえが？」

「偶然、会ったんですよ。」

レイリスがそう言うと

「わぁーその子かわいい。」

恭也とは逆の方にいた美由紀が言った

「なのは、気持ちはわからんでもないが、何も告げずにというのは感心しないな。」

「まぁまぁ、なのはは良い子だからもうしないよな？」

レイリスが言うと

「うん、お兄ちゃんごめんなさい。」

なのはは恭也に謝った

「はい、これで解決。」

一次の日一

なのはは学校でユーノと念話でジュエルシードのことを聞いていた

〈ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にしたものの願いを叶える魔法の石なんだけど力の発現が不安定で昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし、たまたま見つけた人や動物が間違って使用してしまってそれを取り込んで暴走することもある。〉

〈そんな、危険なものがなんで家の近所に?〉

なのはが疑問に思っていると

〈僕のせいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘の仕事をしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して調査団に依頼して保管してもらったんだけど、運んでいた時空船が事故か何らかの災害にあってしまって、２１個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまった。今まで見つけられたのはたった２つ〉

なのはとユーノがそう話していると

〈それは、おまえのせいじゃないだろ。〉

〈ふぇっ〉

〈えっ〉

２人は急に聞こえた声に驚いた

〈あ、悪い急に入ってきて〉

〈レイお兄ちゃん?どうして?〉

〈暇だったんでな。それよりユーノ、ジュエルシードが散らばったのはお前のせいじゃない。〉

レイリスは、ユーノに言う

〈だけど、あれを見つけてしまったのは僕だから。全部見つけてちゃんとあるべき場所に返さないとだめだから。〉

〈それは、結果論だろ。確かにお前が見つけてそうなってしまったかもしれない。だけど、ならなかったかもしれない。だから、誰のせいでもないんだよ。〉

〈うん。私もそう思う。〉

なのはのレイリスに同意する

〈だからさ、一緒に探そう。なのはのいいだろ。〉

〈うん。私にもお手伝いさせて。〉

〈でも、これ以上2人に迷惑を掛けるわけには。〉

〈乗りかかった船だ、気にするな。〉

〈そうなの。〉

〈・・・・ありがとう、2人とも。〉

―放課後―

なのはは、アリサとすずかと一緒に帰りながらユーノとレイリスと話していた

〈そういえば、レイお兄ちゃんも魔法使いさんなんだよね？〉

〈ああ、そうだよ。〉

レイリスは、なのはの質問に答えた

〈僕も驚きました。まさかこの世界に魔法が使える人がいたなんて。〉

〈いや、俺もこの世界出身じゃない。ちょっと訳ありでここにいるんだ。〉

〈訳って？〉

〈それは・・・今は言えないかな。〉

レイリスがそう誤魔化したとき

〈あっ〉

〈あっ〉

〈んっ〉

急に空気が変わり何かの気配がした

〈ユーノ君、これって〉

〈ジュエルシードが発動している。すぐ近く。〉

〈どうすれば？〉

なのはがユーノに言うと

〈一緒にいこう。手伝って。〉

〈うん。〉

〈俺もすぐに行く。〉

3人は、ジュエルシードが発動している場所に急いだ

―神社―

3人は合流しジュエルシードが発動した神社の石段を上っていた

「なのは、レイジングハートを。」

「あ、うん。」

3人が境内に着くと大きな犬のようなものがいた

「原住生物を取り込んでいる。」

「どうなるの？」

「実体があるぶん手ごわくなっている。」

「大丈夫、たぶん。」

なのはが強気に言った

「なのは、レイジングハートの起動を。」

「えっ、起動ってなんだっけ？」

「おい、なのは。」

レイリスが呆れていると犬がなのは達に向かってきた

「くっ、俺が止めるその間に起動しろ。」

レイリスが犬に立ち向かった

「なのは、我は使命にからの起動パスワードを。」

「ええー、あんなに長いの覚えてないよ。」

「もう一回言うから繰り返して。」

「う、うん。」

なのはが言うと

「しまった。」

「うぅぅぅぅぅぅ」

レイリスを飛び越え犬がなのはに迫っていた

「あっ」

そのとき、レイジングハートが突然、光だし

＜Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．＞

レイジングハートが起動した

「パスワード無しで起動させた。」

ユーノが驚いていると犬が再び向かってきた

「なのは、防護服を。」

「えっと」

＜　Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ．　＞

レイジングハートがそう言うとなのははバリアージャケットに身を包んでいた

「うぅぅぅぅぅぅ」

犬が迫ってくるとなのははプロテクションを張り犬を弾き返した

「えっと、封印ってのをすればいいだよね。レイジングハートお願いね。」

＜　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　＞

「リリカル・マジカル、ジュエルシード・シリアル・？？。封印。」

なのははジュエルシードを封印をした

「これでいいのかな？」

「うん、これ以上ないってくらいに。」

「よくやったなのは、俺は結局役に立たなかったけど。」

レイリスは苦笑いしながら言った

「それじゃあ、そろそろ帰るか。」

「そうだね、帰ろう。」

3人は、あかね色に染まる石段を降りながらそれぞれの家に帰っていった

第2話　「少女と不屈の心、魔法の呪文はリリカルなの？」（後書き）

主人公、出てきましたが大した活躍ができない。なのはの方がすごく出てるし。

やっぱり原作通りにしすぎかもしれませんね。次からはレイリスの出番を増やせる

ようにがんばります。

では、お次は第3話で会いましょう。

第3話　「少女と失敗、街は危険がいっぱいなの？」（前書き）

第3話です。

シリアスな場面がありますが難しい。向いてないかもしれないです。

それでは、どうぞ。

第3話　「少女と失敗、街は危険がいっぱいなの？」

朝、なのははなかなか起きられないでいた

「なのは、朝だよ。そろそろ起きないと。」

昨日のと夜もジュエルシードを封印したのだが、９歳の女の子には結構きつかったみたいだ

「今日は、日曜だし・・・もうちょっとお寝坊させて。」

なのはは、首に掛けてあるレイジングハートを上にあげてこれまで集めたジュエルシードを見ていた

「そうだ、なのは今日はお休みにしよう。」

「え、でも。」

「もう、５つも集めて貰ったんだから少しは休憩しないともたないよ。それに今日は約束があるんでしょ。」

「うん、そうだね。」

なのはは素直に頷いた

―河川敷―

なのはは、士郎が監督を務める翠屋ＪＦＣのサッカーの試合にアリサとすずかとレイリスの４人で応援にきていた

「がんばって！」

「かんばれ！がんばれ！」

アリサとすずかは一生懸命に応援していた、その結果翠屋ＪＦＣが勝利した。そして試合の後翠屋にて祝勝会をすることになった

―翠屋―

なのはとアリサとすずかとレイリスは外のテラスでケーキを食べていた

「あらためて見ると、この子フェレットとは何かちょっとちがくな

い。」

アリサの言葉になのははビクッとした

「そう言えばそうだね。」

すずかも同意した

「ユーノは、ちょっと変わった種類っぽいからな。」

レイリスがそうフォローした

「そうなの、レイ？」

「そうなんですか、レイさん？」

アリサとすずかはレイリスに言った

「ああ、でも俺も詳しい訳じゃないからそんなにわかんないけど。」

アリサとすずかとレイリスの出会いはなのはの紹介である。なのはが２人と仲良くなるきっかけのあの事があってから少ししてから互いに紹介されたのである。ちなみにレイリスの呼び方はアリサが‘レイ’すずかが‘レイさん’である

「「「おつかれさまでした。」」」

そうして、祝勝会も終わり解散となった

「ふっ」

そのとき1人の少年がカバンから青い石を取出しポケットに入れ行ってしまった

「あっ」

なのはがそれに気付いたが

「（気のせいだよね？）」

「んっ？なのはどうかしたか？」

レイリスが心配して言うと

「ううん、なんでもない。（うん、気のせい気のせい）」

「それじゃあ、私たちも解散？」

「うん、そうだね。」

アリサとすずかが言った

「そっか、2人は午後から予定があるんだっけ？」

「うん、お姉ちゃんとお出かけ。」

「パパとお買いもの。」

「いいね、月曜日にお話し聞かせてね？」

3人がそう言っていると

「お、ここも解散か？」

士郎が来た

「はい、今日はお誘いありがとうございました。」

「いや、いいんだよ。」

そして、しばらくしてアリサとすずかは帰って行った

「なのははこれからどうする？」

「うーん？・・・お家に帰ってゆっくりする。」

「レイリスは？」

「街を少しブラブラします。」

―高町家―

帰ってすぐになのははベットに伏せていた

「なのは寝るなら着替えたほうがいいよ。」

「う、うん・・」

そう言ってなのはは着替えて眠りについた

ーレイリスー

なのは達と別れてからレイリスは街を歩いていた

「うーん?街に出てみたものの、特にすることがない。」

「＜毎日、街には来ていますからしかたないですよ。＞」

インフィニットがそう言った

「何かお前の声を聞くのすごい久しぶりな気がする。」

「＜き、気のせいです。絶対、気のせいです。＞」

インフィニットが必死に言った

「わ、わかったよ。」

レイリスが驚いているその時、どこからか青い光が上がった

「ん、これは？」

ー高町家ー

「んっ！」

なのははそれに気づいて起き上がった

「なのは！」

「うん、きづいた。」

ージュエルシードー

「わぁぁぁ！」

「きゃぁぁぁ！」

ジュエルシードを持っていた少年と少女は、突然生えてきた木の枝に捕らわれてしまった。そしてその場には巨大な木が立っていた

―なのは―

なのはは、急いで着替えジュエルシードの下へと急いでいた。そしてビルの屋上に来て

「レイジングハート、お願い。」

「＜ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．＞」

なのははレイジングハートを起動させた

「あっ！」

なのはは街の様子を見て唖然とした。いくつもの巨大な木が生えて

いて街を覆い尽くしていた

「きっと人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持った者が、願いを込めて発動させたときジュエルシードは一番強い力を発揮するから。」

「はっ！」

なのはは、昼間翠屋で見た少年を思い出した

「（やっぱり、あの時の子が持ってたんだ。）私、気付いていたはずなのに。」

「なのはー！」

その時、レイリスがやってきた

「やっと見つけた・・・って、どうしたなのは？」

レイリスは、なのはの様子がおかしいことに気付いた

「レイお兄ちゃん。私、気付いてたんだ。」

「な、何に？」

レイリスが聞き返すと

「ジュエルシード。発動する前のジュエルシードに気付いてたの。」

なのはは、涙目になって話した

「こうなる前に止められたかもしれないのに。」

「なのは・・・」

ユーノも困惑した様子でいた

「なのは。」

「ふぇ？」

レイリスはなのはをやさしく抱きしめた

「そんなに、自分を責めるな。誰にだって失敗はある。俺だってそうだ、たくさん失敗したことがある。その中に取り返しがつかない事になったものだってある。」

レイリスは、自分の過去の失敗の話をした

「だけどな、そうやって自分を責めてばかりじゃ前に進めない。自分を信じろ、なのは。」

その時、レイジングハートが光りだした

「ユーノ君、こういうときどうしたらいいの？」

「あ、うん。封印するには接近しないとだめだ。まずは、元となってる部分を見つけないと。」

「元の部分を見つければいいんだね。」

なのははレイジングハートを構えエリアサーチをし元の部分を探した

「見つけた。」

「あそこか！」

なのはとレイリスは元の部分を見つけた

「すぐ、封印するから。」

「ここからじゃ、無理だよ。もっと近くに行かなきゃ。」

「いや、なのはならできる。そうだろう。」

「うん！できるよ。大丈夫。」

なのははレイジングハートを構え封印を行った

「リリカル・マジカル・ジュエルシード・シリアル?。封印」

封印が終わると街を覆い尽くしていた木がなくなっていた

「おつかれさま。なのは。」

レイリスがなのはに言った

「レイお兄ちゃん、いろんな人に迷惑かけちゃったね。」

「そうだな。でも、さっきも言ったぞ。自分を責めるなって。」

レイリスは、言った

「人は、完璧じゃない。すべての事がうまくいくわけじゃない。だからな、なのはその失敗をどう乗り切っていくかが大切なんだ。自分を信じろ。辛いときは仲間を頼れお前は一人じゃないんだから。」

「うん、わかったの。」

なのはは、レイリスに抱きつきレイリスはなのはを抱きしめた

「それじゃあ、帰ろうか。」

「うん！」

この日、1人の少女が失敗をしそれを乗り越えた。青年は、少女を優しく見守った。2人の絆がより強くなったかのように

第3話　「少女と失敗、街は危険がいっぱいなの？」（後書き）

失敗があってこそ人は成長すると作者は思っています。この作品のなのははどんな

成長をしてくれるんでしょうか？

さあ、次からはあの子がでてきます。ある意味一番難しいかも。

では、第４話で会いましょう。

第４話　「青年と驚愕、ライバル！？もうひとりの魔法少女なの！」（前書き）

第４話です。やっと更新できました。最近、仕事が忙しくなかなか時間が

なくて・・・

でも、がんばって更新できるようにします。では、どうぞ。

第４話　「青年と驚愕、ライバル！？もうひとりの魔法少女なの！」

ある日の夜、１人の少女がビルの屋上にいた

「ロストロギアは、この付近にあるんだね？」

黒いバリアージャケットに黒いデバイス

「形態は、青い宝石。一般呼称はジュエルシード」

傍らには、使い魔のオオカミ

「そうだね。すぐに手に入れるよ。」

一月村邸一

なのはと恭也は、すずかの家に来ていた

「恭也様、なのはお嬢様いらっしゃいませ。」

チャイムを鳴らすと月村家のメイド、ノエルが出てきた

「ああ、お招きにあずかったよ。」

「こんにちわ。」

「どうぞ、こちらです。」

なのはと恭也が、部屋に通されるとアリサとすずかとすずかの姉、忍とレイリスがお茶をしていた

「なのはちゃん、恭也さん。」

「すずかちゃん。」

「なのはちゃん、いらっしゃい。」

すずか専用のメイド、ノエルの妹ファリンがあいさつをした

「恭也～いらっしゃい？」

「ああ」

「そこの2人～いちゃつくのは2人っきりの時にしてくれない？」

レイリスが、冷やかすように言った。

「な、別にいちゃついてなんか！」

恭也は否定した

「ふふ、それではお茶をご用意しましょう。何がよろしいですか？」

ノエルが微笑みながら言った

「まかせるよ。」

「なのはお嬢様は？」

「私も。」

「わかりました。ファリン。」

「了解しました。お姉さま。」

ファリンは、敬礼しながら言った。

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから。」

「はい、そちらにお持ちします。」

「ほどほどにしろよ。」

「な、何がだ！」

恭也は顔を赤くしながら部屋を出て行った

「おはよう。」

「おはよう。」

なのはとアリサは互いにあいさつをした

「でも、相変わらずなのはのお兄ちゃんとすずかのお姉ちゃんはラ

ブラブだよね～。」

「うん！」

「ふふ、まぁ確かに微笑ましい光景ではあるな。」

レイリスがそう言うと

「レイには、そういう人いないの？」

アリサが聞くと

「今は、いないかな。」

「そうなんですかレイさん。」

「意外か。」

レイリスが聞くと

「まぁ、レイ顔は悪くないし。」

「ありがとうよ。」

そんな話をしていると

「きゅぃ――――」

ユーノの泣き声が聞こえてきて見てみると

「わぁ、ユーノ君。」

ユーノが猫に追い回されていた

「あ、アイだめだよ。」

「おまたせしました。」

その時、ファリンが入ってきた

「わぁっ」

ユーノとアイがファリンの足元で回りだした

「わぁっいやっわぁっ」

ファリンがよろけて倒れそうになった瞬間

「よっと！」

レイリスがファリンを後ろから受け止めていた

「大丈夫か？ファリン。」

「え、わぁーーーレイリスさんごめんなさーーーい。」

そして、４人は庭に移動してお茶をしていた

「にしても、相変わらずすずかの家は猫天国よね。」

「ふふ。」

「でも、猫たちかわいいよね。」

「確かにそうだな。」

「里親が決まっている子もいるからお別れしなきゃいけないけど。」

「そうだね。」

4人がそんな話をしている時、さっきの子猫のアイが木陰に近づいて何かを見つけていた、その時

「あっ！」

なのはが何かを感じ取った

「〈なのは！〉」

「〈うん。すぐ近くだ。〉」

「〈どうする？〉」

「〈えーと？〉」

なのはとユーノが考えていると

「〈ユーノ、お前が先に行ってその後をなのはがユーノを連れ戻しに行くようにしろ。俺もすぐに行くから。〉」

レイリスが、そう言うと

「〈うん。〉」

「〈わかった。〉」

そう言い、ユーノが林の中に走って行った

「あ、ユーノ君。」

「あら、ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも。ちょっと探してくるね。」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫。すぐ戻って来るからまってててね。」

そう言ってなのははユーノを追いかけた

「発動した！」

なのはがユーノに追いついてすぐにジュエルシードが発動した。そしてその直後、巨大な猫が現れた

「あ、あ、あ、あれは？」

「たぶん、あの猫の大きくなりたいっていう願いが正しく叶えられたんじゃないかと。」

なのはとユーノが戸惑っているときレイリスは

―レイリス―

「う～ん。なのはだけじゃ心配だから俺も行ってくるかな。」

「別に、なのはだけでも大丈夫じゃない。」

アリサが言うと

「でも、あのなのはだぞ。今頃、転んで泣いてるかもしれないぞ。」

「さすがに、泣いてはいないと思うけど。」

すずかが苦笑いしながら言った

「でも、女の子1人じゃ心配だしなちょっと行ってくる。」

そう言い、レイリスはなのはを追いかけた

ーなのはー

「このままじゃ、危険だから早く封印しよ。」

「うん。この大きさじゃすずかちゃんも困っちゃうもんね。」

なのははレイジングハートを手に持ち

「じゃあ、レイジングハート」

なのはが、セットアップしようとしたとき突然、黄色い閃光が猫を襲った

「な、何?」

なのはは、閃光が飛んできた方向を見ると1人の少女がいた

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃。」

「<Photon Lancer. Full auto fire.>」

そう言うと少女は閃光を連続で放ってきた

「な、魔法の光。そんな。」

「あ、レイジングハートお願い。」

「＜Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．＞」

なのははセットアップをした

「＜Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ．＞」

なのはは、飛行魔法を使い猫の下へと飛んだ

「＜Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．＞」

なのはは黒い少女の攻撃から猫を守った

「魔導士・・・」

けれど黒い少女は、それに躊躇わず攻撃を続けた

「ああ！」

少女の攻撃で猫は倒れてしまった。そしてなのはは猫の前に降り構え、少女も木の枝に降りた

「同系の魔導士。ロストロギアの探索者か。」

「間違いない。僕と同じ世界の住人。そして、この子ジュエルシードの正体を・・・」

ユーノがそう考えていると

「バルディッシュと同様、インテリジェントデバイス。」

「バルディッシュ？」

「ロストロギア、ジュエルシード。」

「＜Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ．Ｓｅｔ　ｕｐ．＞」

少女が言うとバルディッシュが鎌の形になった

「申し訳ないけど、頂いていきます。」

少女は、そう言うとなのはに向かってきた

「＜Ｅｖａｓｉｏｎ．Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ．＞」

なのはは、飛行魔法で空に回避した

「＜Ａｒｃ　Ｓａｖｅｒ．＞」

すると少女は、魔力刃を飛ばしてきた

「ああっ！」

なのはは、咄嗟に避けることができずに直撃しようとした時

「《アイギス》」

何かが、魔力刃を防いだ

「ジュエルシードが発動したと思ったら何でこんな事になってんだ？」

黒い少女の後ろからレイリスが現れた

「んっ！新手、はぁぁぁ！」

少女は、レイリスに攻撃をした

「いきなり攻撃するな・・・・って！」

レイリスは、少女の顔を見た瞬間に目を見開いた

「ア・・リ・・・シ・ア？」

レイリスは聞こえるか聞こえないくらいの声でそう言った

「何で？」

「ん？」

少女の方は、訳がわからない様子でいた

「馬鹿な！」

「ふっ！」

少女は、レイリスが混乱している隙に猫の下に向かった

「なのは、ジュエルシードが！」

「ああ！」

ユーノとなのはが気付きなのはが少女の前に立ちふさがった

「何で急にこんな？」

「答えても、たぶん意味がない。」

互いにそう言い構えた、その直後猫が目を覚ました

「あ！」

なのはが目を逸らした

「ごめんね。」

少女の攻撃がなのはに直撃した

「ああっ」

「なのは！」

ユーノがなのはを魔法で地面に直撃するのを防いだ。そして

「捕獲。」

少女は、ジュエルシードの封印をしていた

「ロストロギア・・ジュエルシード・シリアル？？。封印。」

少女は、封印が終わるとなのはを見た。数秒そうしていると少女は立ち去ろうとした

「ま、待て！」

レイリスが、呼び止めた

「おまえの名前はなんだ？」

レイリスが問いかけると

「・・・・・」

少女は何も言わず飛び去った

その後、なのはをおんぶしてすずか達のところに戻った。戻ったらアリサとすずかがかなり心配し少し騒ぎになった。なのはは、ユーノを探している途中で気絶しているところをレイリスに見つけられたということにした

―レイリス―

その夜、レイリスは昼間会った少女のことを考えていた

「なぜ、あの子が・・・・・あの子はもういないはずなのに。やはり・・・」

レイリスは、ある事が頭をよぎった

「そういうことなのか？あの計画を実行したのか。」

遠くを見つめレイリスは言った

「プレシア・・・」

レイリスは、１人の女性の名前を言い目を瞑った

第４話　「青年と驚愕、ライバル！？もうひとりの魔法少女なの！」（後書き）

いやー、やっとでましたフェイト。作中では、名前が出ていないので少女というふうになってますが。それに、レイリスのことが少しだけわかり始めましたね。ここからどんどん秘密がわかってくると思います。次は第５話で会いましょう。

第5話　「レイリスと確信、ここは湯のまち、海鳴温泉なの」（前書き）

第5話です。気温が高く、暑くて頭が回りません。でも、がんばっていきます。では、どうぞ。

第5話　「レイリスと確信、ここは湯のまち、海鳴温泉なの」

あの少女の出会いから数日、レイリスは、高町家の家族旅行に同行していた

「なのは。」

「何、レイお兄ちゃん?」

「よかったのか?俺まで一緒に来て。」

「いいんだよ。お兄ちゃんが一緒じゃないと楽しくないし。」

そんな話をしていると目的地の旅館についた

ー旅館ー

レイリス達はさっそく温泉に入りにいった

「〈ユーノ君、一緒に入ろう。〉」

「〈えっ!い、いや僕はレイリスと一緒に入るから。〉」

ユーノが、断っていると

「〈一緒に入ればいいじゃないか。〉」

「〈レ、レイリス！〉」

「〈ほれ、なのは連れて行け。〉」

レイリスは、なのはにユーノを渡した

「〈うん。お兄ちゃんまたあとでなの。〉」

「〈裏切り者～～～。〉」

―男湯―

レイリスは、士郎、恭也と一緒に湯に浸かっていた

「あ～、いい湯だな。」

「そうですね。」

「それにしても、レイリス・・おまえ本当に変わらないな。初めてあった時からまるで変わらない。」

恭也がレイリスに言うと

「それは、士郎さんや桃子さんにも言えることですけど・・」

「いやー、でもあの時は本当の君には感謝している。特になのはのことは。」

士郎が４年前の話をする

「お礼なんていいですよ。なのはと会ったのなんて偶然ですしそれに感謝されるほどのことは。」

「いや、それでもだ。これからも、なのはのことよろしく頼むよ。」

「はい、士郎さん。」

ーなのはー

なのはは、アリサとすずかと一緒に温泉からあがり旅館の中を探検していた

「ねぇ、せっかくだし卓球しない。」

「卓球か～」

「私、卓球はちょっと。」

3人がそんな話をしていると

「ハ～イ、おちびちゃん達。」

突然、見知らぬ女性が話しかけてきた

「う～ん?君かねうちの子をあれしちゃってくれてるのは」

「えっえー。」

「あんまし、賢そうでも強そうでもないし・・ただのガキンチョに見えるんだけどな。」

「えー。」

そう言われてなのはが戸惑っていると

「うちの連れに何か御用かな?」

「ん?」

振り返るとレイリスがいた

「レイお兄ちゃん。」

「何かうちのなのはに用でも?」

「あ、あんたは・・・」

女性は、レイリスをみると目を瞑りそして

「あーはははははは。ごめんごめん、人違いだったかな！知ってる子によく似てたからさ」

「そうですか。」

なのはが安堵しているとと

「〈今のところはあいさつだけね。〉」

「なっ！」

女性が念話で話しかけてきた

「〈忠告しておくよ。子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。オイタがすぎるとガブッといくよ〉」

そう言うと女性は立ち去った

「〈なのは。〉」

「〈うん。〉」

ー温泉ー

「〈あー、もしもしフェイト？こちらアルフ。〉」

「〈うん〉」

「〈ちょっと見てきたよ例の白い子〉」

「〈そう。どうだった。〉」

「〈う～ん・・まぁ、どうってことないね。フェイトの敵じゃないよ。〉」

アルフはそう言った

「〈そう？こっちも少し進展。次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できてきた。今夜には捕獲できると思うよ。〉」

「〈う～ん！ナイスだよフェイト。さすが私のご主人様〉」

「〈うん。ありがとうアルフ。夜にまた落ち合おう〉」

「〈あっフェイト！〉」

「〈なに？アルフ〉」

アルフが急に声を上げたのでフェイトが聞き返す

「〈あの男も来てたよ〉」

「〈あの男？〉」

「〈この間、フェイトを見てびっくりしてたやつ。〉」

「〈ああ、あの人。〉」

「〈あいつ結構すごい魔導士だと思う。気迫がハンパない。〉」

「〈そう・・・なんだ。〉」

フェイトは、レイリスが何者なのか考えはじめた

―レイリス―

レイリスは、1人で庭に出て考え事をしていた

「あの女、人の気配じゃなかったな。たぶんあの子の使い魔・・・か。インフィ！」

「〈はい、マスター〉」

「ジュエルシードの気配はあるか？」

「＜微かですが気配はあります＞」

「だとすれば、あの子もいるわけか。」

レイリスがそう考えていると

「んっ！発動したか？」

ジュエルシードが発動しレイリスは駆け出した

―フェイト―

「うっはー、すごいね。これがロストロギアのパワーってやつ？」

「ずいぶん不完全で不安定な状態だけど。」

「あんたのお母さんはなんであんなもの欲しがるんだろ？」

アルフが不思議がっていた

「さぁ、わからないけど理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから手に入れないと。」

そう言うと、フェイトは手を前にだし

「バルディッシュ！起きて。」

「＜Ｙｅｓ，ｓｉｒ．＞」

「封印するよ。アルフサポートを。」

―レイリス―

「この魔力は、やっぱりあの子が・・」

レイリスはジュエルシードの下へと急いでいた

「今度こそ確かめる・・」

―なのは―

「二つ目・・」

「はぁはぁはぁ・・あっ！」

なのははジュエルシードの下へとつくのそこにはフェイトがいた

「あ～ら、あらあら。子供は良い子でって言わなかったけか？」

「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ？！それは危険なものなんだ！」

「さーね？答える理由が見当たらないよ。それにさぁ、あたし親切に言ったよね？！良い子でいないとガブッといくよって。」

そう言うとアルフはオオカミの姿になった

「やっぱり、あいつあの子の使い魔だ！」

「使い魔？」

「そうさ。あたしはこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で生きるかわりに命と力のすべてをかけて守ってあげるんだ。先に帰っててすぐに追いつくから。」

「うん。無理しないでね。」

フェイトが行こうとした時

「残念だが、行かせるわけにはいかない。」

レイリスがフェイトの後ろからきた

「くっおまえ。」

アルフがフェイトの前に守るように立った

「なのは、こいつは俺が相手をする。なのははその子を・・」

「う、うん。わかったの。」

なのはが頷く

「させると思ってんのかい！」

「させるよ。インフィ！」

「はい、マスター。」

インフィニットが魔法を起動した

「これは、転移魔法？」

「なのは、頼んだぞ。ユーノ、こっちこい。」

「うん。わかった」

レイリスは、そう言うと転移した

「あの人は何なの？」

「何って・・レイお兄ちゃんは、なのはのお友達なの。」

「そう・・・」

ーレイリスー

レイリス達は、少し離れたところに転移していた

「ここまで来ればいいかな?」

「くっあんた達を倒してあたしは行かせてもらうよ。」

そう言って、アルフは戦闘態勢に入った

「待て、俺はお前と戦うつもりはない。話が聞きたいだけだ。」

「知るかーーー!」

アルフが向かってきた

「ちっ!しょうがない。少し相手してやる。」

レイリスとアルフの戦闘が始まった

―なのは―

「で、どうするの？」

「話し合いで何とかなることってない？」

「私は、ロストロギアの欠片をジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら私たちは、ジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる。」

「だから、そういうことを簡単に決めつけないように。話し合いって必要なんだと思う」

「話し合うだけじゃ・・言葉だけじゃきっと何も変わらない。・・・・伝わらない。」

フェイトは戦闘態勢になり、一気になのはの背後をとった

「あっ！」

「＜Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ．＞」

なのはは、飛行魔法で避けた

「でも、だからって・・」

「賭けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ。」

―レイリス―

「はぁぁぁぁぁぁ！」

「くっ！」

アルフは爪や牙を使って攻めてきていた

「インフィ！」

「＜Ｂｌａｃｋ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．＞」

レイリスも魔法で応戦する

―なのは―

「＜Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ．＞」

「＜Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．＞」

なのはとフェイトは互いに威力の高い魔法で攻撃した

「レイジングハート。お願い」

「＜Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．＞」

するとなのはのディバインバスターの威力が上がりフェイトのサンダースマッシャーを打ち破った

―レイリス―

「んっ！なのはか。」

「なのは、強い・・」

ユーノはなのはに驚いていた

「でも・・甘いね。」

「＜Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ．＞」

「なのは！」

「あ・・あっ！」

フェイトが上空から一気に下降しそして

「ひっ！・・・・・・・・えっ？」

なのはの首元で寸止めしていた

「＜Ｐｕｌｌ　ｏｕｔ．＞」

レイジングハートがジュエルシードを一つ出した

「レイジングハート！なにを？！」

「きっと、主人思いの良い子なんだ。」

フェイトはジュエルシードを手に取った

「帰ろう、アルフ。」

「さっすが私のご主人様！」

アルフは人型に戻り言った

「ん、じゃあねおちびちゃん。」

「待って！」

「できるならもう私たちの前に現れないで。もし次があったら今度は止められないかもしれない。」

「名前・・あなたの名前は？」

「フェイト。フェイト・テスタロッサ。」

「あの、私は」

名前を言うとフェイトとアルフは行ってしまった

「テスタロッサ・・・・やはりか。」

レイリスは、少女の名前を聞き予感が確信に変わっていた

第5話　「レイリスと確信、ここは湯のまち、海鳴温泉なの」（後書き）

原作を見ながら書いてますけど、久しぶりに見ると結構新鮮ですね。
内容をほとん
ど忘れてますし・・・　この先の展開についてはレイリスが少しだ
けフェイト側に
つくかもしれません。方向性のない作品ですみません。
では、次は第６話で会いましょう。

第6話　「なのはとフェイト、わかりあえない気持ちなの？」（前書き）

第6話です。今回はレイリスの出番がない。次回がんばれ！

それでは、どうぞ！

第6話　「なのはとフェイト、わかりあえない気持ちなの？」

なのはは、フェイトのことを考えて浮かない顔をしていた

「いい加減にしなさいよ！」

「あっ？」

「この間から何話してもぼーとして。」

「ご、ごめんね。アリサちゃん。」

なのはは、アリサに謝った

「ごめんじゃない！私たちと話してるのがそんなに退屈なら1人でいくらでもぼーとしてなさいよ！行くよすずか！」

「アリサちゃん・・」

そう言いアリサは行ってしまった

「あ、なのはちゃん」

「いいよ、今のはなのはが悪いから」

「そんなことないと思うけど・・とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね。」

「ごめんね。」

アリサを追いかけすずかも行った

「ごめんね・・・アリサちゃん。」

―アリサ・すずか―

「アリサちゃん、アリサちゃん」

「何よ。」

「何で怒ってるのか何となくわかるけど。だめだよ、あんまり怒っちゃ。」

「だってムカつくわ！悩んでるの見え見えじゃない。迷ってるの困ってるの見え見えじゃない。なのに・・・何度、聞いても私たちには何も教えてくれない。」

「あっ！」

「悩んでも困ってもないなんて嘘じゃん！」

アリサはすずかに言った

「どんなに仲良しの友達にも言えないことあるよ。なのはちゃんが秘密にしたいことなら私たちは待ってあげることしかできないんじ

ゃないかな。」

「だから、それがムカつくの！少しは役に立ってあげたいのよ！どんなことだっていいから・・何もできないかもしれないけど。少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない。」

アリサは、思っていたことをすべて行った

「やっぱり、アリサちゃんもなのはちゃんのこと好きなんだよね？」

「そんなの、当たり前じゃないの！」

「ふふっ」

ーレイリスー

「テスタロッサ・・・・まさかとは思っていたが本当にそうだとは。」

レイリスは、旅行から戻ってからフェイトのことばかり考えていた

「はぁ・・・インフィ、ジュエルシードの方はどうだ？」

「＜一つ場所が特定仕掛かっていますがまだ・・＞」

「そうか・・・一度あいつに会わなければならないな。」

―なのは―

なのははジュエルシードの探索にきていたが

「ああ、タイムアウトかも・・そろそろ帰らないと。」

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探してくから。」

「うん・・ユーノ君、1人で平気?」

「平気。だから晩御飯取っておいてね。」

なのはとユーノはそこで別れた

―フェイト―

「だいたいこのあたりだと思うんだけど、大まかな位置しかわからないんだ。」

「はぁ、確かにこうごみごみしてると探すのも一苦労だね。」

アルフは溜息をついた

「ちょっと乱暴だけど、魔力流を打ち込んで強制発動をさせるよ。」

「ああ、待ったそれあたしがやる。」

「大丈夫、結構疲れるよ。」

「ふっ、このあたしを誰の使い魔だと?」

「じゃあお願い。」

「そんじゃ!」

アルフは魔力流を放った

―レイリス、なのは、ユーノ―

「おっ!」

「あっ!」

「んっ!」

ユーノ、なのは、レイリスは強い魔力を感じた

「こんな街中で強制発動？結界、間に合え！」

なのはは、魔力の感じた方へ急いでいた

「レイジングハートお願い」

「＜Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｌｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．＞」

―フェイト―

アルフが魔力流を放って数分、一か所から光が上がった

「見つけた！」

「フェイト、あっちも近くにいるみたいだね。」

その瞬間、結界が張られた

「早く片付けよう。バルディッシュ！」

フェイトは封印の体制に入った

―なのは―

なのはは、ジュエルシードの近くまで来ていた

「〈なのは、発動したジュエルシードが見える？〉」

「〈うん、すぐ近くだよ。〉」

「〈あの子たちも近くにいるんだ。あの子たちより先に封印して。〉」

「〈わかった！〉」

なのはも封印の体制に入った

―レイリス―

「まさか、街中で強制発動とは・・大胆なことをしてくれる。」

レイリスもジュエルシードのところへ急いでいた

「（いやな予感がする。いそがないと。）」

レイリスはスピードを上げた

ーなのは、フェイトー

なのはとフェイトは封印魔法をジュエルシードに放った

「リリカル・マジカル！」

「ジュエルシード・シリアル??！」

「「封印」」

封印が完了しなのははジュエルシードの下へと近づいた

「やった、なのは早く確保を・・」

「そうはさせるかい！」

フェイトとアルフが来た

「この間は自己紹介できなかったけど。私、なのは！高町なのは！
私立聖祥大付属小学校3年生・・」

「＜Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ．＞」

「あっ！」

フェイトがバルディッシュを鎌の形にし構え突っ込んできた

「＜Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ．＞」

なのはは空に飛びあがった。そして二人は激しい戦いを繰り広げた

「フェイトちゃん！話し合うだけじゃ言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど・・だけど、話さないと言葉にしないと伝わらないことだってきっとあるよ。何もわからないままぶつかりあうのはいやだ！」

なのははフェイトに自分の気持ちをぶつけた

「私が、ジュエルシードを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから私はそれのお手伝いで！だけどお手伝いするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意志でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしてる街や周りの人たちに危険が降りかかったらいやだから！」

なのはは言う

「これが・・私の理由！」

「わ・・私は。」

「フェイト！答えなくていい！」

フェイトが言うのをアルフが止めた

「やさしくしてくれる人たちのとこで、ぬくぬく甘えて暮らしてるがきんちょになんか何も教えなくていい！」

「えっ！」

「私たちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

「ん！」

アルフに言われフェイトは構えた

「あっ！」

「なのは！」

「大丈夫！」

そう言いなのはも構えた

「ふっ！」

「あっ！」

フェイトはジュエルシードに向かって行きなのはも追いかけた。そして・・・

ガキン

レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードに重なり

バリッバリバリ

レイジングハートとバルディッシュに亀裂が入り

「きゃぁぁぁぁぁ！」

「くっ！・・・く！」

ジュエルシードが暴走した

―レイリス―

「なっ！この魔力は？」

レイリスは急に大きな魔力を感じ驚いた

「まさか、ジュエルシードの暴走か！くっ、急がなくちゃ！」

レイリスはさらにスピードを上げた

第6話　「なのはとフェイト、わかりあえない気持ちなの？」（後書き）

第６話を見ていて、無印の時のフェイトってこんな感じだったかな？と思ってしま

いました。母親の為にがんばる、健気ですね～。次回はいよいよ、あのＫＹくｎ、

いやいやクロノ君が出ると思います。無印もだいたい折り返し地点にきました。

ここから一気にいきたいと思います・・・・たぶん？

では、次は第７話で会いましょう。

第7話　「生と死、三人目の魔法使いなの？」（前書き）

第7話です。

いつもよりも長くなってしまいました。

それでは、どうぞ。

第7話　「生と死、三人目の魔法使いなの？」

レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードに重なったことによりとてつもない魔力が放出した

「んっ！」

フェイトがバルディッシュを見ると亀裂が入り酷く損傷していた

「大丈夫？戻ってバルディッシュ。」

「＜Ｙｅｓ，ｓｉｒ．＞」

バルディッシュは待機状態に戻った

「んっふっ！」

フェイトはジュエルシードに向かって飛んだ

「止まれ！・・・止まれ！止まれ！」

フェイトはジュエルシードを手に包み暴走を止めようとした

「止まれ！・・止まれ！」

それでも、ジュエルシードの暴走は止まらず逆にフェイトの体を傷つけていった

「止まれ！！」

フェイトが必死に止めようとしたその時

「まったく、無茶をする。」

そう言うとフェイトの手を誰かが包んだ

「えっ？」

そこには優しく微笑んだレイリスがいた

「俺も力を貸してやる。一緒に止めるぞ。」

そう言った直後、レイリスからジュエルシードの暴走よりも大きい魔力が放たれた

「わぁっ！」

フェイトが驚いているとジュエルシードの暴走が止まった

「あ・・あああ」

フェイトは魔力の使い過ぎでよろけた

「フェイト！」

アルフが人型に戻りながら近づいてきた

「おっと！」

それより先にレイリスがフェイトを抱きとめた

「大丈夫か？フェイト。」

レイリスはフェイトに優しく話しかけた

「なっ！あんた、フェイトを離しな！」

アルフがレイリスを睨み付けた

「そう睨むな、フェイトには何もしない。」

そう言うとレイリスはフェイトに手をかざした

「傷は治した。後はゆっくり休ませてやれ。」

そう言ってアルフにフェイトを渡した

「くっ！礼は言わないよ！」

そう言うとアルフはフェイトを抱え行ってしまった

―なのは―

なのはは、レイリスと別れ家の帰ってきた

「レイジングハート、かなりの大出力にも耐えれるデバイスなのに。それを一撃でここまで破損させるなんて。」

ユーノはレイジングハートを見ながら言う

「あの子となのはの魔力の衝突？いや・・・それじゃあ説明がつかない・・あれはやっぱりジュエルシードの・・」

コンコン

その時、ドアをノックする音がし、なのはが入ってきた

「ユーノ君、レイジングハート大丈夫？」

「うん。かなり破損は大きいけど、きっと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから明日までには直ると思う。」

「うん。」

「なのはは、大丈夫？」

「うん。レイジングハートが守ってくれたから。」

なのはは、切なげにレイジングハートを見て

「ごめんね、レイジングハート。」

―レイリス―

レイリスは、部屋に帰ってきていた

「ん～？」

レイリスは、フェイトのことを考えてきた

「＜マスター、どうしました？＞」

「フェイトの傷を治したときにな、ジュエルシードでできた傷とは違う痕があったんだ！」

「＜違う傷痕？＞」

インフィニットが言う

「ああ、背中にまるでムチで叩かれたみたいな傷が・・・」

レイリスは、考えるように言う

「まさか、プレシアが？」

レイリスは、まさかと思いながら言った

―フェイト―

次の日、フェイトはマンションの屋上にいた

「お土産はこれでよしと。」

「甘いお菓子か？こんなもの、あの人が喜ぶかね？」

「わかんないけど、こういうのは気持ちだから。」

「ふ～ん。」

「それじゃあ、行っこか。」

フェイトが次元転移しようとした時

「ちょっと待ってくれない？」

誰かに止められた

「あ、あんたは！」

「俺も一緒に連れってくれない。」

レイリスがいた

「なんで、あんたがここにいるんだい！？」

「昨日、フェイトの傷を治したときにちょっとね。」

「なっ！」

「それより、一緒に連れってくれ。」

「なぜですか？」

フェイトがレイリスに言う

「俺は、君の母親・・・プレシア・テスタロッサに用がある。」

「！！」

フェイトは驚いた

「母さんを知ってるの？」

「知ってる・・かなりな。」

「・・・・・」

フェイトは考えていた

「大丈夫だ、プレシアの居所は誰にも言わない！」

「・・・・・・」

レイリスの目をフェイトは見ていた・・・・そして

「わかりました。連れて行きます。」

「フェ、フェイト？」

「大丈夫だよ、アルフ。この人は嘘をついていない。そんな目をしてる。」

「まぁ、フェイトが言うなら・・・」

「ありがとう、フェイト。」

そうしてフェイトが次元転移を開始した

「次元転移。次元座標 - ８７６Ｃ　４４１９　３３１２　Ｄ６９９３５８３　Ａ１４６０　７７９　Ｆ３１２５。開け誘いの扉、時の庭園、テスタロッサの主の下へ。」

ー時の庭園ー

「ここが、プレシアのいるところ。」

レイリスは次元転移を終え時の庭園に来ていた

「それじゃあ、母さんのところにいきます。」

「ああ、よっと！」

レイリスはフードを被った

「何でそんなものを被るんだい？」

「ちょっとね。」

レイリスがアルフに誤魔化していると大きな扉の前に着いた

「ここに母さんがいます。」

そう言いフェイトは扉を開けた

「母さん、ただいま戻りました。」

フェイトの言う先には1人の女性がいた。

「お帰りなさいフェイト。それで、どうして無断でここに人を招いたのかしら。」

女性は、鋭い殺気を放った

「えっ・・・と、母さんの知り合いというので・・・」

「知り合い？」

女性がレイリスを見ると

「知らないわ、そんな人。」

「忘れたか？プレシア。」

レイリスはフードを脱いだ

「俺を・・・」

「！！！！」

プレシアは目を見開き驚いていた

「レ、レイ・・さん？」

「久しぶりだなプレシア。」

レイリスは久々に再開に言った

「フェイト、少しだけプレシアと2人にしてくれないか。」

「えっ？」

「頼む。」

フェイトは何も言わず部屋から出て行った

「レイさん、どうしてあなたが？」

「たまたま、俺もあの街に居てなそれでだ。」

「んっ・・・」

「心配するな、お前のことは誰にも言うつもりはない・・・それよりだ。」

レイリスは本題に入った

「あの子・・フェイトはアリシアのクローンか。」

「！！！」

「その反応をみるに間違いないか。」

レイリスは目を瞑った

「そうよ・・フェイトはアリシアのクローン。私がプロジェクトFで生み出したクローン。」

プレシアは言う

「でも!!あのこはまるでアリシアじゃない。私の娘アリシアじゃなかった!」

「当たり前だ。いくらクローンでも元とまったく一緒なんて不可能なんだ!」

レイリスは言った

「命には限りがある。それを弄ぶことなんて許されることではない!アリシアは生き返らない!」

「プレシア!お前は何をしようとしている?プロジェクトFでの蘇生がだめとわかった今、ジュエルシードで何をしようとしている!」

レイリスがプレシアに問いかける

「生き返る・・アリシアは絶対に生き返る!」

プレシアはレイリスを睨み付けた

「レイリス!あの時あなたの力があればアリシアは今、生きていた。でもあなたはアリシアを救ってはくれなかった。あなたを絶対に許さない!」

「・・・・わかった。今日はこれで帰る。」

レイリスは扉を開けた

「プレシア、一つだけ言っとく。フェイトを愛してやれ・・・アリ

シアとの約束だろ？」

そう言ってレイリスは出て行った

「あっ！」

レイリスが出てきてフェイトが近づいてきた

「悪かったな、時間を取らせて俺はこれで帰るよ。」

「母さんと何を話したんですか？」

フェイトが聞いた

「それは言えない。それじゃあな。」

そう言いレイリスは行ってしまった。レイリスは少しだけ泣いていた

―フェイト―

フェイトはレイリスが言った後プレシアのところに来た

「母さん、どうしたの？」

母親の様子がおかしかったのでフェイトは言った

「何でもないわ。それよりフェイト、ジュエルシードはいくつ手に入れたの？」

「４つです。」

「４つ・・・たった４つ。」

プレシアはフェイトの方を向き

「足りない・・・全然足りないわ。」

フェイトに手を上げようとした時

（フェイトを愛してやれ・・・アリシアとの約束だろ？）

レイリスの言葉が過り止まった

「か、母さん？」

「早く行きなさい。ジュエルシードこれだけでは足りないわ。」

「えっ？」

「行きなさい！！」

「は、はい！」

フェイトは部屋を出て行った

「アリシア・・・・」

―レイリス―

レイリスは地球に帰ってきてジュエルシードを探していた

「インフィ、ジュエルシードの位置は？」

「＜発動しそうなのが一つあります。臨海公園の方です。＞」

「わかった。」

レイリスは公園へ向かった

―臨海公園―

キィィィィィィィィン

ジュエルシードが発動しそばにあった木と融合した

「封じ結界、展開」

ユーノが結界を展開した

「ふっ！」

なのはが木と対峙した・・・その時、黄色い閃光が降り注いだ

「うぉ！生意気にバリアまで張るのかい。」

フェイトとアルフがきた

「今までのより強いね。それにあの子もいる。」

フェイトがなのは見た

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

木がなのはとフェイトに攻撃をしようとした時

「クロス・ファイヤー・ブレイカー！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

突然、黒い光線が木を一撃で倒した

「インフィ、封印だ！」

「＜はい、マスター！＞」

レイリスは封印を開始した

「ジュエルシード・シリアル？・・・封印。」

レイリスはジュエルシードを封印した

「レイリス！早くジュエルシードをこっちへ！」

ユーノが言う

「悪い、ユーノ。ジュエルシードは渡せない。」

「えっ？」

「レイお兄ちゃん？どういうこと？」

なのはが言う

「なら、こっちへ渡してください。」

フェイトがレイリスに言った

「残念だけどどっちにも渡せない。」

「それなら・・・ふっ！」

フェイトがレイリスに向かってきた

「ん！」

レイリスが構えた

キィィィィィン

「ストップだ！」

突然、レイリスとフェイトの間に誰かが入ってきた

「ここでの戦闘は危険すぎる。」

「あっ？」

「んっ？」

「時空管理局・執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聴かせてもらおうか？」

少年はそう言った

第7話　「生と死、三人目の魔法使いなの？」（後書き）

クロノが出てきました。最後に少しだけ・・・

そんなことより、レイリスとプレシアですね。知り合いというのはわかりましたが

どんな関係だったのかは、まだわかりません。

作中では、アリシアの死がレイリスのせいみたいなことになってますが真実はどう

なのでしょうか？

では、次は第８話で会いましょう。

第8話　「レイリスと管理局、それは大いなる危機なの？」（前書き）

第8話です。

なかなか更新できないよ～

それでは、どうぞ。

第8話　「レイリスと管理局、それは大いなる危機なの？」

レイリスとフェイトが戦闘をしようとした時、1人の少年が間に入ってきた

「ストップだ！ここでの戦闘行動は危険すぎる！」

「あっ！」

「んっ！」

「時空管理局・執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聴かせてもらおうか？」

クロノと名乗った少年は言った

「（ハラオウン？ってことは・・・）」

レイリス少し焦った

「まずは、全員武器を引くんだ！」

そう言って3人は地面に降りたがレイリスは飛んだままでいる

「何をしている！早く降りて来い！」

クロノがそう言った瞬間

ドーンドーン

アルフがクロノに攻撃をした

「フェイト、撤退するよ！離れて！」

「うんっ！」

フェイトが離れるとアルフはさらに攻撃をした

「ジュエルシードを渡して！」

フェイトがレイリスに向かってきた

ドーンドーン

「きゃっ！」

「んっ！」

クロノがフェイトに向けて攻撃した

「フェイト！」

アルフがフェイトを受け止める

キィィィィィィン

クロノがフェイトにさらに攻撃しようとした時

「だめ！打たないで！」

なのはがフェイトの前に立ち叫ぶ

「捕縛結界！」

レイリスがクロノを結界の中に閉じ込めた

「なっ、なにをする！これは公務執行妨害だぞ！」

「フェイト、アルフ今のうちに行け！」

レイリスは言った

「フェイト！行くよ！しっかり掴まって！」

アルフはそう言いフェイトを背に乗せ飛んで行った

「ふう。」

クロノは一息ついてレイリスの前にきた

「それじゃあ、そのロストロギアを渡してもらおうか！」

クロノが言う

「その前に一ついいか？」

「何だ。」

レイリスは空を見た

「リンディいるんだろ？出て来い！」

「なっ！」

クロノは驚いた

「お久しぶりです。レイさん。」

突然、何もないところから画面のようなものが出てきた

「ああ、久しぶり。」

「か、母さん！こいつを知ってるんですか！？」

「ええ、知っているわ。それでレイさん？」

「ああ、そっちに行けばいいんだろ。」

「クロノ、そっちの子たちも一緒にアースラまで案内して。」

「？？？？」

なのははわけがわからないといった顔をしていた

ーアースラー

レイリス達はクロノに案内されアースラに来た

「〈レイお兄ちゃん、ユーノ君ここって？〉」

「〈時空管理局の次元航行船の中だね。〉」

「〈簡単に言えばたくさんの世界を行き来する船ってこと。〉」

ユーノとレイリスがなのはに説明した

「〈あんま簡単じゃないかも。〉」

「〈う～ん、なのはの暮らしている世界のほかにもいくつもの世界があって僕たちの世界もその一つで・・・〉」

「〈その狭間を渡るのがこの船で、それぞれの世界に干渉しあう出来事を管理しているのが時空管理局ってこと。〉」

「〈そうなんだ。〉」

なのははなんとなくわかったみたいだ

ウィィィィィン

扉を一つ通ると

「ああ、いつまでもその恰好ままでは窮屈だろ。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ。」

「あっそっか！そうですね、それじゃあ。」

なのはは元の服に戻った

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか。」

「ああ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました。」

「ん？」

なのはが不思議な顔をする

キィィィィィィィン

ユーノが人の姿に戻った

「はぁーなのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな?レイリスは初めてだよね?」

「あ、あ、あ、あ、」

なのはがユーノを指さして震えていた・・・・そして

「ふぇえええええええええええええ」

なのはの叫びがアースラ中に響いた

「な、なのは?」

「ユーノ君って!ユーノ君って!そのあの」

「なのは、落ち着け。」

レイリスがなのはに言った

「君たちの間でなにか見解の相違でも？」

クロノが言う

「な、なのは。僕たちが最初に出会った時って僕はこの姿じゃ？」

「ちがうちがう、最初っからフェレットだったよ！」

「う～ん、う～ん。」

ユーノが出会った時のことを思い出そうと考える

「あーそうだ、ごめんごめん。この姿まだ見せてなかった。」

「だよね、そうだよね。びっくりした。」

「あーちょっといいか。君たちの事情はわからないが、艦長を待たせているので早く話を聞きたいのだが。」

クロノが怒り気味に言った

「あ、はい。」

「すみません。」

「では、こちらへ。」

４人はブリッジに向かった

「艦長来てもらいました。」

「あっ！」

４人がブリッジへ入るとそこはお茶室のような和風になっていた

「お疲れさま。まぁ、３人ともどうぞどうぞ楽にして。」

「「・・・・」」

なのはとレイリスが唖然としていた

「どうぞ。」

なのは達のまえにお茶菓子がおかれた

「なるほど、そうですか？あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね。」

「はい、それで僕が回収しようと。」

「立派だわ。」

「でも、同時に無謀でもある！」

クロノがユーノに言った

「あのロストロギアって？」

なのはが尋ねる

「遺失世界の遺産。次元空間の中にはいくつもの世界があってその中には極稀に進化しすぎる世界がある。技術や化学、進化しずぎたそれらが自分たちの世界を滅ぼしてしまってその後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産。それらを総称してロストロギアという。わかったか？なのは。」

レイリスが説明した

「う～ん？なんとなく？」

「ようは、危険なものって覚えておけばいい。」

「・・・・・」

クロノが唖然としていた

「艦長！さっきこいつと知り合いと言ってましたが何者なんですか？」

「クロノ、口には気を付けなさい。この人は階級でいえば私より上よ。」

リンディが言う

「えっ？階級が上？」

「そうよ。この人は時空管理局“最高管理者”なんだから。」

「「えええええええええええええええ」」

クロノだけじゃなくユーノも驚いていた

「リンディ、それ階級じゃないだろ。」

「でも、似たようなものじゃないですか。」

リンディがレイリスに言う

「最高管理者？」

なのはが言った

「時空管理局で一番偉いってことよ。」

「・・・・ふぇえええええええええええええ」

それを聞いてなのはも叫んだ

「それでどうしてレイさんはあそこにいたんですか？」

「４年くらい前からあの街に住んでてな。ジュエルシードを集めてたのはなのは同様偶然だ。」

レイリスがリンディに説明した

「ユースティア管理者、申し訳ありません！」

急にクロノがレイリスに頭を下げた

「なんだ急に？」

「誰と知らずに生意気な口を。」

「ああ、別にいいよ。気にしてないし。」

レイリスはクロノに言った

「レイさんはそういうの気にしないタイプだもの。」

「そういうこと。だからユーノもなのはも今のままでいいから。」

「わ、わかった。」

「う、うん。」

「まぁ、それよりロストロギア・ジュエルシードの回収については時空管理局が全権をもちます。」

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に帰って元通り暮らすといい。」

「でもそんな。」

「これは、次元干渉に係る事件だ！民間人に介入してもらうレベルの話じゃない！」

クロノはなのはに言った

「でも！」

「まぁ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて2人で話し合ってそれから改めてお話をしましょう。」

「送って行こう。元の場所でいいね。」

「ちょっと待って！」

レイリスが止めた

「なにかしら、レイさん？」

「リンディ、いつからそんな悪い子になったのかな？かな？」

「な、なんのことでしょう。」

リンディは動揺した

「正直に言えば許してあげてもいいよ？」

ダラダラダラダラダラ

リンディは滝のような汗を出していた

「ユースティア管理者！」

「レイリスで良いってクロノ。」

「うっ・・・レイリスさんどういうことでしょう。」

躊躇いながらクロノは聞いた

「クロノ、お前さっきなのは達に民間人が介入するレベルの事件じゃないって言ったよな。」

「はい、でもそれが？」

「問題はその次。」

レイリスはなのはの方を見た

「なのは、リンディが言ったこと覚えてる？」

「え～と・・・」

「今夜一晩ゆっくり考えて2人で話し合ってそれからまた話をしようだよ。」

なのはの代わりにユーノが言った

「そこだよ。なのは達には係るなって言ってるのに何を考える必要がある。」

「「あっ！」」

なのはとユーノが気付いた

「で、でもどうしてそんなこと？」

なのはがレイリスに言った

「時空管理局は万年人手不足なんだ。だからあんな言い方をしたんだよ。」

「どういうこと？」

「民間人を危険な目に合わせるわけにはいかないから管理局側から協力してくれとは言えないんだ。だからなのは達から協力したいと言うように考える時間を与えたんだ。」

レイリスはそう言いリンディを見た

「うっ！」

「まぁ、事態が事態だ今回は大目に見よう。」

レイリスはなのはとユーノを見た

「なのは、ユーノ、ジュエルシードの回収手伝ってくれるか？」

「うん！」

「もちろん！」

なのはとユーノは言った

なのははアースラから帰ってからレイリスと一緒に今までの事からこれからの事を桃子に説明した。魔法の事ユーノやレイリスの正体は秘密で

「もしかしたら、危ないかもしれないことなんだけど、大切な友達と一緒に始めたこと最後までやり通したいの。」

「・・うん」

「心配かけちゃうかもしれないけど・・・」

「それはもういつだって心配よ。お母さんはお母さんだから、なのはのことがすごく心配。」

桃子は顔を覆って言った

「だけどね、なのはがまだどっちにするか迷ってるなら危険なことはダメよっていうけどもう決めたんでしょ？」

そう言ってレイリスを見た

「それにレイ君がなのはのこと守ってくれるんでしょ？」

「当然！」

「じゃあ、いってらっしゃい。お父さんとお兄ちゃんはちゃんと説得しておくから。」

「うん、ありがとうお母さん。」

そうしてなのはとレイリスはアースラに向かう準備を整えた

第8話　「レイリスと管理局、それは大いなる危機なの？」（後書き）

レイリスの正体がようやくわかりました。それは、時空管理局“最高管理者”です

オリジナルの設定ですが、これは階級ではなく通称的なものです。

リンディが一番偉いと言ってましたがレイリス自体はもう隠居しています。だから

地球で暮らせてたんですが・・・

ですが、何かと頼られることが多いので管理局の仕事は結構してます。

それでは、次は第9話で会いましょう。

第9話　「レイリスと約束、決戦は海の上でなの」（前書き）

第9話です。

このまま、ラストまでがんばります。

それでは、どうぞ！！

第9話　「レイリスと約束、決戦は海の上でなの」

「というわけで・・本日零時をもって本艦全クルーの任務はロストロギア、ジュエルシードの捜索及び回収に変更されます。また本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり結界魔導士でもあるこちら・・」

「はい、ユーノ・スクライアです！」

ユーノが自己紹介をし

「それから、彼の協力者で現地の魔導士さん。」

「高町なのはです。」

なのはが自己紹介した

「以上2名が臨時職員として事態にあたってくれます。」

「「よろしくおねがいします。」」

2人は頭を下げた

「そして、急ですが応援という形で最高管理者、ユースティア管理者が来ています。」

「よろしく。」

レイリスが挨拶をした

―ブリッジ―

「じゃあ、ここからはジュエルシードの位置特定はこちらでするわ。場所がわかったら現地に向かってもらいます。」

「「はい！」」

「艦長、お茶です。」

エイミィがお茶を持ってきた

「ありがとう。」

リンディはそう言うと緑茶に砂糖とミルクを入れて飲んだ

「はふ？」

「（まだ、そんなことをしていたのか・・・）」

レイリスが心の中で呟いた

「そう言えば、なのはさん学校の方は大丈夫なの？」

「あっはい、家族と友達には説明してますので・・」

なのははそうリンディに言った

―なのは―

その後、なのはとユーノはジュエルシードの回収に行っていた

「捕まえた、なのは！」

「うん！」

なのはは封印の構えをした

「リリカル・マジカル・ジュエルシード・シリアル？・・・封印。」

なのははジュエルシードを封印した

「なかなかのコンビだな、なのはとユーノ・・」

「ええ、２人とのすごく優秀。このままうちにほしいくらい。」

リンディが言った

「ふふ、あっリンディ！」

「何ですか？」

「これから、すこし単独行動を取る。なのはとユーノにはすぐ戻ると言っといてくれ。それじゃ・・」

「あっ！レイさん・・」

レイリスは転移魔法で行ってしまった

ーフェイトー

「フェイト、ダメだ。また空振りみたいだ。」

「そう・・・」

フェイトとアルフはジュエルシードを捜索していたがなかなか見つからないようだ

「やっぱ、向こうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ。」

「うん・・・でも、もう少しがんばろう。」

フェイトがそう言った瞬間

「やぁ、お二人さん調子はどうだ？」

「「！！」」

フェイトとアルフは急に声をかけられ驚きながら振り返った

「あ、あんたなんでここに！？」

「ちょっと、２人に忠告をしにな。」

「忠告？」

フェイトが聞いた

「フェイトの素性が管理局に知られそうになっている。」

「「！！！！」」

「今は、俺が少し妨害してるが長くは持たないな。」

「何で、敵のあんたがそんなことを！？」

「約束だから・・・」

レイリスは、ある女の子との約束を思い出していた

（ねぇ、もし私に妹ができたら仲良くしてくれる？）

（もちろん、？？？？と一緒に仲良くするし守ってあげるよ。）

（本当！やったー、それじゃあ約束ね。）

（ああ、約束。）

「どうしたんですか？」

フェイトが聞いた

「いや、それよりフェイト。」

「はい？」

「あんまり、無茶はするなよ。」

レイリスはフェイトの頭を撫でた

「あっ／／／／」

「じゃあ、今日はこの辺で。それじゃ・・」

レイリスは転移して行った

「（なんだろう、胸がドキドキする。）」

「フェイト？どうしたんだい？」

「ううん、なんでもない。」

フェイトは咄嗟に誤魔化した

ーなのはー

なのは達がアースラに来てから１０日目

「なのはが手に入れたジュエルシードが？．？．？の３つ。そして、フェイトが？．？の２つ。残りあと６つか・・」

レイリス、なのは、ユーノは食堂でお菓子を食べながら話していた

「うん、それにしても今日も空振りだったね。」

「そうだね。もしかしたら長くかかるかもしれないね。」

３人がそんなことを話していると

ウーンウーンウーン

突然、警報が鳴った

「な、なんてことしてんのあの子たち！」

ーフェイトー

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・」

フェイトは海上で呪文を唱えていた

「（ジュエルシードはたぶん海の中、だから海の中に電気の魔力流を叩きこんで強制発動させて位置を特定する。そのプランは間違ってないけど・・・フェイト！）」

「はぁぁぁぁぁぁぁ」

フェイトは魔力流を海に放った

ドーンドーンドーン

魔力流を放ったことにより海が荒れた

「はぁはぁはぁ・・・見つけた残り６つ」

「（こんだけの魔力を打ち込んで・・さらにすべてを封印して、こんなのフェイトの魔力でも絶対に限界越えだ。）」

「アルフ、空間結界とサポートをお願い。」

「ああ、まかせておいて。」

すると突然海から竜巻が派生した

「いくよ、バルディッシュ。がんばろう。」

そう言いフェイトは竜巻に向かった

―アースラ―

「なんとも、あきれた無茶をする子だわ。」

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力を超えている。」

ウィ――――ン

「フェイトちゃん！」

するとなのは達が来た

「あの私急いで現場に。」

「その必要はないよ。ほうっておけばあの子は自滅する。」

「あっ」

なのはが画面を見るとフェイトが苦戦しているようだ

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

「でも・・」

「今のうちに捕獲の準備を。」

クロノはオペレーターに言った

「私たちは常に最善の選択をしないといけないわ。残酷にみえるかもしれないけどこれが現実。」

「でも・・」

「〈いって〉」

「あっ！」

「〈なのは、いって。〉」

「〈ゲートは俺が開いてやる。〉」

ユーノとレイリスが言った

「〈でも、私がフェイトちゃんと話したいのはユーノ君とレイお兄ちゃんには・・〉」

「〈確かに関係ないかもしれない。〉」

「〈でも、なのはが困ってるんなら僕たちは力になりたいんだ。〉」

「〈だからいけ、なのは！〉」

「うん！」

なのはは転送ゲートに乗った

「な、きみは！」

「ごめんなさい、高町なのは指示を無視して勝手な行動をとります。」

「フェイトの結界内へ転送！」
レイリスはなのはを転送した

ーフェイトー

「あっ！」

フェイトが空を見るとセットアップしたなのはが降りてきた

「フェイトの邪魔をするなー！」

アルフがなのはに向かって攻撃ををしようとした

キィィィィィィィィン

「なっ！」

「違う、僕たちは君たちと戦いにきたんじゃない！」

ユーノがアルフの前に立ちふさがった

「ユーノ君！」

「あっ」

「馬鹿な、なにやってんだ君たちは！」

クロノが言った

「〈ごめんなさい。命令無視は後でちゃんと謝ります。でも、ほっとけないの。〉」

なのはは言った

「〈あの子、きっと一人ぼっちなんだ。1人きりが寂しいのは私少しだけどわかるから。〉」

なのはは言う

「フェイト、アルフまずはジュエルシードを停止させないと大変なことになるぞ。」

レイリスもアースラから降りてきた

「だから、今は封印のサポートを」

そう言いユーノは竜巻にバインドを放った

「俺も！はぁ」

レイリスもバインドを放った

「フェイトちゃん！」

なのははフェイトに近づいた

「手伝って、ジュエルシードを止めよ。」

キィィィィィィン

そう言うと、レイジングハートからピンク色の光が出てきてバルディッシュに入った

「＜　Ｐｏｗｅｒ　Ｃｈａｒｇｅ　＞」

「2人できっちり半分子。」

なのはは、フェイトに自分の魔力を分けた

「くっ！結構きついな、これ・・」

キィィィィィン

「弱音を吐いてるんじゃないよ！！」

アルフもバインドを放った

「ユーノ君とアルフさんとレイお兄ちゃんが止めてくれてる！だから今のうち。２人でせーので封印。」

なのははそう言い竜巻の上空へ移動した

「ディバインバスター・・・プルパワー。いけるね。」

「＜　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　＞」

なのはは竜巻に向かって構えた

「ふっ！」

フェイトも構えた

「せーの！」

「サンダー・・！」

「ディバイン・・！」

なのはとフェイトは竜巻に魔法を放つ

「レイジー！！」

「バスター！！」

ドーーーーーーンドドドドドドドド

なのはとフェイトが魔法を放つとすごい衝撃波が起こった

「ジュエルシード、６こすべての封印確認しました。」

「なんて、でたらめな・・・」

「あっ、でもすごいわ！」

封印が終わると海の中からジュエルシードが現れた

（同じ気持ちを分け合えること。寂しい気持ちも悲しい気持ちも半分子にできること。ああ、そうだ・・・やっとわかった。私、この子と分け合いたいんだ。）

なのはは自分の気持ちに気づいてフェイトに言う

「友達になりたいんだ。」

「あっ！」

フェイトはなのはの言ったことに驚いた

ーレイリスー

「なのは・・あいつ・・・ふっ。」

レイリスはなのはとフェイトを見て微笑んだ

「さて、これでジュエルシードは全部そろった・・・んっ！」

レイリスは急にすごい魔力を感じた

「この魔力は・・・・っ！プレシア！！」

―フェイト―

突然、あたりに雷が降り注いだ

ド――――――――――――ン

「母さん?！」

すると、雷がフェイトに当たった

「あああああああああああああ！！」

「フェイトちゃん！！きゃっ！」

なのはにも雷が当たりそうになった

「くっ！プレシア。あっ！フェイト。」

レイリスがフェイトを見ると気を失ったのか海に落ちて行った

「フェイト！！」

アルフがフェイトが海に落ちる寸前でキャッチし、ジュエルシードに手を伸ばした

「させるか！」

クロノがそれを防いだ

「邪魔・・・するなーーー！！」

アルフがクロノを吹き飛ばした

「んっ！3つしかない。」

アルフがジュエルシードを見ると3つしかなかった

「くっ！」

アルフがクロノを見ると残り3つを持っていた

「うぅぅ！！うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

アルフは海に向かって魔法を放ち水しぶきを上げた

ド――――――――――ン

「きゃっ！ううぅっあ！」

なのはが目を開けるとアルフとフェイトはいなくなっていた

―レイリス―

「プレシア・・・お前はもう・・・」

レイリスは空を見上げながらつぶやいた

第9話　「レイリスと約束、決戦は海の上でなの」（後書き）

レイリスの約束の相手ですが、皆さんわかりましたよね。伏字にする必要なかった

かな？

未だにレイリスは、プレシアとどういう関係なのかわかりませんね。

それどころか

最高管理者ということくらいしかわかってませんね。秘密が多すぎだって・・・

それと、感想受付の制限をなくしましたので、よければおねがいします。

では、次は第１０話で会いましょう。

第１０話　「最初で最後、それぞれの胸の誓いなの」（前書き）

第１０話です。

無印もあと少し、それではどうぞ。

第１０話　「最初で最後、それぞれの胸の誓いなの」

「４人とも戻ってきて・・」

「了解。」

クロノは言った

「で、なのはさんとユーノ君・・・そして、ユースティア管理者には私、直々にお叱りタイムです。」

ーアースラー

「「「・・・・・・・・・」」」

なのは、ユーノ、レイリスは俯いていた

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。勝手な行動や判断があなた達だけでなく、周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ。それは、わかりますね？」

「「「はい・・・」」」

「本来なら厳罰に処すところですが、結果としていくつか得るところがありました。よって今回の事については、不問とします。」

「「あっ！」」

なのは、ユーノ、レイリスは互いに見合った

「ただし、二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい。」

「すみませんでした。」

「ごめんなさい。」

レイリス達は謝った

「さて、問題はこれからね？クロノ、事件の大元について何か心当たりは？」

「はい。エイミィ、モニターに。」

クロノは言った

「はい、はーい！」

キュ――――ン

エイミィがモニターを起動すると1人の女性が映った

「あら！」

「くっ！」

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士、プレシア・テスタロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら違法研究と事故によって放逐された人物です。」

クロノは説明を続ける

「登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく・・」

「フェイトちゃん。あのとき母さんって・・・」

「親子・・・ね。」

「そ、その・・・驚いてたっていうより何だか怖がっているみたいでした。」

なのはは言った

「エイミィ！プレシア女史についてもう少し詳しいデータを出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも。」

「はいはい、すぐに探します。」

エイミィが返事をした

「この人がフェイトちゃんのお母さん？」

―レイリス―

レイリスは一人会議室から出て来ていた

「はぁ～、ついにばれたか。このままじゃプレシアの居所がわかるのも時間の問題か・・・」

レイリスはどうすればいいか悩んでいた

―時の庭園―

バシッバシッバシッ

「うっうう」

「はぁはぁはぁ」

プレシアがフェイトをムチで叩いていた

「あれだけの好機を前にして、ただぼーとしているなんて・・」

「ごめん・・なさい・・」

フェイトは謝った

「ひどいわ、フェイト。あなたは、そんなに母さんを悲しませたいの？」

プレシアはムチを振り上げ

バシッーー

「あああああああ！」

ーアースラー

「プレシア・テスタロッサ・・・ミッドの歴史で２６年前は中央技術開発局の第３局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉“ヒュードラ”使用のさい。違法な材料をもって実験を行い・・失敗。結果的に中規模次元震を起こしたことにより、中央を追われて地方へと移動しました」

エイミィが説明を続けた

「ずいぶん、揉めたみたいです。失敗は結果にすぎず実験材料に違法性はなかったと。辺境に移動後も数年間は技術開発に携わっていました。しばらくのうち、行方不明になって・・・それっきりですね。」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

リンディが聞いた

「それらのデータはきれいさっぱり抹消されています。今、本局に問い合わせて調べてもらってますので・・」

「時間はどのくらい？」

「一両日にはと・・」

エイミィが答えた

「う～ん、プレシア女史もフェイトちゃんもあれほどの魔力を放出したあとじゃ・・そうそう動けないでしょう。その間に、アースラのシールド強化もしないといけないし・・」

リンディは立ち上がり

「あなた達は、一休みしておいた方がいいわね。」

「あっでも・・」

「特になのはさんは、あまり長く学校を休んでもよくないでしょう。一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいた方がいいわ。」

「はい・・・」

なのはは俯き気味に言った

―リンディ―

「艦長！」

リンディは会議室を出たところでエイミィに呼ばれた

「何かしらエイミィ？」

「あの、プレシア・テスタロッサのことで少し・・」

エイミィは周りを気にしながら言った

「実は、プレシア・テスタロッサにはとても親しくしていた人物がいたらしいです。」

「親しい人物？それくらい誰にだって・・」

「その人物がユースティア管理者なんです！」

「！！！」

リンディは意外な人物の名前を聞いて驚いた

「そ、それ、本当なの！」

「まだ、確かではないんですが・・確実ではないかと。」

「だとしたら、レイさんはフェイトちゃんがプレシア女史の娘だということを知っていた？ならなぜ、黙っていたのかしら・・・」

リンディの中でレイリスの疑惑が膨れ上がった

―時の庭園―

「フェイト！フェイト！」

アルフは、プレシアのお仕置きで倒れているフェイトに駆け寄った

「ああっフェイト！・・フェイト。」

アルフはフェイトを抱きしめた

「くっ！」

アルフはプレシアのいる部屋を睨み付けた

「たった9つ・・・これでも次元震を起こせるけど、アルハザードには届かない。あっおふっ！」

プレシアは突然、血を吐いた

「もうあまり時間がないわ・・私にもアリシアにも・・」

ド――――――――ン

すると突然、扉のほうで爆発が起こった

「あっ」

プレシアが後ろを見るとアルフがいた

「くっ！わぁー」

アルフはプレシアに向かって行った

キィィィィィン

「うわぁぁ！」

しかし、プレシアの障壁で防がれた

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

アルフは、防がれながらもプレシアに向かって行った

「うわぁぁっ！！」

そして、プレシアの障壁を破って胸倉を掴んだ

「あんたは母親で、あの子はあんたの娘だろ！あんなにがんばっている子に・・あんな一生懸命な子に・・なんであんな酷いことができるんだよ！・・・・あっ」

ド――――ン

プレシアは、無言でアルフに魔法を食らわせた

「がっ！」

「あの子は、使い魔の作り方がへたね。余分な感情が多すぎるわ。」

「くっ！フェイトはあんたの娘・・あんたに笑ってほしくてやさしいあんたに戻ってほしくてあんなに、あっ！」

「邪魔よ・・消えなさい！！」

プレシアは杖をだしてアルフに放った

「くっ！」

キィィィィィン

咄嗟にアルフはそれを防いで時の庭園の真下から落ちてきた

「（どこでもいい・・転移しなきゃ・・ごめんフェイト・・少しだけ待ってて・・）」

キィィィィィィン

アルフはどこかに転移した

「フッ」

アルフが転移したあとプレシアはフェイトの所へ行った

「フェイト。起きなさい、フェイト。」

「はい・・母さん。」

フェイトは目を覚ました

「あなたが手に入れてきたジュエルシード、９つこれじゃ足りないの。最低でもあと５つ、できればそれ以上。急いで手に入れてきて、母さんのために・・」

「はい・・・あっ・・アルフ？」

「ああ？」

「あの子は、逃げ出したわ。怖いからもういやだって・・必要ならもっと良い使い魔を用意するわ。」

プレシアはフェイトを抱き起した

「忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけ・・いいわね・・フェイト？」

「はい・・・母さん。」

ー高町家ー

「っとそんな１０日間だったんですよ。」

「あら～、そうだったんですか。」

なのは、ユーノ、レイリスは一時帰宅ということで高町家に戻ってきていた。そして、この１０日間のことの説明にリンディが同行していた

「〈リンディさん、すごい誤魔化しというか真っ赤なウソというか・・〉」

「〈す、すごいね。〉」

「〈確かに・・・〉」

３人は少し苦笑いをしていた

ーなのはー

翌日、なのはは学校に来ていた。そして、屋上ですずかとアリサと話していた

「なのはちゃん！よかった元気で！！」

「うん、ありがとうすずかちゃん。」

なのはは、すずかにお礼を言いアリサを見た

「アリサちゃんもごめんね、心配かけて・・」

「まぁ、よかったわ・・元気で。」

そして、３人は教室に移動した

「そっか・・また行かないといけないんだ。」

「大変だね。」

「うん・・でも大丈夫！」

なのはは、ガッツポーズをとった

「放課後は？少しくらいなら一緒に遊べる？」

「うん！大丈夫。」

「じゃあ・・家にくる?新しいゲームもあるし」

アリサは言った

「本当!」

「あっ、そういえばね夕べ怪我をしている犬は見つけたの。」

「犬?」

「うん、なんかすごい大型で毛並みもオレンジ色で・・おでこにね・・こう赤い宝石がついているの」

「あっ!」

なのはは心当たりがある顔をした

ーバニングス家ー

「〈やっぱり、アルフさん。〉」

「〈あんた達か・・〉」

「〈その怪我どうした?〉」

なのはに放課後呼ばれたレイリスが聞いた

「・・・・・」

アルフはそっぽをむいてしまった

「〈・・・なのは、俺とユーノで話を聞いておくからアリサ達と・・〉」

「〈うん〉」

なのははアリサ達とお茶をしに行った

「で、どうしたんだ？」

「・・・あんた達がここにいるってことは、管理局の連中も見てるんだよね？」

「ああ」

アルフがそう言うとアースラからクロノが話しかけてきた

「〈時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ。正直に話してくれれば悪いようにはしない。君のことも君の主、フェイト・テスタロッサのことも・・〉」

「話すよ・・全部。だけど約束して・・フェイトを助けるって。あの子は何も悪くないんだよ・・」

「〈約束する。エイミィ記録を。〉」

「〈してるよ。〉」

「フェイトの母親・・プレシア・テスタロッサは・・すべての始まりなんだ。」

アルフはすべてを語った

「〈なのは？聞いたかい？〉」

「〈うん・・全部聞いた。〉」

「〈君の話と現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ。〉」

「〈どうなるのかな？〉」

「〈プレシア・テスタロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも逮捕の理由にはお釣りがくるからね。だから、僕たちは艦長の命令がありしだい任務をプレシアの逮捕に変更することになる。君はそうする高町なのは？〉」

クロノはなのはに言った

「〈私は・・・・・私はフェイトちゃんを助けたい！〉」

なのはは言った

「〈それでこそ、なのはだな。（はぁ、結局こうなるのか。俺も覚

悟を決めなきゃな。）＞」

レイリスは、心の中で言った

ー翌日ー

なのは、ユーノ、アルフ、そしてレイリスの４人は臨海公園に来ていた

「ここなら、いいね？出てきてフェイトちゃん！」

なのはが言った

キィィィィン

「＜ Ｓｃｙｔｈｅ ｆｏｒｍ ＞」

「んっ！」

なのはが後ろを振り返ると、街灯の上にフェイトがいた

「フェイト・・・もうやめよう。あんな女の言うこと、もう聞いちゃだめだよ。フェイトこのままじゃ不幸になるだけじゃないか・・・だからフェイト！・・・」

ふるふる

フェイトは首を横に振った

「だけど・・・それでも私はあの人の娘だから・・・」

キィィィィィィン

なのはは、セットアップした

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？逃げればいいってわけじゃもっとない。きっかけはきっとジュエルシード、だから賭けよう。お互いがもってる全部のジュエルシード！」

「＜＜　Ｐｕｔ　ｏｕｔ．　＞＞」

レイジングハートとバルディッシュはジュエルシードを出した

「それからだよ・・・全部それから。」

なのはは構えた

「私たちの思いは、まだ始まってもいない。だから・・本当の自分を始めるために・・始めよう・・最初で最後の本気の勝負！」

なのはとフェイトの最終決戦がいま始まる

第１０話　「最初で最後、それぞれの胸の誓いなの」（後書き）

レイリスが、活躍できない・・・妙な伏線を張ったけどスルーになる気がする。

まぁ、そんな主人公はほっといていよいよ次回は、なのはとフェイトの決戦ですね

バトルシーン、苦手なのに大丈夫かな??上手にできたら拍手お願いします。

では、次は第１１話で会いましょう。

第１１話　「真実と偽り、思い出は時の彼方なの」（前書き）

第１１話です。

夏バテ気味です。それでは、どうぞ。

第１１話　「真実と偽り、思い出は時の彼方なの」

「始めよう・・・最初で最後の本気の勝負！」

「んっ！」

フェイトは飛びあがり構えた

―アースラ―

「しかし、珍しいよね。クロノ君がこんなギャンブルを許可するんなんて。」

「まぁ、なのはが勝つに越したことはないけど・・あの二人の勝負自体はどちらに転んでもあまり関係ないからね。」

クロノが言った

「なのはちゃんが、戦闘で時間を稼いでくれているうちに、あの子の帰還先追尾の準備をしておくってね。」

「頼りにしてるんだからね。逃がさないでよ。」

「おう！まかせとけ！！」

エイミィは言った

「・・・クロノ君、あの事なのはちゃんに伝えなくていいの？プレシア・テスタロッサの家族と・・あの事故のこと。」

「勝ってくれるに越したことはないんだ。今はなのはを迷わせたくない。」

―なのは・フェイト―

「＜　Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ．　＞」

フェイトは、フォトンランサーを出した

「あっ！」

「＜　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．　＞」

なのはは対抗してディバインシューターを出す

キィィィィィィン

「ファイアー！」

「シュート！」

お互いにぶつけ合った

ーレイリスー

「成長してるな、なのはだけじゃなくフェイトも。」

「うん、2人ともいい勝負してる。」

「何なんだい、あの子！始めの頃より断然強くなってるじゃないか。」

3人はなのはとフェイトの勝負を見て言った

「まぁ、ジュエルシードの回収で実践経験は積んだし、飲み込みも結構いいほうだし。」

レイリスは言った

「そうだね、やっぱりなのはは才能がある。」

「おっ！フェイトが仕掛けるみたいだな。」

―なのは・フェイト―

キィィィィィィィン

「あっ！」

なのはの周りに無数の魔法陣があらわれた

「＜　Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ．　＞」

「あっ！えっ？」

なのははは、両手両足をバインドで拘束された

「《ライトニングバインド！》」

「〈まずい、フェイトは本気だ！〉」

「〈なのは、今サポートを・・〉」

ユーノは言った

「ダメ――――！」

なのはは言う

「〈アルフさんもユーノ君もレイお兄ちゃんも手を出さないで。全力全開の一騎打ちだから、私とフェイトちゃんの勝負だから！〉」

「〈でも、フェイトのそれは本当にやばいんだよ。〉」

「〈平気！〉」

なのはは言った

「アルタス・クルタス・エイギアス、疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ、バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・」

フェイトが詠唱すると周りに大量のスフィアがあらわれた

「《フォトンランサー・ファランクスシフト！》」

フェイトはなのはに向けて

「打ち砕け、ファイアー！！」

ド――――ン、ドーンドンドンドンドン

大量のスフィアがなのはに命中した

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫ぶ

「はぁはぁはぁはぁ」

フェイトは左手にスフィアを集中してなのはの方をみた

「いった～、撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね。今度はこっちの・・」

攻撃後の煙が晴れなのはが反撃に転じる

「＜　Ｄｉｖｉｎｅ・・＞」

「番だよ！！」

「＜　Ｂｕｓｔｅｒ．　＞」

「うわぁぁぁ！！」

フェイトは、左手のスフィアを投げた

「あっ！」

しかし、威力が違いすぎディバインバスターはフェイトに直撃しそ

うになるが

「くっ！」

キィィィィン

フェイトは障壁で何とか耐えた

「直撃、でも耐えきる！あの子だって耐えたんだから！！」

フェイトは何とか耐えきり息をついた

「はぁはぁはぁ・・・えっ？」

フェイトがなのはを見ると

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション。」

キィィィィィィン

「＜　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．　＞」

するとなのはは、自分の周りから魔力を集め収束した

「んっ！えっ？」

フェイトは避けようとしようとしたが両手両足をバインドで拘束された

「あっバインド！」

フェイトは逃げようとするが動けないでいた

「これが私の全力全開・・・」

なのはは、レイジングハートをフェイトに向けた

「スターライト・ブレイカーーーーーー！！！」

ピンク色の砲撃がフェイトを包み込んだ

ズドーーーーーーーーーーーーン

「な、なんつう馬鹿魔力！」

「わぁー、フェイトちゃん生きてるかな？」

クロノとエイミィが言った

「はぁはぁはぁ・・あっ！」

なのはがフェイトを見ると気絶したのか海に落ちて行った

「よっと！」

落ちる寸前でレイリスがキャッチした

「お疲れ様、フェイト・・」

レイリスはフェイトの頭を撫でながら言った

「う・・うん・」

フェイトが目を覚ました

「気が付いたかフェイト。」

「フェイトちゃーーん！！」

なのはが急いで飛んできた

「大丈夫？フェイトちゃん。」

「うん・・・」

フェイトが頷く

「私の・・勝ちだよね？」

「そう・・・みたいだね・・・」

「＜　Ｐｕｔ　ｏｕｔ．　＞」

バルディッシュがジュエルシードを出した

「なのは、ジュエルシードを回収し・・・・くっ！」

レイリスが魔力反応を感じた

ド――――ン

「がぁっ！」

「あっ！」

レイリスとフェイトはプレシアの雷が直撃した

「フェイトちゃん、レイ兄ちゃん!!」

なのはが叫ぶ

その時アースラでは時の庭園に武装局員を転送させていた

「第２小隊、転送完了。」

「第１小隊、潜入開始。」

「お疲れ様、なのはさん。」

リンディは言った

「それから、フェイトさん初めまして。」

「なぁリンディ、子供にここまでする必要ないだろ?」

フェイトは今、囚人服のような白いものを着せられ手錠をされていた

「それは、無理です。」

リンディははっきりと言った

「〈母親が逮捕されるシーンを見せるのはしのびないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋へ。〉」

「〈あっはい。〉フェイトちゃん、よかったら私の部屋・」

なのはが言い終えるまえにフェイトは一歩前に出てモニターを見た

ー時の庭園ー

「プレシア・テスタロッサ!時空管理法違反および管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します。武装を解除してこちらへ。」

「ふん・・」

ぞろぞろぞろ

武装局員がプレシアを取り囲んだ

「こっちを調べろ！」

「ここに何かあるぞ？！」

プシュ――――

局員が一つの部屋に入った

「こ、これは！！」

そこにはポットに入った女の子がいた

―アースラ―

「えっ！」

「っ！・・・ア・・リ・シ・・・・ア。」

レイリスは言った

「あ・ああ・あああ」

フェイトは声にならないくらい驚いていた

一時の庭園ー

「わぁーー！」

「私のアリシアに近寄らないで！！」

プレシアはすごい形相で言った

「う、撃てー」

ド――――ン

局員たちはプレシアに攻撃したが

「うるさいわ・・」

キィィィィィン

ド――――――ン

「わぁぁぁぁぁぁ」

まるで歯が立たなかった

「ふふふふふ、あはははははは!!」

「いけない、局員たちの送還を!!」

「りょ、了解です。」

「アリ・・・シア・・？」

フェイトが呟く

「もうダメね、時間がないの。たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかわからないけど・・でもいいわ、終わり

にする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間も・・この子に身代わりの人形を娘扱いするのも。」

「あっ」

「聞いていてフェイト、あなたのことよ。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない・・私のお人形。」

プレシアは言った

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘・・アリシア・テスタロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる使い魔を超える人造生命の生成。そして・・死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時、彼女の研究につけられた開発コードなの。」

エイミィが説明した

「よく、調べたわね・・そうよ、その通り。だけど、ダメねちっともうまくいかなかった。作り物の生命はしょせん作り物・・・失った物の代わりにはならないわ。アリシアはもっとやさしく笑ってくれたわ。アリシアはときどき我がままも言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。」

「やめて・・」

なのはが言う

「アリシアは、いつでも私にやさしかった・・フェイト、あなたは

やっぱりアリシアの偽物よ。せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった。」

「やめて・・・やめてよ・・」

「アリシアを蘇らせる間に私が慰みに使うだけのお人形。だから、あなたはもういらないわ。どこへなりとも消えなさい！」

「お願い、もうやめて！」

「ふふふふ、はははははは！」

プレシアが笑い出した

「良いことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね・・私はあなたが・・大嫌いだったのよ！」

「あっ！」

その瞬間、フェイトの心が砕けた

「言いたいことはそれだけか？プレシア！」

今まで黙って聞いていたレイリスがしゃべった

「あら、いたの？レイリス？」

「何を企んでいるかと思えばまさか、アルハザードが目的だったとは・・・」

レイリスは言った

「そうよ、あなたに殺された、アリシアを取り戻すためにね。」

「「「「っ！！！」」」」

アースラにいる全員が驚いた

「な、何を言っている！アリシア・テスタロッサは、事故死のはずだ！」

クロノが言った

「いいクロノ、あながち間違いじゃない。」

「なっ！」

クロノが驚いた

「み、みんな大変！屋敷内から魔力反応が多数・・」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

すると、時の庭園の至る所に鎧騎士が現れた

「庭園敷地内に魔力反応いずれもＡ＋！総数６０・・８０・・まだ増えています。」

「プレシア・テスタロッサ、いったい何をするつもり？」

リンディが言った

「私たちの旅を邪魔されたくないのよ。」

プレシアはアリシアのポットを持って玉座の間に来た

「私たちは旅立つの！」

そう言い９個のジュエルシードを展開させた

「忘れられた都・・・アルハザードへ！」

「まさか！」

「この力で旅立って・・・取り戻すのよ！・・・・・すべてを！」

キィィィィィィィィィィィン！！

「次元震です、中規模以上。」

「震動防御、ディストーションシールドを！」

リンディはオペレーターに指示を出した

「愚かだな、プレシア・・・」

レイリスが言った

「アルハザード・・・失われた禁術が眠る場所。そんなもので、過去を変えるつもりか・・・」

レイリスは目を閉じ、息を吐いて目を開けた

「覚悟を決めたよ、プレシア・・あまえは俺が・・・・・・・・・・・・・・・」

第１１話　「真実と偽り、思い出は時の彼方なの」（後書き）

衝撃の事実が発覚、アリシアは死はレイリスが原因？

前は疑惑だけでしたが、レイリスが認めるような発言をしましたね。

まぁ、真実は

本当にはたしてどうなのか？

それと、次回ですがレイリスの力が判明します。どんな力なのかは

次回をお楽しみ

にしてください。

では、次回は第１２話で会いましょう。

第１２話　「母と娘、宿命が閉じるときなの」（前書き）

第１２話です。

調子が悪い、どうしてだーーー！では、どうぞ（泣）

第１２話　「母と娘、宿命が閉じるときなの」

「さて、いきますか・・・」

キィィィィィン

レイリスは、１人でプレシアの下に転移した

ーなのはー

「クロノ君、どこへ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと・・・」

クロノが言う

「私もいく！」

「僕も！」

なのはとユーノが言った

「・・・わかった。」

「アルフはフェイトについててあげて。」

「わかった・・」

「いくぞ！」

「「うん！」」

「クロノ、なのはさん、ユーノ君、私も現地へ出ます。あなた達はプレシア・テスタロッサの逮捕を。」

リンディが言った

「「了解！」」

「それと、レイさんが先に一人で行ってしまったみたいなの。レイさんのことお願いね、なのはさん。」

「はい！」

―レイリス―

キィィィィィン

ド――――――ン

レイリスは、鎧騎士たちを薙ぎ払いながらプレシアの下についた

「プレシア・・・」

「来たのね?レイリス・・・」

プレシアが言った

「おまえを止めに来た・・」

「止める?あなたが・・・あははははははは」

プレシアは笑い出した

「あなた、程度の人が私を止める?くっはははははは」

「・・・・・」

「私にやめてほしいなら、私のアリシアをあなたの力で生き変えらせなさいよ!!」

プレシアは突然、怒り声で言った

「あなたの力なら簡単なことじゃない。あなたの《リライト》なら。」

「あの時も言ったが死者蘇生にリライトは使わない。いや、使っちゃいけない。」

「そう、もういいわ・・・」

プレシアは杖をレイリスに向けた

キィィィィィィン

「しばらく、眠っていなさい。」

ド――――ン

―なのは―

なのは達は時の庭園の入り口にいた

「いっぱいいるね・・」

ユーノが言う

「まだ、入り口だ中にはもっといるよ。」

「クロノ君、この子たちって?」

なのはが聞いた

「近くの敵を攻撃するだけのただの機械だよ。」

「そっか。それなら安心だ。」

なのはが言い、構えた

「この程度の相手に無駄玉は必要ないよ。」

「えっ？」

「はぁぁ！」

キィィィィン

「＜　Ｓｔｉｎｇｅｒ　ｓｎｉｐｅ.　＞」

ド――――――ン

クロノの魔法が鎧騎士たちを次々に倒していく

「《Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ！》」

ド――――――――ン

「ぼーと、してないで行くよ！」

「「う、うん。」」

なのは達はプレシアの下へ急いだ

「あっ」

なのはが足元を見ると穴が開いていてその中に黒い空間が広がっていた

「その穴、黒い空間がある場所は気を付けて！」

クロノが言った

「虚数空間。あらゆる魔法がいっさい発動しなくなる空間なんだ。」

「あっ！」

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってこれなくなる。」

「き、気を付ける。」

なのはが言った

バーーーン

クロノが扉を開けるとそこには大量の鎧騎士がいた

「ここから、二手に別れる。君たちは最上階にある駆動炉の封印を。」

「クロノ君は？」

「プレシアの下へ行く。それが僕の仕事だからね。」

クロノが言う

「今、道をつくるから、そしたら・・」

「うん！」

「あっ？」

なのはは、ユーノを掴んで飛行魔法を発動した

キィィィィィィン

「＜　Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ．　＞」

ド――――――――ン

クロノが鎧騎士を薙ぎ払った

「クロノ君！気を付けてね！」

―アースラ―

「私も出ます。庭園内でディストーションシールドを展開して次元震の進行をおさえます。」

リンディが言った

「あの子たちが心配だから、あたしもちょっと手伝ってくるね。」

アルフはフェイトの頬を触り言った

「すぐ帰ってくるよ。そんで全部終わったら、ゆっくりでいいからあたしの大好きな本当のフェイトに戻ってね。これからは、フェイトの時間は全部フェイトが自由に使っていいんだから。」

アルフはそう言いなのは達の下へと向かった

「（母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった。私が生きていたいと思ったのも、母さんに認めてもらいたかったからだ。どんなに、足りないって言われてもどんなに酷いことをされても。だけど・・・笑ってほしかった。あんなにはっきりと捨てられた後でも、私、まだ母さんに縋り付いてる。）」

フェイトがモニターを見ているとなのは達に合流したアルフが映った

「（アルフ・・・ずっとそばにいてくれたアルフ。言うことを聞かない私にきっと随分悲しんで・・何度もぶつかった白い服の女の子・・初めて私と対等にまっすぐに向き合ってくれたあの子。何度も出会って戦って、何度も私の名前を呼んでくれた。何度も何度も・・）」

フェイトは起き上がりその目からは涙が流れていた

「（生きていたいと思ったのは、母さんに認めてもらいたいからだった。それ以外に生きている意味なんてないと思っていた。それができなきゃ生きていけないと思ってた。捨てればいいってわけじゃない。逃げればいいってわけじゃ・・・・もっとない。）」

フェイトはベットから立ち上がったその時

「〈それでいい・・フェイト。〉」

念話が聞こえてきた

「〈おまえは、おまえだ。ほかの誰でもない、フェイト・テスタロッサだ。母さんに言いたいことがあるんだろ?はやくこい、待ってるぞ。〉」

それで、念話は切れた

「はい・・・今行きます。・・・・バルディッシュ!」

「〈Ｒｅｃｏｖｅｒｙ.　〉」

キィィィン

バルディッシュの傷が直った

「いくよ、バルディッシュ。」

「〈Ｙｅｓ，ｓｉｒ.　〉」

キィィィィィィィィン

フェイトが転移した

ー時の庭園ー

「くそ、数が多い！」

アルフが言う

「数だけならいいけど、この！」

なのはは、魔法で応戦して言う

「何とかしないと・・・・あっ！なのは！」

「えっ！」

なのはに鎧騎士が迫った

「＜　Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ．　＞」

キィィィィィン

ド――――――ン

フェイトが鎧騎士を薙ぎ払った

「フェイト？」

アルフが言う

「来てくれたんだ・・」

「うん」

―プレシア―

「どうやら、フェイトがきたみたいだな。」

レイリスが言った

「あら、起きたのね？」

「ああ、少し前にな・・・それより、フェイトがここにくるぞ。どうする？」

レイリスがプレシアに聞いた

「別にどうもしないわ。黙っててちょうだい。」

―なのは、フェイト―

「フェイト！フェイト！」

アルフがフェイトに駆け寄ってきた

「アルフ・・心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ・・本当の私を。」

フェイトが言う

「早く行こう、あの人が待ってる。」

―レイリス―

「んっ？何？次元震が・・」

突然、次元震がおさまりプレシアが驚いた

「〈プレシア・テスタロッサ。終わりですよ、次元震は私がおさえています。〉」

「リンディか？」

「〈駆動炉もじきに封印、あなたの下には執務官が向かっています。忘れられし都アルハザード、そしてそこに眠る秘術は存在するかどうかすら曖昧な伝説です。〉」

リンディが言う

「違うわ、アルハザードへ道は次元の狭間にある。」

「いや、それは間違いだ。」

レイリスが、２人の話に入ってきた

「アルハザードは確かに存在した・・・だが、１０００年も前に消滅した。」

「なっ！」

プレシアは驚愕した

「あきらめろ、プレシアこんなことしても無意味だ。」

「嘘よ・・・アルハザードは確かにある・・・そんなのは嘘だわ！」

「いい加減、目を覚ませプレシア！アリシアをこれ以上苦しめるな！」

レイリスが言う

「私は、取り戻す・・・私とアリシアの過去と未来を・・」

プレシアには、もうレイリスの声は聞こえていなかった

ド――――――――ン

「あっ！」

突然、爆発が起きてその中から

「過去を取り戻すなんて、そんなことできるわけがない！」

クロノが来た

「どんな辛い過去があっても、それを乗り越えていかないと、人は未来には進めないんだ！」

「くっ・・・あっ！」

プレシアが、上を見るとフェイトが来た

「プレシア・・・フェイトがきたぞ。」

レイリスが言った

「・・・・くふっ！」

プレシアが吐血した

「母さん！」

フェイトがプレシアに駆け寄ろうとする

「何をしにきたの？消えなさい。もうあなたにはようはないわ。」

プレシアは言った

「あなたに、言いたいことがあって来ました。」

「言いたいこと？」

「私は・・・・私は、アリシア・テスタロッサではありません。あなたの作った、ただの人形なのかもしれません。だけど、私は・・・フェイト・テスタロッサは・・・あなたに生み出してもらって、育ててもらった、あなたの娘です！」

「ふふふふ・・あはははははは！」

プレシアが笑い出した

「だから何?今更あなたを娘と思えと?」

「本当に今更か?」

レイリスが言った

「プレシア・・あまえ、フェイトの事を娘だと思ってるんじゃないか?」

「っ!なにを言ってるの、この子は人形・・」

「思い出したんだろ・・あのアリシアとの約束を。」

レイリスが言った

「くだらないわ・・約束?何を言っているの・・・」

キィィィィィィン

「プレシアーーーーー!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

時の庭園の崩壊が始まった

「私は、向かう・・・アルハザードへ。そして、すべてを取り戻す！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「母さん！」

プレシアの足元が崩れ虚数空間へ落ちて行った

「くっ！このままで終われるか！」

レイリスが、プレシアを追って虚数空間に落ちて行った

第１２話　「母と娘、宿命が閉じるときなの」（後書き）

なんか、主人公が何をしたいんだかわからなくなってきた。活躍しないし、なんか
格好悪くなってきた？

前回、言ったようにレイリスの力が判明しました。その名も“リライト”です。どういった効果があるかは次回わかります。

では、次は第１３話で会いましょう。

第１３話　「レイリスの力、約束と未来なの」（前書き）

第１３話です。

長くなってしまったので、分けることにしました。

それでは、どうぞ。

第13話　「レイリスの力、約束と未来なの」

レイリスがプレシアを追って虚数空間に落ちて行った後、なのは達は庭園の完全崩壊の前にアースラに戻ることができていた。

「レイお兄ちゃん・・・・」

なのはは、アースラに戻った後、レイリスがプレシアを追って虚数空間に落ちて行ったことを聞いた

「なのは・・・」

ユーノがなのはを心配する

「クロノ君、レイお兄ちゃん・・帰ってくるよね？」

「んっ・・・・・」

クロノは、険しい顔をした

「はっきり言おう・・・レイリスさんは・・帰ってこない。」

「っ！！！」

なのはは、絶句した

「虚数空間では、すべての魔法が使えない。だから、転移もできない・・帰ってくる術がないんだ！」

クロノは言う

「・・・いやだよ。」

「なのは?」

「いやだよ!ひっく、もう、会えないなんて、うっぐ・・・やだよ!!、うわ～～～～ん。」

なのはは、号泣した

―フェイト―

フェイトは、アースラの中にある護送室にいた

「・・・・・」

フェイトは膝を抱えて俯いていた

「フェイト・・・」

アルフが話しかける

「・・・母さんと一緒にあの人も、いなくなっちゃった。」

「あの人って。レイリスのことかい？」

「うん。・・・あの人、私の所に来たときいつも私を心配してくれてた。危ないことはするなとか無茶をするなとか・・・うっ・・・ひっく・・・いつも・・私を気に・・うっぐ・・かけてくれてた。」

フェイトは、ジュエルシードを集めているとき様子を見に来るレイリスを思い出して泣いていた

「フェイト・・」

アルフはフェイトを優しく抱きしめた

―レイリス―

レイリスは、虚数空間の中でプレシアを探していた

「くそっ！どこだ。」

プレシアの姿が見つからず、レイリスは焦りだしていた

「落ち着け、俺・・・すぅぅー・・はぁぁ・・・よし！」

レイリスは、自分を落ち着かせ捜索を再開した

「・・いた！見つけた！！」

「う・・ううう・・」

「プレシア！大丈夫か？」

レイリスは、プレシアに声をかけた

「う・・レイさん？」

「ああ、俺だ！レイリスだ。」

「なぜ、あなたがここに？」

「教え子の心配して悪いか？」

レイリスが言った

「さぁ、帰ろう。みんなのところに・・」

「できないわ。私は、帰れない。」

「どうして？」

「私は、フェイトに酷いことをしてしまったわ。私には、帰る資格なんてない。」

プレシアが言う

「それに、私はもう永くないの・・帰ってもフェイトと一緒にいてあげられない。」

「そんなの、俺の力で！」

ふるふる

「私は、もういいの・・・レイさん、不束な弟子からの最後のお願いを聞いてくれませんか？」

プレシアが言った

「なんだ、プレシア？」

「アリシアを・・・あの子の未来をもう一度だけ創ってくれませんか？」

「っ！」

「レイさんが、あの力をそういうことに使うのが嫌いなのは知っています・・・だけど、お願いです。」

プレシアは言った

「・・・わかった。その願い叶えてやろう。」

「あり・・がと・う・・・レイ・・さ・ん・・」

プレシアは、まるで眠るかのように逝った

「プレシア、お前は最高の母親だよ。」

ーアースラー

あの日から数日、なのは達は次元震の余波が収まるのを待っていた

「クロノ君・・フェイトちゃんはこれからどうなるの?」

なのはは、クロノに聞いた

「事情があったとはいえ、彼女は次元犯罪の一端の担っていたのは紛れもない事実だ。」

クロノは言う

「重罪だからね。数百年くらいの幽閉がふつうなんだが・・」

「そんな!」

「なんだが!・・状況が特殊だし、彼女が自らの意志で次元犯罪に加担していなかったことも、はっきりしている。あとは、偉い人た

ちにその事実をどう理解させるかなんだけど・・」

クロノが言葉を詰まらせた

「本当は、レイリスさんがいてくれれば簡単な話だったんだけど・・・」

「あっ・・ううう」

クロノの言葉になのはが涙目になる

「で、でも・・その辺には僕もちょっと自信がある。心配するな。」

「クロノ君・・」

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶えるために一生懸命なだけだった娘を罪に問うほど時空管理局は冷徹な集団じゃないから。」

クロノが言う

「クロノ君ってもしかしてすごく優しい?」

「なっ!」

クロノは顔を真っ赤にした

「し、執務官として当然の発言だ。私情ははさんでない!」

「照れなくてもいいのに。」

「て、照れてない！」

―アースラ・食堂―

「次元震の余波は、もうすぐ収まるわ。ここからなのはさん達の世界なら、明日になら戻れると思う。」

リンディが言った

「よかった。」

「ただ、ミッドチルダ方面の航路はまだ安定しないの。しばらく時間が係るみたい。」

「そうですか。」

ユーノは言った

「数か月か半年か安全な航行ができるまで、それくらいはかかりそうね。」

3人が話していると

ウィーーン

「ったく、あんなに寝てるからだよ。」

「だってずっと、徹夜だったんだよ。」

クロノとエイミィがきた

「あの人が、目指していたアルハザードって場所、ユーノ君は知ってるわよね？」

「はい、聞いたことがあります。旧暦以前、全盛期に存在していた空間で今はもう失われた秘術がいくつも眠る土地だって・・」

「だけど、とっくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われている。」

クロノが言った

「あらゆる魔法がその究極の姿にたどり着き、その力をもってすれば叶わないことなどないとさえ言われた・・アルハザードの秘術・・時間と空間を遡り過去さえ変えてしまう魔法・・失われた命をもう一度蘇らせる魔法・・彼女はそれを求めたのね。」

リンディが言う

「でも、魔法を学ぶものなら誰でも知ってるよ。過去を遡ることも、死者を蘇らせることも決してできないって。だから、その両方を望んだ彼女はおとぎ話にしかすぎない伝承に頼れなかった。」

クロノが言う

「だけど、それができる人がたった一人だけいたのよね。」

「えっ！」

リンディの言葉にクロノが驚いた

ウーンウーンウーン

「な、何？」

突然、警報が鳴った

「〈艦長、この辺りいったいに強力な魔力反応が・・・〉」

ブリッジのオペレーターが言った

「いったいなにが？」

「〈何者かがアースラに転移してきます。〉」

「えっ！」

キィィィィィィィィン

ーレイリスー

「やっと、帰ってこれたか？」

「あっ・・ああ・あ」

なのはは、目を丸くしていた

「なのは、みんなただいま。」

「レイお兄ちゃーーーーん！！」

なのはがレイリスに飛びついた

「お兄ちゃん、お兄ちゃん・・」

「ふふ、相変わらずなのはは甘えん坊だな。」

「レイさん・・・いったいどうやって虚数空間から？」

リンディが聞いてきた

「それも話してやりたいが、今は先にやることがある。クロノ、フェイトとアルフをここに連れてきてくれ。」

「え、いや・・はい！わかりました。」

クロノはフェイト達の所に急いで行った

「レイさん？いったい何を？」

「説明はフェイト達が来てから・・・」

「連れてきました！」

クロノがフェイトとアルフを連れて戻ってきた

「あっ！」

「あ、あんた！なんでここにいるんだい！」

フェイトとアルフは驚いた

「今はそんなことより・・・フェイト、お母さんを連れてきたよ。」

キィィィィン

レイリスが手をかざすと空間が割れて中からプレシアが出てきた

「母さん！」

フェイトが駆け寄る

「母さん！母さん！・・・えっ？」

「フェイト・・・プレシアは逝ったよ。」

レイリスが言う

「母さん・・うっ・・うわーーーーーーーん。」

フェイトは、泣いた。

「フェイト・・」

レイリスはフェイトを優しく抱きしめた

「うっ・・うっ・えっ・・」

「落ち着いてきたか？」

「はい・・・」

フェイトが言った

「ごめんな、お母さん助けてあげられなくて・・・」

レイリスは、フェイトの頭を撫でた

「それから、もう一人いるんだ。」

レイリスは、空間からポットを出した

「その子は！」

「アリシア・テスタロッサ・・・フェイトのお姉ちゃんだ。」

「姉さん・・・」

フェイトが呟く

「今から、アリシアを蘇生させる。」

「っ！な、何を言ってるんですかそんなことできるわけが・・・」

クロノが言う

「レイさん・・・いいんですか？」

リンディが言う

「ああ、約束したんだプレシアと・・・」

レイリスは、そう言いアリシアをポットから出し、体が見えないようにタオルで包んだ

「これから、起こることは絶対に秘密だいいな。」

「「「「うん（はい）」」」」

みんなが、頷いた

キィィィィィィン

「時の止まりし者、我が鎖を解き放つ、我が下に舞い戻れ。」

レイリスが、詠唱を開始した・・・そして

「《リライト》」

第１３話　「レイリスの力、約束と未来なの」（後書き）

いや～、予定にないことしてしまった。まさかのアリシアの蘇生ですよ。本当は、
原作のようにするつもりだったんですが、進むうちにこんな流れになってしまい
ました。

でも、後悔はしないつもりです。アリシアに関しては、今後どうするかは決まっ
ています。なので、原作大好きな方たちには申し訳ありませんが、これからもこ
の作品を見てくれるとうれしいです。

では、次回無印最終話で会いましょう。

最終話　「始まった物語、なまえをよんで」（前書き）

最終話です。

無印もおわりか～

それでは、どうぞ。

最終話　「始まった物語、なまえをよんで」

あの日から翌日、フェイトが本局に移動することが決まったのでクロノがなのはに連絡を入れてフェイトに会うことになった

「フェイトちゃん！」

なのはが走ってくる

「あんまり時間がないから話すといい。僕たちは向こうにいるから。」

「ありがとう」

「ありがとう」

なのはとフェイトがクロノにお礼を言う

「ふふ、なのはとフェイト本当にうれしそうだ。」

遠くから見ていたレイリスが言う

「本当に・・・でも、レイさん本当にいいんですか？」

リンディは、レイリスの足にしがみついてる女の子を見て言う

「プレシアとの約束だ俺が面倒をみるよ・・・・な、アリシア。」

「まったく、あなたはいつも勝手なんですから・・・でも、それ

でいいのかしら・・・」

リンディは昨日のことを思い出していた

―――

―――――――――――――――――――――――――

「《リライト》」

アリシアの体が光だしやがておさまっていった

「うっ？う～ん」

すると、アリシアから声が聞こえた

「起きて、アリシア・・」

「う～ん？おはよう～」

アリシアが起きた

「なっ！」

アリシアが起きたことで周りにいるみんなが驚いている

「あれ？ここどこ？」

見知らぬ場所で起きたのでアリシアが混乱した

「おはよう、アリシアどこか痛いとことかないか？」

レイリスが聞く

「う～ん、どこも痛くない。・・・ん～お兄ちゃんだ～れ？」

レイリスを見てアリシアが言う

「あら、レイさん？アリシアちゃんとは顔見知りじゃないの？」

リンディが聞いた

「たぶん、見た目が変わったからわからないんだよ。ちょっと待って・・・」

キィィィィン

レイリスの体が光ったと思ったらそこには見知らぬ人がいた

「あれ？レイお兄ちゃんはどこにいったの？」

「というか、お前はだれだ！」

なのはとクロノが言った

「ふふ、俺だよレイリスだよ。」

「「「「・・・・・えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」」」」

またもみんな驚いた。今のレイリスの姿は、髪が腰にまで伸びていて服も女の子ような恰好をしている

「あっ！レイお兄ちゃんだーーー！」

この姿になってアリシアはようやくわかったみたいだ

「えっと、レイお兄ちゃん・・どういうこと？」

「ああ、今から説明する。」

レイリスは、プレシアとアリシアとのことを話し始めた

「まず、俺とプレシアは先生と教え子の関係なんだ。」

「ちょっと待ってください！それだと、年齢的におかしくなります。」

クロノが言った

「そっか・・・そこから話さないといけないか・・・実は、俺は不

老不死なんだ。」

「「「「っ！！！」」」」

なのは達が声にならないくらい驚いていた

「俺の体の中にはロストロギアがあるんだ。」

「ロストロギア！」

クロノが言った

「ああ、名を“クリフォト”時を止める石だ。」

「時を止める？」

「その石を体に入れられて俺の時が止まってしまった。止めるというよりは戻すと言った方がわかりやすいな。」

レイリスはクリフォトの説明をした

「クリフォトを体に入れることで成長、老化が止まり失くしたものが戻るようになった。例えば、怪我をしてもする前の状態になり、魔力を使っても使う前の状態に戻るといった具合だ。」

「そんなものが・・・・」

「ただな、魔力が戻っても無限に使えるわけじゃない、人である以上精神力がそれについていかない。」

レイリスが言った

「まぁ、俺のことはこの辺で終わりにして、話を戻すぞ。」

レイリスが言う

「さっきも言った通り、プレシアは俺の教え子だった。とても、優秀でな自慢の教え子だった。それから、プレシアは次元エネルギーの研究を始めてな会うことが少なくなってたんだが、プレシアからあるお願いをされてな。」

「お願い？」

なのはが言った

「それが、アリシアの世話をしてほしいってことだったんだ。研究で忙しくてなかなかアリシアの相手ができないって言ってな、それで俺がプレシアが帰ってこられない時とか泊りがけで世話してたんだ。」

レイリスは、そう言うと少し俯いた

「そんなある日、あの事故が起こった。・・・あの日、俺はプレシアが帰ってこられないって連絡がきてたからいつも通りプレシアの家に行った。そして、アリシアと遊んでいる時だった、少し目を離した時あの爆発が起こった。」

レイリスが言う

「プレシアの家まで爆発の衝撃がきて俺は自分の身を守るだけしか

できなかった。・・・事故の後、プレシアに泣きながらお願いされたよ、アリシアを生き返らせてって・・・でも、俺はそれを断った・・・それからだよ、プレシアが変わってあんなふうになったのは・・・」

「そんなことがあったんですか・・・・」

リンディが言った

くいくい

「ねぇお兄ちゃん、お母さんどこ？」

アリシアが、レイリスの服を引っ張って言った

「レイさん・・・」

「わかってる・・でも言わないといけない。」

レイリスは、決心して言う

「アリシア、お母さんはもういないんだ・・・」

「えっ？」

「お母さんは、遠くに行ってもう帰ってこないんだ。」

レイリスは言う

「うそ・・ひっ・・だよね・うっ・・お兄ちゃん?」

「ごめん、アリシア。」

レイリスが、アリシアを抱きしめる

「う・・うっ・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

アリシアが泣く

「ごめんな、アリシア・・・」

「俺が必ず守るからな、アリシア・・」

「うん・・・」

―なのは、フェイト―

「なんだか、いっぱい話したいことあったのに変だね・・フェイトちゃんの顔見たら忘れちゃった。」

「私は・・・そうだね、私もうまく言葉にできない。」

なのはとフェイトが言った

「だけど、うれしかった。まっすぐ向き合ってくれて。」

「うん、友達になれたらいいなって思ってたの。でも・・・今日はこれから出かけなくちゃいけないんだよね。」

「そうだね・・・少し長い旅になる。」

「また、会えるんだよね?」

なのはが言う

「うん・・・少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから。来てもらったのは、返事をするため。」

フェイトが頬を赤くして言った

「君が言ってくれた言葉、友達になりたいって・・」

「うん！うん！」

「私にできるなら、私でいいならって、だけど私・・どうしていいかわからない・・」

フェイトは言った

「だから、教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか・・」

「・・・・簡単だよ。」

「えっ」

「友達になるのすごく簡単。なまえをよんで。始めはそれだけでいいの。君とかあなたとか、そういうのじゃなくてちゃんと相手の目を見てはっきり相手の名前を呼ぶの。」

なのはは言う

「私、高町なのは。なのはだよ！」

「なの・は・・」

「うんそう！」

「なのは・・・・」

フェイトが呼ぶ

「うん！」

「あっ・・なのは！」

「うん！」

なのはは、フェイトに抱きついた

「よかったな、なのは。」

レイリスが来た

「あっ・・姉さん。」

レイリスに足にしがみつきながら、アリシアも来ていた

「なのは、アリシアとも友達になってくれるか？」

「うん、もちろん！」

「ほら、アリシア・・」

レイリスはアリシアを前に立たせた

「あう～」

「私は、高町なのはだよ。」

「あっ・う～・・ア、アリシアです。」

「これで、なのはとアリシアも友達だな。」

「さて、次は・・・」

レイリスはフェイトを見た

「フェイトとアリシアも、姉妹仲良く・・」

「フェイトです・・・アリシア姉さん。」

フェイトが言う

「・・・アリシアだよ、フェイト・・」

「これで、３人仲良し。」

レイリスが言ったとき

「時間だ。そろそろいいか。」

クロノが来た

「うん」

「フェイトちゃん！」

なのはは、そう言いリボンを解いた

「思い出にできるもの、こんなのしかないけど・・」

「じゃあ、私も。」

フェイトもリボンを解いた

「う～私なにもない。」

アリシアが言った

「まぁまぁ、ほら泣かないの。」

そして、なのはとフェイトはリボンを交換した

「じゃあ、僕たちはそろそろ・・」

「うん、クロノ君も元気で。」

キィィィィィィィン

「またね、バイバイ・・フェイトちゃん」

なのはとフェイトは互いに手を振った

キィィィィィン

フェイト達は行った

「さて、それじゃあ家に帰るか。なのは、アリシア。」

「「うん！」」

最終話　「始まった物語、なまえをよんで」（後書き）

無印、終了だーーーーーーー

いやー長かったような短かったような、そんな感じです。最後の最後で、予定変更
でアリシアを生き返らせるし・・・

さて、次回からA's が始まります。A's もまた、レイリスのすごい秘密が明らか
になるのか？あの子も消えずにすむのか？

次回、魔法少女リリカルなのはA's ～Last Wizard～はじまります。

第1話　「新たなる物語、はじまりは突然になの」（前書き）

A's編第1話です。

キャラが多くなるので大変そうです。それでは、どうぞ。

第1話　「新たなる物語、はじまりは突然になの」

ある朝、高町なのはは魔法の練習のため高台に来ていた

「それじゃあ今朝の練習の仕上げシュートコントロールやってみるね？」

「＜　All，right.　＞」

キィィィィィィン

「《ディバインシューター》シュート！」

なのはは、空き缶を上に投げ、それにディバインシューターを当て続ける

「コントロール・・・」

カン・・カン・・カン

「＜　18、19、20、21　＞」

レイジングハートが、それをカウントする

「アクセル・・んっ！」

カン・・カン・・カン

「＜　５４、６０、６４　＞」

「う～ん・・」

「＜　９８、１００　＞」

「はぁ～、ラスト！」

カンッ

空き缶は、ゴミ箱に向かったが外れてしまった

「あ～」

「＜　Ｄｏｎ't　ｍｉｎｄ，ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ．　＞」

レイジングハートが言った

「あはは・・ありがとう、レイジングハート・・」

そう言いなのはは、空き缶をゴミ箱に入れた

「今日の練習、採点すると何点？」

「＜　Ａｂｏｕｔ　８０　ｐｏｉｎｔｓ．　＞」

「そっか。」

なのはは、微笑んだ

―レイリス―

「さて、朝ごはんはこれでよしと・・・そろそろ、起こしにいかないと・・」

レイリスは、寝室に移動した

「すぅすぅすぅ・・」

寝室のベッドでは、女の子が一人寝ていた

「アリシア、朝だよ起きて・・」

レイリスは、アリシアをゆさぶって起こした

「う～ん・・まだ眠い～」

「そんなこと言わないで、ほら・・」

レイリスは、アリシアを何とか起こした

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

それから、レイリスとアリシアは朝ごはんにしていた

「そうだアリシア、フェイトからビデオメールがきてるぞ。」

「本当！」

アリシアは両手を上げて喜んだ

それから、お昼まで時間が過ぎた

「アリシア、そろそろ出かけるよ。」

「は～い。」

レイリスとアリシアは街に出て行った

「お兄ちゃんどこに行くの？」

「図書館だよ。」

レイリスが言った

「ここが、図書館だよ。」

「わぁ～、本がいっぱい！」

アリシアは、たくさんの本の数に驚いた

「さてと・・・アリシアにちょうどいい本は・・」

レイリスが本を探していると

「う～ん、う～ん・・」

「んっ？」

レイリスが声のする方を見ると車椅子に乗った女の子が高い位置にある本を取ろうとしていた

「う～ん、う～ん・・」

「この本？」

「えっ？」

レイリスが本を取ってあげると女の子が振り返った

「はい」

レイリスが女の子に本を渡す

「あ、ありがとうございます。」

女の子はお礼を言った

「俺は、レイリス・ユースティア、で、こっちが・・」

「アリシア・テスタロッサです。」

レイリスとアリシアが自己紹介した

「ウチは、八神はやていいます。」

「はやてかいい名前だね。」

「そんな／／／／」

はやてが顔を赤くした

「アリシアと同じくらいかな？」

「あっウチは、９歳です。」

「じゃあ、同い年だ。」

アリシアが言った

「新しい友達ができてよかったな。」

「うん！」

「えっ？ともだち・・・」

はやてが意外そうな顔で言った

「んっ？俺たちもう友達だろ？」

「ともだち！ともだち！」

「・・・はい！」

はやては、満面の笑みで言った

それから、３人はお互いの事を話していた

「へぇ～、親戚の人たちと暮らしてるんだ。」

「はい、みんなとってもやさしくて。」

「あっ！レイさん！」

急に誰かがレイリスを呼んだ

「ん？すずか！」

「こんにちわ、レイさん。」

声の主はすずかだった

「こんにちわ、すずか。」

「アリシアちゃんもこんにちわ。」

アリシアとすずかも挨拶をした。アリシアの事については、すずか、アリサ、高町家にもそれとなく言ってある

「えっと～、レイさんこちらは～？」

すずかははやてを見て言った

「ああ、この子は八神はやて、さっき知り合って友達になった」

「八神はやていいます。」

「私は月村すずかです。」

その後、４人でいろんなことを話した

「あっウチそろそろ帰らんと・・」

「もう、そんな時間か。よかったら送っていこうか？」

レイリスがはやてに言う

「大丈夫です。迎えがきますから。」

「はやてちゃん！」

「ああ、ちょうど来たみたい。シャマルこっちや！」

「えっ？！」

レイリスは、はやてを迎えに来た人の名前を聞いて固まった

「はやてちゃんこちらは？」

「さっき知り合った、すずかちゃん、アリシアちゃん、レイリスさんや。」

「はやてちゃんがお世話になりました。私はシャマルといいます。」

「月村すずかです。」

「アリシア・テスタロッサです。」

「・・・・・・」

レイリスは、固まったまま動けずにいた

「お兄ちゃん？」

「・・・あっ！レ、レイリス・ユースティアです。」

「じゃあ、すずかちゃん、アリシアちゃん、レイリスさん、ウチはこれで・・」

「うん、またね、はやてちゃん。」

「バイバイ、はやて。」

「またな、はやて。」

そうして、はやてはシャマルと帰って行った

「すずかは？送っていこうか？」

「私もお迎えが来るから。」

「うん。それじゃあまたな、すずか。」

「バイバイ、すずか。」

「さようなら、レイさん、アリシアちゃん。」

レイリスとアリシアも家に帰って行った

―――――――

その日の夜、鳴海市の上空に赤い服の女の子と青い狼のようなものがいた

「どうだヴィータ？見つかりそうか？」

「いるような、いないような・・・」

ヴィータと呼ばれる女の子は言った

「この間っからときどき出てくる妙に巨大な魔力反応・・・あいつが捕まれば一気に２０ページはいきそうなんだけどな。」

「別れて探そう。闇の書は預ける。」

「ＯＫ、ザフィーラ。あんたもしっかり探してよ。」

「心得ている。」

ザフィーラと呼ばれた狼はそう言い行った

キィィィィィン

「封鎖領域、展開」

「＜　Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ.　＞」

ヴィータは、結界を張った

―なのは―

「＜　Ｃａｕｔｉｏｎ.　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ.　＞」

「あっ？」

なのはがレイジングハートを見ると

キィィィィィィン

「結界！？」

「魔力反応！獲物みっけ！」

ヴィータは魔力反応を見つけると

「いくよ、グラーフアイゼン。」

「＜Ｊａ　ｗｏｈｌ．＞」

「＜Ｉｔ　ａｐｐｒｏａｃｈｅｓ　ａｔ　ｈｉｇｈ　ｓｐｅｅｄ．＞」

「近づいてきてる？こっちに！」

なのはは、窓の外を見た

「＜ Gegnstand kommt an. ＞」

ヴィータは、なのはに向かっていた

――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

なのはは、家を出て近くのビルの屋上に来た

「＜ It's coming. ＞」

「あっ！」

なのはが、前方の空を見ると赤い光が見えた

「んっ！」

なのはが、身構えると一つの弾丸のようなものが向かってきた

「あ！」

「＜　Ｈｏｍｉｎｇ　ｂｕｌｌｅｔ．　＞」

キィィィィィィィン

なのはは、障壁を出した

「ううっ！」

押されながらもなんとか防いだ

「うう・・・あっ！」

「《テートリヒ・シュラーク》」

「んっ！」

ドカ――――――――――ン

「ああっ！」

なのはは、障壁で防いだがそのまま吹っ飛ばされビルから落ちた

「うう・・レイジングハートお願い！」

「＜　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ＞」

なのはは、セットアップした

「＜　Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ．　＞」

「はっ！」

ヴィータが誘導弾を撃った

ドカ――――――ン

「オラーーーーーー！」

ヴィータはさらになのはに追撃をする

「いきなり襲いかかられる覚えはないんだけど。どこの子？いったいなんでこんなことするの？」

キィィン　キィィン

ヴィータは誘導弾をセットした

「教えてくれなきゃわからないってば！」

なのはは、事前に放ってあったスフィアをヴィータの後ろに誘導した

「わっ！」

ヴィータは、一つを避けもう一つを受けた

「このやろう！」

ヴィータは、なのはに向かった

「＜　Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ.　＞」

なのはは、高速移動で避けた

「話を・・・聞いてってば！」

「＜　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ.　＞」

キュィィィィン・・・ド――――――――ン

「わっ！」

直撃は免れたが被っていた帽子がボロボロになって落ちて行った

「あ！・・・・くっ！」

ヴィータは、なのはを睨み付けた

「あ・・・」

キィィィィィィン

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

「＜Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．＞」

ガキーン！

「＜Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ．＞」

グラーフアイゼンの形状が変わった

「ああ・・えー。」

「ラケーテン！」

ヴィータはそう言いグルグルと回り

「ハンマー！！」

なのはに強烈な一撃を放った

「あああーーー！」

なのはは吹っ飛ばされビルに激突した

「けほっけほっ・・」

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

ヴィータが追撃しようと振りかぶった

「＜　Ｐｏｔｅｃｔｉｏｎ．　＞」

プロテクションでなんとか防いだが

パリーン

プロテクションが砕け、バリアージャケットの一部も破壊された

「おまえの魔力もらう・・・」

ヴィータが止めをさそうと振りかぶった

「（こんなのって・・いやだ・・ユーノ君・・クロノ君・・フェイトちゃん・・レイお兄ちゃん！）」

なのはが、目を瞑った瞬間

キィィィィン

「あ？」

なのはが、目を開けるとそこには・・・

「ごめん、なのは遅くなった。」

「ユーノ君・・」

「仲間か・・・」

「友達だ。」

フェイトがいた

第1話　「新たなる物語、はじまりは突然になの」（後書き）

はやてのセリフがちゃんとできてるか心配です。

それと、アリシアのことですがレイリスと一緒に暮らしてますね。本編でも書いてますが、高町家、アリサ、すずかにはフェイトのお姉さんということは話してますなぜ、フェイトと離れているのかは家庭の事情ということにしています。

八神家との絡みをどうしようか迷っています。レイリスをなのは側にするかやはや て側にするか・・・

では、次は第2話で会いましょう。

第2話　「新たなる出会い、戦いの嵐ふたたびなの」（前書き）

第2話です。

それでは、どうぞ。

第2話　「新たなる出会い、戦いの嵐ふたたびなの」

フェイトとヴィータが対峙していた

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ。」

フェイトが言う

「何だてめぇ。管理局の魔導士か？」

「時空管理局、嘱託魔導士フェイト・テスタロッサ。抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して・・」

「誰がするかよ！」

ヴィータはそう言いビルから離れた

「ユーノ、なのはをお願い！」

フェイトはヴィータを追った

―レイリス―

「封鎖結界が張られてる・・・・」

レイリスが言う

「お兄ちゃん・・・」

「大丈夫、ここからは遠いから・・」

レイリスは、そう言い

「アリシア、ちょっとお留守番しててくれる？」

「えっお兄ちゃん・・行っちゃうの？」

「うん、大丈夫だよ、すぐに戻ってくるか。」

アリシアの頭を撫でながら言った

「うん・・・いってらっしゃい・・」

「いってきます。」

レイレスは、なのは達の下へ行った

ーフェイトー

「バルディッシュ！」

「＜　Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ．　＞」

「はぁっ！」

フェイトがヴィータに攻撃をする

「グラーフアイゼン！」

「＜　Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ＞」

「はっ！」

ヴィータも対抗した

「障壁！」

「＜　Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ　＞」

フェイトの攻撃をヴィータは障壁で防いだ

「はっ・・んっ・・」

フェイトはかわした

「このー！」

ヴィータは、フェイトに向かって突っ込んできた

「うっ！」

キィィィィィン

「そうはさせないよ。」

「アルフ！」

アルフは、ヴィータをバインドで拘束した

「終わりだね。目的と出身世界を教えてもらうよ。」

フェイトが言う

「・・・あっ！なんかやばいよフェイト！」

アルフがそう言った瞬間

キィィィィン

「わぁぁ！」

フェイトが誰かに弾き飛ばされた

「シグナム！」

「うおおおおおおおお！」

「あっ」

「ふっ！」

アルフも別の誰かに蹴り飛ばされた

「レバンティン、カートリッジロード。」

「＜　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　＞」

ガキーン

シグナムがそう言うと剣型デバイスの刀身に炎が纏った

「《紫電一閃》はぁっ！」

「あ！」

キィィィィン

「わぁー！」

シグナムの一撃はバルディッシュを二つに切断しフェイトを斬り飛ばした

「フェイト！」

アルフが叫ぶ

――――――

「だが、あんまり無茶するな、おまえが怪我でもしたら我らが主が心配する。」

「わーってるよ！」

「それから落し物だ。」

シグナムはヴィータが落とした帽子を被せた

「破損は直しておいたぞ。」

「ありがとう・・シグナム。」

ヴィータがシグナムにお礼を言う

「状況は実質、３対３。１対１なら我らベルカの騎士に」

「負けはねぇ！」

ヴィータがそう言ったとき

「《ヴァジュラ》」

「なっ！」

「なに！」

ドォーーーーーーーーン

突然、シグナムとヴィータの上空から巨大な雷が降り注いだ

「ぐっ・・」

「な、なんだ・・」

シグナムとヴィータは何とか直撃を避けた

「やっぱ、さすがだな、あれの直撃を避けるとは・・」

「誰だ、てめぇ！」

ヴィータが言った

「レイリス・・・おまえらが傷つけた娘達の知り合いさ・・」

「あの、白いのと黒い奴のか。」

「さて、できればお前たちには今すぐにここから立ち去ってくれればうれしいが・・」

レイリスが言う

「ふざけんじゃねぇ！」

ヴィータがレイリスに突っ込んで行った

「まぁ、素直に言うこと聞くやつでもなかったか・・・はぁっ！」

「な?!」

レイリスは、ヴィータを魔法も使わずに簡単に組み伏せた

「な、このやろう、離しやがれ!」

「さぁ、どうする?こっちには人質ができたぞ。」

「くっ・・・我らベルカの騎士はそんなものには屈したりしない!はぁぁ!」

シグナムは、ヴィータを気にせずレイリスに斬りかかってきた

「まったく・・・はぁ!」

レイリスは、ヴィータを離しシグナムの攻撃を受けた

「はぁはぁ・・」

「レイリス!」

「フェイト・・・大丈夫か?」

フェイトに聞いた

「うん、私は大丈夫・・」

「そっか・・・さっそくだけどあの剣の奴の方を頼む。俺は赤い方をやるから。」

「わかった。」

レイリスとフェイトは、1対1でそれぞれ相手をした

―――――――

「はぁぁ！」

キィン

「ああー！」

フェイトは斬り飛ばされた

「フェイト！」

「よそ見してんじゃねぇ！」

ドォーーン

「ぐっ！」

――――――

「だれが・・」

フェイトが傷つきながら言う

「良い気迫だ。私はベルカの騎士ヴォルケンリッターの将シグナム。そして、我が剣レバンティン。お前の名は？」

「ミッドチルダの魔導士、時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッサ。この子は、バルディッシュ。」

―なのは―

「助けなきゃ・・・私がみんなを助けなきゃ・・・」

なのはは、ボロボロの体でみんなの下に行こうとした

「＜Ｍｓｔｅｒ．＞」

「あ？」

「＜Ｓｈｏｏｔｉｎｇ Ｍｏｄｅ．Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ．＞」

「レイジングハート・・」

「＜Ｌｅｔ' ｓ ｓｈｏｏｔ ｉｔ．Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ Ｂｒ

eaker.　＞」

「そんな・・無理だよそんな状態じゃ！」

なのはは言う

「＜　I　can　shoot.　＞」

「そんな、負担のかかる魔法、レイジングハートが壊れちゃうよ。」

「＜　I　believe，Master.　Trust　me，my　master.　＞」

「・・・わかった、やろうレイジングハート。」

キィィィィィィン

「〈みんな、わたしが結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を。〉レイジングハート、カウントを。」

「＜　All　right.　Count9.　＞」

レイジングハートがカウントダウンを開始した

「＜　8.　7.　6.　5.　4.　3.　3.　3.　3.　・・・　＞」

「レイジングハート、大丈夫?」

「＜　Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．Ｃｏｕｎｔ３．２．１．　＞」

なのはが撃とうとした瞬間

「あっ！」

なのはの胸から手が貫いていた

「しまった！なのは！！」

レイリスが叫ぶ

―――――――

「＜　Ｃｏｕｎｔ０．　＞」

「《スターライト・・ブレイカー！！》」

ドォーーーーーーーン

スターライトブレイカーで結界が壊れた

「あ、あ・・あ・・」

なのはが倒れた

「〈結界が抜かれた、離れるぞ。〉」

「〈心得た。〉」

「〈シャマルごめん、助かった。〉」

「〈うん、一端散っていつもの場所でまた集合。〉」

シグナム達は散り散りに逃げた

「逃げたか・・・まぁいい、それよりもなのはが優先だ。」

レイリスはなのはの下に飛んだ

第2話　「新たなる出会い、戦いの嵐ふたたびなの」（後書き）

今回のレイリスは、まあまあ活躍しました。簡単にヴィータを組み伏せたり、人質
とったりと管理局だったやつがすることじゃないような気がするが・・・

次回では、レイリスを八神家に行かせようかなと思っています。そこで、また新た
なる展開が・・・

では、次は第3話で会いましょう。

第3話　「八神家への潜入、再開、そしてお引越しなの！」（前書き）

第3話です。

はやての関西弁が難しすぎる。それでは、どうぞ。

第3話　「八神家への潜入、再開、そしてお引越しなの！」

なのはは、時空管理局本局の医療施設に運ばれた

「ん・・うん・・」

「起きたか？なのは。」

「レイ・・お兄ちゃん・・」

なのはが目を覚ました
その後、なのはは、診察を受けていた

「リンカーコアの回復がもう始まっている。でも、しばらくは魔法が使えないから気を付けるんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ウィーン

「なのは、大丈夫か？」

クロノとフェイトが来た

「あ、ハラオウン執務官ちょっとよろしいでしょうか？ユースティア管理者も。」

「はい、なんでしょう？」

「こちらへ。」

「なのは、ちょっと行ってくる。」

クロノとレイリスは、医務官と一緒に出て行った

―――――――

なのは、ユーノ、アルフは久々の再開に喜んでいた

「バルディッシュ、ごめんね私の力不足で・・・」

フェイトは、バルディッシュに近づき言った

「破損状況は？」

「正直あんまりよくない。今は自動修復をかけてるけど基礎構造の修復が済んだら一度再起動して部品交換とかしないと・・」

「そうか・・」

「ねぇ、そう言えばさあの連中の魔法ってなんか変じゃなかった？」

アルフが言った

「あれは、ベルカ式だ。」

レイリスが答えた

「ベルカ式？」

「その昔、ミッド式と勢力を分けた魔法体系のことだ。遠距離や広範囲よりも近距離攻撃に特化した魔法で優れた術者は騎士と呼ばれた。」

レイリスが、説明をした

「そして、最大の特徴がカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。

魔力を圧縮した弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な力を得る・・・」

レイリスは、そう言い遠い昔のことを思い出していた

「フェイト、そろそろ面接の時間だ。」

「うん。」

「なのは、君もちょっといいか？」

クロノは、フェイトとなのはを連れ面接の場所へと向かった。

「じゃあ、俺は帰るな。」

レイリスは、地球に帰って行った

ーアリシアー

「お兄ちゃん、遅いな・・」

アリシアは、レイリスの帰りを今か今かと待っていた

「ただいまー。」

「あっ！お兄ちゃん！！」

アリシアは、レイリスの所に走って行き勢いよく飛びついた

「おいおい、アリシア。」

「ふふふ?」

レイリスの腰に抱きついたまま頬擦りをしている

「まったく・・・よしよし・・」

レイリスは、アリシアの頭を優しく撫でた

ーなのはー

「え?親子ってフェイトちゃんとリンディさんが・・」

「そう、まだ本決まりじゃないけど養子縁組の話をしてるんだって。」

なのはとエイミィが話していた

「艦長の方から家の子になるって・・・フェイトちゃんもプレシアの事とかいろいろあるし、気持ちの整理がつくのを待っている状態だね。」

「そうですか・・・」

「なのはちゃん的にはどう？」

エイミィが聞いた

「うーんと、なんだかとってもいいと思います。」

「そっか。」

「でも、そうするとアリシアちゃんはどうなるのかな？」

なのはが言った

「ああ、その辺はレイリスさんと相談するってリンディ艦長が言ってた。」

「そうなんだ。」

―レイリス―

その夜、レイリスは今回の魔導士襲撃事件の資料を見ていた

「う～ん、今回もリンディ達が担当か・・・」

レイリスが資料を見ているとその中に驚くのもがあった

「んっ！これは・・・・アリシアちょっと来て。」

「な～に？」

レイリスは、アリシアを呼んだ

「フェイトが近所に引っ越してくるって。」

「え？フェイトが？」

「うん、今回の事件の任務でフェイトが手伝うみたいなんだけど、拠点を鳴海市にするみたいだから明日、引っ越しがあるみたいだよ。」

レイリスが言った

「お兄ちゃん！お手伝いにいこうよ！ねぇいいでしょ。」

アリシアが、甘えた声でレイリスにお願いする

「いいよ。一緒にお手伝いしにいこう。」

「やったー！」

アリシアは、よほどうれしかったのか、すごくはしゃいでいた

そして次の日、レイリスとアリシアは引っ越しの手伝いに向かっていた

「お兄ちゃん、早く早く！」

「アリシア、そんなに急がなくてもフェイトは逃げたりしないって。」

アリシアは、早くフェイトに会いたいみたいでレイリスを急かせていた

「ん！あれは？」

レイリスとアリシアが目的地につくと見知った顔があった

「アリサ、すずか？」

「レイ！」

「レイさん！」

そこには、アリサとすずかがいた

「おまえらもフェイトに会いに？」

「そうよ、あんたも？」

アリサが聞いた

「ああ、そんなことだ。フェイト元気そうだな。」

「うん、レイリスも。」

本当は、前日に会っているのだが、アリサとすずかの前なので久しぶり感をだした

「それと、フェイトに会いたがってる子を連れてきたんだ。ほら、アリシア。」

レイリスは、後ろに隠れてたアリシアを前に出した

「あっ！」

「久しぶり、フェイト・・」

「姉さん！！」

フェイトは、アリシアに抱きついた

そして、久々の姉妹再開も終わりこの後、なのは達は翠屋に移動してお茶をすることになった。なのは達は、レイリスも一緒にと誘ったが他に用事があると断りレイリスは、帰って行った。その時、アリシアが少し駄々をこねた

翠屋について、なのは達がお茶をしリンディが士郎と桃子と一緒に話していると、一つのサプライズが起きた

「リンディ提とっ、リンディさん。」

「はい、なーに?」

「これ・・これって・・」

フェイトが、聖祥小学校の制服が入った箱を持ってきた

「転校手続きしておいたから、週明けからなのはさんのクラスメイトね。」

リンディがニッコリ笑って言った

「あの~、私のこれは・・・・」

アリシアの手にもフェイトと同じく聖祥小学校の制服が入った箱があった

「アリシアさんのは、レイ君からよ。」

「え?お兄ちゃん?」

「ええ、レイ君と相談してアリシアさんも一緒にってことになったの。」

リンディが言った

「やったじゃない！これでみんな一緒よ。」

「うん、一緒だね。」

アリサとすずかが大喜びしている

「ありがとうございます。リンディさん。」

―レイリス―

レイリスは、なのは達と別れたあと、ある場所に向かっていた

「この辺りにいるはずなんだけど？」

レイリスは、海鳴大学病院の近くに来ていた。しばらく病院のあたりを散策していると急に声をかけられた

「レイさん！」

「あ！はやて。」

レイリスに声をかけたのは、はやてだった

「どないしたんですか？こんなところで？」

「ちょっと、はやてに会いたくなって。」

「えええ／／／／／」

はやては、顔を真っ赤にした

「ふふ、それよりはやて。そちらの方たちを紹介してくれる？」

レイリスは、はやての後ろにいる2人を見て行った

「ああ、そやね。シャマルはこのまえ会ったな。こっちは、シグナムや。」

はやては、2人を紹介したが本人たちは、レイリスを見た瞬間から異様な緊張感を漂わせていた。シグナムにいたっては、レイリスに強烈な殺気を放っていた

「初めまして、レイリス・ユースティアです。」

レイリスは、シグナムの殺気にも動揺ひとつせずに名乗った

「そうや、レイさん今暇？」

「うん、暇だよ。」

「なら家に来いひんか？」

はやてが言った

「はやてちゃん！」

シャマルが声を上げて言った

「どうしたん?シャマル?」

「ほら、お部屋も散らかってますし、また別の日にでも・・・」

シャマルは、必死にレイリスを遠ざけようとしていた

「何言うてんの。ちゃんとお掃除してるやん。」

シャマルの健闘空しくはやてによって却下された

「さあ、レイさん早よいこ。」

そうして、レイリスは八神家へと向かった

第3話　「八神家への潜入、再開、そしてお引越しなの！」（後書き）

アリシアが、なんか甘えっ子になってる?そんなつもりはなかったのだが・・・

レイリスが、八神家に招待されました。全部書くつもりでしたが、長くなるのでここまでにしました。

次回は、レイリスとヴォルケンリッターに注目ですね。果たして八神家でなにが起こるのか。

では、次は第４話で会いましょう。

第４話　「魔法使いと騎士たち、共に誓い合った仲間なの」（前書き）

第４話です。

レイリスとヴォルケンリッターとの話です

それでは、どうぞ。

第４話　「魔法使いと騎士たち、共に誓い合った仲間なの」

はやてに誘われ八神家に招待されたレイリスだったが、家に着くまでしシグナムの殺気が突き刺さっていた

「ただいま～」

ダダダダダダ

「おかえりー、はやて！」

リビングから、ヴィータが走ってきて出迎えた

「ただいま、ヴィータ。ちゃんとお留守番してたか？」

「してたよ、は・や・・・て・・・」

ヴィータがはやての後ろにいる人を見た瞬間、凍りついた

「な・・なんでこいつがいるんだ！！」

ヴィータが叫んだ

「ヴィータ、レイさん知っとるん？」

「い、いや・・・」

ヴィータが口籠った

「人違いだよ。初対面のはずだから。」

レイリスが、フォローした

「そやね、じゃあレイさんどうぞ上がって。」

「うん、お邪魔します。」

レイリスは、リビングに通されソファーに座った。そして、レイリスの両隣にシグナム、ヴィータが座り正面にはやてという位置取りになっている

「そういえばさ、はやて以外みんな外国っぽい名前だけどみんな外国出身なの？」

レイリスが、そんなことを聞くとはやてが慌てだした

「え、えっとな・・・その・・」

「あー、言いにくいことなら無理して言わなくてもいいよ。」

「うん、ごめんな～レイさん。」

レイリスの気遣いに感謝しながら謝った

それから、レイリスとはやては他愛もない話をし楽しい時間をすごした

「じゃあ、そろそろお暇しようかな。」

「もうですか。そうや、晩御飯も食べてってください。」

はやてが、夕食に誘う

「せっかくだけど、遠慮しとくよ。アリシアが待ってるから。」

「あ、そうかアリシアちゃんがいたんやね。」

「そういうことだから、またねはやて。」

レイリスは、玄関に行きはやて達が見送りに行った

「じゃあ、今度はアリシアも連れてくるよ。」

「本当に、楽しみやわ。」

はやては、とてもうれしそうに笑った

「〈ヴォルケンリッター、今夜話がある。深夜0時にここに来る、聞く気があるならついてこい。〉」

レイリスは、シグナム達に念話でそう言った

「〈わかった。〉」

「じゃあね、はやて。」

そうして、レイリスは八神家をあとにした

―翠屋―

レイリスは、八神家をあとにしアリシアを迎えに翠屋に来た

「アリシア、迎えにきたよ。」

「あ、お兄ちゃん！」

アリシアは、レイリスを見ると勢いよく飛びついてきた

「ふふ？」

「アリシアったら、本当にレイのこと好きなのね。」

「レイさん、かっこいいもんね。」

アリサは、やれやれといった感じで、すずかは微笑ましい感じで言った

「じゃあ、俺たちはこの辺で帰るよ。」

「うん、また明日ね。」

「フェイト、明日ね。」

「うん、姉さん。」

そうして、レイリスとアリシアは帰って行った

―八神家―

深夜0時、レイリスは八神家の前に来ていた

「〈来たぞ。ついてこい。〉」

レイリスは、念話でそう言うと移動した

―――――――

ラが姿を現した

「もう、管理局に我々のことは、言ったのか?」

「いや、言ってない。言っていたら、今頃お前たちは捕まっている。」

レイリスは、否定した

「本題に入るぞ。お前たちにいくつか聞きたいことがある。」

「なんだ?」

「まず、一つ目。闇の書の主は、八神はやてで間違いないな?」

レイリスが、聞くとシグナム達がビクッとした

「・・・そうだ。」

「二つ目、はやての足は闇の書の影響で麻痺している。」

「そうだよ。」

ヴィータが答える

「三つ目、お前たちがやっている蒐集は、はやてが命じたものじゃないな。お前たちの独断でやっているそうだろ?」

「そうです。」

シャマルが、俯きながら言った

「蒐集をやめる気はないか？」

「やめるかよ！闇の書を完成させないと、はやてが・・・はやてが・・・・・・」

ヴィータが、涙目になりながら言う

「お前ら、闇の書を完成させた持ち主がどうなったのか覚えてるか？」

「そんなの完成させたら・・・えっと・・」

「ヴィータちゃん、どうしたの完成させたら・・・あれ・・」

ヴィータとシャマルは思い出そうとするがなぜか思い出せない

「だろうな、思い出せなくて当然だ。」

「どういうことだ！」

「闇の書が完成すると持ち主は、闇の書に取り込まれ暴走し破壊活動を行う。そして、すべてを破壊し終えると転生し、新たなる主を求め旅をする。」

「なっ！」

シグナム達は、ありえないといった顔で驚いた

「これが、闇の書を完成させた結末だ。だから、はやてはどちらにしろ死ぬ。」

「嘘だーーーーーー！！」

ヴィータが、叫ぶ

「それじゃあ・・・私たちのやってきたことは・・何なんだ・・・」

シグナム達は、膝をつき絶望し涙を流した

「何とかできなくもない。」

「え？・・・」

「はやてを救う方法がある。」

レイリスが、そう言うとシグナム達が

「本当か！本当にはやてを助けることができるのか？」

「ああ、できる。でも、それには俺の言うとおりにしてくれないとできない。」

レイリスが、真剣な表情で言った

「わかった。おまえの言うとおりにしよう。」

「ありがとう。俺もはやてを助けたいからな。」

レイリスは、そう言うとこれからのことを説明し始めた

「これからだけど、蒐集は今までのとおり続けてくれ。」

「でも、それじゃあはやてが・・・」

「わかってる。だけど、闇の書は完成させないといけないんだ。」

レイリスは、闇の書の暴走する原因の説明をする

「闇の書が、暴走する原因は防衛プログラムのせいなんだ。今までの持ち主がプログラムを改変してバグが発生してしまった。だから、闇の書を完成させて防衛プログラムを表に出して切り離す。」

「そんなことが可能なのか?」

「できる。俺の力ならな。」

レイリスは、自信満々に言った

「わかった。では、今から我々は主はやてを共に救う仲間だ。」

シグナムが、レイリスを仲間と認めた

「今夜は、この辺で解散しよう。蒐集だけどあまり派手にはやるな今動いてる管理局は強敵だぞ。」

「そうしよう。・・・一つ聞く、なぜお前は管理局なのに我々に協力する。」

シグナムが、今更ながら聞く

「約束したからだ。大切な人と・・・・」

「・・これ以上は聞かないでおこう。」

シグナムは、レイリスの心を察し聞くのをやめた

「じゃあ、また近いうち会おう。」

「ああ、わかったレイリス。」

そうして、レイリスとヴォルケンリッターはその場を後にした

「やっぱり、俺のことは覚えていなかったか。それに、夜天の書こと も忘れてるみたいだな。」

レイリスは、帰り道に騎士達のことを考えていた

「やっとこの時がきたんだ。絶対に救ってみせる。はやても夜天も。」

レイリスは、あの日の約束を守るためまた動き出す。

第４話　「魔法使いと騎士たち、共に誓い合った仲間なの」（後書き）

レイリスが、はやて側についた！！っというふうな話になってますが、実際は中立
な立場になります。ようは、どっちつかずということです。

さて、レイリスの新たなる約束が出てきました。一体誰との約束なのでしょうか？
大切な人と言っていますが、レイリスとの関係は・・・・・

それに、レイリスはなぜヴォルケンリッターのことを知っていたのか？そのへんも
注目ですね。

では、次は第５話で会いましょう。

第5話　「姉妹と学校、新たなる力、起動なの！」（前書き）

第5話です。

インフィニット久しぶりーーーー

それでは、どうぞ。

第5話　「姉妹と学校、新たなる力、起動なの！」

「よし！これで完璧。」

朝、アリシアはいつもより早く起きた。そして、聖祥小学校の制服に着替え鏡の前で身だしなみを整えていた

「アリシアー、朝ごはんできたよ。」

「は～い！」

アリシアは、元気よく返事をしてリビングに来た

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！どう？」

レイリスの前に来るとひらりと一回転し感想を聞いた

「うん、とっても似合ってるよアリシア。すごく、かわいい。」

「えへへ／／／うれしいな～。」

顔を少し赤らめて照れているアリシア。今日は、フェイトと一緒に聖祥小学校へ初登校する日。それで、今日はこんなにはしゃいでいるのだ

「ほらほら、早く食べなさい。遅刻しちゃうよ。」

「うん！いただきます！」

それから、忘れ物がないかカバンをチェックしていると時間になった

「お兄ちゃん、いってきます！」

「はい、いってらしゃい。」

ー聖祥小学校ー

「さて、みなさん。先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。アリシアさん、フェイトさんどうぞ。」

ガラ

「失礼します。」

「し、失礼します。」

教室の扉を開けてアリシアと、フェイトが入ってきた

「「「わあああああああ」」」

クラスメイトは、入ってきた2人の女の子を見て驚いていた。2人とも同じ顔をしていたからだ

「初めまして、アリシア・テスタロッサです。」

「えっと・・フェイト・テスタロッサです。」

「「よろしくお願いします。」」

パチパチパチパチパチパチ

その後、休み時間は大変な騒ぎになっていた。クラスメイトが、アリシアとフェイトを質問攻めにしていた

「ねぇ、向こうの学校ってどんな感じ?」

「急な転入だよね?なんで?」

「日本語、上手だね。どこで覚えたの?」

「えっと・・その・・」

「うううう」

アリシアとフェイトは、圧倒されていた

「アリシアちゃんとフェイトちゃん・・人気者。」

「でも、これはちょっと・・・」

「はぁ、しょうがないな。」

アリサが、溜息をつきながらアリシアとフェイトの下に行った

「はい！はい！転入初日の留学生をそうやってみんなで、もみくちゃにしないの。質問は、順番にしないさい。」

アリサが、その場を仕切って治めた

ーレイリスー

レイリスは、また病院の前にきていた。

「病院の中から、はやてと・・・これは、シグナムかな。」

病院内の魔力反応を探っていた

「出てくるのを待ってるか。・・・・・インフィ。」

「＜　はい、マスター　＞」

かなり久しぶりに登場のインフィニットが言った

「俺・・・約束守れるかな?」

「＜　マスターのその約束の内容を私は知りません。ですが、マス

ターは約束を一度も破ったことはありません。ですから、私は大丈夫だと思います。＞」

「ありがとう、インフィ。（ほんとは、一度だけ守れなかったんだよな。）」

レイリスが、そんなことを思っていると

「＜　マスター、はやてさんが出てきましたよ　＞」

「足の麻痺が進んでるな。」

はやてを遠くから見ているのにレイリスは体の状態がわかるようだ

「帰るか。」

「＜　会っていかれないのですか？　＞」

「うん、今日はいいや。」

そう言ってレイリスは帰って行った

それから、数日が経ちたった。レイリスは、なのはのリンカーコアの完治、レイジングハートとバルディッシュの修理が完了したとの報告を受けていた

「まさか、レイジングハートとバルディッシュにあれをつけるとは・・」

レイジングハートとバルディッシュの新たな力に驚いていた

「＜　マスター、騎士たちが管理局に見つかったようです　＞」

「くっ！あれほど、派手には動くなと言ったのに。いくぞインフィ！」

「＜　イエス、マスター　＞」

―ヴィータ―

「管理局か・・・・」

「でも、ちゃらいよこいつら。返り討ちだ！」

ヴィータが、そう言い構えると管理局員たちが急に離れて行った

「上だ！」

ザフィーラが叫ぶ

「《スティンガーブレイド・エクスキューションシフト》」

クロノの魔法がヴィータとザフィーラを襲う

「くっ！」

キィィィィィン

ザフィーラが障壁を張り防いだ

「少しは、通ったか？はぁはぁ・・・」

「ザフィーラ！」

クロノの魔法は、ザフィーラに少し当たっていた

「気にするな。この程度でどうにかなるほどやわじゃない！」

「上等！」

ヴィータは、クロノを見た

「くっ！」

「〈武装局員、配置終了。ＯＫクロノ君。それから現場に今助っ人を転送したよ。〉」

「えっ！？」

クロノが、下を見るとそこにはなのはとフェイトがいた

「なのは！フェイト！」

「あいつら！」

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「「セットアップ！」」

キィィィィィィン

なのはとフェイトがセットアップした

「あれ、これって？」

「いつもと違う・・・」

「2人とも落ち着いて聞いて。」

エイミィから通信がきた

「〈レイジングハートとバルディッシュは、新しいシステムを積んでるの。〉」

「新しいシステム？」

「〈その子たちが望んだの、自分の意志で自分の想いで。〉」

「あ！」

「〈呼んであげて、その子たちの新しい名前を。〉」

なのはとフェイトは、お互いを見て頷きあった

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「＜＜　Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ．　＞＞」

なのはとフェイトは、バリアージャケット姿になった

「あいつらのデバイスまさか！？」

ヴィータが、レイジングハートとバルディッシュを見て言った

「あれが、新しいレイジングハートとバルディッシュか・・・」

現場に到着していたレイリスは、少し離れた場所で見ていた

「なんとか助けてやりたいが・・・なのはとフェイトがいるからな・・・」

「＜　マスター、近くに不審な魔力反応があります　＞」

「不審な魔力反応？」

「＜　はい。どうされますか？　＞」

「行ってみるか。」

レイリスは、不審な魔力反応の下に向かった

第5話　「姉妹と学校、新たなる力、起動なの！」（後書き）

祝1万ＰＶ突破です。ドンドンドン　パフパフパフ

いや～、まさかこんなに早く1万を超えるとは、思いませんでした。
初作品なんで
見てくれる人は少ないだろうなって思ってましたから、とてもうれしいです。これ
からもよろしくお願いします。

それで、第5話ですがアリシアとフェイトの初登校がありました。
フェイトと違っ
てアリシアは、少し活発なイメージでいこうかなと思っています。

では、次は第6話で会いましょう。

第6話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（前編）」（前書き）

第6話です。

ついにレイリスが・・・・・・・・

第6話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（前編）」

「インフィ、不審な魔力反応はどのへんだ？」

「＜　すみません、マスター。正確な位置まではわかりません　＞」

シュンとした感じでインフィニットが言った

「そっか・・・ん？この魔力は・・・・シグナムか？」

シグナムらしき魔力を感じたレイリス

「捕縛結界、ヴィータ達は閉じ込められたか。」

「＜　Ｗａｈｌｅｎ　Ｓｉｅ　Ａｋｔｉｎｏ　＞」

「レヴァンティン、おまえの主はここで引くような騎士だったか？」

自身のデバイスに問いかけた

「＜　Ｎｅｉｎ　＞」

レヴァンティンは否定した

「そうだ、レヴァンティン。私たちはいつもそうしてきた。」

「私たちは、戦いに来たわけじゃない。まずは、話をきかせて。」

「闇の書の完成を目指している理由を。」

ヴィータに問いかける。しかし

「あのさ、ベルカのことわざにこういうのがあるんだよ。“和平の使者なら槍は持たない”」

「「ん？」」

なのはとフェイとは、顔を見合わせて意味がわからないという顔をした

「話し合いをしようってのに武器を持ってくるかバカって話だよ！バーカ！」

「なっ！いきなり有無を言わさず襲ってきた来た子言う！」

なのはとヴィータが言いあってると横からザフィーラが

「それにそれは、ことわざではなく小話のオチだ。」

「うっせぇ、いいんだよ細かいことは。」

ヴィータが、開き直ったその時

ド――――――ン

「え？」

「なに！」

突然、雷鳴が響いた

「あ！・・・シグナム！」

捕縛結界を抜けシグナムが駆けつけてきた

―レイリス―

「＜　マスター、管理局と騎士たちの戦闘が始まるようです　＞」

インフィニットが、レイリスに告げた

「う～ん、なんとか戦闘は避けたかったがしかたないか。俺が、ヴィータ達をここで助けるわけにもいかないしな・・・」

なにもできない歯がゆさからレイリスは苦しい顔をする

「なのは対ヴィータ、フェイト対シグナム、あとザフィーラ対アルフか・・・なかなかの組み合わせだな。」

「＜　マスター、クロノさんとユーノさんが動きました　＞」

レイリスが、戦いを眺めているとインフィニットが言ってきた

「たぶん、闇の書を持ってる奴を探しに行ったんだろ。ヴィータ達は持ってないからな。」

ーなのはー

「約束だよ。私たちが勝ったら事情を聞かせてもらうって。」

そう言い、右手を上にあげた

「《アクセルシュート》」

ヴィータに向けてアクセルシュートを放った

「＜　Ｐａｎｚｅｒ　ｈｉｎｄｅｒｎｉｓ.　＞」

グラーフアイゼンが、障壁を張った

ドーンドーンドーンドーン

アクセルシュートがヴィータの障壁を襲う

ビキッビシッ

「なっ！」

ヴィータの障壁に亀裂が入り始めた

―フェイト―

「＜　Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ.　＞」

「《プラズマランサー》」

フェイトが、シグナムに向けて放つ

「ファイア！」

プラズマランサーが、シグナムに向かって撃たれる。しかし

「はぁ！」

シグナムは、レヴァンティンを一振りで薙ぎ払った

「はぁはぁはぁ・・・」

フェイトとシグナムの力は今のところ互角であった

ーレイリスー

「ん？」

「＜　どうしましたマスター？　＞」

「結界の外にシャマルの魔力反応を感じる。」

レイリスは、立ち止って言った

「・・・っ！まずい。シャマルの近くにクロノが近づいてる。くっ急げ！」

全速力でシャマルの下に向かった

ーシャマルー

「〈ヴィータとシグナムが負けるとは思えないが・・・シャマル、何とかできるか?〉」

「〈何とかしたいけど、局員が外から結界維持しているの。私の魔力じゃ破れない。〉」

ザフィーラと念話で対策を練ってはいたが、どうにもならない状況にあった

「〈では、やはりあれを使うしか・・・〉」

「〈わかってるけどでも・・・あっ!〉」

突如、シャマルの背中に何かが突き付けられた

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します。」

クロノだった

「抵抗しなければ弁護の余地がある。同意するなら武装の解除を。」

クロノが、シャマルに言う、もう絶体絶命かと思ったその時

ド―ン!!

「わぁーーー！」

突然、クロノが蹴り飛ばされた

「う・・くっ・・」

クロノが、見るとシャマルの横には、仮面のつけた男がいた

「あなたは？」

クロノを蹴り飛ばした仮面の男にシャマルが問いかける

「使え。」

「えっ？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ。」

男は闇の書を使うように促す

「でも、あれは・・・」

「減ったページは、また増やせばいい。仲間がやられてからでは遅い。」

「あ・・・・ん！」

シャマルが、闇の書を使う決心をした

「〈みんな今から結界破壊の攻撃を放つわ。うまく躱して撤退を。

〉」

「「「おう！」」」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラが言った

キィィィィィィン

「闇の書よ。守護騎士シャマルが命じます。岩壁を打ち砕く力を。今ここに・・・・」

シャマルが、詠唱を始め攻撃を放とうとした。しかし

「《虚数結界》」

「えっ！？」

突如、シャマルの周りに結界が展開し、魔法がキャンセルした

「ふぅ、間に合った。」

「あ！レイくん！」

ギリギリのところでレイリスが間に合った

「不審な魔力反応ってあいつのことか・・・・」

レイリスは、仮面の男を見て言った

「貴様！・・・よくも」

「悪いがおまえの好きにはさせない。」

右手を仮面の男に向けた

「捕縛式（チェイン）」

キィィィィィン

「なっ！なんだこれは！？」

仮面の男は、レイリスの魔法で動きを封じられた

「さてと・・・・」

レイリスが、シャマルの方を見ると

「レイ君！出してください。早く結界を破壊しないと。」

「大丈夫、俺がやるから。」

「な！なにを言ってるんですかレイリスさん！」

クロノがありえないといった顔で叫んだ

「悪いクロノ・・・・」

キィィィィン

「響け勝利の歌。光の剣となりて撃ち抜け。」

レイリスが詠唱を始め結界に向けて放つ

「《ウォーリア》」

ドーーーーーン

レイリスの魔法によって結界が破壊された

「すまん、テスタロッサ。勝負は預ける。」

「シグナム！」

―――――

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータだ。あんたの名は？」

「なのは！高町なのは。」

「高町なぬ・・なの・・ええい！呼びにくい！」

なのはの名前が言えないヴィータだった

「逆ギレ！？」

「ともかく勝負は預けた。次は殺すからな！絶対だ！」

「あ！ヴィータちゃん・・・」

守護騎士たちは散り散りに撤退していった

―――――――

クロノが、レイリスにデバイスを突き付ける

「なぜ、守護騎士たちを逃がしたのか説明してもらいます。」

「そのまえに、あの仮面の男を・・・・・あれ?」

レイリスが、仮面の男がいた場所を見ると誰もいなかった

「仮面の男なら結界が破壊されたのと同時に逃げました。」

「あれを破ったのか!なんてやつだ。」

「それでは、ユースティア管理者。同行願います。」

クロノがレイリスを連れて行こうとしたが

「なぁクロノ・・・」

「なんですか?」

「リンディにさ・・・アリシアを頼むって伝えてくれ。それから、アリシアにはごめんって。」

キィィィィン

「なっ!レイリスさん!」

「じゃあな、クロノ。」

レイリスは、転移して行った

―守護騎士―

「本当にごめんなさい。はやてちゃん・・・」

無事に八神家に戻った守護騎士たちだったが、夕食の時間に間に合わずはやては、すずかの家に行っていた

「〈気にせんでええよ。全然怒ってへんから、謝らんでもええって。〉」

「ごめんなさい、はやてちゃん。じゃあヴィータに変わります。」

「もしもし、はやて・・」

シャマルは電話をヴィータに変わり庭に出た

「寂しい思いをさせてしまったな。」

「うん」

シャマルに続いてシグナムが来た

「それにしてもおまえを助けた男はいったい何者だ?」

「わからないわ・・・でも、当面の敵ではないと思うんだけど・・・
レイ君は敵対してたみたいだったの。」

「レイリスが敵対したいた?」

シグナムが聞き返した

「うん。おまえの好きにはさせないって。結界もレイ君が破壊してくれたし。」

「では、その男はあまり信用しない方がいいかもしれん。」

「そうね。」

―なのは―

「えっ!レイお兄ちゃんが!」

戦いのあと、なのは達はマンションに戻ってきてレイリスの事をクロノから聞いた

「そんな、レイリスが・・・・」

なのはとフェイトは、レイリスが自分たちと敵対したことにショックを受けた

「なぜ、あんなことをしたのかは、聞けなかった。・・・もしかしたら・・・」

「レイさんが闇の書の主かもしれないってこと?」

リンディが言った

「はい。その可能性も否定できません。」

「う~ん、とりあえずアリシアさんを保護しないとね。クロノ、迎えに行ってくれる?」

「はい、すぐに行ってきます。」

クロノはアリシアを迎えにレイリスのマンションに行った

「ふう、(レイさんあなたは一体何を考えているの?)」

リンディが、そんなことを思うが結論に至るわけがなかった

第6話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（前編）」（後書き）

レイリスが、裏切りました。これで完全に中立じゃなくなってしまった。言ったそばから展開がずれていく。なんで～～～～

しばらく、レイリスは単独で動くことになりますね。いったいどこで寝るんですか

ね？八神家には絶対行かせませんから・・・・・たぶん

では、次は第7話で会いましょう。

第7話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（後編）」（前書き）

第7話です。

レイリスと騎士たちの過去が少し出ます。

それでは、どうぞ。

第7話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（後編）」

それから、クロノがアリシアを迎えに行っている間にリンディが闇の書について説明する

「闇の書は、簡単に制御できるものじゃないの。完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない。少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ。」

リンディが言う

「それから、もう一つあの騎士たちね・・・闇の守護者の性質。彼らは人間でも使い魔でもないわ。」

「「「えっ！」」」

リンディの言葉になのは、フェイト、エイミィが驚く

「闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格。主の命令を受けて行動するだけのプログラムにすぎないはずなんだけど・・・」

リンディが、そう説明するとフェイトが

「あの・・・人間でも使い魔でもないとすると・・・私みたいな・・」

「違うわ！」

リンディが声を上げて否定する

「フェイトさんは、生まれ方が少し違っただけで、ちゃんと命を受けて生み出された人間でしょ。」

「はい・・ごめんなさい。」

フェイトが謝った

「ただいま戻りました。」

「お邪魔します。」

そうして、クロノがアリシアを連れて帰ってきた

「いらっしゃいアリシアさん。」

リンディが笑顔で迎える

「あの、お兄ちゃんがどうかしたんですか？そう言われてきたんですけど。」

「それがね。」

リンディが、何があったのかアリシアにすべて話した

「ひっぐ・・う・・お兄ちゃん～」

話を聞いた後、アリシアは泣き出してしまった。

「うう・・うわーーーーーん」

アリシアは、フェイトに抱きつき泣き続ける

「姉さん・・・」

フェイトはアリシアの背中をさすりながら泣き止むまで待った

「うっぐ・・ひっく・・」

「フェイトさん、アリシアさんをお願いしてもいいかしら。」

リンディは、アリシアをフェイトに任せることにする

「はい。姉さん行こう。」

アリシアを自分の部屋に連れて行った

「まったくレイさんはアリシアさんを泣かせて・・・」

リンディは、呆れ顔で言った

「でも、レイお兄ちゃんにも何か事情があると思うんです。」

「それは、私も思うけど・・・でも、今回のことはどんな事情でも許されることではないわ。」

その後、なのはは家に帰るため街を歩いていた

「〈ねぇ、ユーノ君。闇の書の主ってどんな人かな?〉」

「〈闇の書は、自分を扱う資質を持つ人をランダムで転生先を選ぶみたいだから・・・〉」

ユーノがそれに答える

「〈そっか。案外私たちと同い年くらいの子だったりしてね。〉」

「〈さすがにそれは・・・〉」

すると、なのはの携帯にメールがきた

「〈すずかちゃん、今日友達がお泊りに来てるんだって。〉」

「〈そうなの?〉」

「〈うん、ほら。〉」

なのはが、ユーノに携帯を見せた

「〈八神はやてちゃん。今度紹介してくれるって。〉」

―レイリス―

翌日、レイリスは公園で眠っていた

「シグナム・・ヴィータ・シャマル・・・・ザフィーラ・・・夜天・・」

レイリスは、とても懐かし夢を見ていた

―――――――

「ふっ」

そばでその様子をシャマルとザフィーラが見ていた

「あなたは、いかなくていいの？」

シャマルは、一緒に見ていた銀髪の少女に言った

「私はいい。今行っても主を困らせるだけだ。」

銀髪の少女はそう言った

「必ず・・・助けてやるからな・・・・・」

眠りながら誓いをたてるレイリスだった

一なのは一

「ねぇ、アリシア今日なんだか元気ないみたいだけどどうしたの？」

アリサが聞いてきた

「えっと・・その・・なんというか・・」

フェイトが、事情を説明しようとするがなんといっていいかわからなかった

「ちょっとね、いろいろあって詳しいことは言えないんだ。」

なのはが言った

「うん、よくわからないけど聞かないほうがいいんだよね。」

「でも、アリシアが元気ないのはよくないわ。ちょっと元気づけてくる。」

そう言ってアリサはアリシアのところに行った

「私たちの行こう。」

「「うん！」」

すずかに言われなのはとフェイトも続いて行った

―レイリス―

目覚めた後、レイリスは時空管理局本局に来ていた

「入るぞ、グレアム。」

「レイさん、お久しぶりです。」

レイリスは、グレアムのところに来ていた

「今日はどうしました。最近は姿を見ませんでしたが。」

「ちょっと、おまえの世界に行っててな。今日はおまえに言っておきたいことがあってきた。」

「言っておきたいこと？なんですか。」

グレアムが聞いた

「う～ん？今日は猫姉妹はいないのか？」

レイリスは、周りを見て言った

「あの娘達は、ちょっとクロノの用事で今日はいません。」

「そうか・・・まあいい。話だが、グレアム俺はおまえの気持ちがわからないわけじゃない。」

「急になんですかな？」

グレアムが聞いた

「闇の書。」

「っ！」

闇の書という言葉にグレアムが動揺する

「おまえが、あの事件を引きずってるのは知っている。けどな、他人の命を弄んでいいわけがない！」

「・・・・・」

グレアムは、なにも言わず黙っている

「このまま、手を引くなら目を瞑ってやる。でも、引かないっていうなら・・・」

キッ！

「うっ！」

グレアムに鋭い殺気を放つ

「おまえといえど、容赦はしない。」

レイリスは、グレアムに忠告をする

「話はこれだけだ、じゃあな。」

レイリスは、グレアムの部屋を後にする

―――――――

インフィニットがこれからのことを聞く

「地球に戻ってはやてと騎士たちの監視だな。闇の書のページを早く埋めないといけないからな。」

そう言い、レイリスは地球に戻って行った

第7話　「レイリスの裏切り、それは小さな願いなの（後編）」（後書き）

レイリスと騎士たちの過去が出てきましたね。会話を聞く限りレイリスと守護騎士
はそういう関係だったってことですよね。ちょっとだけっていうかだいぶネタばれ
してしまいました。

これに関して話が進みにつれて明らかになっていきますので気長におまちください

それに、グレアムのことにも気づいていたレイリスさんです。本当なんでもできる
人ですね。

では、次は第８話で会いましょう。

第8話　「見えない未来、壊れた過去と現在となの」（前書き）

過去に縛りつけられたままじゃ先には進めない

過去を受け入れ、今と未来を生きて行くんだ

第8話　「見えない未来、壊れた過去と現在となの」

「な、なんだかいっぱいあるね・・・」

「ほんとに・・・」

フェイトとアリシアは、携帯のカタログを見て言った

「まあ、最近かどれも同じような性能だし、見た目で選んでいいんじゃない。」

とアリサが言う

「でも、やっぱりメール性能がいいやつがいいよね。」

なのはも言う

「カメラもきれいだといろいろ楽しいだよ。」

「「う～ん」」

アリシアとフェイトは真剣に見ていた

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょう。」

「操作性も大事だよ。」

「外部メモリー付いてるといろいろ便利でいいだけど。」

3人は自分の意見を言いまくる

―――――――

その頃、ユーノは時空管理局本局でクロノに頼まれた事をしていた

「大丈夫?私たち仕事があるから頻繁に手伝ったりできないけど。」

「そうそう。」

そう言っているのがグレアムの双子の使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアだ

「過去の歴史の調査は僕らの一族の本業ですから。検索魔法も用意してきましたし・・・大丈夫です。」

ユーノが言う

「そっか、君はスクライアの子だっけね。」

「なるべく手伝うようにはするよ。」

ロッテとアリアは言った

ーなのはー

その頃、リンディとクロノが本局に行っていてマンションを留守にしていた

「ただいまー」

そして、買い物に行っていたエイミィが帰ってきた

「艦長もう本局に出かけちゃった？」

エイミィがフェイトに聞いた

「うん、アースラの武装がすんだから試験航行だって。」

「武装っていうと、アルカンシェルか・・・あんな物騒なもの最後まで使わずに済めばいいけど。」

溜息交じりにエイミィが言う

「クロノ君もいないですし、エイミィさんが指揮代行だそうですよ。」

「責任重大！」

アルフが言った

「それもまた物騒な・・・まあ、でもそうそう非常事態なんて起こるわけが・・」

ウーンウーンウーン

エイミィが、そんなこと言うと突然アラームが鳴った
そして3人は、急いでモニタールームに行った

「文化レベル0。人間は住んでない、砂漠の世界だね。」

そう言い、3人はモニターを見ていた。そして、モニターにはシグナムとザフィーラが映っていた

「結界の張れる魔導士が到着するまで最速で45分・・・・まずいな～」

エイミィが、頭を悩ませていると

「エイミィ・・私が行く。」

「私もだ！」

フェイトとアルフが、現場に行くと言ってきた

「うん、お願い。」

「うん。」

「なのはちゃんは、ここで待機していて。」

「はい。」

そして、フェイトは部屋にバルディッシュとカートリッジを取りに行った

「行くよ、バルディッシュ！」

「＜　Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　＞」

―シグナム―

シグナムは、１人で魔法生物と戦っていた

「はぁはぁはぁ・・・」

グォオオオオオオオ

「あっ！」

シグナムが油断していると背後から触手が襲ってきた

「ぐっ・・・しまった！」

触手から逃げきれずシグナムは捕まってしまった

グォオオオオオオオ

「う・・わぁぁぁ！」

触手がシグナムを締め付ける、ここまでかとシグナムが諦めかけた・・・その時

「＜　Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｂｌａｄｅ.　＞」

ドーンドーンドーン

グォォォォォォォォ

魔法生物の体に剣型のスフィアが突き刺さった

「あっ！？」

シグナムは、触手から抜け出しスフィアの飛んできた方向を見た

「ブレイク！」

ドォーンドォーンドォーン

フェイトの掛け声で魔法生物に刺さっていたスフィアが爆ぜた

その頃、ザフィーラが遠くからその様子見ていた

「ご主人様が気になるかい？」

「おまえか？」

ザフィーラが振り向くとアルフがいた

「ご主人様は、１対１。こっちも同じだ。」

「シグナムは、我らの将だが主ではない。」

そう言いザフィーラが構える

「あんたの主は、闇の書の主っていうわけね。」

「〈フェイトちゃん！助けてどうするの、捕まえるんだよ！〉」

エイミィが叫ぶ

「あ・・ごめんなさい。つい・・・」

フェイトが、申し訳なく言うと

「礼は言わんぞ、テスタロッサ。」

「お邪魔でしたか？」

「蒐集対象を潰されてしまったからな。」

そうシグナムが言うと

「まあ、悪い人の邪魔をするのが私の仕事ですし・・」

フェイトが正論を言う

「そうか・・・悪人だったな私は。」

―――――――

ウーンウーンウーン

「もう一か所！」

モニタールームで、フェイト達を見ていると別の場所で反応があった

「本命はこっち！」

エイミィが、モニターに映すと闇の書を持っているヴィータが映った

「なのはちゃん！」

「はい！」

―リンディ―

「久しぶりだね、リンディ提督。」

「ええ。」

本局にいたリンディは、グレアムのところに来ていた

「闇の書の事件、進展はどうだね？」

「なかなか難しいですが、うまくやります。」

リンディがそう言う

「君は優秀だ。私の時のような失態はしないと信じてるよ。」

グレアムが真剣な表情で言う

「夫の葬儀の時も言いましたが、あれは提督の失態ではありません。」

リンディは持っていたティーカップを置いた

「あんな事態を予測できる指揮官なんていませんから。」

そう言い、軽く微笑む

「予測できる指揮官はいないか・・・しかし、できる人を私は1人だけ知っている。」

「え？」

リンディは聞き返した

「レイさんだよ。数時間前にここに来た。」

「レイさんが、ここに来たんですか！」

リンディが、声を上げて聞いた

「どうした?そんなに驚いて。」

「あ・・いえ・・」

レイリスが、管理局を裏切った事はまだ伏せていたので、理由を言うわけにもいかなかった

「あの人は、本当にすごい人だ。あの時もレイさんが居ればあんなことには・・・・」

グレアムは、まだ過去に囚われていた

―――――――

「行くぞ、インフィ！」

「＜　イエス、マスター　＞」

第8話　「見えない未来、壊れた過去と現在となの」（後書き）

レイリスの出番があまりなかったです。

単独行動をしてるとなかなか出しにくいですね。

では、次は第9話で会いましょう。

第9話　「遅れてきた魔法使い、レイリスの怒り爆発なの！」（前書き）

正体不明の仮面の男。傷ついた仲間。

1人の魔法使いの怒りが爆発する。

第9話　「遅れてきた魔法使い、レイリスの怒り爆発なの！」

砂漠の真ん中で、フェイトとシグナムが互いに見合っていた

「預けた決着はできれば今しばらく先にしたいが・・速度はおまえの方が上だ。逃げられないなら戦うしかないな。」

「はい。私もそのつもりで来ました。」

そう言い、2人は構えた

「はぁっ！」

「ああっ！」

キィン

フェイトとシグナムの攻防は、白熱していた。シグナムの言うとおり速さではフェイトが上回っていた
しかし、経験の差などからシグナムは、それを物ともせずにいる

「＜　Ｓｃｈｌａｇｅ　ｆｏｒｍ.　＞」

「はっ！」

シグナムは、レヴァンティンを連結刃に変え、フェイトに向けて放った

「あっ！」

フェイトは何とか交わした

「＜Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ．＞」

「《ハーケンセイバー》」

フェイトが魔力刃を飛ばす

ーヴィーターー

「〈シグナムたちが？〉」

「〈うん、砂漠で交戦しているの。テスタロッサちゃんとその守護獣と・・〉」

ヴィータは、飛びながらシャマルと念話でシグナムたちのことを聞いていた

「〈長引くとまずいな。助けにいくか？〉・・あっ！」

ヴィータは急に止まった。そしてその先になのはがいた

「〈ヴィータちゃん？〉」

「〈くそー、こっちにもきた。例の白服。〉」

ヴィータはシャマルにそう言うと

「高町なんとか！」

「わぁっ！なのはだってば！な・の・は！」

ヴィータは、なのはの名前をやはり覚えていなかった

「ふぅ、ヴィータちゃんやっぱりお話聞かせてもらうわけにはいかない？」

なのはは、一息ついてヴィータに言う

「もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかもしれないよ？」

なのはは、優しく微笑みかけて言った

「う、うるせぇ！管理局の人間の言うことなんか信用できるか！」

ヴィータが叫ぶ

「私、管理局のひとじゃないもの、民間協力者。」

「（闇の書の蒐集は魔導士１人につき１回。つまりこいつを倒してもページにはなんねぇんだよな。カートリッジの無駄遣いも避けたいし・・・）」

「ヴィータちゃん。」

黙っていたヴィータになのはが呼びかける

「ぶったおすのは、また今度だ！」

キィィィィィィィィン

「ああ！」

「吼えろ！グラーフアイゼン！」

「＜Ｅｉｓｅｎｇｅｈｅｕｌ．＞」

「はああ！」

ドォーーーーーーーーン

「ああ！」

ものすごい、衝撃波がなのはを襲った

「脱出」

ヴィータがその場から離脱した

「うううー・・・あっ！」

衝撃波が止み、なのはが目を開けるとヴィータはかなり遠くまで離れていた

「＜Ｍａｓｔｅｒ．＞」

レイジングハートがなのはに呼びかける

「よし、ここまで離せば攻撃もこねぇ。」

ヴィータが安心していると

「えっ？」

「＜Ｂｕｓｔｅｒ　ｍｏｄｅ．Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．＞」

「いくよ！久しぶりの長距離砲撃。」

「＜Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．＞」

カートリッジを2発ロードした

キィィィィィィィン

「嘘だ！あんな遠くから・・」

ヴィータは信じられないといった顔をしていた

「＜Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ．＞」

「《ディバイン・・・バスター》」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「はっ！」

ドォーーーーーーーーーーン

ディバインバスターは、ヴィータに直撃した

「＜　Ｉｔ'ｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ.　＞」

「ちょっとやりすぎた。」

「＜　Ｄｏｎ't　ｗｏｒｒｙ.　＞」

ディバインバスター、直撃のさいにでた煙が晴れてくる。しかし、なぜか人影が２つあった

「あっ！」

煙が完全に晴れると、ヴィータそばにいたのは仮面の男だった

「あんたは・・・」

「闇の書を完成させるんだ。」

「あ！」

キィィィィィィィィン

「《ディバイン・・・》」

なのはが、再度ディバインバスターを撃とうとするが

「＜　Ｍａｓｔｅｒ！　＞」

「あっ！」

キィィィィン

なのはがバインドで縛られた

「バインド!?そんな、あの距離から一瞬で・・・」

今度は、なのはが信じられないといった顔をした

「ううん、うーん！」

なのはがバインド破って周りを見るが、すでに2人の姿はなかった

「＜　Ｓｏｒｒｙ，Ｍａｓｔｅｒ．　＞」

レイジングハートが謝る

「ううん・・私の油断だよ。」

―――――――

フェイトとシグナムの戦いは、まだ続いていた

「はぁはぁはぁ・・・」

シグナムの体には、大きくはないが傷がついていて、息も上がりつつあった

「（ここにきて、なお速い。目で追えない攻撃が出てきた。早めに終わらせないとやばいな。）」

シグナムがそう思っているが

「はぁはぁはぁ・・・（強い・・クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ。今は、スピードで誤魔化しているだけ。まともに喰らったら叩き潰される。）」

フェイトもシグナムもお互いにもう限界が近かった

「（シュツルムファルケン、当てられるか？）」

「（ソニックフォーム、やるしかないかな？）」

フェイトとシグナムは、威力の大きい攻撃を放とうとしていた

「はぁ！」

「ああっ！」

フェイトとシグナムが、最後の一撃を放とうとしたその時

キィィィィン

「あああ！？」

突然、フェイトの背中を手が貫通してきた

「なっ！」

突然のことにシグナムが立ち止る

「テスタロッサ・・」

フェイトの体を貫いたのは仮面の男だった

「おまえのリンカーコアいただくぞ。」

キィィィィィン

「あ！、あああああああああああ！」

フェイトのリンカーコアが蒐集されようとした。だが次の瞬間

「悪いがそうはさせない・・・」

ドォーーーーーーン

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

仮面の男が吹っ飛ばされた

「遅くなった、フェイト・・・」

「レ、レイリス・・・」

フェイトが、見たのは自分をいつでも助けてくれる、とても大好きな人だった

「俺の大事なフェイトを傷つけたんだ・・覚悟はいいな！」

第9話　「遅れてきた魔法使い、レイリスの怒り爆発なの！」（後書き）

最後の展開は一体なに？
自分で書いといてなんでこうなったと思ったことはたくさんあったが、ここまでで
一番の理解不能だ。

これじゃあ、レイリスとフェイトが両想いみたいじゃないか！言っておくがそんな
ことは決してないので誤解がないように。

レイリスの言った大事とは家族的な意味で恋愛感情ではないです。
本当に・・・

では、言い訳はここまでで、次は第１０話で会いましょう。

第１０話　「守る力とすれ違う友なの」（前書き）

守りたい者がある。助けたい人がいる。

魔法使いは１人で運命に立ち向かう

第１０話　「守る力とすれ違う友なの」

「シグナム、フェイトを頼む。」

レイリスは、フェイトをシグナムに預ける

「わかった。」

シグナムがフェイトを抱きかかえる

「さてと、じゃあお仕置きの時間だ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

レイリスからとてつもない魔力が溢れ出す

「な！なんだこの魔力は！？」

仮面の男は、あまりにすごい魔力に驚きを隠せない

キィィィィィィン

「＜　ブラックシュータ　＞」

ドーンドーンドーン

「くっ！」

仮面の男にレイリスのブラックシュータの雨が降り注ぐ

「ぐっ・・うわっ！・ぐわっ・・・」

無数のブラックシュータを躱し続けることなどできず、仮面の男は何発も喰らい続けた

「かはっ！・・・・はぁはぁはぁはぁ・・・」

ようやく、ブラックシュータの雨が止む。しかし、レイリスの攻撃はまだ続く

「まだまだ、これくらいで終わらない。」

レイリスは、両足に魔力を集中させ、そして一気に解放する

ヒュン

まるで、瞬間移動したかのように、一瞬で仮面の男との距離を詰めた

「はぁぁ！」

右手に魔力を乗せて、仮面の男に掌底の一撃を放った

「うわぁぁぁぁ！」

仮面の男は、砂漠に叩きつけられるように吹っ飛ばされた

「かはっ！・・くっ・・このままでは体が持たない・・」

キィィィィィィン

仮面の男は、転移しようとした

「な！逃がすか！」

レイリスが、男の下に急ぐが

「この借りは返させてもらうぞ。」

仮面の男は、そう言い転移した

「くっ！逃がしたか・・・・・」

仮面の男を逃がしてしまい、レイリスは悔しそうにした。そして、フェイトの様子を見にシグナムのところに戻って来た

「フェイトの様子はどうだ?」

「ああ、気を失っているが、大したことはないだろう。リンカーコアも無事だと思うが・・・」

シグナムは、フェイトを抱きかかえながら言った

「そうか、よかった。」

レイリスは、心の底から安心した

「さてと、じゃあ・・・・・んっ!」

知った魔力が近づいてくるのをレイリスが感じ取った

「アルフか・・・シグナム、今からここに来るやつにフェイトを任せろ。」

「おまえの仲間じゃないのか?だったらおまえが残ればいいじゃないか。」

シグナムがもっともなことを言うが

「俺は、今裏切り者だからな・・・あまり会うわけにはいかない。」

「裏切り者!どういうことだ!」

シグナムはその言葉に驚きた

「このまえ、お前たちを助けたことが原因でな・・・」

「あっ！あの時のか・・・・すまん・・私たちのせいで・・」

シグナムは、責任を感じた

「謝るな、俺が好きでやったんだから。」

謝るシグナムにレイリスが言う

「俺はそろそろ行くよ。じゃあな！」

キィィィィィィン

レイリスは、そう言い転移した

―――――――

「私の時と同じように闇の書に蒐集されちゃったんですね。」

なのはが、そう言うと

「いいえ、フェイトさんは闇の書に蒐集されてないわ」

リンディが否定した

「えっ!?どういうことですか?」

「それは・・・アルフ、説明お願い。」

リンディは、アルフに説明を求めた

「うん・・・私が駆けつけた時、もう仮面の男はいなかった。でも・・あいつが・・シグナムがフェイトを抱きかかえてて、そしたらフェイトを私に渡したら“レイリスに感謝するんだな”って・・・」

「えっ!?お兄ちゃん?」

予想外の名前が出てきてなのはは驚いた

「フェイトを助けてくれたみたいなんだ。シグナムがそう言ってた。」

アルフがそう言う

「というわけで、フェイトさんは蒐集されずにすんだそうよ。」

リンディがまとめた

―八神家―

その頃、八神家に戻ったシグナム達は仮面の男の話をしていた

「助けてもらったってことでいいのよね？」

「少なくとも奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ。」

「完成した闇の書を横取りしようとしているのかもしれんな・・・」

ヴィータを、仮面の男が助けた理由について考えていた

「ありえねぇ！だって完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん！」

「完成した時点で主は絶対的な力を得る・・・はずなんだが・・・・」

シグナムは、レイリスの言っていたことを思い出す

「だが、レイリスが言うには闇の書が完成すれば主は闇の書に取り込まれ破壊活動をすると・・」

「未だに信じらんねぇけど、なんであいつが嘘を言ってるようには思えねぇんだ。」

ヴィータが言う

「ああ、それは私もだ。」

「私も・・」

「うん・・・」

ほかの3人も同じ気持ちだった
そして、ヴォルケンリッターがリビングでそんな話をしていると、
2階の部屋で眠っていたはやてが目を覚ました

「うーん・・うう?・・ふわぁぁ・・うん?」

はやては、起きると隣を見て首を傾げる。いつも一緒に寝ていて自分より遅く起きるヴィータがいないからだ

「もう起きたんやろか。」

ヴィータが先に起きたと思いはやてはベッドから車椅子移ろうとする

「よいしょっと!・・・あっ!」

キィィィィィィン

「あ・・あああ・・あ・・」

はやては、突然激しい胸の痛みに襲われた。

「あ・・・ああ・・ああああ・・」

バタン

はやては、耐えられずに床に倒れてしまった

「ん！」

「あっ！」

その音をリビングにいた４人が聞いた

「はやて！」

「はやてちゃん！」

４人がはやての部屋に行くとはやてが胸を押さえてうずくまっていた

「早く病院！救急車！」

シグナム達は急いではやてを病院に連れて行った

ーレイリスー

レイリスは、砂漠を後にし一度自分のマンションに戻ってきていた

「はぁ～まったく・・・・・」

砂漠での事を思い出して深く溜息をつく

「警告しても聞くような奴だとは思ってなかったけど・・・どうするかな～」

「＜　マスター、気にする必要はありません　＞」

レイリスが、悩んでいるとインフィニットが話しかけてくる

「＜　マスターは、ちゃんとやめるように言ったのです。それでもやめない向こうが悪いのです　＞」

インフィニットが、珍しく怒っているようだ

「インフィの言うこともわかるよ。でもね、あいつの気持ちもわかるからさ。」

「＜　マスター・・・・・　＞」

「それにさ・・・」

「〈レイリス！〉」

突然、念話が来た

「〈シグナムか？どうした？〉」

「〈主が倒れた。今、病院にいるすぐに来てくれ！〉」

シグナムは、落ち着きがなく余裕がない様子だった

「〈わかった、すぐ行く。〉」

レイリスは、そう言うと念話を切った

「＜　マスター、どうしたのですか？　＞」

「はやてが倒れたらしい、今から病院に行く。」

「＜　わかりました。マスター　＞」

レイリスは、準備を済ませると急いで病院へ向かった

第１０話　「守る力とすれ違う友なの」（後書き）

レイリスが、爆発しました。あんな圧倒的に痛めつけるとは・・・・・

それにしても、バトルシーンは難しいねぇ～何回も言ってすいません

んが・・

では、次は第１１話で会いましょう。

第１１話　「八神家の新たな主夫なの？」（前書き）

あの頃と変わらない光景。それは、懐かしく儚いものだった。

第11話　「八神家の新たな主夫なの？」

はやては、鳴海大学病院に運ばれ診察を受けた

「うん、大丈夫みたいね。よかったわ。」

はやてがいきなり病院に運ばれてきたので主治医の石田先生は、かなり心配していたが何事もなかったので安心していた

「はい、ありがとうございます。」

「はぁ～、ほっとしました。」

「せやから、ちょっ眩暈がして胸と手がつっただけ言うたやん。もう、みんなして大事にするんやから。」

はやては、みんなが大げさにしていたので大丈夫だと言い張っていた

コンコン

「ん？は～い、どうぞ。」

はやての病室のドアがノックされた。そして、ドアが開くとそこには意外な人が

「はやて、お見舞いに来たよ。」

「レイさん！どうしてここに！？」

はやては、自分がここに運ばれた事を知らないはずのレイリスが来たので驚いた

「シグナムが連絡をくれてね。それで、急いできたんだ。」

そして、レイリスは持っていた花をはやてに渡す

「はい、これ・・」

「わぁー、ありがとう、レイさん。」

はやては、レイリスから花を受け取るとかなりうれしそうに笑った

「えっと・・はやてちゃん。こちらの方は？」

石田先生は、初めて見る顔だったのではやてに聞いた

「こちらは、レイリス・ユースティアさん。私のお友達です。」

「初めまして、レイリスといいます。」

「初めまして、はやてちゃんの主治医の石田です。」

はやての紹介でレイリスと石田先生は互いに名乗りあう

「はやてちゃん、来てもらったついでにいろいろ検査もしたいからもう少しゆっくりしていってね。」

「はい。」

「それで、シグナムさん、シャマルさん、それとレイリスさんちょっと・・・」

石田先生は、シグナムとシャマル、そしてなぜかレイリスを呼んで病室の外に出た

―――――――

シャマルが困ったように言う

「こういった事がまた起きるかもしれません。用心のためにも少し入院してもらったほうがいいでしょう。大丈夫でしょうか？」

「うう・・」

シャマルは、シグナムを見てどうしようかという目線を送った

「はい・・・」

そうして、シグナムは石田先生の提案を受け入れた

「入院？」

突然、入院する事になったと聞かされはやてはひっくりする

「ええ・・そうなんです。」

そうすると、はやてはシュンと俯いてしまった

「あっでも、検査とか念のためとかですから。心配ないですよ。」

シャマルは、何とか誤魔化した

「いや、それはええねんけど・・・私が入院しとったらみんなのご飯は誰が作るんや？」

「うっ」

「そ、それは何とかしますから。」

ご飯の事については何も考えてなかったらしい

「そうですよ。大丈夫ですよ・・・たぶん。」

シャマルが苦笑いしながら言った

「・・・よかったら俺がやろうか？」

話を聞いていたレイリスがそんなことを言ってきた

「えっ？」

「俺もそれなりに料理できるし、困ってるなら手助けしたいし・・」

「いや、でも悪いですよ。それにほら、レイさんにはアリシアちゃんがおるし・・」

はやては、そんな事を頼むのは悪いと思い断ろうとした

「ああ、アリシアは今、知り合いの家に行っててていないんだよ。だから、大丈夫だよ。」

「いや・・でも・・・・」

「いいから、いいから。それに断っちゃうとシグナム達が困るよ。」

レイリスは少し意地悪な言い方をする

「うう・・わかりました。お願いします。」

はやては、渋々ＯＫする

「ありがとうはやて。じゃあそろそろ俺たちは帰ろうか。」

「そうだな、では主私たちはこれで。」

「うん、またな。」

レイリス達は、病院を後にした

病院を後にし八神家までの道を歩きながらレイリス達は、はやての事を話していた

「まったく、はやては我慢しすぎなんだよ。」

「ああ、それに関しては私も思っていた。」

はやてが、痛いのを我慢して無理に笑っていたのをレイリス達は気付いていたが、気付かないふりをしていた

「闇の書の蒐集を急がないとな。」

そうしているうちに、４人は八神家に着いた

「お邪魔します。」

「ん？レイリスどうしたのだ。」

リビングに入るとザフィーラがレイリスに気付き話しかけてきた

「はやての代わりにこの家の家事を引き受けたんだ。よし、それじゃあさっそく・・・」

レイリスは、始めに部屋の掃除からやりだした

「うん、さすがはやて普段からきれいにしてるな。」

レイリスは、掃除機をかけていると部屋は結構きれいだったので驚いた

「レイ君、何かお手伝いしましょうか？」

そうしてると、シャマルが手伝いに来た

「そうだな、じゃあお風呂の準備お願いできる？」

「はい、わかりました。」

シャマルはお風呂の準備のた浴室に行った

「じーーーーーーーーー」

「どうした・・ヴィータ？」

レイリスは、何か視線を感じたと思い視線の感じる方向を見るとヴィータがじっと見ていた

「なんかさ・・・懐かしいような感じがしてさ。」

「懐かしいか・・・・・」

レイリスは、ヴィータの言った事に微笑んだ

「ありがとうな、ヴィータ。」

レイリスは、そう言いヴィータの頭を撫でた

「な、なにすんだよ！」

ヴィータは、急に頭を撫でられ怒るが、手を退けようとはしなかった

「そろそろ、ご飯の準備を始めるか・・」

レイリスは、掃除を終わらせるとキッチンに行き夕食の準備を始めた

「レイ君、私もやります。」

シャマルが、お風呂の準備を終わらせキッチンに来た

「じゃあ、シャマルは野菜を切って。」

「はい。」

そうして、レイリスとシャマルで夕食の準備が始まった。そして、1時間ほどして料理が完成した

「「「いただきます」」」

「はい、召し上がれ。」

ぱく

「どうかな、はやてと比べれば劣るかもしれないけど・・・」

レイリスが、感想を聞こうとすると

「ひっく・・ぐす・・」

「ヴィータ、なぜ泣く!」

突然、泣き出したヴィータにレイリスは焦る

「なんでだよ・・なんで涙が出てくるんだよ・・」

「ヴィータ、大丈夫か?」

「ヴィータちゃん・・・」

「シグナムもシャマルも人のこと言えるかよ・・・・・」

ヴィータの言ったとおり、シグナムもシャマルも涙目になっていてヴィータ同様すぐにでも泣きだしそうだった

「ほら、みんな泣き止んで。」

レイリスは、必死に泣き止ませようとする。その光景は、あの頃とまったく変わらない魔法使いと守護騎士たちの姿だった

第１１話　「八神家の新たな主夫なの？」（後書き）

また、破ってしまった。

レイリスを八神家に行かせないと言っておいて結局こうなるのね。
話が進んで行く
と自然とこうなってしまいました。

なので、これからは不用意にやらないとか言わないようにします。

では、次は第１２話で会いましょう。

第１２話　「闇の真実、悲しい決意と勇気の選択なの」（前書き）

君のそばにいる。そう誓ったが、君と同じくらい大切なものがいる

約束を破った魔法使いは・・・・・

第１２話　「闇の真実、悲しい決意と勇気の選択なの」

クロノの依頼で無限書庫で闇の書について調べていたユーノは、現在わかった事をクロノに報告していた

「〈ここまでで、わかった事を報告するよ。まず、闇の書ってのは本来の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は“夜天の魔導書”。本来の目的は、各地の偉大な魔導士の技術を蒐集して研究するために創られた主と共に旅する魔導書。〉」

ユーノは、見つけた資料を見ながら説明していく

「〈破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだ。その改変のせいで、旅をする機能と破損したデータを修復する機能が暴走してるんだ。〉」

「〈転生と無限再生はそれが原因か！？〉」

クロノが、それを聞いて言う

「〈一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力の資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、今までの主は完成してすぐに・・・〉」

ユーノは、その先を口籠る

「〈ああ・・封印や停止についての資料は？〉」

「〈それは、今調べてる。だけど完成前の停止は、難しい・・・〉」

「〈なぜ?〉」

クロノは、聞き返す

「〈闇の書が、真の主と認識した人間じゃないとシステムへの管理者権限が使用できない。つまり、プログラムの停止や改変ができないんだ。無理に外部から操作しようとすれば、主を吸収して転生しちゃうシステムも入ってる。〉」

闇の書への対策はなかなか難しいそうだった

ーアリシアー

「姉さん。そろそろ学校に行くよ。」

フェイトは、アリシアを呼びに部屋に入った

「あっ!フェイト・・・」

ごしごし

「姉さん?・・・・」

アリシアは、目元を赤くして袖口で涙を拭っていた

「姉さん・・大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。フェイト・・・」

アリシアは、大丈夫と言うがフェイトの目には全然大丈夫には見えなかった

「ほら早く学校に行こう。なのはが待ってるんでしょう？」

アリシアは、無理して笑いながら部屋を出て行った

―なのは―

「えっ！入院。はやてちゃんが？」

なのは達は、学校に着くとすずかがはやてが入院したと聞かされた

「昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないみたいなんだけど、検査とかいろいろあってしばらくかかるって・・・」

すずかは、そう言い下を向く

「そっか・・・それじゃあ、放課後みんなでお見舞いとか行く？」

アリサが、はやてのお見舞いにみんなで行かないかと提案する

「え？いいの。」

「すずかの友達なんでしょう?紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいんじゃない?」

「う~ん・・それはちょっとどうかとおもうけど・・・」

なのはは、苦笑いしながらフェイトを見る

「でも、いいと思うよ。姉さんもそう思うよね?」

「うん、私もいいと思う。」

「ありがとう!」

すずかは、みんなにお礼を言う

ーレイリスー

その頃、レイリスはシャマルと一緒にお弁当を詰めていた

「ふんふんふん♪」

鼻歌を歌いながら手際よく作っていた

「♪?♪?♪?」

すると、シャマルが預かっていたはやての携帯が鳴った

「あっすずかちゃん。」

「え?すずか?」

レイリスは、メールの主がすずかと聞いて驚いた

『“シャマルさんへ”こんにちは、月村すずかです。今日の放課後、友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いに行きたいんですが、行っても大丈夫でしょうか?もし、ご都合が悪いようならこの写真をはやてちゃんに見せてあげてください。』

「すずかちゃん・・いい子ね。」

シャマルは、すずかのやさしさに感謝した。そして、添付されていた写真を見る。

「えっ?・・・・・」

シャマルは、その写真を見ると言葉を失った

「どうした、シャマル?・・・・あっ!」

シャマルが、急に黙ってしまったので、レイリスは携帯を覗いた。すると、そこにはなのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずかが、“早く良くなってね”と書かれた幕を持って写っていた

―シグナム―

「〈なに？テスタロッサ達がどうしたって。〉」

蒐集のため別世界に来ていたシグナムは、緊急事態だとシャマルから連絡が来ていた

「〈だから、テスタロッサちゃんとなのはちゃん。管理局魔導士の2人が、今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから！どうしよう！どうしよう！・・・〉」

シャマルは、どうしていいか分からずパニックになりかけていた

「〈落ち着けシャマル！大丈夫だ。幸い主はやての魔法資質はほとんど闇の書の中だ。詳しく検査されないかぎりバレはしない。〉」

「〈そ、それはそうだけど・・・〉」

「〈つまり、私たちと鉢合わせなければいいだけだ。そうだろレイリス。〉」

シグナムは、レイリスに聞く

「〈ああ、そうだな。・・・悪い俺のミスだ。こういう事があるかもしれないと気を付けておくべきだった。〉」

レイリスは、予想できた事態を回避できなかった事を悔いる

「〈おまえのせいではない。あまり気落ちするな。〉」

シグナムは、レイリスを慰める

「〈う～ん、顔を見られちゃったのは失敗だったわ。出撃したとき、変身魔法でも使っておけばよかった〉」

「〈今更、そう言ってもしかたない。ご友人の見舞い時は私たちは外そう。それから、主はやてそれと石田先生には、我々のことは出さないようお願いを。〉」

「〈はやてちゃん、変に思わないかしら・・・〉」

シャマルは、はやてが不審に思わないか心配だった

「〈しかたあるまい。頼んだぞ。〉」

「〈うん・・〉」

「〈わかった。〉」

ーはやてー

コンコン

「はーい、どうぞ。」

「「「こんにちわ！」」」」

はやての病室に来たのは、なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずかの5人だった

「こんにちわ、いらっしゃい！」

はやては、みんなが来てくれて事でかなりうれしそうだった

「お邪魔します。はやてちゃん大丈夫？」

「うん、平気や。あ、みんな座って座って！」

「うん、ありがとう。」

はやて達が、おしゃべりを始めると病室のドアが少しだけ開いた

「シャマルさん、レイリスさん何やってるんですか？」

そこには、ロングコートとサングラスで変装したシャマルと普通の恰好でいるレイリスがいた

「あの・・その・えっとちょっと気になりまして・・・」

「中に入ればいいじゃないですか？というのは禁句なんですかね？」

「あははは・・・・」

―――――――

はやては、アリシアとフェイトを見比べて面白そうにしていた

「そりゃそうでしょ、双子なんだから。」

「うふふ、でも本当にそっくり。」

「「ううう・・・・」」

アリシアとフェイトは、恥ずかしいのか顔を赤くしていた

「そういえば、アリシアちゃん。今レイさんと一緒にいてへんのやろ。どこにおるん?」

「なんで、はやてが知ってるの?」

アリシアは、話してもしないことをはやてが知っていたので不思議そうな顔をする

「昨日なレイさんが来てん。それで、教えてもろうたんよ。」

「えーーーーー!」

それを聞いてアリシアは、驚いた

「お兄ちゃんここに来たの!」

「うん、そうや。そんでな、今私の家にいるんよ。」

「はやての家になんで?」

はやての家にいると聞いてアリシアは、どうしてと聞いた

「私が、入院してるからご飯作る人がいないんよ。そうしたら、レイさんがやるって言うてくれて。それでお願いしたんや。」

「そうなんだ・・・・」

アリシアは、シュンと俯いてしまった

シャマルが、石田先生と話に行ってしまいレイリスは1人病室の前にいた

「まずいな・・・俺がはやての家にいることがバレたか。どうする・・・・」

レイリスは、居所がバレたことに焦りどうするか悩んだ

「ひとまずは、様子を見るしかないか・・・」

今どうにかできるわけもなく、とりあえず様子見にすることにした

「それに・・・・アリシアごめんな。ずっとそばにいるって約束したのにな。でも、もう少しだけ俺の勝手を許してくれ、おまえと同じくらい守りたい奴らがいるんだ。」

レイリスは、アリシアに謝りその場を後にした

第12話　「闇の真実、悲しい決意と勇気の選択なの」（後書き）

レイリスって、結構約束守れてないように思えるんですけど・・・

それにしても、アリシアかわいそうに・・・バカな主人公のせいで辛い思いを。

「おい、作者。」

えっ！誰だ俺のプライベート空間に侵入した奴は！

「俺だ、レイリスだ。」

何でおまえがここに来れる。ここに、キャラは来れないはずだぞ。

「俺に不可能はない。そんなことより、おまえのせいでアリシアが寂しがってんじゃないか。どうすんだよ。それに、俺の居所もバレるし。」

そこにかんして、謝罪しよう。しかし、もう少しの我慢だ。あと少しでおまえは、アリシアのところに帰れる

「本当か？」

・・・・たぶん。

「消してやろうか。」

やめろ、無駄な争いはしない主義なんだ

「格好つけて言うな！ムカつくな。」

まぁそんなとこで、次回からはすごい事になると思うのでお楽しみに

「過度な期待はしないでください。」

では、次は第１３話で会いましょう

第13話　「クリスマス・イブ、それは嵐の前のひととき」（前書き）

ついに主が知られてしまった騎士たち。

悲願のため敵に牙をむく。

しかし、そこで1人の魔法使いが・・・

第13話　「クリスマス・イブ、それは嵐の前のひととき」

12月22日の夕方、クリスマス・イブまで後2日となっていたが、はやての表情は暗かった。

「はやて・・・大丈夫か？」

はやてのお見舞いにレイリスが来ていた。ヴォルケンリッターの4人は、闇の書の蒐集のため各世界へ飛び回っているため、はやての世話はレイリスとシャマルがしていた。

「うん、大丈夫やよ。」

はやては、無理に笑った。それを見てレイリス自身も元気をなくしていきそうだった。ただでさえ、シグナム、ヴィータがお見舞いに来る回数が少ない。そのため、口では大丈夫というが内心とても寂しい気持ちだった。

「（はやて・・もう少し、もう少しだけ我慢してくれ。そうすれば、すべてが解決する。）」

心の中で、レイリスはそう言い窓の外を見た

―八神家―

「〈ええ・・ここまでは、うまくいってるわ。〉」

「〈ああ。そちらに戻らなっかぶん管理局もこちらを追い切れてないようだ。〉」

シャマルとシグナムは、現在の状況を報告し合っていた。

「〈主はやては、寂しがってしないか？〉」

「〈私には、なにも。でも、お友達はよく来てるみたいなの・・・すずかちゃん達。〉」

「〈そうか。〉」

自分たちが、そばにいられないぶん、すずか達に頼ることしかできない状況にシグナムは、情けない気持ちになる。

「だが、心配させてもいけない。数日中に一度戻る。」

「その方がいいわね。レイ君が、あんなことになっちゃったし・・・・」

この間、すずかがなのはフェイトを一緒に連れてきた日、はやてがレイリスが自分の家にいると言ってしまったことにより、なのは達に居場所がバレたのだ。そのため、レイリスはなるべく八神家にいないようにしていた。

―高町家―

翌日の夜、高町家にはフェイトとアリシアが、夕食に招待されていた。

「はい、どうぞ。」

「「「うわーーー」」」

食卓には、たくさんのご馳走が並んでいた。

「「いただきます。」」

「フェイトちゃんもアリシアちゃんもたくさん食べてね。」

「はい。」

「ありがとうございます。」

フェイトとアリシアは、桃子にお礼を言った。

「フェイトちゃんは、今年のクリスマス・イブはやっぱりご家族と一緒なのかい？」

「はい・・一応は・・」

フェイトは、ちょっと困った顔で答えた

「アリシアちゃんは、レイリスと過ごすのかな？」

士郎は、何気なくアリシアに聞いた。だが、それは失敗だった。それを聞いたアリシアの箸が、止まりみるみるうちに目に涙が浮かん

できた。

「ひっぐ・・うっぐ・・・」

アリシアは、たまらず泣き出してしまった。

「お父さん！」

「士郎さん！」

なのはと桃子は、士郎を責めた

「あ・・いや・そんなつもりは・・」

実は、事前になのはからレイリスのことは、アリシアには禁句と言われていたのだが、士郎はついそれを忘れレイリスの事を話してしまった。

「ひっぐ・・お兄ちゃん・・・・」

「姉さん・・大丈夫だよ。」

フェイトは、アリシアを抱きしめ慰めた。そして、傍らでは士郎がなのはと桃子に激しく怒られていた。

ーすずかー

「『明日の終業式の帰りの件・・・みんな大丈夫ですか?』」

すずかは、なのは達にメールを打っていた

「『はやてにプレゼントを渡しに行くんだよね？』」

「『でも、大丈夫かな？』」

フェイトとアリシアは、高町家からの帰り道でメールを受けていた。

「『そうだね。内緒で行っていいのかな？』」

なのはは、自室でメールを打っていた。

「『まぁ、もし都合が悪ければ石田先生に渡してもらえばいいし。』」

アリサは、問題なしと打つ。

「『じゃあ、そういうことで・・・また明日ね。おやすみ・・・！』送信っと。」

すずかは、明日が楽しみでたまらないようだった。

―海鳴大学病院―

クリスマス・イブ、当日。はやての所には、久しぶりにみんなが集合していた。

「はやて、ごめんね。あんまり会いにこれなくて・・・」

「ううん、元気やったか？」

はやては、ヴィータの頭を撫でた

「うん、めちゃめちゃ元気！」

その様子をそばで見ていたシグナム、シャマル、レイリスは久しぶりのはやての笑顔に安心していた。

「主が、笑ってくれて本当によかった。」

「ええ、本当。」

「ああ、よかった・・・んっ！」

レイリスは、これで一安心と思っていると、病室によく知った魔力が近づいて来ているのを感じ取った。

「どうした、レイリス？」

「シグナム、シャマル・・まずい！」

コンコン

「こんにちは・・・」

「あれ？すずかちゃん！はい、どうぞ！」

「はやて、待って！」

レイリスの叫びは、間に合わず無情にも病室のドアは開かれた。

「「「こんにちわ！」」」

そう言い、すずか達は病室に入ってきた

「ああ、今日はみなさんお揃いですか？」

「どうも、初めまして。」

すずかとアリサが、あいさつをする。だが、そんな和やかな雰囲気にはなれない者が５人いた。なのは、フェイト、そしてシグナム、シャマルだった。そんな中レイリスは、やれやれといった感じで１人落ち着いていた。

「くっ！」

「あっ！？」

まさに一触即発しそうな空気の中、１人の少女によってそれは壊された。

「お兄ちゃーーーん！」

その少女とは、アリシアだった。アリシアは、病室に入った瞬間に

レイリスを見つけ今まで会えなかった寂しさが一気に爆発し、レイリスに向かって飛びついた。

「おっと・・」

レイリスは、飛びついてきたアリシアを受け止め頭を撫でた。

「久しぶり、アリシア。元気にしてたか?」

「うん、元気してたよお兄ちゃん。」

アリシアは、もう離さないといった感じに抱きつく

「ちょっと、アリシア!ここ病院なんだから静かにしなさい!」

アリサは、アリシアに注意するが、そう言うアリサも静かにしてほしいと思ったレイリスだった。

「あはは!アリシアちゃんすごくうれしそうやな。ところで、今日はみんなどないしたん?」

「「うふふ」」

すずかとアリサは、顔を見合わせ、そして

「「せーの」」

2人は、コートで隠していた物を出した。

「「サプライズ、プレゼント!」」

「わぁーーー」

はやては、すごい笑顔になった。

「今日は、イブだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント。」

「わぁー、ほんまか？」

はやてが、すずかとアリサにプレゼントを貰っていると、なのはとフェイトはまだ混乱していて2人でどうしたらいいかと困っていた。そして、なのはがふと見るとヴィータが、なのはとフェイトを物凄く睨んでいた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん・・・どないしたん？」

「う、ううん・・なんでも・・」

「ちょっと、ご挨拶を・・ですよね？」

フェイトはシグナムに振った

「はい・・・」

「ああ・・みんなコート預かるわ。」

「「はーい。」」

そして、なのは達はシャマルの後についた

「念話は使えない。通信妨害を？」

「シャマルは、バックアップのエキスパートだ。このくらい造作もない。」

フェイトとシグナムが話す。そのそばで、ヴィータがなのはを睨み続けていた。

「えーと・・あの・・そんなに睨まないで・・・・」

「睨んでねぇです。こういう眼つきなんです。」

なのはの言う事に耳を貸そうしないヴィータだった。

「ヴィータ嘘はアカン！悪い子はこうやで。」

はやては、ヴィータの鼻を摘み上下させた。

「お見舞いしてもいいですか？」

「ああ・・」

それから、しばらくしてなのは達は、病室を後にし帰って行った

―レイリス―

そして、それからとあるビルの屋上になのはとフェイト、そしてシ

グナム達がいた。

「はやてちゃんが、闇の書の主。そうなのレイお兄ちゃん？」

「ああ、そうだよ。」

レイリスは、誤魔化すことなく答える

「悲願はあと少しで達成される。」

「邪魔をするならはやてちゃんのお友達でも・・・・」

シグナムとシャマルは、強気に言う

「待って！ちょっと待って！話を聞いてください！ダメなんです！闇の書が完成したらはやてちゃんは・・・！」

なのはが、闇の書が完成するとはやての命があぶないと言おうとする。しかし

「はぁぁぁ！」

「あっ！」

ヴィータが、グラーフアイゼンでなのはにいきなり襲いかかってきた。なのはは、防御しようと右手を前に出す。しかし、衝撃は来なかった

「えっ！？」

なのはは、前を見るとレイリスに襟もとを掴まれたヴィータがいた。

「レイリス！なんで邪魔すんだよ！」

「ヴィータ、少し落ち着け。」

レイリスは、ヴィータをなんとか宥める。そして、なのは達の方を見た。

「なのは・・闇の書が完成したら持ち主がどうなるのか俺が知らないわけがないだろう。」

「えっ！それじゃあ・・」

「ああ、シグナム達はそれを承知で闇の書を完成させようと・・」

レイリスが、なのはに自分の計画を話そうとした。しかし、それはすぐできなくなった。

グサッ！

「かはっ！」

レイリスの話の途中、突然レイリスの心臓になにかが突き刺さった。

「レイリス！」

「レイお兄ちゃん！」

バタン！

レイリスは、立っていられず倒れてしまった。そして、だんだん意識が薄れていくなか自分を攻撃した人物を目にした。それはあの仮面の男だった。

第１３話　「クリスマス・イブ、それは嵐の前のひととき」（後書き）

いや～、やられちゃったねレイリス。

「なんで俺が心臓刺されなきゃならないんだ！」

なんていうか・・・日頃の行い？

「ふざけんな！俺はみんなのためにがんばってんだろうが！」

いいじゃん、約束どおりアリシアに合わせてやったんだから。どうだった久しぶりに甘えられた感想は？

「そりゃ～、かわいかったけど・・・」

・・・・ロリコン

「なんだとてめぇ！」

まぁそんなことで、次回からレイリスの出番が減るといったところで

「なっ！ちょっと待て！」

次は、第１４話で会いましょう。バイバイ！

第１４話　「覚醒、繰り返される悲劇」（前書き）

ついに覚醒する闇。

少女たちは、闇に立ち向かう。

第１４話　「覚醒、繰り返される悲劇」

「余計な事をするからそんなことになるんだ。」

レイリスの心臓を一突きにした仮面の男は、嘲笑うように言った。

「貴様！」

シグナムは、仮面の男に向かってレヴァンティンを振り下ろした。

だが、仮面の男は簡単にシグナムの攻撃を躱す。

「貴様！よくもレイリスを・・・」

シグナムは、仮面の男を睨み付ける。そして、その体からはとてつもない殺気が溢れていた。

「なにをそんなに憤慨している？そんな男いない方が、世界のためだというのに・・」

「それ以上しゃべるなーーーーーーー！」

すると、今度はヴィータが突撃して行った。

―――――――

「レイリス・・・・・グスっ・・・」

なのはとフェイトは、レイリスの手を取りながら泣いていた。心臓を貫かれた人間が生きているわけがない。しかし、レイリスは不老不死、そのためまだ生きていた。レイリスは、なのはとフェイトの泣き声が聞こえてきて意識が朦朧としながらも目を開けた。

「な・・の・は・・・・フェイ・・・ト・・・」

レイリスは、辛うじて聞こえるくらいの声を出した。

「お兄ちゃん！」

「レイリス！」

なのはとフェイトは、レイリスが目を覚ました事で声を上げた。

「なの・は・・フェイト・・・あい・つを・・・仮面の・・男を止め・・てくれ。」

「で、でも！」

「レイリスを置いていくなんてできないよ！」

レイリスを1人にして置けないと言ってなのはとフェイトは、動こうとしない。すると、レイリスが

「大・・丈夫・だ。時間・・が経て・・・ば、傷・・は塞・がる。」

レイリスは、最後の力を振り絞り叫ぶ。

「行け！なのは、フェイト！」

なのはとフェイトはお互い向き合い頷きあう。

「行ってきます。レイお兄ちゃん！」

「行ってきます。レイリス！」

そう言い、2人はシグナム達の下へ飛び立った。

「少しの・・間任せ・・・た・・ぞ・・・・」

レイリスは、再び眠りについた。

「はぁはぁはぁはぁはぁ・・・・」

「はぁはぁはぁ・・くそっ！・・・」

シグナムとヴィータは、仮面の男にずっと攻撃を避けられてばかりいた。レイリスが、やられた事によって頭に血が上り2人は実力の半分も出せていなかった。

「どうしたその程度か守護騎士というのは？」

期待外れと言わんばかりの言動にシグナムとヴィータは、さらに怒りが増す。

「さて・・では、そろそろ・・・ん?」

仮面の男が、次の段階に進もうかと思った時、仮面の男の背後から

「《ディバインバスター》」

ピンク色の魔力砲が、仮面の男を包み込んだ。

「ヴィータちゃん!」

「シグナム!」

なのはとフェイトが、2人に近寄る。

「何しに来やがった!おまえら・・・」

ヴィータは、未だなのは達は睨み付けていた。

「レイお兄ちゃんに言われたの。」

「レイリスに?」

シグナムとヴィータは、顔を見合わせ首を傾げた。

「あの仮面の人を止めてって。だから・・・」

「一緒にあの人を止めよう！」

なのはとフェイトは、シグナムとヴィータにそう言う。だが、シグナムとヴィータは戸惑っていた。いくらレイリスの言った事とはいえ簡単に協力はできない。シグナムとヴィータが、迷っていた時

キィィィィィィン

「「「「あっ！」」」」

突然、なのはとフェイト、そして守護騎士の3人にバインドがかけられた。

「バインド！また・・・」

なのはが、周囲を見渡す。すると、ディバインバスターを撃った方向と真逆の所に仮面の男が2人いた。

「2人！」

誰もが予想できなかった事が起きる。仮面の男は、2人いたのだ。

「すまん・・油断した。」

「そんなことは今はいい。それより、この人数だとバインドも通信妨害も長くは持たない。早く頼む。」

「ああ。」

そう言うと仮面の男の手に闇の書が現れた。

「そんな、いつのまに！」

シャマルは、自分が持っていた闇の書がいつの間にかなくなっていたことに驚いた。

キィィィィィン

仮面の男が、闇の書を発動させる。すると、守護騎士たちが急に苦しみだした。

「ぐあああ！・・」

「くっ！・・・」

「あああああ！」

すると、守護騎士たちのリンカーコアが体の外に出てきた。そして、闇の書はそれを蒐集し始めた。

「最後のページは、不要となった守護者自ら差し出す。これまでも、幾たびかそうだったはずだ。」

「ぐっあああああ！」

「あああああああ！」

リンカーコアを蒐集され始めシグナムとシャマルの体が透け始めた。
そして、完全に蒐集されシグナムとシャマルは消えた。

「シグナム！シャマル！・・・くそ！何なんだよてめぇら！」

ヴィータの悲痛の叫びが響く。

キィィィィン

「ぐっ・・あああああ！」

「プログラム風情が知る必要はない。」

ヴィータの叫びも空しく散り、ヴィータの体も消え始めた。

「いややややや！」

突如、上空からザフィーラが突っ込んできた。しかし、ザフィーラの一撃も仮面の男には、届かなかった。

「そうか・・・もう一匹いたな？」

キィィィィン

「ぐわわわわわわ！・・・」

ザフィーラのリンカーコアも蒐集され始めた。しかし

「うわわわわわわわわ！」

ザフィーラは最後の一撃とばかりに仮面の男に向かって拳を放った。

「あっ！」

その頃、はやては自分の病室で目を覚ました。

「なに、この感じ・・・・・」

はやては、なにか言葉では言い表せない嫌な予感がした。

「あの2人は・・・なのはとフェイトの2人は大丈夫か?」

「4重のバインドにクリスタルゲージだ。抜け出すまで数分はかかる。」

仮面の男の2人は、次の段階の準備を始める。男たちのそばには、まだ消えていないヴィータが空中に磔のようになっていてその下にザフィーラが倒れていた。

「闇の書の主の・・・・目覚めの時だ。」

仮面の男の1人が、なのはに姿を変えた。

「いや・・・因縁の終焉の時だ。」

そして、もう一人はフェイトの姿になる。

キィィィィィィィン

そして、仮面の男たちは転移魔法を発動させる。そこから、現れたのは八神はやて、闇の書の主だった。

「えっ!ここは?・・・・なのはちゃん・・フェイトちゃん?」

いきなり、知らない所に移動させられたはやては、わけが分からず周囲を見渡す。すると目の前になのはとフェイトが空中に浮いていた。

「何なんこれ?」

はやては、聞いた

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気。」

「もうね・・・治らないんだ。」

「ええ?」

なのはとフェイトが、何を言っているのかはやてにはわけがわからない。

「闇の書が完成しても、助からない。」

「君が救われる事はないんだ。」

「え・・うう・・」

はやては、なのはとフェイトの言葉にショックを受け俯いてしまった。

「そんなん・・・ええねん・・・ヴィータを離して・・・ザフィーラに何したん?」

はやては、自分の事よりもヴィータとザフィーラの事を心配していた。

「この子たちね?もう壊れちゃってるの。私たちがこうする前から。」

「とっくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えると思ってる。無駄な努力を続けてた。」

「無駄ってなんや！シグナムはシャマルは？」

守護騎士の残りの２人の居所をはやては聞く。すると、フェイトが不敵に笑いながら言う。

「ふふっ、それなら君の後ろに・・・」

そう言われたはやては後ろを振り向く。

「あ・ああ・・・」

そこには、シグナムとシャマルが着ていた服があった。

「それに、ほらあっちには・・・」

なのはが、別の方向を指さす。

「えっ？」

はやては、なのはが指さす方を見るとそこには

「えっ！レイさん・・・」

胸から血を流し、まったく動かないレイリスが倒れていた。

「レイさん！レイさん！」

「無駄だよ。あれは、もう動かない。」

なのはとフェイトは、そう言うとヴィータに手を伸ばす。

「壊れた機械は役に立たないよね。」

「だから、壊しちゃお。」

「いやー、やめてーーー！」

はやての悲痛な叫びが響く。

「やめてほしかったら。」

「力ずくでどうぞ。」

「何で・・なんでやねん。なんでこんなん？」

はやては、足を引きずりながら必死に止めようと動く。

「ねぇ、はやてちゃん・・・」

「運命って残酷なんだよ。」

「やめてーーーーーー」

キィィィィン

「あ・・かはっ！・・・」

最後の２人が、完全に蒐集され闇の書が完成した。そして、はやて

の前に闇に書が現れる。

「＜　Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ　Ｍｅｉｓｔｅｒ.　＞」

パリーーーン

本物のなのはとフェイトは、やっとバインドを解いて脱出した。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

「ううう・・ううう・・うわあああああああああああああああああああああ！！」

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

はやてが、上空に向かって叫ぶと黒い光の柱が上がった。

「我は、闇の書の主なり。この手に力を。封印解放。」

「＜　Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ.　＞」

はやてが、闇の書の封印を解放した。解放した闇に書は、はやてを包み込みだ。すると、はやての姿がどんどん変わり、銀髪の少女の

姿に変わった。

「また、すべてが終わってしまう。一体いくつこんな悲しみを繰り返せばいいんだ？」

「はやてちゃん！」

「はやて・・・・」

銀髪の少女は、泣いていた。その涙は、これから起きる事に対しての贖罪なのか。

「我は、闇の書。我が力のすべては・・・」

「＜　Ｄｉａｂｏｌｉｃ　ｅｍｉｓｓｉｏｎ．　＞」

銀髪の少女は、巨大な黒い魔力球の魔法を放った。

第１４話　「覚醒、繰り返される悲劇」（後書き）

ついに、ついに・・リィンフォースがでたーーーーーーーー！

長かった・・本当に長かった。でも、やっとここまで来た。

「さっきからうるせぇーな！」

なんだよ、人が喜んでる時に横から入って来るなよ。

「そんなことより、今回俺の出番ないじゃん！」

何言ってんだよ。ちょっとでたじゃん。

「俺主人公だよ。普通は、毎回出番が多いはずだぞ。」

最近はそうでもないぞ。主人公だけじゃなく主要キャラは平等にが俺の考えだ。

「おまえの考えなんて知らねぇよ！」

まぁ、どうでもいいけど。さて、次回からレイリスがついにその実力を披露します

これまで、実力の半分も出していないレイリス。もしかして、闇を一瞬で消してしまうのか？

「え？なにそのムチャぶり！」

次回、第15話でまた会いましょう。それでは。

第１５話　「悲しい再開と氷結の杖」（前書き）

久しぶりの再開は、悲しくも敵同士。

彼女たちを救うため、魔法使いは動き出す。

第15話　「悲しい再開と氷結の杖」

「ねぇ、レイリス。」

「ん？どうした。」

レイリスを呼んだ少女は、少し悲しげな表情をしていた。

「もう、行っちゃうんだよね？ここからいなくなっちゃうんだよね？」

少女は、レイリスの目を見て言った

「ああ、別れは辛いがしょうがないんだ。」

「うん、わかってる。だから、わたしはこの子たちを創ったんだから・・・」

少女の手には、表紙に十字架がある魔導書があった。

「あなたが、寂しくないように、いつまでも一緒にいてくれる家族をって・・・ひっぐ・・」

少女は、耐えきれなくなって涙を流す。レイリスは、その少女の肩を抱いた。

「ありがとう。」

「レイリス・・約束して。私が創ったこの子たちを何があっても絶

対に守るって。」

「うん。約束する絶対にこの子たちは守ってみせる。」

レイリスは、少女に永遠の約束を誓う。

―――――――

いただろう。

「忘れたのか・・俺はこの程度じゃ死なないって事を。」

「＜　わかっていても、マスターのこんな姿は見たくありません＞」

「ごめん、インフィ。」

レイリスは、インフィニットを優しく撫でた。

「それにして、久しぶりだな。あいつに会うのも。」

レイリスの視線の先には、涙を流している銀髪の少女がいた。

「早く・・止めないと・・ヤバ！」

レイリスが、立ち上がろうとしていると、銀髪の少女は広域攻撃魔法を放とうとしていた。

「インフィ！転移！」

「＜　はい、マスター！　＞」

「《デアボリック・エミッション》」

ーなのはー

「《デアボリック・エミッション》」

黒い魔力球は、上空で一端収縮した

「あっ！」

「空間攻撃！」

「闇に、染まれ。」

そして、一気に拡大しなのはとフェイトを包み込んだ。

―――――――

すると、仮面の男の周りに光の粒子のようなものが現れた。そして、それは光の鎖になり仮面の男たちを拘束した。

「ストラグルバインド。相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する。あまり使いどころない魔法だけど、こういう時には役に立つ。」

仮面の男たちに、バインドをかけたのはクロノだった。

「もちろん、変身魔法も強制的に解除するからね。」

クロノが、そう言うと仮面の男たちの体が光りだした。そして、光が収まると仮面の男たちは、猫耳の少女へと姿が変わった。

「クロノ！・・・この！・・・」

「こんな魔法、教えてなかった。」

仮面の男たちの正体は、グレアムの双子の使い魔、リーゼ・ロッテとリーゼ・アリアだった。

「1人でも精進しろと言ったのは、君たちだろ・・アリア、ロッテ？」

クロノの目は悲しみに染まっていた。

「隠れたか？」

銀髪の少女の広域攻撃魔法、デアボリック・エミッションを間一髪の所で躱したなのはとフェイトだった

「なのは、ごめん。大丈夫？」

「うん、大丈夫。」

なのはのプロテクションで防いだものの、なのはに大きな負担がかかっていった。

「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな？バルディッシュ！」

「＜Ｙｅｓ，ｓｉｒ．Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｆｏｒｍ．＞」

フェイトは、バリアージャケットをソニックフォームからライトニングフォームへ変えた。

「なのは！フェイト！」

「ユーノ君、アルフさん！」

すると、ユーノとアルフが合流した。

「主よ、あなたの望みを叶えます。」

銀髪の少女は、涙を拭い、自分の胸に手を置いた。そして、自らの主の望みを叶えるため動く。

キィィィィィィン

「愛おしき守護者を・・・そして、愛おしき人を傷つけた者たちを・・・今、破壊します。」

「＜　Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ.　＞」

銀髪の少女は、魔力封鎖の結界を張った。

「スレイピニール、羽ばたいて。」

「＜　Ｓｌｅｉｐｎｉｒ.　＞」

そして、少女は背中の2対の翼を羽ばたかせ空に舞い上がる。

ー クロノ ー

「リーゼ達の行動は、あなたの指示ですね・・グレアム提督?」

クロノは、アリアとロッテを捕まえた後、本局のグレアムの所に来ていた。

「違うクロノ！」

「私たちの独断だ。父様は関係ない！」

アリアとロッテは、あくまでも自分たちが勝手にやった事だと言い張る。

「ロッテ、アリアいいんだよ。」

だが、グレアムがそれを遮る。

「クロノは、もう粗方のことを掴んでいる。違うかい？」

「11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね？そして、発見した。闇の書の在り処と現在の主八神はやてを。」

クロノは、淡々と自分が調べたことを話していく。

「しかし、完成前の闇の書と主を押さえてもあまり意味はない。主を捕えようと、闇の書を破壊しようとすぐに転生してしまうから。だから、監視をしながら闇の書の完成を待った。」

そして、クロノは一呼吸を置いて

「見つけたんですね？闇の書の永久封印の方法を。」

「・・・両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが、運命だと思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人が少なくなる。」

グレアムが、そう言うとクロノはグレアム宛の手紙とはやてとヴォルケンリッターが写っている写真をだした。

「あの子の父親の友人を語って生活の援助をしていたのも提督ですね？」

「永遠の眠りにつく前くらいせめて幸せにしてやりたかった。・・・・・偽善だな。」

グレアムは、自分でした事を後悔しているような感じだった。

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて次元の狭間か氷結世界に閉じ込める、そんなところですね？」

「そう、それならば闇の書の転生機能は働かない。」

「これまでの闇の書の主だってアルカンシェルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わんない。」

「クロノ、今からでも遅くない。私たちを解放して、凍結がかけられるのは暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ。」

ロッテとアリアが、自分たちを解放し封印をさせろと言う。

「その時点ではまだ闇の書の主は、永久凍結をされる犯罪者じゃな

い。・・・違法だ。」

「そのせいで！そんな決まりのせいで、悲劇が繰り返されてるんだ。クライド君だって、あんたの父さんだって・・」

「ロッテ。」

ロッテの言葉をグレアムが遮る。

「法以外にも提督のプランには問題があります。まず、凍結の解除はそう難しくないはずです。どこに隠そうと、どんなに守ろうとつかか誰かが見つけて使おうとする。怒りや悲しみ・・欲望や絶望・・その願いが導いてしまいます。封じられた力へと・・・」

クロノは、立ち上がりグレアムに一礼する。

「現場が心配なんですみません一端失礼します。」

「クロノ。」

クロノが、行こうとするとグレアムが引き留めた。

「アリア、デュランダルを彼に。」

「父様！」

「私たちにもうチャンスはないよ。持っていたって役に立たん。」

グレアムに言われアリアはカード型のデバイスを渡す。

「どう使うかは、君に任せる。氷結の杖“デュランダル”だ。」

第１５話　「悲しい再開と氷結の杖」（後書き）

はい、現在夏休み中のＴｈｅａｔｅｒです。
休みと言うことで更新速度が速くなるかなと思ったんですが、そうでもなかったです。

「ゲームに心を奪われるからだろ。」

そう言うなって。こっちもこれでがんばってんだから。

「そんなことより、また俺出番ないじゃん！」

そう慌てるな。次回はちゃんとおまえの出番があるから。

「それに、冒頭のあれはなんだ？」

おまえの過去だけど・・・・なにか？

「ネタばれしすぎだよ！」

まあいいじゃん。だいたいみんな気付いてたと思うよ。ヴォルケンリッターとおまえが知り合いの時点で。

「そうか？」

さて、そんなところで次は第１６話で会いましょう。

「バイバイ！」

第１６話　「運命、それは変えられないものなのか」（前書き）

闇を鎮めようとする魔法使い。

だが、その願いは届かず。

第16話　「運命、それは変えられないものなのか」

キィンキィンキィン

「はぁぁぁぁ！」

キィンキィン

クロノが、グレアムからデュランダルを託されていた頃、なのは、フェイト、ユーノ、アルフの4人は銀髪の少女と交戦中だった。

「はっ！」

「ふっ！」

ユーノとアルフがバインドで銀髪の少女の動きを止める。

「砕け」

「＜Ｂｒｅａｋｅｒ．＞」

しかし、銀髪の少女はバインドをものともせず破壊する。

「＜Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ．＞」

「ファイア！」

「＜Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ．＞」

「シュート！」

フェイトとなのはが、すかさず銀髪の少女を囲みプラズマスマッシャーとディバインバスターを撃つ。

「楯。」

「＜　Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ．　＞」

だが、銀髪の少女はそれでも怯まず障壁を展開してプラズマスマッシャーとディバインバスターを防ぐ。

「刃以て、血に染めよ。」

銀髪の少女は、プラズマスマッシャーとディバインバスターを受けながら、詠唱を行った。

「穿て《ブラッディ　ダガー》」

銀髪の少女の周りに無数の紅い刃が現れ、それを一斉になのはとフェイトに向かって放った。

ドォーーーーーーーーン

「くっ！」

「あっ」

なのはとフェイトは、何とか防ぎ大きなダメージにはならなかった。
しかし、銀髪の少女の攻撃は止まらず次の詠唱に入っていた。

「咎人達に滅びの光を。」

キィィィィィン

銀髪の少女が、詠唱を始めると右手にピンク色の魔力が収束してきた。

「あれは・・・」

「まさか・・」

ユーノとアルフが、ある魔法を思い浮かべる。

「星よ集え、全てを打ち抜く光となれ。」

「スターライト・・・ブレイカー?」

なのはは、己の最大の魔法の名前を呟いた。

「ユーノ、アルフ!」

「うん」

「はいよ」

アルフが、ユーノをフェイトがなのはを支え全速力でその場から離れる。

「なのはの魔法を使うなんて！」

「なのはは、一度蒐集されてる。その時にコピーされたんだ！」

ユーノが、説明する。

「フェイトちゃん・・・こんなに離れなくても・・」

「至近距離で喰らったら防御の上からでも堕とされる。回避距離をとらなきゃ！」

なのはは、自身の魔法の事をわかってなかった。

「＜Sir，there are noncombatants on the left at three hundred yards.＞」

バルディッシュが一般市民がいると言ってきた。

「やっぱり、誰もいないよ。急に人がいなくなっちゃった。」

「うん・・・」

バルディッシュが言っていた一般市民とは、アリサとすずかだった。

「あたりは暗くなるし・・・なんか光ってるし・・・一体何が起こってるの？」

「う～ん？」

アリサとすずかは、いきなり周りから人がいなくなり、どうしていいかわからかった。

「とりあえず逃げよう。なるべく遠くへ！」

「う、うん。」

アリサは、すずかの手を引いてその場を離れた。

「なのは、この辺。」

「うん。」

なのはとフェイトは、結界の中に取り残された一般市民を保護するため探していた。

「あっ！」

なのはが、周りを見て探していると2人の人影が見えた。

「あの、すみません！あぶないですからそこでじっとしていてください！」

なのはが、その人影に声をかける。すると、人影はなのはの方を向いた。

「なのは？」

「フェイトちゃん？」

結界内に取り残された一般市民が、アリサとすずかだった事になのはとフェイトは驚きのあまり固まった。

「《スターライトブレイカー》」

銀髪の少女は、準備が完了しスターライトブレイカーをなのは達に向けて放った。

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

「〈フェイトちゃん、アリサちゃん達を！〉」

「2人ともそこでじっとして！」

「＜　Ｄｅｆｅｎｓｅｒ　ｐｌｕｓ.　＞」

フェイトは、アリサとすずかにドーム型の障壁を張った。

「レイジングハート！」

「＜　Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.　＞」

なのはは、カートリッジを2発ロードしプロテクションを張った。

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

ものすごい勢いで、スターライトブレイカーが迫ってくる。なのはとフェイトは、自分たちはともかくアリサとすずかだけは守りきらなければいけないと思っていた。すると、そこで思いがけない事が起こった。

「えっ！？」

いきなりなのは達とスターライトブレイカーの直線上に人影が現れたのだ。

「ダメーー！逃げてーーーーー！」

なのはが、人影に向かって叫んだ。しかし、人影は動かずこう言っ

た。

「大丈夫だよ、なのは。」

人影は、なのはの名前を言うと、迫ってくるスターライトブレイカーを

「はっ！」

右手一本で、上空へと払い除けた。

―レイリス―

「ふう・・・」

スターライトブレイカーを右手一本で払い除けたレイリスは、一安心し一息ついた。そして、後ろを振り返るとなのは達が目を見開いて驚いていた。

「〈エイミィ、アリサとすずかを転送してくれ。〉」

「〈レ、レイリスさん！は、はいすぐに！〉」

レイリスは、エイミィにアリサとすずかの転送を頼むと2人のそばに行った。

「ごめんな、アリサ、すずか。怖い思いをさせたな。」

レイリスは、アリサとすずかの頭を撫でた。

「／／／

「ううん、いいの。」

「レイリスが、無事ならそれで。」

なのはとフェイトは、レイリスが無事で安心した。

「さてと、じゃあ俺は行くから。」

「え？」

「あいつの所に行ってくる。」

レイリスは、銀髪の少女を指さした。

「ダメだよ！１人で行くなんて！」

「そうだよ！」

なのはとフェイトは、レイリスを止めるが聞こうとしなかった。

「たぶん、あいつを止められるのは俺しかいないんだ。それじゃあ！」

「あっ！」

そう言うとレイリスは行ってしまった。

「久しぶりだな・・・・夜天。」

レイリスは、銀髪の少女を夜天と言った。

「守護騎士は、覚えてなかったけどおまえは覚えてるはずだ。俺の事を・・・」

「・・・・・・はい、覚えています。マスター・・・・」

夜天は、レイリスの事をマスターと呼んだ。

「今、お前の主は俺じゃないだろ夜天。・・・・はやてを返してしれないか?」

「できません。我が主は、自分の愛する者たちを奪った世界を悪い夢であってほしいと願いました。私は、ただそれを叶えるのみ。主には、穏やかな夢の内で永久の眠りに・・・そして、愛する騎士たちを奪った者には永久の闇を・・・」

キィィィィィン

「夜天・・・・」

ゴゴゴ

急に地響きが鳴り、なのはとフェイトがいる所の地面が割れそこから触手が出てきた。

「きゃ！」

「あっ！」

なのはとフェイトは、触手に捕まった。

「私は、主の願いを叶えるだけ。」

「願いを叶えるだけか・・・そんな願いを叶えてはやてが喜ぶのか？何も考えずに、心を閉ざして、主の願いを叶えるだけの道具のように・・・おまえはそんな事のために生まれたんじゃない。」

「私は、魔導書。ただの道具だ。」

夜天は、そう言うがその目からは涙が流れてきた。

「おまえはいつもそうだったな。強情で自分の意志を曲げようとしない。なのに、泣き虫で寂しがり屋で・・・」

「この涙は、主のだ。私は、道具だ。悲しみなどない。」

「俺を・・・夜天の魔導書を託されし者をなめるなよ。」

レイリスは、夜天をまっすぐに見つめた。

ゴゴゴ

「＜　Ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ．　＞」

「いう事を・・・」

「＜　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．　＞」

「聞けーーー！」

フェイトが、夜天に突っ込んでいく。

「待て、フェイト・・・」

だが、レイリスがそれを遮った。

「レイリス！なんで！」

「言っただろ。あいつを止められるのは、俺だけだって。フェイトは、離れてろ。」

「・・・わかった。」

フェイトは、渋々ながら離れた。

「マスター・・・」

「なんだ？」

「あなたも私の内で眠ってください。」

キィィィィィィィン

「なっ！」

夜天が、そう言うとレイリスの体が光だし粒子となって消えた。

「＜　Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ.　＞」

「すべては安らかな眠りの淵へ・・・」

第１６話　「運命、それは変えられないものなのか」（後書き）

レイリス、おまえカッコいいな！

「いきなりなんだよ？」

だってさ、急に主人公らしくなってさ

「それは、おまえが国語を苦手としているから俺が苦労するんだよ。」

うう～、レイリスがいじめる～

「いじめてねぇよ！人聞きが悪いな。」

まぁ、話がいよいよ佳境を迎えてきている所だし、今回は頑張って連続投稿するか

「大丈夫か！そんなこと言って！」

大丈夫！今日はノッてるし。そう言うことで次回、第１７話でまた会いましょう。

第17話　「愛しき者との再会」（前書き）

魔法使いは、かつて愛した者と出会う。

しかし、それは夢でしかない。

第17話　「愛しき者との再会」

レイリスが、夜天に吸収され消えた後、なのはとフェイトは呆然としていた。

「〈エイミィさん！〉」

「〈状況確認中。レイリスさんのバイタルまだ健在。闇の書の内部空間に閉じ込められてるだけ。助ける方法、現在検討中。〉」

エイミィがレイリスを救出する方法を探す。

「我が主も、そして・・・マスターも覚めることのない眠りの内に終わりなき夢を見る。生と死の狭間の夢、それは永遠だ。」

「永遠なんてないよ。みんな変わってく。変わって行かなきゃいけないんだ！」

「私が、変わったようにあなたも！」

―レイリス―

「う・・ううう・・ここは？」

レイリスが、目を覚ました所は周りが広い草原で、木陰の下で寝ていたようだ。

「どうしたのレイ？」

「うん？」

レイリスが顔を上げるとそこには、１人の少女がレイリスの顔を覗き込んでいた。

「私の膝枕、寝づらかった？」

「そんなことないよ。心地いいよミリア。」

ミリアとレイリスに呼ばれた少女は、うれしいそうに笑った。

「レイーーー！ほら、早く早く！」

「待てって！」

レイリスとミリアは、草原を追いかけっこしていた。

「はい！捕まえた！」

「きゃ！捕まえられちゃった！」

２人は、そんな事をしながらいちゃついていた。

「ふふっレ～イ～」

ミリアは、レイリスの腕を取り甘えてきた。

「どうした？急に・・」

「なんでもな～い。」

―はやて―

「眠い・・眠い・・う、うう・・ん？」

闇の書に取り込まれたはやては、闇の書のなかで目を覚ました。そして、目の前には銀髪の少女が立っていた。

「そのままお休みを、我が主。あなたの望みはすべて私が叶えます。目を閉じて心安らかに夢を見てください。」

―なのは―

「ん！」

キィィィィィン

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーン

「あっ！」

「＜　Ｓｃｈｗａｒｚｅ　Ｗｉｒｋｕｎｇ.　＞」

ドォーーーーーーーーーーーーーーン

「きゃあああああああ！」

「なのは！」

なのはが、夜天に吹っ飛ばされた

「なのは、大丈夫？」

フェイトがなのはの下に来る。

「うん、大丈夫！＜リンディさん、エイミィさん、戦闘位置を海の付近に移しました。市街地の火災をお願いします。＞」

「＜大丈夫。今、災害関係の職員が向かっているわ。＞」

「〈それと、闇の書は駄々っ子だけど何とか話は通じるみたいです。もう少しやってみます。〉」

フェイトがリンディにそう言う。

「いくよ、バルディッシュ！」

「＜Ｙｅｓ，ｓｉｒ．＞」

「レイジングハート！」

「＜Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．＞」

そして、なのははカートリッジをリロードした。

「マガジン残り3本、カートリッジ18発。スターライトブレイカー撃てるチャンスあるかな？」

「＜Ｉ ｈａｖｅ ａ ｍｅｔｈｏｄ．＞」

「えっ？」

「＜Ｃａｌｌ ｍｅ Ｅｘｅｌｉｏｎ ｍｏｄｅ．＞」

レイジングハートは、エイミィから使うなと言われたエクセリオンモードを使えと言ってきた。

「だめだよ。あれは本体を補強するまで使っちゃだめだって。私がコントロールに失敗したらレイジングハート壊れちゃうんだよ！」

「＜Sir，call me Zanber form.＞」

「バルディッシュまで・・・」

今度は、バルディッシュもザンバーフォームを使えと言ってきた。

「＜Call me. Call me my master.＞」

「＜Call me sir.＞」

レイジングハートとバルディッシュは、譲らず使えと言う。

―はやて―

「私は・・・何を望んでたんやっけ？・・・・・」

「夢を見る事、悲しい現実はすべて夢になる。安らかな眠りを。」

「そうなんか？・・・私の本当の望みは・・・」

―なのは―

「おまえ達も、もう眠れ。」

「いつかは眠るよ。」

「だけどそれは今じゃない！今は、レイリスとはやてを助ける。」

「そして、あなたも。」

なのはとフェイトは、決意を固めそして

「レイジングハート、エクセリオンモード！ドライブ！」

「バルディッシュ、ザンバーフォーム！ドライブ！」

「＜＜　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．　＞＞」

―レイリス―

レイリスとミリアは、また木の下で休んでいた。すると急に雲行きが怪しくなってきた。

「あ！レイ、雨が降りそうだよ。帰りましょ。」

ミリアはレイリスに家に帰るように言うが

「レイ？」

「ごめん、俺はまだここにいるよ。」

「じゃあ、私もいる！」

ミリアは、そう言いレイリスの隣に座る。

「なぁ、ミリア・・・」

「なぁに？」

「俺はおまえとの約束守れなかった・・・」

レイリスは、悲しい顔をして言った。

「あの子たちを何があっても絶対に守るって言ったのに・・・」

レイリスは、肩を震わせその目には涙が浮かんでいた。

「レイ・・・」

ミリアは、優しくレイリスを抱きしめる。

「そんなことないよ。レイはちゃんとあの子たちを守ってくれてるよ。私は知ってる、レイは約束は必ず守る人だって。」

「ありがとう、ミリア・・・」

レイリスは、そんなミリアの優しさに感謝した。

ーはやてー

「私が、欲しかった幸せ・・・」

「健康な体、愛する者たちとずっと続いて行く暮らし。眠ってください。そうすれば夢の中であなたはずとそんな世界にいられます。」

夜天が、はやてにそう言うがはやては、首を横に振る。

「せやけど、それはただの夢や！」

ーなのはー

キィンキィンキィン

「はっ！」

ドォーーーーーーン

「わぁぁぁぁぁ！」

フェイトが、夜天の一撃を受ける。

「そんな一つ覚えの砲撃、撃たせると思うか？」

なのはにスターライトブレイカーを撃たせるためフェイトは、何とか隙を作ろうとしていたが夜天の障壁が固すぎてどうにもできずにいた。

「撃たせてみせる、信じてくれる仲間がいるから！」

キィィィィィィィン

「疾風迅雷！《スプライトザンバー》」

ドォーーーーーーーーーーーーーーン

「ぐっ！」

パリーーーーーーーン

フェイトの攻撃で夜天の障壁が壊れた。

「なのは！」

「うん！レイジングハート！」

「＜　Ａ．Ｃ．Ｓ．　Ｓｔａｎｄｂｙ．　＞」

キィィィィィィン

「アクセルチャージャー、起動・・・ストライクフレーム！」

「＜　Ｏｐｅｎ．　＞」

「エクセリオンバスターＡ．Ｃ．Ｓ．ドライブ！」

なのはは、夜天に向けて渾身の一撃を放つ。

「ブレイクシュート！」

ドォーーーーーーーーーーーーーーーン

なのはの砲撃に夜天は飲み込まれた。

「はぁはぁはぁ・・・これでダメなら・・・」

「＜　Ｍａｓｔｅｒ．　＞」

レイジングハートが叫ぶとなのはは、上を見た。そこにはほぼ無傷

の夜天がいた。

「もう少しがんばらないとだね。」

「＜　Ｙｅｓ．　＞」

―はやて―

「私、こんなん望んでない。あなたも同じはずや。ちがうか？」

はやてが夜天に聞く。

「私の心は、騎士たちの感情と深くリンクしています。だから、騎士たちと同じように私もあなたを愛おしく感じます。だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない。自分ではどうにもならない力の暴走、あなたを侵食することも暴走してあなたを喰らいつくしてしまうことも止められない。」

「覚醒の時に今までのこと少しはわかったよ。望むように生きられへん悲しさ。私にも少しはわかる。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い寂しい思いしてきた。」

はやての言葉に夜天が俯くが

「せやけど、忘れたらアカン。」

はやては、車椅子から少しだけ立ち夜天の頬に触れた

「あなたのマスターは今は私や。マスターのいう事はちゃんと聞かなアカン。」

―レイリス―

「ミリア、そろそろ行かないと・・・」

「うん、そうだね。はい、これ。」

ミリアは、ポケットからインフィニットを出しレイリスに渡す。

「ミリアが持ってたのか？」

「うん、レイの大事なものだからちゃんと大切に預かってたよ。」

ミリアは、偉いといった風にレイリスに言った。

「・・・さよならは言わないよ、レイ・・・」

「ああ、おまえはいつでも俺の心の中にいてくれるからな。」

「うん、もっとレイと一緒にいたかったな・・・」

ミリアはそう言い光となって消えた。

「・・・・・いくぞ、インフィ！」

「＜　はい、マスター　＞」

「インフィニット、セットアップ！」

「＜　スタンバイレディ　＞」

キィィィィィン

「久しぶりだな、セットアップするのも・・・」

レイリスは、久しぶりのセットアップを懐かしんでいた。

「さてと、インフィ、ブラスターモード。」

「＜　ブラスターモード　＞」

キィィィィィン

「待ってろ、今行く。」

レイリスはそう言うと、夢から覚めるために砲撃を放つ。

「《バーストフレア》」

第17話　「愛しき者との再会」（後書き）

新キャラが出たーーーーーーーーー

「うるさい！しかも、新キャラって言っても前から回想で出てきてただろ。」

そうだけどさ、名前が出たんだから新キャラでいいじゃん

「いい加減な・・・・」

それと、今日はもう疲れたからこの辺で終わりね

「まだ、始まったばかりだろ！」

それでは次回、第18話で会いましょう

第１８話　「聖夜の贈り物、祝福のエール、リィンフォース」（前書き）

名前の無い少女は、贈り物を貰う。

それは、とても大切なものを。

第１８話　「聖夜の贈り物、祝福のエール、リィンフォース」

「名前をあげる。闇の書とか呪いの魔導書なんて言わせへん。私が呼ばせへん。」

はやての言葉に夜天は涙を流す。

「私は管理者や。私にはそれができる。」

「無理です・・・自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導士が戦っていますが、それでも・・・」

「止まって・・・」

キィィィィン

「〈外の方。えっと・・・管理局の方。そこにいる子の保護者、八神はやてです。〉」

はやては、外にいる防御プラグラムの動きを一時的に止め、外にいる人に呼び掛ける。

「はやてちゃん！」

「〈なのはちゃん？ほんまに？〉」

「〈うん、なのはだよ。いろいろあって闇の書さんと戦ってるの。

フェイトちゃんも一緒に。〉」

「〈はやて、私もいるよ。〉」

フェイトもはやてに呼び掛ける。

「〈ごめん、なのはちゃん、フェイトちゃん・・・なんとかその子止めてあげてくれる。魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が奔ってると管理者権限が使えへん。今そっちに出てんのは、自動防御のプログラムだけやから。〉」

―レイリス―

「かっこつけたはいいけど・・・出れねーーー！」

レイリスが、砲撃魔法で幻想空間から出ようとしたが、思いのほか強力で出られなかった。

「泣きそう・・・」

「＜　マスター、泣かないでください　＞」

インフィニットが、レイリスを慰める。

「だってさ・・・ん？この声は・・・はやてになのは・・・それにフェイト？」

突然、レイリスのいる所にはやてたちの声が聞こえてきた。そして、先ほどはやてが話している内容を聞いてレイリスはある考えが浮かんだ。

「これなら、いけるかもな。」

―なのは―

「〈なのは！フェイト！聞こえるか？〉」

「えっ？この声って・・・」

「レイリス・・・」

なのはとフェイトは、はやて以外の声が聞こえてきて驚いた。

「〈なのは！フェイト！聞こえないか？〉」

レイリスは、もう一度呼びかける。

「〈聞こえるよ！レイお兄ちゃん！〉」

「〈レイリス！大丈夫！〉」

「〈よかった、聞こえてるか。うん、俺は大丈夫だ。それでだ、なのは、フェイト2人にやって貰いたいことがある。〉」

レイリスは、なのはとフェイトにそう言う。

「〈やって貰いたいこと？〉」

「〈何？レイリス？〉」

「〈簡単に言うぞ。今から2人にやって貰うことがうまくいけば、はやてと俺が外に出られるかもしれない。それで、その方法だけど、目の前にいる奴に魔力ダメージを与えるんだ。それも全力全開、手加減なしでな。〉」

レイリスが、そう言うとなのはとフェイトが顔を見合わせ笑った。

「さすが、レイお兄ちゃん！」

「わかりやすい！」

キィィィィィィン

「エクセリオンバスター、バレル展開！中距離砲撃モード！」

「＜ Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ．Ｂａｒｒｅｌ Ｓｈｏｔ． ＞」

ドォーーーン

なのはのバレルシュートで防衛プログラムの動きを止めた。

―はやて―

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リィンフォース。」

―レイリス―

「よし！じゃあこっちもやりますか！インフィ、ブラスターモードリリース。」

「＜　はい、ブラスターモードリリース　＞」

レイリスは、インフィニットをブラスターモードからノーマルモードの杖に戻した。

「砲撃効かなかったし、となると・・・結界破壊系しかないか・・・よし！」

レイリスは、気合を入れた。

「インフィ！結界破壊プログラム“エンシス”起動！」

「＜　了解。“エンシス”起動　＞」

キィィィィィィン

――なのは――

「エクセリオンバスター、フォースバースト！」

「プラズマスマッシャー、最大出力！」

なのはとフェイトが、高出力砲撃を放つ。

「ブレイクシュート！」

「《プラズマスマッシャー・オーバーレイ》」

――

――

「解け（テオタナシア）よ偽りの世界」

ビシッビシ・・パリーーーーーン

内と外からの同時攻撃によりはやてが防御プログラムを切り離すことに成功した。だが、防御プログラムが消えたわけじゃない。本当の戦いはここからだった。

第１８話　「聖夜の贈り物、祝福のエール、リィンフォース」（後書き）

今回は、短いな・・・・

「短いだけじゃないだろ。なんだ！あの終わり方は！」

本当に！ごめんなさい！自分でも情けないです・・・・

「まぁ、新人だし仕方ないだような。」

申し訳ない・・・次からはこんなことはないように努力します

「作者が謝ったところで次回、第１９話で会おうぜ。」

バイバイ

第１９話　「夜天の復活」（前書き）

夜天の主は、真の覚醒を果たす。

そして、仲間と共に闇を払う。

第１９話　「夜天の復活」

「やっと出られた・・・」

夜天の中からやっと出られたレイリスは、大きく背伸びをした。

「レイお兄ちゃん！」

「レイリス！」

なのはとフェイトは、レイリスを見つけると全速力で抱きついてきた。

「おいおい、いきなり抱きつくな。」

「だって、無事でよかったんだもん。」

「うん、心配したんだよ・・・」

レイリスは、なのはとフェイトの頭を優しく撫でた。

「ごめん、心配かけて。それに、まだ安心している場合じゃないよ。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

レイリスがそう言うと地鳴りが響いた。レイリス達は海の方を見ると、海の上に黒い不気味なものが浮いていた。

「あれは？」

「防衛プログラムだよ。今度は、あれを相手にしないといけない。」

レイリスは、深く溜息をつく

―はやて―

「管理者権限発動。」

「防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。数分程度ですが、暴走の遅延もできます。」

「うん。」

すると、はやての周りに４つの光の玉が現れた。

「リンカーコア召喚、守護騎士システム破損修復。」

キィィィィィン

はやてが、守護騎士のリンカーコアを修復すると、ヴォルケンリッ

ターが復活した。

「リィンフォース、私の杖と甲冑を。」

「はい。」

はやては、騎士甲冑を装備し真の夜天の主が誕生した。

「夜天の光よ我に集え！祝福の風リィンフォース・・・セットアップ！」

はやては、さらにリィンフォースをセットアップした。そして、目の色が青くなり、髪も白っぽくなった。

「夜天・・・いや、リィンフォースとユニゾンしたか・・・これで、役者はそろった。」

「はやて・・・」

「すみません・・・」

「あの・・・はやてちゃん、私たち・・・」

シグナム達は、はやてに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「ええよ、みんなわかってる。リィンフォースが教えてくれた。せやけど細かいことは後や。今は、お帰りみんな。」

「う、うわーーん！はやて！はやて！」

ヴィータが、涙を流しながらはやてに抱きついた。

「よかったな、おまえら。」

そこに、レイリス達も来た。

「なのはちゃんもフェイトちゃんもごめんな。うちの子たちがいろいろ迷惑かけてもうて。」

「ううん。」

「平気。」

なのはとフェイトは、気にしていない様子だった。そして、はやてはレイリスを見て言った。

「それから、レイさんもいろいろありがとうな。この子らを助けてくれて。」

はやては、レイリスにお礼を言った。

「俺は、何もしてないよ。」

「水を差してすまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する。」

クロノがみんなのところに来て説明をする。

「あそこの黒い淀み闇の書の防衛プログラムだ。あと数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在2つある。」

クロノは、プランの説明に入る。

「1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる。これ以外に何か方法がないか？闇の書の主とその守護騎士たちに聞きたい。」

クロノは、2つのプランの他に良い方法がないかみんなに聞いた。

「えっと～、最初のはたぶん難しいと思います・・・主の無い防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから・・・」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん。」

「アルカンシェルも絶対ダメ！こんなとこでアルカンシェル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃないか！」

クロノが言ったプランは、どちらも却下された。

「アルカンシェルってそんなにすごいの？」

なのはが、レイリスに聞いてきた。

「発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲・・・と言ってもわかんないよな。要するにここで撃ったら海鳴市全体が消滅するってこと。」

「えーー、クロノ君、私もそれ反対！」

「同じく絶対反対！」

なのはとフェイトも反対のようだった。

「僕も艦長も使いたくない・・・でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより大きくなる。」

「〈はーい！みんな暴走臨界点まであと１５分切ったよ！決断は、早めにね！〉」

エイミィからタイムリミットまで時間がないと通信が来た。

「何かないか？」

クロノは、シグナム達に聞く。

「すまない、あまり役に立てそうにない・・・」

「暴走に立ち会った経験は、我らにはほとんどないのだ。」

「でも、なんとか止めないと・・・はやてちゃんのお家がなくなっちゃうのは嫌ですし・・・」

「いや、そういうレベルの話じゃないんだが・・・」

良い方法が思いつかずみんなは困った。

「そうだ！レイお兄ちゃんの力でどうにかできない？」

なのはがレイリスに聞いた。

「俺の力って“リライト”のことか？」

「そうか！それがあったか！」

クロノが、思い出したように声を上げた。

創造（リライト）の理

ＰＴ事件、解決後に事件の首謀者プレシア・テスタロッサの愛娘にしてフェイト・テスタロッサの元となった人物、アリシア・テスタロッサを生き返らせたレイリスの希少能力（レアスキル）。

有を無に、無を有にといった事象を操る力だ。

「残念だけど、それは無理だ。」

レイリスは、リライトは使えないと言ってきた。

「え！どうしてですか？」

「俺の勝手なんだが、リライトはできればあまり使いたくはないんだ・・・ごめん・・・」

レイリスは、申し訳なさそうに謝った。

「でも、今はそんなこと言ってる場合じゃ！・・・」

「クロノ君！レイお兄ちゃんを責めないで！」

なのはが、クロノを止めた。

「しかし！・・・わかった・・・」

クロノは渋々引き下がった。

「ごめんね、レイお兄ちゃん・・・私があんなこと言わなければ・・・」

「気にするな。俺が我がまま言ってるのが悪い。」

レイリスは、こんな時に自分の身勝手さに内心イラついていた。

「他に役に立ちそうな力はあるけど、アルカンシェルと同じでここでは使えないし・・・あっ！」

レイリスは、自身の力で役立つものがないか考えていた。そして、ふと空を見上げた時にある方法を思いついた。

「どうしたの？レイリス？」

「良い方法を思いついた。」

「本当！」

「何ですかそれは！」

レイリスが、方法を思いつくとみんなが寄ってきた。

「みんな、耳貸してあのな・・・ごにょごにょごにょ」

「「「「えーーーーーーーーーーーーーーーー」」」」

第１９話　「夜天の復活」（後書き）

レイリスの我がまま・・・

「いきなり、なんだよ！」

だって、リライト使えば一発じゃん。なのに使いたくないとか・・・

「使ったら使ったで、おもしろないだろ。」

まぁ、そうだけどね。使いたくない理由はいずれどこかで話すかもしれないから

「んじゃ、今回はこのへんで」

次回、第２０話で会いましょう。

第２０話　「夜の終わり、旅の終わり、そして、別れの時」（前書き）

みんなの気持ちを一つに今、闇が消える。

第２０話　「夜の終わり、旅の終わり、そして、別れの時」

「なんとまぁ、相変わらずものすごいと言うか・・・」

「計算上では、実現可能っていうのがまた怖いですね。さすが、最高管理者ってところですね・・・」

アースラのリンディとエイミィは、レイリスの考えた作戦に驚かされていた。

「クロノ君、こっちのスタンバイＯＫ！暴走臨界点まで１０分！」

―――――――

「バリアを抜いたら本体に向けて私たちの一斉砲撃でコアを露出。」

「そうしたら、ユーノ君たちの強制転移魔法でアースラの前へ転送！」

「あとは、アルカンシェルで蒸発っと・・・」

レイリスたちは、作戦内容の確認をする。

―クロノ―

「提督見えますか？」

「ああ、よく見えるよ。」

クロノは、グレアムと通信していた。

「闇の書は、呪われた魔導書でした。その呪いは、いくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきました。あれのおかげで僕の母さんも・・・」

クロノは、グレアムに言う。

「他の多くの被害者遺族もこんなはずじゃない人生を進まなきゃいけなくなった。それは、きっとあなたもリーゼたちも、なくしてしまった過去は変えることはできない。」

「＜　Ｓｔａｒｔ　ｕｐ.　＞」

クロノは、デュランダルを起動させた。

「だから、今を戦って未来を変えます！」

―――――――

なのはとフェイトの周りに優しい風が舞った。そして、みるみるうちに傷が治っていった。

「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です。」

「すごいです！」

「ありがとうございます、シャマルさん！」

なのはとフェイトはシャマルにお礼を言った。

「あっ！レイ君も治しますね。」

シャマルはレイリスの方を見て言った。

「いや、俺はいい。大体治ってる。」

レイリスの傷は、そのほとんどが塞がっていた。すると

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「始まった・・・」

ついに防衛プログラムの暴走が始まった。

「夜天の魔導書・・・呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・闇の書の闇。」

防衛プログラムを覆っていた黒い淀みが消え、中から異形のものが出てきた。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「喰らえ、鋼の軛！」

ユーノ、アルフ、ザフィーラでプログラムの触手を薙ぎ払う。

「ちゃんと会わせろよ！高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータがついになのはの名前をちゃんと言った。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

「＜　Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ．　＞」

「轟天爆砕！《ギガントシュラーク》」

ドォーーーーーーーーーーン

ヴィータの最大威力のギガントシュラークが防衛プログラムのバリアを貫く

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン、行きます！」

キィィィィン

「＜Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．＞」

ガシャン、ガシャン、ガシャン、ガシャン

「エクセリオンバスター！ブレイクシュート！」

ドォーーーーーーーーーン

また一枚バリアが壊れる。

「次、シグナムとテスタロッサちゃん！」

シャマルが、第2陣に合図を送る。

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン！連結刃に続くもう一つの姿。」

シグナムは、レヴァンティンの柄に鞘をつけた。

「＜　Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ．　＞」

レヴァンティンは、弓の形になった。

「翔けよ、隼！」

「＜　Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ．　＞」

ドォーーーーーーーーーーーーーーン

シグナムが、また一つバリアを破壊した。

「フェイト・テスタロッサとバルディッシュザンバー！行きます！」

キィィィィィン

「撃ち抜け、雷神！」

「＜　Ｊｅｔ　Ｚａｍｄｅｒ．　＞」

フェイトが最後の一枚を破壊する。

「はやてちゃん！」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて。撃ち貫け。石化の槍、《ミストルティン》！」

はやての魔法で、防衛プログラムが石化していった。

「うわー！なんだあれ。」

「なんだかすごい事に・・・」

はやてのミストルティンで石化した防衛プログラムだったが、即座に再生した。

「〈やっぱり並の攻撃じゃ通じない！ダメージを入れたそばから再生されちゃう！〉」

「〈だが、攻撃は通ってる。プランの変更はなしだ！〉」

クロノはエイミィに言った。

「いくぞ、デュランダル！」

「＜　ＯＫ，Ｂｏｓｓ．　＞」

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ。」

クロノの詠唱と共に海が凍りついた。

「凍てつけ！」

「＜　Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ．　＞」

クロノは、防衛プログラムも凍りつかせるが、すぐに再生し元通りになってしまった。

「いくよ！フェイトちゃん、はやてちゃん！」

なのはは、２人に呼びかける。

「「うん。」」

フェイトとはやては、頷いた。

「＜　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．　＞」

「全力全開！スターライト！」

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

なのはとフェイトが最後の一撃に入る。

「ごめんな・・・おやすみな・・・」

はやては、防衛プログラムに謝り、そして別れを言った。

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

「「「ブレイカー！！！」」」

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

3人のブレイカーのより、防衛プログラムの外殻は完全に消し飛んだ。

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

「「転送！」」

転移魔法により、防衛プログラムのコアがアースラの下に転送される。

―――――――

「アルカンシェル、バレル展開！」

エイミィがアルカンシェルの発射用意をする。

「これで、終わるのね。」

リンディが、闇の書を終わらせるために引き金を引く。

「アルカンシェル発射！」

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

アルカンシェルが、周囲の空間を捻じ曲げ、防衛プログラムの姿が消えた。

「〈効果空間内の物体完全消滅。再生反応・・・ありません！〉」

エイミィが、防衛プログラムの完全消滅を確認した。

「〈準警戒態勢を維持、もうしばらく反応区域を観測します。〉」

「〈了解！・・・はぁ～・・〉」

エイミィは、ほっと一息をついた。

「〈と言うわけで、現場の皆さんお疲れ様でした！〉」

なのは達は、それを聞きみんなが喜び声をあげた。ただ、1人を除

いては・・・

「・・・・」

「レイお兄ちゃん？どうしたの？」

みんなが笑顔で喜んでいる時に1人難しい顔をしていたレイリスを見てなのはが不思議に思いどうしたのかと話しかける。

「ああ、きっとあれじゃないか？1人だけ何もしてないから、拗ねてるんだよ。」

アルフが、からかうようにニヤニヤしながら言ってきた。事実、レイリスはさっきまでの戦いで何もしていなかった。

「レイリス・・・拗ねないで・・・誰も気にしてないから・・・」

フェイトが、レイリスを慰めに来た。

「・・・・・」

しかし、レイリスは誰の声も聞こえていないように、ただ空を見続けていた。

「レイお兄ちゃん・・・」

「・・・来た・・」

「えっ？」

ウーンウーンウーン

「な、何！・・・・これは！」

エイミィが、急な警報に何事かと思い調べた。すると・・・

「〈み、みんな大変！防衛プログラムがまだ生きてる！〉」

「「「えーーーーーーーー！」」」

アルカンシェルで完全消滅したと思っていた防衛プログラムは、まだ生きていた。

「どうしよう！」

「宇宙にいるんやったら、うちらどうにもできん・・・」

「くそ！どうしたら！」

みんなが、慌てている中レイリスただ1人が落ち着いていた。

「落ち着け、おまえら・・・」

「レイリスさん！なんでそんなに落ち着いているんですか！早くな

んとかしないと！」

クロノが、一大事に妙に落ち着いているレイリスを見て声を上げる。

「こんな事もあろうかと準備をしていたからだ。」

「えっ！？」

「〈エイミィ！防衛プログラムは、どのくらいの大きさになってる？〉」

レイリスは、エイミィに確認する。

「〈は、はい！えーと？・・・まだ、完全には再生していません。大きさもそれほど大きくありません。〉」

「〈了解！〉」

「レイリスさん！一体何をするんですか？」

「戦いの前にも言ったよな。他にも使える力はあるけどここじゃ使えないって。だから、それを今使う。」

レイリスは、クロノにそう言うと右手を空に向けて伸ばした。

「この世すべてを喰らう者、封印を破りその姿を見せよ。」

レイリスが、詠唱を開始した。

「な、何？あれは・・・・」

リンディは、目を見開いて驚いた。リンディが、見たものとは防衛プログラムの近くに鎖で頑丈に封印されている巨大な門だった。

「開け、封印の門。出て来い、暴食の王（グラトニー）」

門を封印していた鎖が切れ、扉が開いた。

グォォォォォォォォォォォ！

門の中から何かが出てきた。

「あ・・あああ・・・・あああ・・・」

リンディは、それを見た瞬間に体中が震え出した。まるで、見てはいけない物を見たように言葉も出ない。しかも、なぜかそれから目が離せなかった。見なくないはずなのに体が動かない。

ギロッ

グラトニーと呼ばれたそれは、アースラの方を見た。

「違う・・・そっちじゃない。餌は目の前のだ。」

グゥウウウウウウ・・・・

それは、アースラから防衛プログラムへと向いた。

「喰らえ、グラトニー。」

グォオオオオオオオ！！

それは、あっと言う間に防衛プログラムを喰らい尽くしていった。荒れ狂う獣のように目の前の餌を喰らう。そして、防衛プログラムを喰らい尽くした所でレイリスが再封印を行った。

「封印の門。再び、悪しき者を捕えよ。」

門の中から無数の鎖が出てきた。そして、鎖はそれに絡み付いて再び門の中へと引きずり込んでいった。

グォオオオオオオオオオオ！！

最後に怒りの籠った雄叫びを残し、門の扉は閉じられた。

「これで、本当に終了。ふう～。」

レイリスは、息を吐きみんなに言った。

「終わったんですか？レイリスさん・・・」

「ああ、終わった。もう再生不可能だ。」

「終わったんやね・・・今度こそ・・ほんまによかっ・・・た・・・」

「はやて！」

レイリスの言葉を聞き安心したはやては、ゆっくりと倒れた。

第２０話　「夜の終わり、旅の終わり、そして、別れの時」（後書き）

・・・・・・

「どうした？黙り込んで？」

いや～、最後の部分がね。やりすぎたかなって・・・

「そりゃ、そうだ。なんだあれは？」

防御プログラムがアルカンシェルで消滅しないって事であれを出したんだけど。終
始ほとんどそれって言う扱いにしちゃったし。

「説明はないのか？」

それに関しては、次回の話でおまえが話す予定にしている。姿に関しては、皆さん
が自由に想像してください。カッコいいのだったり、不気味だったりと自由に。

「人任せかよ。」

俺自身もイメージが固まってないんだよ。できれば、皆さんに募集したいくらいだ
よ。

「だったら募集しよ。えっと、グラトニーのイメージ画を描いてもいいよって言う読者の皆さん。できればでいいのでお願いします。

待ってまーす！」

こら！なにを勝手に募集してんだよ！皆さんに迷惑だろ！

「そういうことで次回、第２１話で会おうぜ！」

話を聞けーーーー！

第２１話　「夜天を救う者」（前書き）

夜天は、自ら破壊を望む。

だが、魔法使いがそれを阻止する。

第２１話　「夜天を救う者」

「やはり、破損が致命的な部分にまで至っている。」

はやてが倒れた後、守護騎士たちが大慌てをし大変だった。それをレイリスが、鎮めて一同はアースラにはやてを運んだ。

「防衛プログラムが停止したが歪められた基礎構造はそのままだ。私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防衛プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう。」

「やはりか・・・」

「修復はできないの？」

シャマルが、リィンフォースに聞いてみる。

「無理だ。管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿が消されてしまっている。」

「元の姿が分からなければ戻しようがないというわけか？」

「そういうことだ。」

改変された時に夜天の書の本来の姿が消されてしまい元通りにはできなくなっていた。

「主はやては大丈夫なのか？」

シグナムは、はやての心配をした。

「何も問題はない。私からの侵食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している。不自由の足も時をおけば動くようになるだろう。」

はやての呪いは完全に消えて歩けるようにもなるとのことだった。

「そう・・・それならまぁ・・良しとしましょうか・・・」

「ああ、心残りはないな。」

「防衛プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば暴走することも二度とない。代わりに私たちも消滅するけど・・・」

防衛プログラムを新たに生まないためには、夜天の書を破壊しないといけない。けれど、破壊していますと守護騎士プログラムも一緒に破壊するため、シグナム達も消えてしまう。

「すまんな、ヴィータ。」

「なんで謝んだよ?いいよ別に・・・こうなることくらいみんな知ってたじゃんか・・・」

「いいや、違う。」

ヴィータが、悲しい顔をしてそう言うと、リィンフォースが否定した。

「おまえたちは残る。逝くのは・・・私だけだ。」

「夜天の書の破壊？」

「どうして？防御プログラムは破壊したはずじゃ？」

シグナムたちとは、別になのはたちも夜天の書の破壊の話をしていた。

「闇の書・・夜天の書の管制プログラムからの進言だ。」

「管制プログラムってなのはたちが戦ってた？」

アルフが、クロノに聞いた。

「ああ。」

「防衛プログラムは、無事破壊できたけど・・・夜天の書本体は、すぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度も、はやてちゃんが侵食される確率が高い・・・夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ。」

「だから、夜天の書は防御プログラムが消えているうちに自らを破壊するように願い出た。」

それを聞いたなのはたちは、心を痛めていた。

「そ、そんな！」

「じゃあ、シグナム達は・・・」

「いや、私たちは残る。」

そこに、シグナム達がやってきた。

「シグナム。」

「防衛プログラムと共に我々守護騎士プログラムも本体から解放したらしい。」

「それで、リィンフォースからなのはちゃんたちにお願いがあるって・・・」

「お願い？」

―レイリス―

「なんのようだ？夜天？」

1人外を眺めていたレイリスの下にリィンフォースがやってきた。

「お別れを言いに来ました。マスター・・・」

「俺は、もうおまえのマスターじゃない。マスターは、はやてだろ・・・」

レイリスは、リィンフォースの方を見ようとしないで話す。

「確かに今のマスターは、八神はやてです。でも、あなたは私たちの家族です。」

「んっ！」

「やっと、お会いできたのにお別れになってしまってすみません。」

レイリスは、何も言わない。

「守護騎士たちは、大丈夫です。彼女たちは解放しておきましたので逝くのは私1人です。できれば、あなたの手で逝きたいです。それでは・・・」

リィンフォースは、それだけ言った後部屋から出て行った。

「はぁ～、ミリア・・・使う時なんだよな？」

次の日、リィンフォースは夜天の書の破壊のため海鳴市に来ていた。

「ああ、来てくれたか。」

そこに、なのはとフェイトが来た。

「リィンフォース・・・さん。」

「そう呼んでくれるのだな。」

「うん。」

「あなたを空へ還すの私たちでいいの？」

フェイトがリィンフォースに聞く。

「本当は、やって貰いたい人がいるが、でもおまえたちだから頼みたい。おまえたちのおかげで、私は主はやての言葉を聞くことができた。主はやてを食い殺さずにすみ・・・騎士たちも生かすことができた。感謝している。だから、最後はおまえたちに私を閉じてほしい。」

「はやてちゃんとお別れしないでいいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ。」

それは、リィンフォースの優しさなのかもしれない。だけど

「でも、なんだか悲しいよ！」

「おまえたちもいずれわかる。海よりも深く愛し、その幸福を守りたいと思う者と出会えればな。」

リィンフォースが、そう言い微笑む。すると、守護騎士の４人が来た。

「そろそろ始めようか。夜天の書の終焉だ。」

―はやて―

その頃、はやては自宅の部屋のベットで目を覚ました。

「んっ・・・リィンフォース・・・」

「起きたかはやて？」

「レイさん？」

はやてが、目を覚ますとそばにはレイリスがいた。

「行くぞ、はやて。」

「えっ？行くってどこへ？」

はやては、わけがわからないままレイリスに連れていかれた。

―――――――

リィンフォースは、守護騎士となのはとフェイトに見守られながら、逝こうとしていた。

「＜　Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｓｅｔ．　＞」

「＜　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　＞」

「ああ・・・短い間だったが、おまえたちにも世話になった。」

リィンフォースは、レイジングハートとバルディッシュに礼を言った。

「＜　Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ．＞」

「＜　Ｔａｋｅ　ａ　ｇｏｏｄ　ｊｏｕｒｎｅｙ．　＞」

「ありがとう。」

とその時

「リィンフォース！みんな！」

突然の声にみんなが声のした方を向く。そこには、レイリスに抱っこされながらリィンフォースを呼ぶはやてがいた。

「はやてちゃん」

「はやて！」

「動くな！」

ヴィータが、はやての所に行こうとするとリィンフォースがそれを止めた。

「動かないで。儀式が止まる。」

「アカン、やめて！リィンフォースやめて！」

レイリスに抱っこされたままリィンフォースの近くまで来た。

「破壊なんかせんでええ、私がちゃんと抑える！大丈夫や！こんなんせんでええ！」

はやては、リィンフォースを真っ直ぐ見つめる。

「主はやて・・・よいのですよ。」

「いいことない！いいことなんかなんもあらへん！」

「随分と永い時を生きてきましたが・・・最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心をいただきました。騎士たちもあなたのそばにいます。何も心配はありません。」

「心配とかそんな・・・」

「だから、私は笑って逝けます。」

そう言いリィンフォースは微笑む。

「笑って逝けるか・・・おもしろい冗談だな夜天。」

はやてを抱っこしていたレイリスがリィンフォースに言う。

「冗談ではありません。私は・・」

「俺は、ここにいる誰よりもおまえの事を知っている。一番長い付き合いだおまえの気持ちがわからないわけがないだろう。」

「マスター・・・」

「インフィ!儀式解除だ。」

「＜　はい、マスター　＞」

キィィィィィィィィン

「何をマスター!」

レイリスは、インフィニットに命じ儀式の解除をした。

「シグナム、はやてを頼む。」

「ああ、わかった。」

レイリスは、はやてをシグナムに渡す。

「さてと・・」

「マスター！」

レイリスは、リィンフォースから夜天の書を取り上げた。

「夜天、いや、リィンフォース！おまえは生きたいか？」

レイリスは、リィンフォースに問いかけた。

「私は・・・私は・・・」

「生きたいか！リィンフォース！」

「生きたいです・・ひっく・・・生きたいです・・マスター・・・うっぐ・・・」

リィンフォースは、大粒の涙を流した。

「大丈夫だ、リィンフォース。俺がおまえを助けてやる。」

「マスター・・ひっく・・・マスター・・・うっぐ・・・」

レイリスは、リィンフォースを優しく抱きしめた。

第２１話　「夜天を救う者」（後書き）

はい！リィンフォース生存確定でーす。パチパチパチ

「何を１人で盛り上がってる。」

だって、リィンフォース生存だよ、テンション上がるだろ！

「まぁ、おまえの好きなキャラの１人だからな。気持ちはわかるが・・・」

この作品を始める前にリィンフォースは残すように考えていたからな。やっとここまで来たよ。

「次回でいよいよ最終話だな。」

そうだな。Ａ′ｓ編も長かったような短かったようなそんな感じだ。

「最終話は明日か？」

だな、今日のうちにある程度は書いておくけど投稿は明日になるな。

「じゃあ、ひとまずこの辺で。」

次回、最終話で会いましょう。

最終話　「明日へとスタンバイ・レディ」（前書き）

1人の魔法使いが闇を受け入れる。

そして、少女たちは未来へと羽ばたく。

最終話　「明日へとスタンバイ・レディ」

「そう？うん、わかった。報告ありがとう。今日は家でゆっくり休みなさい。私も明日には帰るから。」

「フェイトちゃんから？」

そう言うのは、リンディの同僚であり同じ時空管理局提督のレティ・ロウランだ。

「うん。魔導書の破壊は中止しなったみたいよ。」

「中止！どういうこと！」

レティが、驚き顔で聞いてきた。

「レイさんよ。また、あの人が無茶したみたい。」

「あの人は・・・いつまでたっても変わらないんだから・・・」

―――――――

「あっ！なのはちゃん、フェイトちゃん、おはよう！」

「あれ？」

「どうしたの？もう退院？」

なのはとフェイトがはやてを見ると私服姿だった。

「残念。もうしばらくは入院患者さんなんよ。」

「そうなんだ。」

「でも、もうすっかり元気やし、すずかちゃんたちのお見舞いはお断りしたよ。クリスマス会直行や！」

はやては、微笑みながら言った。

「昨日は、いろいろあったけど最初から最後までほんまありがとう。」

「ううん。」

「気にしないで。」

とその時

「はやて、入るぞ。」

「あっ！レイお兄ちゃん！」

レイリスがやってきた。

「おっ！おまえたちも来てたのか。」

「なのは！フェイト！」

「姉さん！」

「アリシアちゃん！」

レイリスの後ろからアリシアが出てきてなのはとフェイトに抱きついてきた。

「姉さん・・・苦しいよ・・・」

「えへへ！」

アリシアは、満面の笑みだった。

「アリシアちゃん！来てくれたん。」

「うん！はやてにもぎゅぅぅぅ！」

「わぁぁ！」

アリシアは、今度ははやてに抱きついた。

「アリシア！ほどほどにしとけよ。ていうかリィンフォース！早く入ってこいよ。」

「えっ？リィンフォースさんいるの？」

「うん、なんか恥ずかしがって入ってこないんだ。」

なのはとフェイトは、レイリスの言葉に？を頭に浮かべていた。

「ほら、入ってこいって！」

「待ってください！まだ、心の準備が！」

レイリスは、リィンフォースの手を引いて無理やり部屋に入れた。

「「「わぁー」」」

リィンフォースが部屋に入った瞬間、その場にいた全員が驚いた。

「リィンフォース綺麗や・・・」

「うんうん！すごく綺麗！」

リィンフォースは、あの恰好ではなくとてもおしゃれをしていた。

（リィンフォースの恰好は皆さんが似合うと思う服を自由に想像してください。ｂｙ作者）

「どうしたんリィンフォース、その服。」

「えっと・・・その・・・あの・・」

リィンフォースは、恥ずかしいのかなかなか話そうとしない。

「昨日あの後、リィンフォースとデートをしてさ。似合いそうな服を選んであげたんだ。」

レイリスは、何気なくそう言った。

「「「デ、デート！」」」

なのは、フェイト、はやてはデートという言葉に反応した。

「ほんまなんか！リィンフォース！」

「／／／／／／／／こく」

リィンフォースは、物凄く顔を赤くして頷いた。

「ずるいの！レイお兄ちゃん、なのはもデートしたい！」

「レイリス！私も！」

「ウチもや！」

なのは、フェイト、はやては、レイリスにデートしてほしいと言ってきた。

「なんだ！おまえらいきなり！」

レイリスは、３人のすごい剣幕に驚いた。

「あはは・・・なんかすごいことになっちゃったわね。」

「自業自得だ。」

そばで見ていたシグナムたちは苦笑いをしながらその様子を見守っていた。

そして、それからいろいろあった。最初になのは、フェイト、はやて、アリシアがクリスマス会に行ってアリサとすずかに魔法関係のことをすべて話した。

次に、なのはがリンディとフェイトと一緒に魔法のことを家族に打ち明けた。そして、将来はそっちで働きたいということも一緒に。

それから数日が経ち、はやてが退院した。それを機にいよいよリィンフォースとの約束を果たす時がやってきた。

「じゃあ、これからリィンフォースを救う方法の説明を始めるぞ。」

レイリスに呼ばれ、なのはたちはアースラに集まっていた。

「まず、最初にはやてに言っておきたいことがある。」

「なんや？レイさん？」

「はやてには・・・リィンフォースのマスターをやめてもらう。」

レイリスは、はやてにそう告げた。

「な、なんでや！」

「今からそれを説明する。」

レイリスは、説明に入った。

「みんなも知ってる通り夜天の書をこのままにして置くと防衛プログラムがまた生まれてしまう。それを止めるためには、夜天の書を破壊するしかない。でも、そんなことは誰もしたくない。だけど、たった1つだけ方法がある。」

「その方法って？」

「俺と夜天の書の融合だ。」

レイリスが、とんでもないことを言った。

「「「えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」」」

その場にいた全員が驚きの声を上げた。

「融合ってどういうこと！」

リンディが、レイリスに聞いてきた。

「防衛プログラムが生まれないために俺自身の体を檻として使うってことだ。」

「そんなこと！いくらレイさんといえど危険です！」

レイリスの身を心配しリンディが止めるように言う。

「わかってくれ・・・リィンフォースを救うにはこれしかないんだ。」

リィンフォースの頭を撫でながらレイリスは言った。

「はやて、融合するためには管理者権限を俺に移す必要がある。だから・・・悪いおまえからリィンフォースを取ることになる。」

レイリスは、はやてに申し訳なさそうに言う。

「そんなんはええ・・・リィンフォースが生きてくれてるだけでウチはうれしい。せやけど・・・それでレイさんが危険な目に遭うのがウチは怖い・・・」

はやては、涙目になりながら震えていた。

「はやて・・・」

レイリスは、はやての前に行きはやての目線の高さに腰を下ろした。

「大丈夫だ、心配するな。」

はやての頭を優しく撫でて落ち着かせる。

「本当に大丈夫なんだなレイリス。」

はやての横にいたシグナムが言った。

「ああ、大丈夫だ。不本意だが、最高管理者の名において誓おう。」

「わかりました。レイさん夜天の書はあなたにおまかせします。」

リンディは、仕方ないと言った感じで了承した。

「ありがとう。リィンフォース・・・」

「はい、マスター。」

リィンフォースは、夜天の書をレイリスに渡した。

「夜天の魔導書、管理者権限を八神はやてから譲渡。新たなる、管理者レイリス・ユースティアの名の下我が身に宿れ。」

キィィィィィィィィィィィン

―――――――

―はやて―

「ほんなら、シャマル！グレアムおじさんに小包送っておいてな。」

「はい、おまかせです！」

「シグナムは後で合流やね。」

「はい、後程。」

「おしっと！」

聖祥大付属中学の制服に身を包みはやては、自分の足で立ち上がった。

「はやて、行ってらっしゃい！」

「行ってきます！」

八神はやて。私立聖祥大付属中学校3年生兼時空管理局特別捜査官。守護騎士ヴォルケンリッターを率いる優秀な魔導騎士として、ロストロギア関連事件の捜査に才覚を発揮する。

―フェイト―

「うん！よしっと。フェイト、は～いお弁当！」

「ありがとうございます。母さん。」

フェイト・T・ハラオウン。私立聖祥大付属中学校3年生兼時空管理局執務官。使い魔アルフを伴って、執務官として第一線で活躍中。そして、正式にリンディ・ハラオウンの養子として迎えられハラオウン家の長女となる。

―アリシア―

「アリシアー準備できたか？」

「うん！できたよ！」

アリシアが部屋から勢いよく出てくる。

「はい、お弁当。」

「ありがとう。」

レイリスから弁当を受け取る。

「じゃあ、行ってきますお父さん！」

「行ってらっしゃい。」

アリシア・T・ユースティア。私立聖祥大付属中学校3年生兼時空管理局航空機動隊捜査官。捜査官として数々の事件を解決しその名を広める。正式にレイリス・ユースティアの養子として迎えられ幸せな日々を送っている。

―レイリス、リィンフォース―

「行ったか。」

「マスター、アリシアは行きましたか？」

「ああ、今行ったよ。」

「では、私たちも支度をしましょう。」

レイリス・ユースティア。時空管理局最高管理者（通称）兼ユースティア家主夫。アリシアを正式に養子に迎え入れ管理局の仕事を渋々手伝いながら地球で暮らしている。

リィンフォース？。レイリスのデバイス兼時空管理局航空機動隊捜査官。アリシアと共に空で活躍を見せている。レイリスと一緒に家事を引き受けるが、料理は未だ修行中。たまにインフィニットとレイリスのことで喧嘩になる。

―なのは―

「あっ！なのは！」

「なのはちゃん。」

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

高町なのは。私立聖祥大付属中学校3年生兼時空管理局武装隊戦技教導官。新任局員への戦技教導の傍ら、捜査官としても活動。優秀な成績を残している。

「今日もお仕事？」

「うん！今日は久しぶりにみんな集まるんだ！お昼すぎに早退しちゃうからノートお願い！」

「はいはい！がんばってコピーしやすいノート取るわよ！」

「にゃはは・・・ありがとう。」

それから、なのは、フェイト、アリシア、はやては学校の屋上に来ていた。

「レイジングハート。」

「＜Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．＞」

「バルディッシュ。」

「＜Ｙｅｓ，ｓｉｒ．＞」

「エクレール。」

「＜　ＯＫ，ｍａｓｔｅｒ．　＞」

「リィンフォース？」

「はい、マイスターはやて。」

「「「「セットアップ！」」」」

閑話その1

A′s編、お疲れ様でした！パチパチパチ！

「いや～、終わったちゃったな。A′s編。」

これも、皆様が応援してくださるおかげです。感謝感謝。

「それで、ここでは何をやるんだ？」

とりあえず、これまでの軽い振り返りだな。あのシーンでは、実はこんな裏設定があった的なことやります。では、スタート！

「ます、序章からだな。何か俺が退屈してるシーンからだったな。」

そうそう、それから地球に行ってなのはと出会ったんだよ。皆さん覚えているかわかりませんが、レイリスは久しぶりに地球に来たんです。それで実は、幼き日の桃子さんに会っていた・・・

「マジで！」

ということを無印の最後らへんで妄想してました。

「妄想かよ！裏設定じゃないのか！」

ということで、次はアリシアの事話します。

「無視された！まぁいい。んで、アリシアついてはなんだ？」

それはね、アリシア生き返った時の状況について。死んだ年のまま生き返ったんだからフェイトよりも若いし背も小さいはずなんだよね。

「確かに。じゃあ何でフェイトと学年同じなんだ？」

リライト使った時にフェイトと同い年にしました。いろいろ面倒だったんでその辺省きました。

「面倒っておまえな・・・」

じゃあどんどん行ってみよう！

「また無視か・・・」

お次は、一気に飛んでＡ′ｓの最終話の話です。

「飛びすぎだ！Ａ′ｓの裏設定とか裏話はないのか！」

ない！ということで闇の書事件解決後６年の月日が流れて中学生になったなのはたちの事についてだ。

「みんな、管理局員なってたな。アリシアが意外なんだが？」

アリシアをどうするか悩んだよ。Ａ′ｓでも戦闘はまったくしなかったし、デバイスすらなかったんだから。

「じゃあどうして？」

ＳｔｒｉｋｅｒＳに向けて強くなってもらわないと扱いに困るから

だ。だから、裏設定としおまえとリィンフォースに鍛えられたということに。

「なるほどな。そういえば、アリシアとリィンフォースの役職だけどあれってオリジナルだよな？」

ああ、そうだよ。航空機動隊捜査官だ。

「何するんだ？」

シグナムがいた航空武装隊と若干かぶるんだけど、武装隊ってのは戦闘が見込まれる事態が発生した場合、前線の戦闘員として駆り出されるところで航空武装隊ってのが、それの飛行技術を持つってことなんだけど。

「うんうん。」

それで、オリジナルの機動隊が簡単に言えばお巡りさんだ。戦闘に関係なく事件が起きれば出動するところだ。執務官の指示で動いたりもするからフェイトと組んだこともある。

「へー、でもアリシアさ姉なのに立場が下なのか。」

その辺は、いいじゃん。細かいな。次行くぞ！

「そうだ！最終話を投稿してすぐに感想きたよな？」

来たぞ。無印のヒロインがアリシア（プレシアのような気も）でＡ′ｓがリィンフォースでいいのかという質問だな。

「どうなんだこれは？」

そうだな・・・間違ってはないな。章単位で言えば間違いなくこれであってるだろ。でも、この作品のメインヒロインは、なのはになるだろうな。

「まぁ、妥当だろうな。」

さて、そろそろ終わりにしますか。

「そうだな、長々やっても飽きるだろうし。じゃあ、次回からＳｔｒｉｋｅｒＳが始まるのか？」

いや、まだやらない。次回からは、過去編やります。

「過去編！誰の！」

もちろん、おまえに決まってるだろ。今まで夢や回想で出てきてたミリアについてやるぞ。

「てことは、夜天の書の始まりをやるのか？」

そうだ！夜天の書は一体何のために生まれたのか？そして、それを創った者は一体何者なのか？

「大体ネタばれしてるがな。」

次回、過去編～夜天を創りし者～始まります。

第1話　「夜天の始まり」（前書き）

魔法使いは、少女たちに語る。

とてもとても永い物語を。

第1話　「夜天の始まり」

闇の書事件から数か月が経ち、リィンフォースがレイリスのデバイスとして過ごしていたある日。レイリス達は、はやての家に集まっていた。集まっていた理由は、はやての新しいデバイスの事についてだった。

レイリスが、夜天の書と融合をしてしまった事により、はやてはデバイスを失ってしまい新しい物が必要になった。そこで、レイリスは良い事を思いつた。それは、リィンフォースを元にしたユニゾンデバイスを創るというものだった。

レイリスは、そのユニゾンデバイスを主要に魔導書型ストレージデバイスと杖型のアームドデバイスを創る計画を立てた。それをはやてに提案すると大賛成してくれた。そして、現在制作を進めているところだ。

「大体こんな感じだけどわかった？」

レイリスは、はやてにデバイスの創り方を教えていた。

「う～ん・・・何となくやけど・・・」

はやては、自身なさげに言う。

「心配するな。俺も手伝うし、管理局のデバイスマスターも協力してくれるって言ってるし。」

「うん。ありがとうな、レイさん。」

はやては、レイリスに感謝した。

「お茶が入りましたよ！」

すると、シャマルたちがキッチンからお茶を持ってきた。

「休憩にしようレイお兄ちゃん！」

そう言い、なのはがレイリスの隣に座ってきた。八神家には、レイリスの他になのは、フェイト、アリシアが一緒に来ていた。

「はい、マスターどうぞ。」

もちろん、リィンフォースも来ていた。リィンフォースは、レイリスにお茶を渡し隣に座った。

「・・・なぁレイさん。いつも聞こうと思ってたんやけど、レイさんって私から管理者権限移す前からリィンフォースにマスターって言われてたけどなんでや？」

「ああ、それはな・・・」

レイリスは、少し考えてから口を開いた。

「夜天の書は、元々俺のデバイスだったからだ。」

レイリスが、そう言うと一瞬にして時が止まった。ティーカップを口につけたまま固まったり、お菓子を取ろうと手を伸ばしたままか様々な形のまま。そして、１分ほど経った時・・・

「「「「えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」」」」

八神家全体に絶叫が響き渡った。

「ほんまなんか！リィンフォース！」

はやては、リィンフォースに確認を取る。しかし、リィンフォースはみんなの絶叫のせいで目を回してした。

「リィンフォース、大丈夫か？」

レイリスがリィンフォースの背中を撫で起こした。

「う～ん・・・あっマスター。はい～、大丈夫です・・・」

全然大丈夫ではなさそうだが、リィンフォースが大丈夫というのでレイリスは過度な心配はしなかった。

「リィンフォース、それで本当にレイさんのデバイスやったんか？」

「あっはい、本当ですよはやて。」

リィンフォースは、レイリスの言った事を肯定した。

「し、しかし我々にはそのような記憶はないぞ！」

そう言ってきたのは、シグナムだった。リィンフォースは、肯定するが夜天の書の守護騎士だったシグナムには、そんな記憶はまるでなかった。

「あたしにもねぇーぞ！」

「私も・・・」

「私もだ。」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラも同様にそんな記憶ないと言ってくる。

「なくて当たり前だ。管制プログラムだった私と違い守護騎士プログラムは、夜天の書の改変の時に記憶を消されてしまったのだから。」

「なっ！そんな！」

「マジかよ！」

それを聞いたシグナム達は、驚きを隠せなかった。

「マスターと会ったときに何か感じなかったか？懐かしい感じとか安心する感じと言った感覚を。」

「「あっ！」」

リィンフォースにそう言われシグナム達は、はっとした。思い出してみれば心あたりがいくつもあった。レイリスに夜天の書が改変されていて完成してもはやてを助けられないと聞かされた時だ。とても信じにくい話だったが、なぜかレイリスが嘘を言っているようには、まったく思えなかった。

他にもはやてが、入院して八神家にレイリスが来たときだ。レイリスとシャマルが料理を作りそれをみんなで食べた光景がどこか懐か

しいと思った事があった。

「リィンフォース、おまえの言うとおりだ。そんなことが確かにあった。」

シグナムは、リィンフォースの言っていることが本当だと認めた。

「ということは・・・レイ君が私たちの本当の主ってことなの？」

シャマルは、はやてのことを気にしながら言った。

「いや、違う。俺は、管理者権限を破棄しておまえらを捨てたんだから・・・」

レイリスは、軽く笑いながら言った。

「貴様！」

それを聞いたシグナムは、レヴァンティンを起動させレイリスに向かって振り下ろした。しかし、シグナムの一撃はレイリスには届かなかった。

「落ち着け！烈火の将！」

リィンフォースが、レイリスとシグナムの間に入りレヴァンティンを止めた。

「退け！リィンフォース！今の言葉許せん！」

シグナムの鋭い眼光は、レイリスを確実に殺そうとしていた。

「落ち着けと言っている！はやて、あなたも烈火の将を止めてください。」

リィンフォースは、はやてにシグナムを落ちるかせるように言った。

「あっ！シ、シグナム！やめるんや！ヴィータ！シャマル！シグナムを止めて！」

「お、おう！」

「は、はい！」

突然の出来事に完全に固まっていたはやてだったが、リィンフォースの言葉で我に返ったはやては、ヴィータとシャマルにシグナムを止めるように言った。

「離せ！ヴィータ！シャマル！」

「やめろってシグナム！」

「落ち着いてシグナム！」

ヴィータとシャマルが、必死になってシグナムを止めた。そして、数分後やっと落ち着いたシグナムを見てみんなは、一安心した。

「それで、リィンフォースさっきの話は本当のことなのか？」

「そんなわけがないだろう！マスターいい加減なことを言わないでください！」

リィンフォースは、シグナムの言葉を否定しレイリスに怒った。

「いい加減か・・・」

レイリスは、悲しげな顔をして呟いた。

「あなたは、私たちを捨てたんじゃない！守ってくれたんです！あの人との約束を守ろうとしてくれたんです！」

リィンフォースは、今にも泣き出しそうな目をして言った。

「約束？約束ってなんや？」

はやてが、リィンフォースに聞いた。

「それは・・・」

「俺が話すよ。」

今まで黙っていたレイリスが口を開いた。

「みんなには、いつか話そうと思っていたからな。」

レイリスは、目を閉じ語りだした。

「それは、遠い昔のある1人の魔法使いと少女の物語。」

◇◇◇

それは、遠い昔の物語。まだ、時空管理局も無く世界同士が干渉し合うことも少ない時代。１人の魔法使いが旅をしていた。
魔法使いは、世界を渡り歩いていた。まだ、世界を渡れるほどの航行技術が発展した世界は少なく世界を個人の能力だけで行き来するのは大変珍しかった。そして、魔法使いはある世界に降り立った。

「ふぅー、やっと逃げ切れた・・・」

個人の能力だけで次元航行をする魔法使いがいるという噂がながれ、魔法使いを捕えようとする者たちが増えていた。魔法使いは、なるべく戦闘はしないで逃げるのに徹していた。

「まったく・・・有名になるのも考えものだな。さてと・・・」

魔法使いは、溜息をつきながら周囲を見回した。

「・・・特に危険はなさようだな。これでようやく一息つける。」

周囲に危険がない事がわかると魔法使いは歩き始めた。そして、この地に降りたことが魔法使いには、運命だったのかもしれない。これから始まる楽しくもあり苦しくもあるとても永い物語の幕開けだったのだから・・・

第1話　「夜天の始まり」（後書き）

と言うことで始まりました！過去編です！
夜天の書はどのようにして始まったのか！そして、生まれた意味とは！

「いちいち面倒な言い回しするな！」

おまえ・・・まだいるの？

「俺がいちゃ悪いか！」

別にいいけど・・・

「・・・そ、それで過去編はどのくらいやるんだ？」

一応、長くても5話くらいで終わると思うよ。あんまり先の展開考えてないし

「そんなんで大丈夫か！？」

大丈夫だ！問題ある！

「あるのかよ！しかも微妙に古いし！」

さて、あまり内容も考えず勢いだけで始まった過去編ですが、楽しんでいただければ幸いです。
それでは次回、第2話で会いましょう。

第2話　「運命の出会い」（前書き）

魔法使いは、少女に助けてもらう？

第2話　「運命の出会い」

「・・・ずいぶん歩いたけど街はおろか人すらいない・・・・・・」

魔法使いことレイリス・ユースティアは、彷徨い歩いていた。別に荒野でも樹海と言ったとんでもないとこではない。ただ果てしないほどの草原が広がっていた。

「はぁ～、もしかして人がいない無人の世界だったか？」

何時間も歩き続けても人に出会う様子がない。その結果、人がいない無人の世界なのではないかとレイリスは思い始めた。

「日が暮れた・・・しょうがないか・・・はぁ～」

結局、街も人も見つけられないまま日が暮れてしまった。レイリスは、覚悟を決め野宿をすることにした。いい場所がないか探すとちょうどいい木陰があったのでそこで休むことにした。

「それじゃあ、おやすみ・・・」

レイリスは、目を閉じ眠りについた。

――――――

「う～ん・・・」

レイリスは、まだ眠い中人の声が聞こえたような気がしてうっすらと目を開けた。すると、もう朝なのだとわかるくらい明るくなっていた。そして、自分が体を揺らされているのにレイリスは気付いた。

「起きてください・・・」

声のする方を見るとそこには、レイリスと同じくらいの少女が必死にレイリスを起こそうとしていた。それを見てレイリスは、ゆっくりと体を起こした。

「ああ！よかった～起きてくれました～」

レイリスが起きてくれた事により少女はとてもうれしそうにした。

「こんなところで寝ていては風邪をひきますよ。」

少女は、ニコニコしながらレイリスを見ていた。よほど、レイリスが起きてくれたのがうれしかったようだ。

「・・・君は誰？」

レイリスは、目の前でニコニコしている少女に聞いた。

「あっ！すみません。私は、ミリア、ミリア・カラーです。よろしくお願いします。」

何をよろしくするのか疑問だったが、とりあえず自分も自己紹介し

ておこうと思った。

「俺は、レイリス・ユースティアだ。」

「レイリスさん、どうしてこんなところで寝ていたんですか?」

ミリアは、当然の疑問を言ってきた。

「昨日ここに来たんだけど、街もなければ人もいなかったから仕方なく野宿したんだ。それよりこの世界は名前を教えてもらってもいいかな?」

レイリスが、ここで寝ていた理由を話しここがどこなのか聞いた。すると、ミリアは少し驚いたような反応を見せたがレイリスの質問に答えた。

「えっと、ここはベルカと言います。」

「ベルカ・・・確かいくつかの王たちが治めている世界だったか・・・」

レイリスは、ミリアには聞こえないくらいの声で呟いた。そんな、レイリスの様子を見たミリアは心配げな顔で言った

「・・・あの~レイリスさん。よかったら家に来ませんか?」

「えっ!?」

突然の事にレイリスは、間の抜けた声を出した。それはそうだ、何を思ったのか会ったばかりの見ず知らずの男をいきなり家に招いた

のだから。

「さぁ行きましょう。」

ミリアは、手を差し伸べ優しく微笑んだ。

「あっ・・・」

レイリスが、断ろうとする前にミリアは、強引にレイリスを引っ張って行った。

「着きました。ここが私の家です。」

ミリアに案内され、１０分ほど歩いたところに一軒の家がぽつんと建っていた。レイリスが、中に入ってみると驚いた。最初に家の外観を見た時も思ったが、ミリアの家はやたらとでかい。家の中には、一体いくつの部屋があるのかわからないほどあり、しかも部屋の一つ一つが広い。そんな家に招かれたレイリスは、落ち着きがなくなっていた。

「す、すごい家だな！・・・」

「そんな事ないよ～。普通だよ～。」

決して普通ではないと心の中でツッコんだ。

「レイリスさ～ん！はい、ここに座ってください。すぐにできますから待っててくださいね。」

ミリアは、レイリスを椅子に座らせ、たぶんキッチンだろうと思われるところに行ってしまった。

「ふんふんふ～ん♪」

キッチンからミリアの鼻歌が聞こえてくる。レイリスは、それを聞きながら部屋を見回した。部屋には、それほど物がなくがら～んとしていた。

「できましたよ！レイリスさん！」

それから、１５分くらい経つとミリアが、料理を運んできた。

「どうぞ！召し上がれ！」

「う、うん・・・いただきます・・・」

レイリスは、戸惑いつつも料理を口にした。

「ぱくっ・・もぐ・・・・あっ美味しい・・」

ミリアの料理は、すごい美味しかった。それを聞いたミリアは、とてもうれしそうに笑った。それから、２人でご飯を食べ終わって一休みしている時にレイリスが、疑問に思っていたことをミリアに聞いた。

「ミリア、聞きたいことがあるんだけど？」

「はい、なんですか？」

ミリアは、かわいく首を傾けて言った。

「なんで、見ず知らずの俺にここまでしてくれるんだ？」

「う～ん・・・」

ミリアは、頬に人差し指をついて考え始めた。そして、しばらく目を瞑って考えていたミリアが目を開け口を開いた。

「そのですね、困ってそうだったので・・・」

それを聞いてレイリスは、コケそうになった。そりゃあ困っている人がいれば助けたくなるのもわかる。だが、レイリスはまだ名前と野宿をしていた理由しか教えていない。なのに、ミリアは家に招いただけじゃなくご飯まで食べさせてくれたのだ。

「（お人好しなのか・・・なんか危なっかしいな・・・）」

そんなミリアをレイリスは、心配になった。

「そういえば、まだ俺の事を教えてなかったな。俺は、世界を次元転移しながら旅をしてるんだ。」

レイリスは、自分の事を話し始めた。すると、次元転移しながら旅をしていると言った瞬間にミリアは、目をキラキラさせた。

「次元転移って！もしかして転移魔法が使えるんですか！？」

ミリアは、身を乗り出して聞いてきた。

「ああ、使えるよ・・・」

「きゃー！すごいすごい！」

ミリアは、声を上げて驚いていた。次元転移魔法が使える魔導士や騎士は、この時代ではまだ少ない。次元転移するには、航行船を使うか転移装置を使うしかなかった。

「不思議だったんです。さっきこの世界の名前を聞いていたのでおかしいとは思っていたんです。航行船や転移装置を使ってこの世界に来たのなら知らないはずがないから。」

レイリスは、それを聞いてあの時ミリアが驚いていた理由がようやくわかった。すると、ミリアが何か言いたそうにしていた。

「どうした？」

「あのですね・・・その・・・旅のお話を聞かせてもらってもいいですか？」

ミリアは、少し遠慮気味に言ってきた。それを見たレイリスは、やれやれと言った感じに笑った。

ミリアにお願いされたレイリスは、ご飯のお礼ということで旅の話をしてあげた。もちろん、レイリスにとって都合の悪い事は省いて。

「と言ったところかな。」

「ふぇ～」

レイリスの話が終わるとミリアは、呆けていた。

「すごいです～。そんな壮絶な旅をしてたんですね。」

「あ・・いや～・・・」

レイリスは、そんなすごい話をしたつもりはなかったので、そんなに驚かれるとは思いもしなかった。

「こんなすごいこと聞いちゃったら、私の事も話さないといけないね。」

ミリアは、そういうとおもむろに立ち上がった。そして、レイリスを手招きして言った。

「レイリスさん！こちらにどうぞ。私の秘密を教えてあげます？」

第2話　「運命の出会い」（後書き）

ということで第2話でした。

「なんだ?この展開。まったく意味がわからない?」

安心しろ!俺も意味がわからない!

「なに!胸張って言ってんだ!だめだろそれじゃあ!」

オリジナルな話だと結構難しいんだぞ。原作にちょっとオリジナル展開入れるのとはわけが違うんだぞ!（泣）

「泣きながら叫ばれても・・・」

そんなわけで、しばらくこんな話になると思いますが、我慢して付き合ってくださ
い。お願いします（祈）

「俺からも頼む。というわけで次回、第3話で会おう。」

第3話　「旅する魔導書」（前書き）

魔法使いは、少女の夢を知った。

第3話　「旅する魔導書」

レイリスの旅の話を聞いてなんでか感動？したミリアは、レイリスをある部屋へと連れて行った。

「この部屋だよ。さぁ、私の秘密を大公開！」

2人は、部屋の前に来た。そして、ミリアは扉を開けレイリスを中に押し入れた。

「押すなって！・・わぁっととっ・・・んっ！これって・・・」

ミリアに押されながら部屋に入れられた。押されてちょっと転びそうになったが、なんとか持ち直して部屋の中を見てみた。すると、そこには驚くものがあった。

「えへへ？すごいでしょ！」

「これは・・・デバイスか？」

そこには、3つのデバイスがあった。剣型、ハンマー型、指輪型のアームドデバイスだ。

「ミリアが創ったのか？」

「そうだよ！と言ってもまだ完成はしてないけどね。」

ミリアは、あははと笑って見せた。

「でもね、本命はこっちだよ！」

ミリアが、じゃーん！と言った感じでそれを見せた。

「これは・・・」

レイリスが、見たものはポットのようなものに入った一冊の本だった。その本は、表紙の色が茶色で剣十字の紋章がついていた。

「これはね、魔導書型のデバイスなの。まだ、名前はないんだけどね・・・」

「魔導書型のデバイス・・・」

レイリスは、その場で動けなくなっていた。

「すごいな！これは！」

「そうでしょう！自身作なんだ。」

レイリスに褒められミリアは、胸を張って喜んでいた。

「このデバイスはね、すごい機能があるんだよ。このデバイスは、旅をするんだ。」

「旅？」

レイリスは、ミリアに聞いた。

「うん。これにはね、魔法記録装置がついてるの。」

ミリアは、魔導書型のデバイスの説明をしだした。

「いろんな世界のね、すごい魔導師だったり魔法を記録して半永久的に残す機能なの。」

「それはすごいな、でも、なんでミリアはそんなことを？」

レイリスは、ミリアに聞いてみた。

「私の夢なの。本当は、私自身が旅をして記録できたらいいんだけど・・・人の時間って短いから。だから私は、この子に私の夢を託そうと思って・・・」

ミリアの夢。いろいろな世界を旅してすごい魔導士や魔法を記録して後世に残すこと。自身の手で記録したいが、人間の時間には限りがある。だから、それを自らが創ったデバイスに託す。

それを聞いた、レイリスは思う。まだ、１７歳くらいの女の子がこんな壮大な夢を持っていてそれを実現しつつあることにレイリスは、驚きを隠せなかった。

「すごいなミリアは、立派な夢を持っていて。」

「そんなことないよ～。私の夢なんて、言ってることはすごそうだけど、まだデバイスの完成がいつになるかだってわからないもの。」

ミリアは、大したことはないと謙遜する。

「それでも・・・」

ドンドン

「あっちょっとごめんねレイリスさん。誰か来たみたい。」

玄関のドアを叩く音が聞こえミリアは、玄関に行った。

「大したことないね・・・立派だよ。俺なんかよりずっと・・・・」

レイリスは、ミリアが行ったあと1人でそんなことを思っていた。

「や、やめて！離してください！」

「んっ！」

ミリアが行ってから数分も経たない頃、突然、玄関の方からミリアの悲鳴が聞こえてきた。それを聞いたレイリスは、玄関に急いだ。

「はーい！どちら様ですか？」

ミリアは、そう言い玄関のドアを開けた。すると、そこには騎士甲冑を着た数人の男たちがいた。

「ミリア・カラー。先日の件の返事を聞きに来た。」

男の1人がそう言うとミリアは、苦い顔をした。

「それでしたら、何回もお断りしてるはずです。私の気持ちは変わりません。」

「そうか・・・では、こちらもそれなりの手段にでるしかないな！」

「な、何を!?」

男は、突然ミリアの腕を掴んだ。

「また、断るようなら無理やりにでも連れてこいと王からの命令だ。すまないが、このまま連れて行く。」

「や、やめて！離してください！」

「何をしている？おまえら・・・」

「ん？なんだ貴様は！」

奥からレイリスが、来たことに男たちは驚いた。

「ちょっとミリアに世話になった旅の者なんだけど・・・さっきの話はどういうことかな？」

レイリスは、男たちに聞いた。

「ふんっおまえなどに教える義理はないが、まぁいいだろう。この女、ミリア・カラーはかなり優秀な技術者でな。その技術をこの国の王が、欲している。だが、この女は何度もその誘いを断り続けた。だから今回も断ったら無理にでも連れてこいとの命令だ。」

男はそう言い、ミリアを連れて行こうとした。しかし、その手をレイリスが振り払った。

「貴様！何をする！」

「悪いけど、それはできないな・・・」

レイリスは、ミリアを引き寄せ自分の後ろに隠した。

「貴様！逆らうとどうなるか分かっているのか？」

「どうなるんって言うんだ！」

「うっ・・・」

レイリスの気迫に男たちは、後ずさりをする。

「少しは、できるようだな。しかし、我らは騎士だ。そう簡単に引き下がるわけにはいかない！」

男たちは、そう言いデバイスを起動させた。

「はぁ～、しょうがない。少し遊んでやるか。」

第3話　「旅する魔導書」（後書き）

早くＳｔｒｉｋｅｒＳやりた～い

「いきなり過ぎるな、おまえは・・・」

ごめん。過去編がここまで難しいとは・・・

「仕方のない奴だな。」

と言うことで次回、第４話で会いましょう・・・

第４話　「魔法使いの秘密」（前書き）

魔法使いは、少女を助ける

そして、秘密を教える

第４話　「魔法使いの秘密」

ミリアが、この国の王のところに連れて行かれるのを阻止しようとレイリスは、騎士たちと戦うことになった。

「我ら５人相手にたった１人で勝てると思っているのか。」

「さぁ～どうかな？」

レイリスは、かなりの余裕を見せていた。騎士たちは、それが気に障ったらしく、怒りが頂点に達しようとしていた。

「その余裕どこまで続くか！」

騎士たちは、陣形を組んでレイリスに突撃してきた。２人が、正面からもう２人が両サイドから、後の１人が後ろに回り込んで剣型のデバイスを振り下ろした。

「「「はあああああ！！」」」

ドォーーーン

一斉に振り下ろされた剣にレイリスは、一歩も動けずにくらってしまった。

「レイリスさーーん！」

ミリアの悲痛な叫びが響く。

「呼んだか？」

「えっ？」

レイリスの声が、突然自分のそばで聞こえミリアは、驚いた。

「な、なに！」

「バカな！」

ミリアと同じく騎士たちも驚いていた。今確かに倒した相手が、ミリアの隣に立っているのだから。

「貴様・・・どうやって・・・」

「どうやって？それもわからないのか。それでも騎士かおまえらは？」

レイリスは、仮にも騎士と名乗っているにも関わらずこの程度のことがわからないと言った騎士たちに落胆した。

「遊ぶつもりでいたけど・・・もういいや。」

キィィィィィン

「封印の門。我が前に現れよ。」

レイリスのそばに巨大な魔法陣が現れ、そこから封印の門が召喚された。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「な、これは・・・召喚魔法！こんな高度な魔法を・・・」

目の前に現れた巨大な門に騎士たちは、驚いていた。

「解けよ封印の鎖。」

ギィィィィ・・・

封印の門を覆っていた鎖の一部が解け、扉が少しだけ開いた。すると、中から不気味な音が聞こえてきた。それを聞いた騎士たちはもちろんレイリスのそばにいるミリアも身震いをしていた。

グゥウウウウウウウウ

それは、唸り声に似たものに聞こえた。そして、少しだけ開いた扉の隙間から何かが見えた。

「ひっ！」

それを見たミリアは、震えが止まらず小さく悲鳴を上げた。扉の隙間からは、金色に光った瞳が1つこっちを見ていた。同じくそれを見た騎士たちは、声を発することさえできず、ただ震えることしかできなかった。

グゥウウウウウウウ

すると、扉の隙間から何かが出てきた。それは、黒く一見すると靄や霧と言った粒子状のものだった。それは、騎士たちのそばまでくるとまるで何かを探るように騎士たちの体を包み込んだ。それに包み込まれた騎士たちは、今にも気絶してしまいそうな雰囲気だった。虚ろな目に思考が停止しているような顔になっていっそのこと殺してくれと言ったような様子だった。

「あ・・あああ・・あああああ・・・」

「殺すなよ・・・いいな。」

レイリスは、門の中にいるそれに言い聞かせた。

「よし・・戻れ！」

グゥウウウウウウ

騎士たちを包み込んでいたものは、レイリスの言葉を聞くと門の中

に戻って行った。そして、門の中に完全に戻った後、レイリスは封印の門の扉を閉じた

ギィィィィ・・・バタン！

そして、封印の鎖を掛けなおして封印の門を異空間の中に戻した。

キィィィィィィン

「これで、終了っと。」

レイリスは、封印の門を戻すと騎士たちの方を見た。すると、騎士たちは5人とも完全に気絶していた。

「ちょうどいい。このままどこかに転移させよう。」

レイリスは、騎士たちをバラバラにランダムで転移させた。そして、騎士たちを転移した後、ミリアの方を見た。レイリスは、ミリアを見た瞬間、罪悪感に駆られた。なぜなら、ミリアは地面に腰が砕けたように座り込んでいて、その目からは大粒の涙が流れていたからだ。

「ひっぐ・・・うっぐ・・・」

「ミリア・・・」

レイリスは、ミリアのそばに来た。そして、ミリアを抱きしめ頭を優しく撫でた。触れた瞬間ミリアはビクッとしたが、逃げようとはしなかった。そして、しばらく撫でて続けているとだんだんと落ち着いてきたのか泣き止んできた。
落ち着いてきたミリアを見てレイリスは、耳元で優しく囁きかけた。

「ごめんねミリア・・・怖い思いをさせて・・・」

レイリスは、そう言うと悪いとは思ったが、いつまでもここにいるわけにもいかず、ミリアをお姫様抱っこをして家の中に入った。そして、ミリアをリビングのソファーに座らせた。

「「・・・・・・・」」

お互いに何をしゃべらず、時間だけが過ぎていった。そして、先に口を開いたのはミリアの方だった。

「あの～聞いてもいいですか？」

「うん。いいよ。」

「あれは、なんですか？」

ミリアは、さっきの封印の門のことについて聞いてきた。それについてレイリスは、少し考えた。どこまで教えていいものなのかと。でも、レイリスは覚悟を決めすべてを話すことにした。

「少し長くなるかもしれないけど・・・いいかな？」

「はい・・・大丈夫です。」

ミリアの了承を得て、レイリスはすべてを語る。

第4話　「魔法使いの秘密」（後書き）

ふう～、何とかもう少しで終わりそうだ。

「5話くらいって言ってたけど後1話で終わるのか？」

いや、たぶん後2話ってところかな。

「すべて話すってなってるけど、本当に全部話すのか？」

ああ、全部だ。おまえの秘密全部。

「俺ってそんなに秘密あったか？」

それなりにな。まぁ、ほとんど後付けになるけど・・・

「それで失敗しなきゃいいけど・・・」

がんばる・・・ということで次回、第5話で会いましょう。

第5話　「魔法使いの初恋」（前書き）

魔法使いと少女は、恋に落ちた。

第5話　「魔法使いの初恋」

レイリスは、ミリアに自分の事をすべて話すことに決めた。

「さて、何から話したらいいか・・・」

レイリスは、何から話したらいいか考えた。そして、とりあえず自分の体のついて話すことにした。

「じゃあ、まず俺の体について話すよ。・・・俺は、歳を取らないんだ。」

「えっ?歳を取らないって・・・」

ミリアは、その言葉を聞いて目を丸くした。

「言葉どおり・・・俺は、不老不死なんだ。」

そして、レイリスはありのままに話した。不老不死になった経緯、今までの旅のことで話していなかったことなどをいろいろ話した。

「そして、さっきのあれだけど。あれは、俺が昔に封印した魔獣だ。旅をしている途中、いくつもの世界を喰い尽くしている魔獣がいるって噂を聞いてな。それで、さすがに放っておけなくてその魔獣を探し出して何とか封印したんだ。」

レイリスは、門の中にいた物の説明を終えた。

「と言うわけだ。」

「・・・・・」

レイリスの話はすべて終わった。そして、レイリスはミリアを見た。ミリアは、俯いて悲しそうな顔をしていた。

「それじゃあ、俺は行くね。いつまでも俺みたいな化物が、一緒に居たら迷惑だろうし・・・」

レイリスは、そう言って椅子から立ち上がり、玄関に向かった。そして、ドアを開け出て行こうとした。

「待って！」

レイリスは、突然呼び止められた。そして、背中に暖かい感触が伝わった。レイリスは、後ろを振り向くとそこには、必死に背中に抱きついているミリアがいた。

「待って・・・行かないで・・・」

ミリアは、涙を流しながら行かないでと懇願してきた。それを見てレイリスは、困った。別に泣かせるつもりはなかっただけにどう対処していいかわからない。

「離してくれミリア・・・」

レイリスは、ミリアに冷たい声でそう言う。レイリスは思っていた。ここで優しくしてはいけないと、戻ってはいけないと。レイリスはいつもこうしてきた。誰かと必要以上に親しくはしない。親しくなる前にいなくなる。引き留められても冷たくあしらう。

レイリスは、今までそうやって生きてきた。だから、今回も同じようにする。

「いや！離さない！絶対離さない！」

ミリアは、レイリスの言葉を聞かず、より力を込めて抱きしめてきた。

「レイリスは、化物なんかじゃないよ。とても優しい人だよ。私知ってるもん。」

ミリアは、そう言ってレイリスを引き留めようとする。だが、レイリスの気持ちは変わらない。

「わかってくれミリア。俺は・・・」

「私、レイリスのこと好き！」

「なっ！？」

レイリスは、ミリアが一瞬なにを言ったのかわからなかった。レイリスの事が好き、ミリアは確かにそう言った。その好きがどういう意味での好きかは、わからない。でも、レイリスの心を揺さぶるには十分だった。

「（ミリアが、俺の事を好き？）」

レイリスは思った。今までもミリアのように好意を寄せてきた女性はいた。でも、レイリスは親しくならないように振る舞ってきたし、何より好意事態に気づかないふりをしてきた。

それにレイリスの正体を知った瞬間に化物扱いをして離れていくのがほとんどだったから。だから、今まで正体を知ってなおレイリスのことを好きと言ってくれた人はいなかった。

「レイリス・・・行かないで・・・私のそばにいて・・・」

レイリスの心は乱れていた。自分の正体を知っても好きと言ってくれる人をこのまま放って行くなんてレイリスには、とてもできそうにもなかった。でも、このままここにいるわけにはいかない。２つの思いがぶつかり合ってレイリスを悩ませる。

「俺は・・・俺は・・・」

レイリスは、押しつぶされそうになった。それだけどちらの思いも強いということだった。そして、レイリスはミリアに初めて会った時のことを思い出した。

朝日が差し込む木陰の下で自分を必死に起こしてくれた少女。彼女の眩しいくらいの笑顔を見たとき今まで感じたことのない感覚があった。

「（もしかして・・・俺は・・・）」

レイリスは、自分の気持ちが何なのかわかった気がした。しかし、それを認めてしまっていいものかとレイリスは思った。だが、目の前の少女を見てその考えはどうでもよくってしまった。

「ミリア・・・」

レイリスは、ミリアを見つめた。

「レイリス・・・」

ミリアもまた同じように見つめた。そして、ミリアはそっと瞳を閉じた。レイリスも同じようにそっと瞳を閉じながらミリアの唇に自らの唇を重ねた。

―――――――

ミリアは、涙目になってレイリスに聞いてきた。それを見たレイリスは、笑いそうになった。

「そんなことないよ。うれしよ。」

「本当！よかった・・・」

うれしいと言ってもらえたことでミリアは、笑顔になった。

「ミリア、聞きたいことがあるんだけど？」

「なあに？」

「ミリア、いつ俺の事が好きになったんだ？出会ってからまだ、１日も経ってないのに・・・」

「ふふっそれはね・・・レイリスを見つけた時。」

ミリアは、微笑みながら話した。

「最初ね誰かが倒れてるんじゃないかって、びっくりして慌てて近寄ったの。でも、そうしたら寝息が聞こえてきて、ただ寝てるだけってわかったの。でね、その人の顔を見た瞬間にねキュンってしちゃったの。」

ミリアは、恥ずかしそうに言った。

「たぶん、一目惚れだったんだと思うの。見た瞬間に胸がドキドキして顔が熱くなっていくのがわかって。それに、無防備に眠ってい

る姿を見て何だかほっとけなくて・・・」

それを聞いたレイリスは、驚いていた。何しろ自分と同じだったからだ。一目見た瞬間に恋をして、相手のことをほっとけないと思うことまで。

「俺たち、出会った瞬間に両想いになったみたいだな。」

「うん、なんだかうれしい。」

そうして、2人はまた唇を重ねた。こうして、出会った瞬間に恋に落ちた2人は、一緒に暮らし始めた。

そして、物語は数年の時が流れてからまた始まった。

第5話　「魔法使いの初恋」（後書き）

・・・・・・

「どうした？また黙って。」

ロリコンのくせに、ロリコンのくせに、ロリコンのくせに・・・

「何を言ってるんだ！おまえは！」

だって！おまえロリコンだろ！なのにあんな出会った瞬間に両想いってふざけんなよ！

「ちょっと待て！何で俺がロリコンってことになってんの！？」

だって前にアリシアくらいの女の子が好きだって・・・

「言ってねぇ！そんなこと一言も言ってねぇ！」

まぁいいや。それより今回の話はたぶん分かり難いところが多いとおもいます。好きになるの早すぎるとか、展開が意味わからないとかあると思いますが、そこは勘弁してください。自分でもあまり納得していませんが、これが限界なので察してください。

「おまえいい加減俺を無視するのやめない。」

では、次回たぶん過去編の最終話になるかもしれない、で会いましょう。

最終話　「2人の主」（前書き）

魔法使いの話は終わった。

そして、家族が増えた。

最終話　「2人の主」

2人が、愛を誓いあってから数年の時が流れた。2人は、その数年間とても幸せに暮らしてした。だが、幸せというものは長く続くものではなかった。

「ミリア・・・お別れだ。」

「いや！行かないでレイリス！」

その光景は、まるで数年前に2人が出会った時のようだった。一体2人に何が起こったのか？

「これ以上、ミリアに迷惑はかけられない・・・」

「迷惑なんかじゃない！そんなことない！」

ミリアは、あの時以上に必死になってレイリスを引き留めようとした。幸せだった2人が別れる原因となったものは、悲しくもレイリスだった。

あの日、レイリスが追い払った騎士たちの主、つまりこの国の王がレイリスの下へ攻めて来たのだ。ミリアを手に入れる事ができず、無様にも自国の騎士たちがやられた事に腹を立て戦争でもするかの如く大群で押し寄せてきた。

しかし、レイリス相手にそのような事をしてもまったくの無意味だった。30分も経たずにたった1人の魔法使いによって一国が滅んだのだ。

その事はすぐに近隣の国にも知れ渡った。一国をたった1人で滅ぼした魔法使いとして。そして、王を失った国は、激しく荒れた。そ

れが、原因でレイリスはベルカの国すべてから特S級の危険人物として監視の対象とされた。
だから、レイリスはこのままではミリアも危険に晒される可能性があると思い別れを決断した。

「わかってくれ・・・これもミリアを守るためなんだ。」

「ひっぐ・・・いやだよ・・・うっぐ・・1人にしないで・・・」

ミリアは、ついに泣き出してしまった。しかし、レイリスは今回ばかりは譲れなかった。

「ミリア・・・」

レイリスは、ミリアを抱きしめた。

「ごめん・・・本当にごめん・・・」

「レイリス・・・」

レイリスの声は震えていた。別れるのが辛いのはレイリスだって同じだった。

「・・・うん・・わかった・・レイリス・・」

ミリアは、レイリスと別れる決意をした。でも、ミリアはただ別れるのはいやだった。

「レイリス・・一つだけお願い聞いてくれる?」

「なに？」

「お別れするの1年だけ待ってくれない。」

ミリアは、別れるのを1年だけ待ってほしいとお願いしてきた。

「どうして？」

当然、レイリスはそれを疑問に思った。

「今は秘密。お願い聞いてくれる？」

「わかった。ミリアの最後のお願い聞いてあげる。」

そうして、2人の別れは1年後と決まった。

それからの1年間ミリアは、忙しく研究に没頭していた。レイリスが、手伝おうかと言うが絶対にダメっと怒られてしまう。しかし、ミリアは研究だけでなくレイリスに甘えることも忘れていなかった。研究の合間にミリアは、精一杯レイリスに甘えた。

そんな、日々が続きあっと言う間に時間は過ぎた。そして、その日は訪れた。

「ごめんねレイリス、1年も待ってくれて。」

「ううん。大したことはないよ。」

2人とも顔は笑っているが、態度がぎこちなかった。

「レイリス、はいこれ・・・」

「えっ！これって？」

レイリスが、渡されたものはミリアが創っていたあの魔導書だった。

「なんで！？」

「レイリスに貰ってほしいの。元々この子は、旅をさせるつもりだったから、レイリスと一緒に連れて行ってほしいの。」

「でも・・・」

レイリスは、貰うのをためらったが・・・

「いいの！もうあげるって決めたの！」

ミリアは、聞く耳持たずだった。

「ほら、早く起動させて。永遠の魔法使いと旅する魔導書“夜天の魔導書”を。」

「・・・夜天の魔導書・・起動！」

キィィィィィィン

レイリスが、夜天の魔導書を起動させると目の前に5つの魔法陣が現れた。そして、そこから現れたのは4人の騎士と1匹の守護獣だった。そして、騎士の内の3人と守護獣が膝をついた。

「我ら夜天の主の下に集いし騎士。」

「主ある限り我らの魂尽きることなし。」

「この身に命がある限り、我らは御身の下にあり。」

「我らが主、夜天の王レイリス・ユースティアの名の下に。」

そして、頭を下げた騎士と守護獣を見てレイリスは戸惑った。

「えっと・・・ミリア・・彼女たちは・・」

「夜天の魔導書の騎士プログラム、ヴォルケンリッターよ。あなたを守ってくれる存在よ。そしてあっちが・・・」

ミリアが向いた方を見ると、最後の騎士がこっちを見ていた。

「あの子は、夜天の魔導書の管制プログラム。あの子だけまだ、名前がないのレイリスがつけてあげてね。」

ミリアにそう言われ、レイリスは、彼女に近づいた。

「えっと・・・」

レイリスが、近づくと彼女はじっとレイリスを見つめてきた。なにかを話すわけでもなく、ただじっとその紅い瞳でレイリスを見ていた。

「（名前か・・・どうするかな。）」

レイリスは悩んだ。いきなり名前をつけてと言われてもそう簡単に思いつくわけがない。だが、レイリスは1つだけいい名前を思いついた。

「（これがいいかな?）じゃあ、君に名前を与えるよ。」

「コクッ」

声を発さず彼女は頷いた。

「アイン・・・君の名はアインだ。」

「アイン・・・」

「そう、アインだ。」

「アイン・・アイン・・アイン・・」

アインと言う名前を与えられ、下を見ながら彼女は自分の名を何回も繰り返す。そして、しばらくしてレイリスの方を向いた。

「ありがとう！マスター！」

満面の笑みでアインはレイリスにありがとうと言った。それを見た

レイリスはドキッとしてしまった。

「むむむ・・レイリス！」

「わっ！」

ミリアは、レイリスの耳を引っ張った。どうやらヤキモチを妬いたみたいだ。

「ミリア～痛いって・・」

「知らない！」

レイリスの耳を離してミリアは後ろを向いた。レイリスは、謝ろうとミリアの方を見る。すると、ミリアの肩が震えていた。

「ミリア・・・」

「ねぇ、レイリス・・・もう行っちゃうんだよね。ここからいなくなっちゃんだよね。」

涙交じりの声でミリアは言った。

「うん。」

「ひっぐ・・・レイリス・・最後に約束してほしいの。」

「なに？」

「私が創ったこの子たちは、あなたにどんなことがあっても守って

くれる。でもね、レイリスにもこの子たちに何があっても守ってほしいの。」

それがミリアの最後の約束事だった。

「わかった。レイリス・ユースティアの名に誓ってこの子たちを守ってみせる。」

「うん、約束。」

「約束だ。」

そして、2人は最後の口付けを交わした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「と言うわけだ。」

レイリスは、昔話を話し終えみんなの方を見た。すると、なにか様子がおかしい。特になのは、フェイト、はやて、リィンフォース、そしてなぜかシグナム。

「あの～どうした？」

レイリスが恐る恐る声をかけた。すると、さっきの4人が立ち上がりレイリスの前に立った。

「えっと・・・」

「マスター・・今の話は何ですか?」

リィンフォースが聞いてきた。

「何って・・・夜天の書が俺のデバイスだったって話だけど・・・」

「そうなんか?私たちには、のろけ話にしか聞こえへんかったけど・・・」

レイリスは、身の危険を感じた。

「レイお兄ちゃん・・・」

「レイリス・・・」

「レイリス・・・」

なのは、フェイト、シグナムも同じように詰め寄ってきた。そして・・・

「「「「レイリス（お兄ちゃん）（さん）のバカーーーーーーーー！」」」」

そうして、４人の制裁と言う名の私刑（リンチ）を受けた。

「痛い（泣）・・・」

「自業自得だ！」

「そうなの！」

何かすごい理不尽なことになっていた。

「でも、レイ君。さっきの話で私たちがレイ君の物だったって事はわかったけど、私たちを捨てたって言うところがないんだけど。」

シャマルが聞いてきた。

「ああ、それはな。・・・ミリアのところから旅立ってから数十年後にどこで知ったかわからないが、夜天の書を狙う奴らが現れたんだ。そいつらが結構強くてな、おまえらと一緒に戦ったがダメだった。でも、夜天の書を取られるわけにはいかないから、一度契約を破棄して夜天の書をランダムに転送したんだ。」

さっきまで騒いでいた４人も黙って聞いていた。

「転送した後、奴らから何とか逃げ切った。そして、どこにいったかもわからない夜天の書を探す旅に出たんだ。」

「そうだったのか・・・」

シグナムは、さっきの自分の行動を恥じた。何も知らないのにレイリスを責めた自分が許せなかった。

「レイリス・・・すまなかった・・・」

「別にいい。こうしておまえたちとも再会できた。それにおまえた

ちには素敵な主がいるんだしさ。」

レイリスはそう言いはやてを見た。

「しかし・・」

シグナムは、混乱していた。今の自分の主ははやてだ。けれど、自分たちには真の主がいたことを知った今、どうしたいいかわからなくなっていた。無論ヴィータ、シャマル、ザフィーラも同じ気持ちだった。

それを見たはやてがこんな提案をした。

「なら、レイさんも主でええやん。」

その言葉にレイリスとヴォルケンリッターは、驚いた。

「無理にどっちかにせえへんでも、私とレイさん両方が主ならええやん。」

レイリスは、はやてが無邪気にそんなことを言ったのでおもわず笑ってしまった。

「そうだな。俺ははやてに賛成だ。」

レイリスがそう言うとヴォルケンリッターたちも。

「私も賛成します。」

「あたしもだ。」

「私も。」

「うん。」

満場一致で夜天の主は、八神はやてとレイリス・ユースティアに決まった。

「これからもよろしくな、おまえら。」

閑話その2

過去編終了！お疲れ様でした！

さて、今回は過去編での補足をやりたいと思います。

まず、最初にですがツヴァイが創られた理由ですね。原作と違い、リィン
フォースが生きている設定なわけですから、どうやってはやてに創らせる
かを考えた結果、シンプルに魔導師を続けたいはやてのためにレイリスが
夜天の書のプログラムとリィンフォースのデータの一部を提供して創ると
いうことにしました。

次にですが、古代ベルカについてです。ミリアがいた場所は、聖王でも覇

王でもない国の設定にしています。なので特にこれと言った、王の設定は
考えてはいません。
夜天の書は、ミリアが初めから創っていたということにしています。そし
て、守護騎士は始めは夜天の書にないことになっていて、ミリアがレイリ
スのために1年で完成させたとしています。
ちなみに、管制プログラムのリィンフォースは始めからいた設定にしてい
ます。作中では、特に触れませんでしたが、こうなってます。
守護騎士のデバイスも2話で出たようにミリアが趣味で創っていた物を使
用した設定です。

それと、最終話でまだ名前のなかったリィンフォースにレイリスがアイン
と名付けてましたが、再開したときに夜天と言っていたのは、契約が破棄
されていたので呼ぶのを躊躇っていたと本人が言ってました。

「言ってねぇよ！」

おっ出て来たのか？今回は出ないかと思ってた。

「それは、おまえ次第だろ。」

それもそうか。それじゃあ、補足はこれくらいで今更だけど主人公設定をやります。

「本当に今更だな！」

主人公設定

名前：レイリス・ユースティア

階級：時空管理局最高管理者（本人いわく通称らしい）

魔導師ランク：空戦ＳＳ

魔力資質：ＳＳ（だが、クリフォトのせいでほぼ無限）

魔力変換資質：凍結（作中では、一度も使われていないが一応ある）

魔法術式：不明（ミッド式でもベルカ式でもない、今は失われた術式。）

魔力光：漆黒

デバイス：インテリジェントデバイス“インフィニット”
ユニゾンデバイス“リィンフォース？”
ストレージデバイス“夜天の書”（オリジナル。現在、封印中）

時空管理局創設者の１人にして管理局トップだった人物。隠居して地球の海鳴市にて暮らしていたが、闇の書事件以降、なのはたちが中学を卒業と同時にアリシアと共にミッドチルダの自宅に移る。
そして現在、三提督に依頼されいやいやながら現場復帰をした。

こんなところかな？

「意外とふつうだな。もっとチートかと思った。」

それもおもしろいけど、割とふつうの方が好きなんだ。

「そうなのか。それより次回からいよいよＳｔｒｉｋｅｒＳの始まりだな。」

ああ、今からわくわくが止まんねぇ！

「どんな構成にするんだ？」

基本は、原作重視。だけど、Ａ'ｓと同じでとんでもない設定を考えている。

「そんなにすごいのか？」

すごいな。俺もなのはの二次創作はいろいろ見て来たけど、俺の考えている設定は今までなかったな。

「言い切るほどか」

ただ、俺が知らないだけであるかもしれないけど・・・

「急に弱気な。」

と言うことで、次回Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編がスタートします。

闇の書事件から１０年。少女たちは、時空管理局の魔導師として活躍していた。

楽しいこと辛いことを経験し成長していく彼女たち。

夢を叶え、自分の部隊を立ち上げた少女を中心に新たな仲間を迎え彼女たちは動き出す。

そこへ、ミッドチルダ史上最大の事件が幕を開ける。

果たして彼女たちは、事件を解決することができるのか？

そして、永遠の魔法使いは・・・

魔法少女リリカルなのは～Ｌａｓｔ　Ｗｉｚａｒｄ～Ｓｔｒｉｋｅｒｓ始まります。

第1話　「少女たちの始まり（前編）」（前書き）

４年前の大火災。

少女たちには、それが始まりだった。

第1話　「少女たちの始まり（前編）」

００７１年　４月２９日　ミッドチルダ臨海第８空港

「ダメだ！ダメだ！こっちはダメだ！」

「こっちに子供が取り残されてるんだ！何とかならないのか！？」

レスキュー隊と思われる人たちが必死に消化作業をしていた。ミッドチルダ臨海第８空港は、現在紅蓮の炎に包まれていた。炎は空港全体に広がり最早絶望的状況にあった。

「さっき本局の魔導師が突入した！救助は彼女がしてくれる！」

どうやら魔導師が突入したようだった。彼女と言うことは女性らしい。

―――――――

火の海の中、1人の女の子が父親と姉を探していた。どこにいるかもわからない2人を探して彷徨い続ける。

ドォーン

「きゃっー！」

少女のそばで、突然爆発が起き少女は吹き飛ばされた。

「痛いよ・・・痛いよ・・・こんなのいやだよ・・・帰りたいよ・・・」

爆発のショックで怪我をし、痛いと言い泣き出す少女。すると、少女の後ろにある銅像が不気味な音を立てた。

ビシッ・・ビシビシッ・・・

土台の部分が崩れかけ、今にも少女の方に倒れてきそうだった。

「誰か助けて・・・」

ドォン！

ついに土台が完全に崩れ、銅像が少女の方に倒れてきた。少女は、それに気付いたが、逃げるには遅すぎた。徐々に迫る銅像に少女は目を瞑った。

キィィィィン

「大丈夫か？」

「えっ！？」

少女が目を開けると、倒れてきている銅像を片手で受け止めている青年が目に入ってきた。青年は、銅像を脇へ退かし少女に下に来た。

「大丈夫？怪我は・・・ちょっとあるか。待ってね。」

キィィィィン

「あっ！」

青年は、治癒魔法で少女の怪我を治した。そして、一通り治した後、

青年は少女に手を差し出した。

「さぁ、一緒に外に出よ。」

「でも・・・お姉ちゃんが・・・」

「お姉ちゃん？お姉ちゃんがいるの？」

青年が少女に聞くと、少女はコクッと頷いた。

「一緒にここに来たの。でも、はぐれちゃったの。」

「そうか・・・（どうする。この子を先に外に出してから、もう一度・・・いや、それじゃあたぶんこの子のお姉ちゃんは助からない。どうする・・・）」

青年がどうするか迷っていると、突然青年の胸元から声が聞こえてきた。スバルは、突然の事に驚いた。そしてよく見てみると声の主は、どうやら青年が首から下げている十字架から聞こえているようだった。

「＜　マスター、こちらに魔導師が1人近づいて来ています。おそらくは・・・　＞」

「それって・・・しょうがない任せよう。あっえっと・・君名前は

？」

「スバル、スバル・ナカジマ・・・」

「ナカジマ！えっと・・・もしかしてお姉ちゃんの名前ってギンガ？」

「うん。知ってるの？」

少女こと、スバルの返事を聞いて青年は苦笑いをした。そして青年はスバルの頭に手を乗せた

「スバル。今からここに魔導師のお姉ちゃんがくるから。その人と一緒に外に出て。」

「えっでも、お姉ちゃんは？」

「大丈夫！ギンガはお兄ちゃんが、助けてくるから。はい！約束。」

青年は、スバルの小指に自分の小指を絡ませた。ようするに指切りだ。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲～ます♪指切った♪」

「なにこれ？」

「地球って言う世界の約束の儀式かな？」

青年は、そう言い立ち上がった。そしてスバルに結界魔法をかけた。

「この中に居れば大丈夫だから。それじゃあ！」

「あっ！」

青年は、そのまま飛んで行ってしまった。そして、スバルはまた１人になってしまった。１人になった事でまた、泣き出しそうになったが、すぐに助けが来た。

「大丈夫！助けに来たよ！」

スバルを助けに来た魔導師は、白いバリアジャケットに髪をツインテールにした少女だった。そして、その少女はスバルにそばに来た。すると、スバルが結界の中に居るのを見て驚いた。

「結界？一体誰が？」

少女が、不思議に思っているとスバルが、その理由を話した。

「えっと・・・お兄ちゃんが助けてくれたの。」

「お兄ちゃん？君の？」

「ううん。知らないお兄ちゃんだった。」

少女は、それを聞いて困った。しかし、スバルからそのお兄ちゃんの特徴としゃべる十字架の話を聞いたらそのお兄ちゃんの正体がわかった気がした。

「来てたんだ・・・うん！それじゃあ、外に出よ。安全な場所まで一直線だから。」

魔導師の少女は、そう言い天井を見た。

「＜Ｕｐｗａｒｄ　ｃｌｅａｒａｎｃｅ　ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ．＞」

キィィィィィィン

「＜Ａ　ｆｉｒｉｎｇ　ｌｏｃｋ　ｉｓ　ｃａｎｃｅｌｌｅｄ．＞」

「一撃で地上まで抜くよ！」

「＜　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　＞」

彼女のデバイスはカートリッジを2発ロードした。すると、デバイスにピンク色の光の羽根が広がった。
その舞い上がる羽根にスバルは見とれていた。

「＜　Ｂｕｓｔｅｒ　ｓｅｔ．　＞」

少女は、天井に向かって自身のデバイスを構えた。

「ディバイン・・・バスター！」

高出力の砲撃魔法で少女はスバルのいたエントランスの天井を貫いた。そして、少女はスバルを抱きかかえながら飛び出てきた。

「こちら教導隊０１。エントランスホール内の要救助者、女の子を一名救助しました。」

「〈ありがとうございます！さすが、航空魔導師のエースオブエースですね！〉」

「西側の救護隊に引き渡した後、すぐに救助活動を続行しますね。」

「〈お願いします！〉」

魔導師の少女は、スバルを救出したことを報告した。スバルはその様子を抱きかかえながら聞いていた。
そして、スバルはふと空を見上げた。すると、そこには満天に輝く星空が広がっていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「スバルー！どこー！」

スバルが魔導師の少女に救出されていた頃、１人の少女がスバルを探していた。

「スバルー！返事して！」

少女のいるところは、非常階段のような場所だった。幸いにもそこには、火の手はまだ来ていなかった。だが、度重なる爆発のショックで建物自体の強度が落ちていて今にも崩れようになっていた。

「お姉ちゃんが、すぐに助けに行くから・・・」

床を這いながら、必死に妹を探す少女。しかし、いくら呼んでも返事は返ってこなかった。

「スバル！」

ビシビシ・・ドォーン！

突然、床が崩れ少女は真っ逆さまに落ちて行った。

「きゃあああああああああああ！」

第1話　「少女たちの始まり（前編）」（後書き）

第1話でした。

「いきなり、過去の話で始まりかよ。」

いいじゃん。これがないと始まらないんだし・・・

「まぁいい。それで前編ってことは、次回も過去の話か?」

そうなるな、書いてたら予想以上に長くなりそうだから、分けただけだけど。

「てことは、本編はまだ先か・・・」

まぁ、焦らずにゆっくり行こうよ。と言うことで次回、第2話で会いましょう。

第2話　「少女たちの始まり（後編）」（前書き）

1人の少女は夢を語る。

そして、友たちと一緒にその夢に向かって歩き出した。

第2話　「少女たちの始まり（後編）」

スバルが、魔導師の少女に救出され外に出た頃、お兄ちゃんこと、レイリス・ユースティアはスバルの姉ギンガを探していた。

「どこだー！ギンガー！」

「返事しろ！ギンガー！」

ギンガを必死に呼ぶも返事はない。レイリスは、焦りだしてきていた。この場もいつまで持つかわからない。

「インフィ！サーチに反応は？」

「＜　ありました。この先に生体反応が出ています。　＞」

「わかった。行くぞ！」

レイリスは、インフィの指示通りに反応が出た場所に向かった。そして、着いた場所は非常階段のようなところだった。幸いにも火の手が来ていなかったので、レイリスはほっとした。

「ギンガはどこに？」

「きゃあああああああああああ！」

「何！？」

レイリスが、ギンガを探そうとすると、悲鳴が聞こえてきた。レイリスが下を見ると、１人の少女の足元が崩れ、落下して行くのが見えた。

「ギンガ！くそっ、インフィ！」

「＜　ポイント・ムーヴ　＞」

レイリスは、転移魔法でギンガの下に移動した。そして、落下している何とかギンガをキャッチした。

「大丈夫か？ギンガ！」

「えっ？・・・私落ちて・・・わぁっ！」

ギンガは、突然目の前にレイリスの顔があったので驚いてしまった。

「えっと・・・あなたは誰ですか？」

「一応、救助隊かな？」

レイリスは疑問形で答えた。

「それより、早く外に出よう。」

「待ってください！まだ、妹がいるんです！探さないと！」

「スバルなら大丈夫。今頃、外に出てるよ。」

「えっ！スバルを知ってるんですか！？」

レイリスの口からスバルの名前が出て来て、ギンガは驚いた。

「ここに来る前に俺が、助けて来た。だから、大丈夫。」

「よかった・・・スバル・・・」

スバルが無事だとわかって、ギンガは安堵した。

「それじゃあ、行くよ。」

キィィィィィン

レイリスは、ギンガを抱いたまま転移魔法でその場から脱出した。

―――――――

「最悪の事態は回避できそうか？」

「はいです！」

「よし。おちびの空曹さんも、もういいぞ。自分の上司のとこに合流してやんな。」

「いいえ。もう少し情報を整理して、指示系統を調整してからにします。」

「そうかい。まぁ、助かるがな。」

「さすが、リインだ。えらいぞ。」

「えっ？」

リインと呼ばれた女の子は、後ろを振り向いた。すると、そこには1人の女の子を抱っこしたレイリスが立っていた。

「レイくん！」

「レイさん！あんた、何でここに！と言うかなんでギンガをあんたが抱っこしてんだ！」

「でかい声を出すなよゲンヤ。娘を助けてきてやったんだから。」

レイリスは、そう言いギンガを降ろした。そして、ギンガはゲンヤの下に走って行った。

「うえぇぇぇぇん、お父さん！」

ギンガは、ゲンヤに抱きつき泣き出した。そして、ゲンヤはギンガを優しく抱きしめた。

「ありがとうな、レイさん。ギンガを助けてくれて。」

「いいよ、お礼なんて。ところでリイン、はやては？」

「はやてちゃんなら、消化活動に行きました。」

リインが、そう言うとレイリスは空港の方を見た。

「じゃあ、俺も行ってくる。リイン、また後でな。」

「待って！」

「ん？」

呼び止められ振り向くと、ギンガがレイリスのそばに来た。

「あの、助けて頂いてありがとうございます。」

「どういたしまして。またねギンガ。」

ギンガは、お礼を言って頭を下げた。そして、その頭にレイリスは手を乗せて撫でた。

「／／／

「八神一尉、指定ブロックの避難完了です。」

「お願いします！」

救助隊の2人がはやてに向かって言う。

「了解！来よ、氷結の吹雪《アーテム・デス・アイセス》」

はやての氷結魔法によって、空港を覆っていた炎の一部が消えた。
そして、その光景を見ていた局員たちは、圧倒されていた。

「すっげー！」

「これがオーバーSランク魔導師の力・・・」

「巻き添えごめんな。私、1人やとどうも調整へたで・・・」

「まだまだ、修行不足だな。」

「へ？」

突然声を掛けられて、はやては間抜けな声を出してしまった。

「レ、レイ君！どうしてここに！」

「手伝いに来たんだけど・・・不要だったかな?」

「そんなことあらへんよ!助かるわ」

「でも、ほら。」

「え?」

レイリスが、指指す方向を見ると応援らしき部隊の姿が見えた。

「遅くなってすまない!現地の諸君と臨時協力のエースたちに感謝する。あとは、こちらに任せてくれ!」

「了解しました!引き続き協力を続けますので、指示をお願いします。」

「じゃあ、はやて。俺は、向こうに行くからまた後で。」

「うん。わかった。」

レイリスはそう言い残し行ってしまった。そして、それから懸命な救助活動と消化活動によって火災事件は事なきを得た。

それから、一夜明けた。臨時で協力していた、なのは、フェイト、はやて、リインフォース?の3人はホテルの部屋でぐったりとしていた。

「う~ん、やっぱりな・・・」

「うん?」

「実際働いたんは、災害担当と初動の陸士部隊となのはちゃんとフェイトちゃんやんか。」

「あはは・・まぁ休暇中だったし・・・」

「民間の人たちは無事だったんだし。」

「あんな、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

はやては、真剣な顔をして2人を見た。

「あたし・・やっぱり自分の部隊を持ちたいんよ!今回みたいな災害救助はもちろん、犯罪対策も発見されたロストロギアの対策もなんにつけミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる!」

はやてのいう事に目を見開いて聞いているなのはとフェイト。

「後手に回って承認ばっかりの動きじゃアカンし、あたしも今みたいにフリーで呼ばれてはあっちこっち回ってたんじゃ、ちっとも前に進めてる感じがせえへん。少数精鋭のエキスパート部隊。それで成果を上げてったら、上の方も少しは変わるかもしれへん。」

はやての考えていることは、すごいことだった。

「でな、あたしがもしそんな部隊を作ることになったら、フェイトちゃん、なのはちゃん、協力してくれへんかな？」

はやては、なのはとフェイトに聞いた。そして、２人は顔を見合わせた。

「も、もちろん！２人の都合とか進路とかあるんはわかるんやけど・・・」

「はやてちゃん、何を水臭い！」

「小学３年生からの付き合いじゃない。」

「それに、そんな楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら、逆に怒るよ！ねっフェイトちゃん！」

「うん！」

2人はそう言い、クスッと笑った。

「おおきに！ありがとうな、なのはちゃん、フェイトちゃん！」

はやては、ニッコリと笑った。

「〈良い話に水を差すようで悪いけど、年頃の女の子がそんな恰好でいるのはどうかと思うよ。〉」

「「「えっ！？」」」

突然の念話になのは、フェイト、はやての3人は驚いた。

「〈まぁ、俺にとっては目の保養になっていいんだけど・・・〉」

「レイ君！」

「うそ！レイリス！」

「わぁっ！」

3人は、急いで胸元などを腕で隠した。そして、レイリスがどこに

いるのか探した。

「〈救助活動、お疲れさん。俺は、まだ用があるからこれでさよならだ。それでは。〉」

「待ちや！レイ君！」

「許さないよ！レイ君！」

「待ちなさい！レイリス！」

はやて、なのは、フェイトの怒号がホテル中に響いた。

第2話　「少女たちの始まり（後編）」（後書き）

これにて、４年前の火災事件は終わりです。

「ようやく、次回から本編の始まりか・・・」

ＳｔｒｉｋｅｒＳは、バトルシーンが多いからそれが悩みだよ。

「それよりさ、なのはたちの俺の呼び方、変わってなかった？」

ああ、そのことね。それは、なのはたちが成長しておまえの見た目年齢に近づいて来たから、呼び方を変えたんだよ。

「そう言うことか。」

いずれ、なのはたちの方が見た目が上になるからな、いつまでもお兄ちゃんじゃまずいだろ。

「確かに・・・」

それと、余談なんだがＳｔｒｉｋｅｒＳを久しぶりに見て気付いたんだけど、この火災事件が起きた日って俺の誕生日と一緒だったんだ。驚いたぜ！

「どうでもいい！」

と言うわけで次回、第３話で会いましょう。

第3話　「空への翼、憧れの人」（前書き）

あの火災事故から４年。

成長した少女は、憧れの人に再開する。

第3話　「空への翼、憧れの人」

００７８年　４月　ミッドチルダ　臨海第８空港近隣　廃棄都市街

あの火災事件から４年の時が流れた。あの時、魔導師の少女に助けられた女の子、スバル・ナカジマは助けてくれた魔導師の少女に憧れ、時空管理局の魔導師となった。そして現在、スバルは魔導師ランク昇進試験の真っ最中である。

「フッ！」

試験前に念入りにウォーミングアップをするスバル。そして、その後ろにはオレンジの髪をツインテールにしている女の子がいた。

「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのおんぼろローラーが逝っちゃうわよ。」

「え～、ティア！嫌なこと言わないで！ちゃんと油も差してきた。」

ティアナ・ランスター。それが、スバルと一緒にいる少女の名前だ。スバルとは、第４陸士訓練校でルームメイトとして出会い、以来腐れ縁の中である。

ビーーーー

「おはようございます！」

ブザーが鳴り、スバルとティアナのそばに空間モニターが出てきた。
そして、そこに映っていたのは、リインフォース？だった。

「さて、魔導師試験受験者2名揃ってますか？」

「「はい！」」

「確認しますね。時空管理局陸士３８６部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士と」

「はい！」

「ティアナ・ランスター二等陸士。」

「はい！」

リインが、２人の所属、名前、階級を確認して、スバルとティアナはそれに返事をした。

「保有している魔導師ランクは、陸戦Ｃランク。本日受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇格試験で間違いないですね？」

「はい！」

「間違いありません。」

「はい。本日の試験官を務めまのは私、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長です。よろしくですよ。」

「「よろしくお願いします！」」

リインが、スバルとティアナの2人に今回の試験内容の説明と自身の紹介をした。そして、お互いによろしくと言い、試験の準備に入る。すると、試験会場である廃棄都市街の上空に一機のヘリコプターが飛んでいた。そして、その中から試験の様子を見ている人物がいた。

「お、さっそく始まってるな！リインもちゃんと試験官している。」

「はやて、ドア全開だと危ないよ。モニターでも見られるんだから。」

ヘリの中にいたのは、時空管理局二等陸佐八神はやてと時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンだった。

「は～い。」

はやては、そう言いヘリのドアを閉めた。そして、フェイトがモニターを開いて様子を見る事になった。

「この2人が、はやての見つけた子たちだね。」

「うん。2人ともなかなかのびしろがありそうなええ素材や。」

「今日の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き?」

フェイトは、はやてに聞いた

「うん、直接の判断はなのはちゃんにお任せしてるけどな。」

「そっか。」

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下で教え子になるわけやからな。」

―――――――

ithin the range. There is no dangerous object either.＞」

その頃、試験コースのチェックをしている1人の少女がいた。

「＜Check of the course was finished.＞」

「うん、ありがとう、レイジングハート。」

少女の正体は、はやて、フェイトの親友、高町なのはだった。

「観察用のサーチャーと障害用のオートスフィアも設置完了。私たちは、全体を見てようか？」

「＜Yes, my master.＞」

「2人は、ここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。あっ！もちろん、破壊してはダメなダミーターゲットもありますからね。」

リインは、スバルとティアナに試験内容を説明をしていた。

「妨害攻撃に気を付けて、すべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。何か質問は？」

「えっと・・・」

「ありません！」

「では、スタートまで後、少しゴール地点で会いましょうですよ。」

そう言って、リインはモニターを閉じた。すると、直後に試験開始のカウントダウンが、始まった。それに合わせスバルとティアナは、スタートダッシュの構えを取った。

「レディ・・・」

「「ゴー」」

スタートと同時に2人は、走り出した。

「おっ始まった！始まった！」

「お手並み拝見っと。」

そして、その様子を見ていたはやてとフェイト。だが、2人が乗っているヘリよりもまだ、上空に1人の人影があった。

「へー、あれがはやての見つけた子たちか。スバル・ナカジマにティアナ・ランスター・・・」

そこにいたのは、時空管理局最高管理者、レイリス・ユースティアだった。

「どっちも俺の知ってる子じゃないか。また、妙な運命だな。」

「＜　マスター。ゼスト隊とティーダ・ランスターの事でしたらマスターが、気に病むことでは・・　＞」

「そうもいかないだろ。俺の責任でもあるんだから・・・やめやめ！今こんな話をしてる場合じゃない。試験を見ないと。」

レイリスは、話を切り上げ試験を見るのに集中した。

「あの2人、かなり良いコンビだな。」

試験を見ていると、レイリスはそんな感想を言った。スバルとティアナの2人は、レイリスの目から見てもなかなか見どころがあった。

「このまま、ゴールかな?・・・ってあれ?」

その時、スバルとティアナが言い争っているのが、見えた。

「仲間割れか?・・・いや」

しかし、レイリスの思っている事とは逆に2人は、笑っていた。そして、数秒後ティアナが1人で出てきた。それに伴って試験最後の難関の大型オートスフィアがティアナに向かって攻撃をしてきた。

「1人?それに、あれは・・・」

オートスフィアの攻撃が、直撃をしてもティアナは止まることなく走り続けていた。

「シルエットか?」

走り続けてしたのは、ティアナの魔法フェイクシルエットだった。
それなら、スバルはとレイリスは周りを見渡した。

「う～と・・・あっいた。」

スバルは、廃ビルの屋上にいた。そして、右手を地面につけた。すると、スバルの足元から青色の光の道が伸びた。

「ウイングロード？何をするつもりだ？」

スバルとティアナの考えがまだわからないレイリスは、頭を傾げた。そんな、レイリスをよそにスバルは、ウイングロードを駆け抜け別の廃ビルの中に突撃した。

「なるほど。そういうことね。」

ようやくスバルとティアナの作戦がわかり、レイリスは納得の顔をしていた。

「しかも、ディバインバスターを使うとは・・・」

スバルは、大型オートスフィアの破壊にディバインバスターを使ったのだ。それを見たレイリスは何ともいえない顔をしていた。

「難関もクリアしたし、後はゴールまで一直線か。それじゃあ、ゴール付近で待つとするか。」

レイリスは、そう言いゴールの場所まで飛んで行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「あっ！来たですね。」

ゴールで待っていたリインが、スバルとティアナを視認した。しかし、来たのは良いが、なぜかスバルがティアナをおんぶしていた。

「あと何秒？」

「１６秒！まだ、間に合う！」

そう言い、ティアナはスバルの背中からデバイスを構えターゲットを撃ちぬいた。

「はい！ターゲット。オールクリアです。」

「魔力全開！」

それを聞いたスバルは、残りの魔力を全開で放出した。

「ちょっスバル！止まる時のこと考えてるんでしょうね！」

「へっ？」

気付いた時には、すべてが遅かった。魔力全開で走っていたスバルのスピードはすでに自力では、止まれないほどになっていた。

「あっ何かちょいヤバです。」

「「あああああああああああ！」」

ゴールポイントを過ぎても勢いが止まらない。そして、このまま行けば瓦礫の山に激突してしまう。

「アクティブガード。ホールディングネットもかな？」

「＜　Ａｃｔｉｖｅ　Ｇｕａｒｄ　ｗｉｔｈ　Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎ

ｅｔ．　＞」

ドォーーーーーーーーーーン

「もうー！２人とも危険行為で減点です！」

ようやく止まった２人にリインが言った。

「頑張るのは良いですが、怪我をしては元も子もないですよ！そんなんじゃ魔導師としてはダメダメです！」

「ちっちゃ・・・」

ティアナが、小声で言った。

「まったくもう！」

「あはは、まぁまぁ。ちょっとびっくりしたけど、無事でよかった。とりあえず試験は終了ね。お疲れ様。」

空から声が聞こえたと思うと、白いバリアジャケットにツインテー

ルの魔導師、なのはが降りてきた。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官できてたよ。」

「わ～い！ありがとうございます、なのはさん！」

リインは、両手を広げ喜んだ。

「まぁ細かい事は後回しにして。ランスター二等陸士。」

「は、はい？」

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで。」

「ああ、治療なら私がやるですよ。」

「あ、えと・・すみません。」

すると、ティアナのそばでスバルが、ぼっとしていた。

「なのはさん・・・」

「ん？」

「あっいえ、高町教導官！一等空尉！」

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから。４年ぶりかな、背伸びたねスバル。」

「あ、あの・・」

スバルの目から涙が溢れてきた。

「また、会えてうれしいよ。」

「う、ううう・・うっぐ・・・」

そして、その様子を上空からレイリスは、微笑ましい顔で見ていた。

「ここで、出て行くのは無粋かな?まぁ、会うのは後でいいか。」

レイリスは、その光景を眺め続ける事にした。

第3話　「空への翼、憧れの人」（後書き）

やっと、本編が始まった。

良い事なんだけど、最近ある重要なことに気付いた。それは、レイリスをどうやって機動六課に絡ませるか・・・

最高管理者と言う肩書があるせいで、できたばかりの部隊に入り浸ってるのも不自
然な気がしますし・・・ああ！どうすればいいだ！

まぁ、何とか頑張ってみます。

では次回、第４話で会いましょう。

第４話　「新部隊勧誘、その名は機動六課」（前書き）

２人の少女は、新部隊に勧誘される。

彼女たちの決断は・・・

第４話　「新部隊勧誘、その名は機動六課」

憧れの人との再開は突然に訪れた。４年前の火災事故で自分を救ってくれた恩人に出会いスバルは、抑えきれず涙を流してしまった。

「うっぐ・・・えっぐ・・・」

「私のこと覚えててくれたんだ。」

「あの、覚えてるっていうか、あたしずっとなのはさんに憧れてて・・・」

「うれしいな。」

うれしいと言われ、スバルは俯いていた顔を上げた。

「バスター見たときは驚いたよ。」

「わぁっ！す、すみません勝手に・・・」

「ふふっいいよ、別に・・・」

そんな、なのはとスバルのやりとり見てリインが、言った。

「ランスター二等陸士は、なのはさんの事ご存知ですか？」

「あ、はい、知ってます。本局武装隊のエースオブエース。航空戦技教導隊の若手ナンバーワン、高町なのは一等空尉。」

「そして、管理局の白い悪魔の異名を持つ。」

「「えっ！」」

突然、空から声が聞こえてきてティアナとリインが上を見ると、1人の青年が降りてきた。

「レイ君！どうしたですか？」

「えっ・・誰？」

突然の訪問者に2人は、それぞれ、困惑していた。

「ちょっとな、所用で・・・」

「レイ君・・・」　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「な、なのは・・さん・・」

レイリスが、振り向くとそこには、ニッコリ笑ったなのはがいた。

しかし、その目はまったく笑っていなかった。

「レイ君。今、私の事なんて言ったのかな？」

「えっと・・・その・・・」

「私！悪魔じゃないもん！」　ドォーーーーーーーーーーン（ゼロ距離ディバインバスター）

「ぎゃあああああああああ！」

レイリスに天誅が下った。

「酷い目にあった・・・」

「自業自得やんか。」

試験終了と共に場所を移動し、試験結果が出るまでの間、はやてとフェイトはスバルとティアナを機動六課のフォワードに誘っていった。

「厳しい仕事になるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろ？」

「あ・・えと・・」

「う・・あ・・」

急にそんな事を言われ、スバルとティアナは言葉が出てこなかった。

「スバルは、高町教導官に魔法を直接教われるし、執務官志望のティアナには、私でよければアドバイスとかできると思うんだ。」

「2回も試験に落ちた奴のセリフか・・い、痛っ！」

レイリスは突然の痛みに足元を見た。すると、フェイトがレイリスの足をおもいっきり踏みつけていた。

「えっと、取り込み中かな？」

「ううん。平気やよ。」

「ちょっと足が痛いです。」

そんな、レイリスの発言をなのはは、無視をしスバルとティアナの前に座った。

「とりあえず、試験の結果ね。」

「「はい。」」

「2人とも技術は、ほぼ問題なし。でも、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えています。自分やパートナーの安全だとか、試験のルールを守れない魔導師が、人を守るなんてできないよね。」

「まるで、数年前の誰かさんみたいだ。」　ゴンッ！

「だから、残念ながら2人とも不合格。」

「ッ痛・・・」

なのはの強烈な一撃に頭を押さえうずくまるレイリス。それを見て、はやてとフェイトは苦笑いをし、スバルとティアナは、目を丸くしていた。

「なんだけど。」

「「えっ！」」

「2人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのは、かえって危ないかも。というのが、私と試験

官の共通見解。」

「ですぅ！」

「ということでこれ。」

なのははそう言い、書類と封筒を出した。

「特別講習に参加するための申請用紙と推薦状ね。これを持って、本局武装隊で3日間の特別講習を受ければ、4日目に再試験を受けられるから。」

「え・・え・・」

「あ・・え・・・」

「来週から本局の厳しい先輩たちにしっかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよう。そしたら、Bランクなんて余裕だよ。ねっ！」

なのはは、そう言い微笑んだ

「「ありがとうございます！」」

「合格までは、試験に集中したいやろ。私への返事は、試験が終わってからにしとこうか？」

「「すみません。恐れ入ります。」」

スバルとティアナは、立ち上がって敬礼をした。そして、お互いの顔を見て笑みを浮かべた

―――――――

「まぁ、そうなんだけどさ・・・」

最高のチャンスのはずなのに、スバルは何だか浮かない顔をした。

「あたしは、どうしようかな。遺失物管理部の機動課って言ったら、普通はエキスパートとか特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょう・・・そんなとこに行ってさ・・・今のあたしがちゃんと働けるのかなって・・・」

「ふふ～ん」

「ん？」

すると、スバルが意味深な笑みを浮かべた。

「“そんなことないよ、ティアもちゃんとできる”って言ってほしいんだろ？」

「何言ってんのよ！」

―――――――

「あの2人は、入隊確定かな？」

「だね。」

スバルとティアナが、じゃれあっているのをなのはたちが、見ていた。

「なのはちゃんうれしそうやね。」

「2人とも育てがいがありそうだし、時間かけてゆっくり教えられるしね。」

「ふふっそれは、確実や。」

「新規のフォワード候補は後、2人だっけ。そっちは？」

「2人とも別世界。今、シグナムとアインが迎えに行ってるはずや。」

「なのは！はやて！」

なのはとはやてが話してしるとフェイトとがリインを肩に乗せたレイリスが来た。

「おまたせ。」

「おまたせですぅ！」

「・・・・・」

「ほんなら次に会うんは、六課の隊舎やね。」

「お2人の部屋、しっっっかり！作ってあるですよ！」

「おまえら本当は、付き合ってるんじゃっ」　ゴンッ！　バキッ！

「まったく、2人とも少しは手加減してくれればいいのに・・・」

なのはたちと別れ、レイリスは1人歩いていた。

「この後、どうするか・・・アインのところにでも行ってみるかな。」

「〈お父さ～ん。〉」

「ん？アリシア？〈どうした？〉」

アリシアから念話が来た。

「〈荷造り手伝って～〉」

「〈おまえな、１９にもなって１人で荷造りもできないのか？〉」

「〈だって～・・グスッ・・〉」

「〈わかった。今すぐ帰るから、泣くな！〉」

「〈うん！お父さん大好き！早く帰って来てね。〉」

そう言い、アリシアは念話を切った。

「どこかで、育て方間違ったかな・・・」

第４話　「新部隊勧誘、その名は機動六課」（後書き）

はい、第４話でした。どうも、Ｔｈｅａｔｅｒです。

今回は、なかなか今までにない展開でした。レイリスが、ボケなのか分かりませんが、いろいろやられてましたね。

書いてて思ったんですが、スバルがレイリスを見ても何も驚かなかったですね。これは、単に忘れたわけではなく、スバルがレイリスの顔を覚えてないということです。

なんで、覚えてないかというと、火に囲まれた中で記憶がおぼろげってことにしておいてください。あと、じゃあ何で、なのはのことは覚えてるんだっていうツッコミに関して、なのはは、エースオブエースとして名前が有名だから覚えていたんです。

それに対して、レイリスは管理局員でも顔を知らない人が、多いんです。だから、スバルはわからなかったんです。

以上、そういうことです。

では次回、第５話で会いましょう。

第5話　「始まりの日」（前書き）

少女の夢が始まる日

第5話　「始まりの日」

「はぁ～」

「どうした？溜息なんてついて。」

「別に・・・」

レイリスが、アリシアの罠に嵌っていた頃、シグナムとアインは残りのフォワード候補の2人を迎えに行っている最中だった。だが、そこでアインは盛大に溜息をついていた。

「まぁ、大体わかってるがな。大方レイリスのことだろ？」

「う、うるさい！大きなお世話だ！」

「ふふっ。」

シグナムの言うとおり、アインが溜息をついてる理由はレイリスだった。なぜかと言うと、本当ならレイリスも一緒にこの場にいるはずだったのだ。だが、急にレイリスが別のフォワード候補を見に行くと言いだして来れなくなったのが原因だった。

「笑っているが、おまえこそマスターが来れなくなったと聞いた時、すごく残念そうな顔をしていたくせに。」

「な、私はそんな顔はしていない！」

「否定するだけ無駄だぞ。」

「お疲れ様です。」

「ん？」

アインが、シグナムと言い合いをしていると突然声を掛けられた。声のした方を見るとそこには、赤髪の少年がいた。

「私服で失礼します。エリオ・モンディアル三等陸士です。」

「ああ、遅れてすまない。遺失物管理部機動六課のシグナム二等空尉だ。」

「同じく、リインフォース？二等空尉だ。・・・それと、もう一人は？」

「あ、はい。まだ来ていないみたいで・・・あの！地方から出てくるとのことなので、迷ってるのかもしれません！探しに行ってもいいでしょうか？」

エリオがそう言うとシグナムとアインは顔を見合わせた。そして

「頼んでいいか？」

「はい！」

エリオは、そう言いもう一人を探しに行った。

そして数瞬間後。

０７５年　４月　時空管理局　遺失物対策部隊　機動六課隊舎。今日この日に機動六課は始まる。

「リインにちょうどええサイズがあってよかったな。」

「はぁ～い。リインにぴったりですぅ。」

機動六課部隊長室。ここに部隊長八神はやてとリインフォース？がいた。２人は自分のデスクに座り、談笑をしていた。すると、部屋のブザーが鳴った。

「はーい！どうぞ。」

「「失礼します。」」

「ああ！お着替え終了やな。」

「お2人とも素敵ですぅ。」

入ってきたのは、なのはとフェイトだった。いつもの違いなのはは、教導隊の制服ではなく管理局の制服を着ていた。

「3人で同じ制服着るの中学校以来やね。なんや、懐かしい。まぁ、なのはちゃんは、飛んだり跳ねたりしやすいように、教導隊制服でいる事が多いかと思うけど。」

「事務仕事とか公式の場では、こっちってことで。」

「ふふっ」

「さて、それでは。」

「うん。」

「ちょっと待って！」

その時、突然誰かが部屋に入ってきた。

「はぁはぁはぁ・・・」

「姉さん！」

「アリシアちゃん！」

部屋に入って来たのはアリシアだった。アリシアは、ひどく息切れをしており、着ている制服を乱れていた。

「アリシアちゃん、やっと来たな。遅刻やで。」

「ごめん・・はぁはぁ・・はやて・・・はぁ・・」

「はやて、どうして姉さんが？」

「それは、もちろんアリシアちゃんも機動六課に誘ったからや。」

「「えーーーーーーーー！」」

フェイトだけなく、なのはも一緒に驚いていた。

「聞いてないよ。」

「言うてへんからな。」

「まったく・・はやてには困ったものだ。」

「「えっ？」」

アリシアの後ろからさらに誰かが入って来た。

「アイン！」

「なのは、フェイト2人とも久しぶりだな。」

「はやてちゃん、もしかしてアインも・・・」

「うん。誘ったで。」

はやては、当たり前のように言った。

「アリシアちゃんとアインには、シグナムとヴィータ同様にスターズとライトニングの副隊長をしてもらうんや。」

「そうなんだ。」

「ちなみに、アリシアちゃんがライトニング。アインがスターズや。」

「よろしくフェイト。」

「うん、姉さん。」

フェイトとアリシアが、そんなことを言っていると隣で、なのはがアインに尋ねてた。

「ねぇ、アイン。どうして遅刻なんてしたの？」

「単にアリシアの寝坊だ。」

「あー！アイン言っちゃダメー！」

「むぐっ！」

遅刻の理由をアインに暴露されて慌てたアリシアがアインの口を塞いだ。

「なんで寝坊なんて。」

「だって！お父さんが起こしてくれなかったから！」

「なんや、アリシアちゃん。いつも、レイ君に起こしてもろうとるん？」

「い、いや～。」

「姉さん・・・」

「アリシアちゃん・・・」

アリシアの発言にはやては、ニヤ顔をし、なのはとフェイトは呆れ顔でアリシアを見た。

「そ、それよりもお父さん来てないの!?家に居なかったんだけど。」

「来てへんよ。呼んでへんから。」

「えっ!じゃあ、どこに行ったの?」

「うちに聞かれてもな。」

アリシアに聞かれはやてが、困っているとまたも部隊長室に訪問者が来た。

「失礼します。」

「あ、グリフィス君どないしたん?」

「えっ!グリフィス君。」

「はい。高町一等空尉、テスタロッサ・ハラオウン執務官お久しぶりです。」

部屋に入ってきたのは、なのは、フェイト、はやての知り合いのグリフィス・ロウランだった。

「久しぶり！グリフィス君。」

「お母さん、レティ提督はお元気？」

「はい、おかげ様で。あ、報告してもよろしいでしょうか？」

「うん、どうぞ。」

「フォワード４名を始め、機動六課部隊員とスタッフ全員揃いました。今は、ロビーに集合待機させています。」

「そうか、結構早かったな。」

「あの、それと・・・」

「ん？なんや？」

グリフィスが、何か言いたそうにしていた。

「はい。八神部隊長の知り合いだと言っている人が、来てまして。今、隊員やスタッフたちと一緒にいるのですが・・・」

「誰や？」

「レイと言えばわかると。」

「えっ！お父さん来ているの！」

「レイ君・・来てるんだ。」

レイリスが来ている事がわかるとアリシアは喜んだが、なのは、フェイト、はやては微妙な反応をした。

「まぁ、ここにいてもなんやし。行こうか？」

「そうだね。」

そうして、隊長陣は部隊長室を出て行った。

第5話　「始まりの日」（後書き）

はい、第5話でした。どうも、Ｔｈｅａｔｅｒです。

何か最近のレイリスがヒロインたち、主になのは、フェイト、はやてに距離を置かれている気がするんですが・・・

まぁ、そんなことよりレイリスを本当にどうやって六課に絡ませるか・・・
今のところ、何にも思いつかないです。

では次回、第６話で会いましょう。

第６話　「思わぬ出来事」（前書き）

機動六課での最初の訓練だけどそこで・・・

第6話　「思わぬ出来事」

グリフィスからレイリスが来ている事を聞いたなのはたちはロビーに向かっていた。

「レイ君、来るんなら連絡してほしかったわ。」

「まぁまぁ、はやて。レイリスも何か事情があったかもしれないし・・・」

「たぶん、無いと思うよお父さんの事だから。」

娘から容赦のない事を言われるレイリスって・・・

「まったく・・・あ、見えてきたで。」

ロビーの近くまで来るとフォワードの４人と話しているレイリスが見えた。

「４人ともすごいね。この部隊にスカウトされるなんて優秀なんだね。」

「優秀なんて・・そんな・・・」

「そ、そんなことないですよ。」

レイリスに優秀と言われ、４人は照れたように笑った。

「レイ君。」

「ん？お、はやて遅かったな。」

「遅かったやあらへん。来るなら来るって言うてくれんと。」

「悪い悪い。」

まったく反省していない様子のレイリスだった。

「まぁ、ええわ。それじゃあ、始めよか。」

最初ははやてからの挨拶から始まった。部隊長のはやてを始め、隊長陣が前に並び、隊員の方になぜかレイリスが一緒に並んでいた。

「さて、長い話は嫌われるんで以上ここまで機動六課課長及び部隊長八神はやてでした。」

はやての挨拶が終わり、発足式が終了した。

「そう言えば、お互いの自己紹介はもう済んだ？」

式が終了した後、なのははフォワードの４人を連れて歩いていた。

「名前と経験とスキルの確認はしました。」

「あと、部隊分けとコールサインもです。」

「そう。それじゃあ、訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「「「「はい！」」」」

それから、なのはは教導制服にフォワードの４人は訓練着に着替えてるために一旦別れた。そして、なのはが、先に着替え終わり訓練場に来ていた。

「なのはさ～ん！」

すると、なのはを呼ぶ声が聞こえてきた。

「シャーリー！」

呼ばれたなのはが振り返るとそこには六課の通信主任兼メカニックのシャリオ・フィニーノが走ってきていた。そして、その横にはなぜかレイリスが一緒にいた。

「レイ君？どうしたの？」

「せっかくだから訓練を見せてもらおうかなと思って。」

「ふふっそれじゃあ、ゆっくり見て行ってね。」

「うん遠慮なく。ん？来たようだな。」

すると、フォワードの４人が着替え終わったようで走ってきた。そして、揃ったところで訓練の前に預かっていたデバイスを４人に返した。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから、ちょっとだけ大切に扱ってね。それからメカニックのシャーリーから一言。」

「えー、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フ

ィニーノ一等陸士です。みんなは、シャーリーって呼ぶのでよかったそう呼んでね。」

シャーリーが、一礼をして自己紹介した。

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするのでときどき訓練を見せてもらったりします。デバイスについての相談があったら遠慮なくいってね。」

「「「「はい！」」」」

「じゃあ、さっそく訓練に入ろうか？」

「あの～なのはさん。」

すると、ティアナがおもむろに手を挙げた。

「なに？ティアナ？」

「えっと・・・そちらの方なんですけど・・・」

「ん？俺か。」

「はい。えっと・・・管理局の方ではないですよね。制服も着ていないですし。」

「あれ、レイ君さっきみんなとお話ししてなかった？」

式の前にフォワードの４人と話していたはずとなのはは思った。

「ああ、そういえば名乗ってなかったか・・・じゃあ、ついでだ自己紹介しよう。」

レイリスは、一歩前に出て自己紹介を始めた。

「えっと、一応初めましてになるかな？俺の名前はレイリス・ユースティア、なのはの小さい頃からの知り合いだ。よろしく。」

「「よろしくお願いします。」」

スバル、エリオ、キャロが一礼して返したが、ただ１人呆然としている者がいた。

「ん？ティア、どうしたの？」

「レイリス・ユースティア・・・・」

ティアナが、レイリスの名前を呟いた。そして、キッとレイリスを睨み付けデバイスを構えた。

「ティ、ティア！」

「ティアナ！」

「あなたが、あなたが・・・兄さんを！」

次の瞬間、ティアナが引き金を引いた。ティアナの放った弾はまっすぐレイリスに向かって行った。

「くっ！」

だが、ぎりぎりのところでレイリスは、弾を躱した。

「この！」

「ティアナ！」

ティアナが追撃をしようとするのをなのはが止めた。

「ティアナ！何をしているの！」

「やめろ、なのは！」

「でも、レイ君！」

「いいんだ。」

レイリスの真剣な目になのははは、仕方なく下がった。

「なのは、今日は帰る。後のこと頼めるか？」

「わかった。」

そう言い、レイリスはその場を後にした。

「残念だけど、今日の訓練は中止にします。スバル、ティアナをお願いできる？」

「は、はい！」

こうして、最初の訓練は思わぬ事態に中止になってしまった。

第6話　「思わぬ出来事」（後書き）

はい、最近寒くて辛い日々を送っているＴｈｅａｔｅｒです。

なんか、すごい事態になりましたね。ティアナがいきなり撃つとは・・・・

最初は、こんな展開にするつもりではなかったんですが、書いているうちにこうしたほうがいいかなと思ってこんなふうにしました。

それに、いつになったらレイリスの正体がフォワードの４人に伝えることができるんでしょうね。もう、タイミングが・・・・

ちなみに、ティアナとレイリスの和解をいつにするか迷っています。すぐに和解するか、なのはに撃墜されるまで待つか・・・

前者はいいですが、後者の場合、ティアナに嫌われたまま進むことになるので難しくなりそうで・・・

まぁ、ゆっくり考えることにします。

では次回、第７話で会いましょう。

第7話　「レイリスとティアナの関係」（前書き）

レイリスとティアナを繋ぐ関係とは・・・

第7話　「レイリスとティアナの関係」

初めての訓練が中止になり、その場で解散となってスバルはティアナを連れて部屋に帰ってきた。

「ティア・・・」

「・・・・・」

スバルは、ティアナをベットに座らせると心配そうな顔をしていた。

「ティア、どうしたの？あんなことティアらしくないよ。」

「あいつは・・・あいつだけは絶対に許さない！」

ティアナの耳にはスバルに声は聞こえていなかった。

一方、なのははティアナの事をはやてに報告しに部隊長室にきてい

た。そして、なのはの他にもフェイト、ヴィータ、シグナムら隊長陣もいた。

「そっか・・・ティアナがそんなことを・・・」

なのはから、報告を受けてはやては、難しい顔をしていた。

「でもよう、なんでティアナはそんな事をしたんだ？」

「確かにそれがわからん。」

ヴィータとシグナムは、ティアナがそうなった理由が分からないと言う顔をしていた。

「まだ、詳しい事はわからないけどティアナには、早く聞いた方がいいね。」

フェイトが、そう言うとみんなが頷いた。すると、部隊長室の外から急に騒がしい音が聞こえてきた。そして、次の瞬間、部隊長室のドアが乱暴に開かれた。

「なのは！どういう事だ！」

「アイン！落ち着いて！」

部隊長室に入って来たのは、怒りを露わにしたアインとそれを宥めようとしているアリシアだった。

「アイン？どうしたん？」

「どうしたじゃない！マスターがティアナに撃たれたそうじゃないか！」

アインが、怒っている理由は、先ほどまで話していたティアナがレイリスを撃った事に対してだった。アインは、見るからに興奮していて手が付けられない状態にあるようだった。必死にアインを抑えているアリシアを見ていればここに来るまでの苦労が覗える。

「アイン。まずは、落ち着きや。そんなんじゃ、説明もできひんわ。」

「わかった・・・・」

はやてに諭されてようやく落ち着いてきたアイン。そして、アインを抑えていたアリシアは、ほっとした顔をしてアインから手を離した。

「それで、何があったんだ？」

「うん、それがね。」

なのはは、何があったのかアインに説明した。レイリスが、名前を言った瞬間にティアナの様子が変わりいきなりデバイスをレイリスに向けて撃ってきたと

「と言うことがあったの。」

「なるほど、そんなことが・・・アイン？」

なのはの説明を聞いて状況を理解した様子のアリシア。だが、ふと隣で同じように説明を聞いていたアインを見ると、なぜか肩を震わせていた。

「アイン？」

「ゆ」

「ゆ？」

「許さーーーん！ティアナ！よくも私の大事なマスターに！」

一度は、収まっていた怒りが話を聞いているうちに再び爆発してし

まった。

「落ち着いてアイン。今の話を聞いてわからなかったの！？」

「わかる？何がだ。」

「お父さんとティアナの事をだよ！」

アリシアにそう言われ、アインは頭に血が上った状態で考え始めた。

（マスターとティアナ・・・マスターとティアナ・・・ティアナ・・・ランスター・・・あっ！）

アインは、思い出したと言う顔をした。

「思い出した？」

「ああ、思い出した。」

アインが思い出したのはいいが、そばで見ていたなのは達は、何のことか分からないと言った顔をしていた。

「あの～私たちにも説明してくれないかな？」

「悪いがそれはできない。」

「えっなんで？」

「マスターの命令だ。だから話すことはできない。」

アインは、絶対に話しそうになかった。それならとアリシアの方を見るが、アリシアもごめんねと言うように両手を合わせていた。

「とりあえず、この話は一端終わりや。なのはちゃん、明日から改めて訓練お願いするわ。」

「うん、まかせて！」

一方、機動六課を後にしたレイリスはとある場所に来ていた。

「久しぶりだな。今日、ティアナに会ってきたよ。」

レイリスは、しばらく会っていなかった友に話しかけるよう話し始めた。

「名前を言った瞬間に手荒い歓迎をされちゃったけどな。」

レイリスは、クスクスと笑いながらさっきの出来事を話し始めた。そして、それが終わると今度は他愛のない世間話を始めた。管理局で無理難題を押し付けられたとか、娘が自分に対する扱いが悪くなってきたことなどたくさんのことを話した。

「さてと、そろそろ行くよ。」

レイリスは、その場から立ち上がった。

「また、来るよ。できれば今度は、ティアナも一緒がいいかな。」

レイリスが、そう言い微笑むと急に風が吹き付けた。まるで、“ああ、頼むぞ”と言うかのように

「ふふっじゃあな、ティーダ。」

第7話　「レイリスとティアナの関係」（後書き）

はい、第7話でした。どうも、Ｔｈｅａｔｅｒです。

６話の時点でレイリスとティアナがどう関係しているのか分かった人も多いと思います。ですが、まだ明らかにはしません引っ張るだけ引っ張ります。

それから、しばらくはレイリスの六課には近づけないようにします。行ったらまたティアナが暴走すると思うので。

なので陰からのサポート役に任命したいと思います。主人公なのにこれでいいのかな？

では次回、第８話で会いましょう。

第8話　「旧友と悩み」（前書き）

ティアナの事をどうするかと悩むレイリス。

第8話　「旧友と悩み」

そして、次の日。改めて初訓練が行われていた。

「昨日はちょっと大変な事があったけど、改めて訓練を始めます。シャーリー！」

「は～い！」

シャーリーは、なのはに言われ空間モニターを出した。

「起動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸戦用空間シュミレーター。ステージセット！」

シャーリーが、そう言うと訓練スペース一面が光だし、そこにビル群が広がりだした。それを見たフォワードの４人は、目を見開いて驚いていた。

「それじゃあ、訓練を始めるよ。」

「「「「はい！」」」」

機動六課、初の訓練が開始された。

そして、その頃、レイリスはと言うと地上本部にいた。

「入るぞ。」

レイリスは、ある一室の扉を断りもなしに開けた。

「おや、レイさん。」

「レイさん・・・あんたはまたノックもせずに・・」

「どうだ調子は?」

部屋の中にいたのは、時空管理局・法務顧問相談役レオーネ・フィルス、武装隊栄誉元帥ラルゴ・キール、本局統幕議長ミゼット・クローベルの3人。通称伝説の3提督だ。

「それで、今日は何でここに？」

ミゼットが、尋ねた。

「お前たちが、地上本部に来てるって聞いて会いに来たんだよ。」

そう言って、レイリスは椅子に座った。

「ふん、ただ会いに来たわけではないだろう？」

「ああ、まぁな・・・」

レイリスは、しばらく目を瞑ってから一呼吸おいて話し始めた。

「ティーダ・ランスターの事は覚えているか？」

「ん？ああ、覚えているが・・・」

「それが、どうした？」

ラルゴたちは、首を傾げた。

「なら、その妹。ティアナ・ランスターが機動六課にいるのは知ってるか？」

「ああ、六課の人員は把握してる。当然知ってるが・・・」

「昨日、六課に行って名前を言ったら、ティアナに手荒い歓迎を受けた。」

「な、何と！」

それを聞いた3人は驚きを隠せなかった。

「レイさんの事を覚えていたのか？」

「いや、違うな。」

レイリスは、その言葉を否定した。

「あの、事件の事を調べればわかるだろうよ。」

「そうか・・・」

そして、しばらく沈黙の後

「それで、レイさんはどうするつもりだい？」

「しばらくは、様子を見る。後は、それからだ。」

「相変わらずだなレイさんは。」

3人は、変わらないレイリス事を見て、苦笑した。

「じゃあ、俺はもう行くな。」

「また、会いにきてくれよ。」

「ああ、またな。」

レイリスは、部屋を出て行った。

「さて、これからどうするか・・・ん？あれは・・」

レイリスが、部屋を出て廊下を歩いていると、前から見知った顔をが歩いてきた。

「久しいな、レジアス。」

「あんたか・・・」

歩いてきたのは、時空管理局・中将にして地上本部総司令のレジアス・ゲイズだった。

「ここで何をしている。」

「老人たちと話しがあっただけだよ。」

「3提督か・・・」

レジアスは、レイリスを睨み付けるように見てきた。

「それじゃあな。」

レイリスは、そんなことはお構いなしにレジアスの横を通り過ぎようとする。そして、去り際に

「あんまり、無茶な事はするなよ。レジアス。」

「っん！」

レジアスは、その言葉に動揺した。そして、レジアスが振り返ると

レイリスが後ろ向きで手を振っていた。

「本当に無茶をしないといいけど。」

レイリスは、地上本部を出て考えていた。

「悩んでも仕方ない。行くか。」

レイリスは、気を取り直して歩き出した。

第8話　「旧友と悩み」（後書き）

はい、第8話でした。どうもＴｈｅａｔｅｒです。

今回は、短いです。ネタがない、どうしよう・・・・

六課から離れると何もすることがない。しばらく、構想を練るのに集中することにします。

では次回、第9話で会いましょう。

第9話　「アインの憂鬱」（前書き）

今回は、アリシアとアインのお話。

第9話　「アインの憂鬱」

「すぅすぅすぅ・・・」

機動六課、女性宿舎。
そこの一室で、ライトニング分隊副隊長、アリシア・T・ユーステ
ィアが、気持ちよさそうに眠っていた。

「すぅすぅ・・・」

「いい加減に起きろ！アリシアーーーーー！」

「ひゃっ！」

耳元で突然、大声が響いてアリシアは、飛び起きた。そして、何事
かと周りをキョロキョロと見回した。すると、目の前にすごい形相
のアインがいた。

「アリシア・・お前はいつになったら1人でちゃんと起きるんだ・・
・」

「えっと・・・あは、あははは・・・」

笑って、誤魔化すアリシア。

その光景は、もうお馴染みと言っていいほどだ。小さい頃、まだアリシアが小学生の時、レイリスが多少甘やかしていたため、アリシアは未だに誰かに起こしてもらわないと起きれなかった。

「まったく、もう朝の訓練が終わる時間だ。さっさと着替えて食堂に行くぞ。」

「は～い。」

朝の訓練に参加するはずだったアリシア。しかし、寝坊によりすでに終わる時間になっていた。仕方ないのでアリシアは、パジャマから制服に着替えて、朝ごはんを食べるために食堂に向かうことになった。

「なのはに会ったら、ちゃんと謝っておくように。」

「わかってるって・・・」

（はぁ、私がしっかりしなければ。）

寝坊により、訓練不参加では、副隊長として肩書が泣いているようなものだ。アインは、レイリスの代わりにしっかりアリシアを教育する事を密かに誓うのであった。

そして、2人が食堂に着くと、そこにはすでにフォワードの4人がいた。アリシアとアインは、朝ごはんを取ってくると4人の隣の席に腰を下ろした。

「朝の訓練、ご苦労様。」

「あっ！アリシアさん。」

「アインさんも。」

4人は、訓練に顔を見せないアリシアとアインに何か用事でもできたのかと思っていた。しかし、普通に食堂に来ていた2人を見て、少し驚いていた。

「あれ？何か用事があって訓練に来なかったんじゃ・・・」

別に誰かにそうと言われた訳じゃなかったのだが、スバルは勝手にそう思い込んでいた事を2人に確かめた。

「い、いや・・・そう言う訳じゃない。」

「あはははは・・・」

歯切れの悪い、答えに４人は?を浮かべていた。そして、そんな２人の背後から、ゆっくりと近づいてくる影が、４つあった。

「アリシアちゃん。」

「えっ?」

名前を呼ばれたアリシアは後ろを振り向く。すると、そこには何やらお怒りの隊長陣の皆さんがいた。それを見たアリシアは、嫌な汗が流れてきた。

「それで、何で訓練に来なかったのかな?」

「えっと・・・それは・・・」

来なかった理由は、すでにわかっているのだが、あえてアリシアに言わせようとしているなのは。その、後ろでは、シグナムとヴィータが怒りの形相で睨んでいて、その隣でフェイトが、呆れていた。

「ごめんなさい・・寝坊しました。」

その重圧に耐えられなかったアリシアは、素直に謝った。そして、何とかみんなから許してもらい、改めて朝食を食べ始めた。しかし、アリシアだけはガクッと肩を落とし、食が進んでいなかった。

「どうした、アリシア？」

それを見て、アインが声を掛けた。アリシアは、その問い掛けに答えずに、唸っていた。

「姉さん。もう、みんな怒ってないから、一緒に食べよ。」

アインでは、反応が無かったので、次はフェイトが声を掛けた。しかし、それでもアリシアは反応しない。

「ぐすっ・・」

「「「「えっ！」」」」

次の瞬間、その場にいたみんなが、思いもしない事が起こった。何と、アリシアが目に涙を浮かべて泣き出したのだ。

そんな急に、泣き出したアリシアを見て、なのはたちは慌てざるをえなかった。

「ア、アリシアちゃん！本当にもう、怒ってないから泣かないで。」

「泣かないで姉さん・・・」

なのはとフェイトが、アリシアの頭も撫でたり、背中をさすったりしてあやした。

そして、唯一その光景を見て、冷静でいた人物がいた。それは、アインだった。アインは、１９にもなって、少し怒られただけで、泣き出すアリシアに頭を抱えていた。

（マスター・・・あなたの娘は、どうにかしないといけないみたいです。）

アインは、ここにいない自分のマスターにそんな事を心の中で言っていた。

「ん？・・・なんだろうな、アインから何か来たような・・・」

とある無人の世界。
そこで、レイリスは1人、何かをしていた。そして、誰にも告げずにひっそりと何かをしていた時、ふいにアインから何かがきたような気がした。

「まぁ、気のせいか。何かあったら連絡でも寄こすだろうし。」

レイリスは、それを気のせいということにして、再び何かを始めた。
レイリスが何をしているのか誰にもわからない。一体、無人の世界で1人、何をやっているのか。

第9話　「アインの憂鬱」（後書き）

はい、第９話でした。どうも、Ｔｈｅａｔｅｒです。

レイリスが、使えないということで、しばらくはアリシアとアインに頑張ってもらうことにしました。

それにしても、アリシアのキャラが崩壊しているような気がするのは気のせいか・・・

では次回、第１０話会いましょう。

第１０話　「六課は準備万端！」（前書き）

カリムの所を訪れるはやて。

第１０話　「六課は準備万端！」

「あ～、終わった！終わった！」

機動六課の訓練場。朝練が終わって、なのは、アリシア、そして、少し前にフォワードの４人が寮への道を歩いていた、そこで、アリシアが大きな声を上げて両手を伸ばしていた。

「にゃはは。アリシアちゃん、そんなに疲れたの？」

「だって、私は私で自主練しなきゃいけないんだもん。」

アリシアが、自主練している理由は、アインがやれと言ったからだ。機動六課に来て、レイリスと離れて暮らすようになってからと言うもの。アリシアは、何かとだらしなくなっているのだ。

「うう～。お父さんが居てくれたらな～」

「あんまり、レイ君に頼るのもどうかと思うよ、アリシアちゃん。」

なのはが、アリシアに言う。

「まぁ、それより。みんな！一旦、寮でシャワー使って着替えてロ

ビーに集まろうか。」

「「はい！」」

「ん？あの車って」

なのはたちの目の前に一台の車が近づいて来て、そばに止まった。

「フェイトさん、八神部隊長。」

「うん。」

「すごーい！これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ。地上での移動手段なんだ。」

「みんな、練習の方はどないや？」

「あ～えへへ。」

はやてに言われ、スバルは愛想笑いをする。

「頑張ってます。」

「エリオ、キャロ、ごめんね。私が2人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて・・・」

「あ、いえ、そんな。」

「大丈夫です。」

ライトニング分隊隊長であるフェイトだったが、執務官の仕事もあることから、なかなかエリオとキャロの訓練の見てあげることができずにいた。

「4人とも良い感じで慣れてきてるよ。いつ、出動があっても大丈夫。」

「そうか。それは、頼もしいな。」

「2人は、どこかにお出かけ?」

「うん。ちょっと6番ポートまで。」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ。」

「私は、昼前には戻るから、お昼はみんなで一緒に食べよっか?」

「「「「はい!」」」」

「ほんならな~」

フェイトは、車を発進させて行ってしまった。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局の理事官。カリム・グラシアさんか・・・私は、お会いした事ないんだけど・・」

「ああ、そやったね。」

聖王教会に向かう道中、フェイトとはやてはカリムの話をしていた。

「はやては、いつから？」

「う～ん、私が、教会騎士団の派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばっかりの時やから・・・８年くらい前かな。」

「そっか。」

「カリムと私は、信じてるものも、立場も、やるべきも事も全然ち

ゃうんやけど、今回は2人の目的が一致したから・・・そもそも、六課の立ち上げ、実質的な部分をやってくれたんは、ほとんどカリムなんよ。」

「そうなんだ。」

「おかげで私は、人材集めの方に集中できた。」

「信頼できる上司って感じ?」

「う~ん、仕事や能力はすごいんやけど、あんまり上司って感じはせえへんな。」

はやては、カリムを上司と言うよりは、別の関係を思い浮かべていた。

「どっちかって言ったらお姉ちゃんって感じや。」

「ふふ、そっか。」

「まぁ、レリック事件が一段落したら、ちゃんと紹介するよ。きっと気が合うよ、フェイトちゃんもなのはちゃんも。」

「うん。楽しみにしてる。」

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアナさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ。」

フェイト、はやてと別れた後、フォワード陣はシャワー室にいた。無論、エリオは別。

「訓練校でも、前の部隊でも支給品って杖しかなかったのよ・・・」

「私は、魔法がベルカ式な上に戦闘スタイルがあんなだし、ティアもカートリッジシステムが使いたいからって。」

「で、そうなると自分で作るしかないのよ。訓練校では、オリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね。」

「ああ、もしかしてそれでスバルさんとティアナさんは、友達になったんですか？」

同じオリジナルデバイス持ちと言う共通点があったスバルとティアナ。キャロは、それで2人は知り合い友達になったと思った。

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりって言って。」

「えへへ。さて、キャロ、頭洗おっか。」

「お願いします。」

スバルは、キャロの頭を洗ってあげようとする。キャロもそれを喜んでお願いした。

「私、先に上がってるからね。」

「「は～い。」」

ティアナが、先に出て行った。

「みんな、まだかな・・・」

そして、1人男のエリオは、女性陣のシャワーをフリードと一緒に待っていた。

『騎士カリム。騎士はやてが、いらっしゃいました。』

「早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい。」

『はい。』

「それから、お茶を2つ。ファーストリーフの良い所をミルクと砂糖付きでね。」

『かしこまりました。』

ミッドチルダ北部、ベルカ自治領聖王教会大聖堂。

そこに一室で、金髪の女性、カリム・グラシアがいた。そこへ、はやてが来たと連絡をもらい、自分の部屋へと通すように言った。

「よしっと。」

そして、少ししてカリムの部屋のドアをノックする音がした。

「どうぞ。」

「カリム、久しぶりや。」

「はやて、いらっしゃい。」

カリムはニッコリと微笑んだ。

「ごめんな、ご無沙汰で。」

「気にしないで。部隊の方は、順調みたいね。」

「カリムのおかげや。」

「ふふ、そういう事にしておくと、いろいろお願いしやすいかな。」

「あはは。何や今日会って話すんは、お願い方面か？」

はやてが、茶化すようにそんな事を言った。すると、カリムは少し沈んだような表情になった。そして、モニターを操作して、窓にカーテンを引いた。部屋を暗くした後、カリムはいくつかの空間モニターを出した。

「これ、ガジェット。新型？」

カリムが出したのは、ガジェットに関するものだった。そこには、見たことがないタイプのものまであった。

「今までの?型以外に新しいのが2種類。戦闘性能は、まだ不明だけど、これ。」

カリムは、新しいタイプのガジェットの画像を大きく出した。

「?型は、割と大型ね。」

丸く、人と比べると、大分大きかった。

「本局には、まだ正式に報告はしてないわ。監査役のクロノ提督には触りだけお伝えしたんだけど。」

「これは・・・」

はやては、1つのケースの画像に目をやった。

「それが、今日の本題。一昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物。」

「レリックや、ね。」

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし・・・」

「ガジェット達が、レリックを見つけるまでも予想時間は？」

「調査では、早ければ今日か明日。」

「せやけど、おかしいな・・・レリックが出てくんのがちょっ早いような・・・」

「だから、会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか。」

カリムが、はやてを呼んだのは、まさにこのことだった。

「レリック事件も、その後に起こるはずの事件も、対処を失敗するわけにはいかないもの。」

「うん。」

「あ、はやて？」

はやては、カーテンを開けた。

「まぁ、何があってもきっと大丈夫。カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長たちは勿論、新人フォワードたちも実践可能。予想外の緊急事態にも、ちゃんと対応できる下地ができてる。そやから大丈夫。」

はやては、自身満々に言った。

「それにいざとなったら、頼れるお兄ちゃんがいるからな。」

―――――――

第１０話　「六課は準備万端！」（後書き）

はい、第１０話でした。どうも、Ｔｈｅａｔｅｒです。

お久しぶりです。２ヶ月振りの更新です。ネタに詰まり今まで更新できずに申し訳ありません。

いろいろ考えた結果、これからの話をどうするか決まりました。簡単に言えば、主人公を出しません。アリシアとアインをメインに進めたいと思います。まぁ、気が向けば最後に今回みたいな感じで出します。

そして、いつまで主人公を出さないかは、原作の９話が終わるまで出しません
結構長いですが、レイリス復活まで見守ってください。

では次回、第１１話で会いましょう。

年末特別記念

「今年も、終わりか～長いようで短かったな。」

「マスター、年寄りくさいですよ。」

「実際、精神年齢は年寄りだからな。」

年末と言う事で、レイリスとアインは、海鳴にある自宅に戻ってきていた。長く放っておいたせいか、埃がすごい事になっていた。

「やっぱり、まめに掃除に来るべきだったな。」

「そうですよ。マスターは、基本的に暇なんですから、掃除に来てください。」

「ごめん、ごめん。」

アインに小言を言われながら、掃除をするレイリス。ちなみに、何でレイリスとアインしかいないかと言うと、機動六課の方でも大掃除がある為、アリシアはそっちに行ってるのだ。

「早く、掃除を終わらせないと、あいつらが来ちゃうからな。」

六課の大掃除が、終わるとアリシアと一緒になのはたちが、こっちに来ることになっていた。六課の隊長陣とフォワードで、年を越すと言う計画を立てていた。レイリスに相談も無く。

「そう言えば、あの時もこんな感じだったよな。」

「あの時とは？」

「闇の書事件が、解決した時さ。」

闇の書事件が、解決した時もこんな年の瀬だった。全てが、終わり無事に大晦日を迎えられた事をみんな喜んでいた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「アリシア。ちゃんと掃除してるか？」

今日は、大晦日。ユースティア家でも大掃除が始まっていた。レイリスは、アリシアがちゃんと掃除をしているか部屋を見に行った。

「あ、お兄ちゃん・・・」

「進んでいないみたいだな。アリシア・・・」

「や、やろうとしたんだよ。でも、中々思い通りにいかないと言うか。」

言い訳をするアリシアを見て、苦笑いをするレイリス。体は、フ

ェイトと同じくらいにしたが、精神年齢はまでは、年相応にはできない。だから、こうなるのは大体予想できていた。

「ごめんなさい・・・」

「良いって、アリシア。一緒にやろ。」

泣きそうなアリシアを宥めて、一緒に部屋を掃除することになった。そして、掃除が終わると、出かける準備をする。

今日は、翠屋で年越しをする事になっていた。俺たちに、リンディ一家、八神一家が揃うことになっている。ちなみに集合時間は、まだ先だが準備を手伝う為、一足先に翠屋へ出発した。

「こんにちは。」

「こんにちは。」

「あら、いらっしゃい。レイ君、アリシアちゃん。」

翠屋に着くと桃子さんが、出迎えてくれた。それにしても、相変わらず若いな・・・見た目が・・・

「何か、言ったかしらレイ君?」

「いえ、何も言ってませんよ。別に・・・」

結構、鋭い桃子さんに睨まれながら、レイリスは誤魔化した。

「それで、どうしたの?まだ、時間早いけど。」

「準備を手伝おうと思いまして。」

「そうなの、ありがとう。それじゃあ、手伝ってもらおうかしら。」

「はい。あ、なのははいますか?」

「ええ、いるわよ。」

「それじゃあ、アリシア。なのはと一緒にいろ。」

「はぁ～い。」

レイリスは、桃子さんと一緒に準備をアリシアは、なのはの部屋に向かった。

「なのは～入るよ。」

「え、あ、アリシアちゃん！」

「こんにちは、なのは。」

アリシアが部屋に入ると、なのはは、ユーノと一緒にいた。すでに魔法の事はバレているのだが、ユーノはフェレットの姿だった。

「何でユーノ、フェレットなの？」

「やあ、アリシア。何かこっちの姿の方が慣れちゃって。」

長い事、フェレットの姿でいたせいか、人間の姿よりフェレットの姿の方が、楽なんだそうだ。それでいいのかユーノ。

「それで、アリシアちゃんは、なんで家に？」

「お兄ちゃんが、今日の準備のお手伝いしに行こうって言ったから来たの。それでね、私はなのはと一緒にいなさいって。」

アリシアは、なのはにレイリスに言われた事を言った。そして、それから数時間が過ぎた。

「それでは、皆様。グラスを持ちましたか？それじゃあ、乾杯！！」

「「「「「乾杯！！！」」」」」

時間になり、リンディ家と八神家が、翠屋に来た。そして、全員が揃ったところで年越しパーティが始まった。

「で、何でアインが俺の隣なんだ？」

「別にいいじゃありませんか、私はマスターの物なんですし・・・」

アインさんや。今の発言は結構危ないですよ。ほら、なのは、フェイト、はやて、何でかシグナムも一緒にこっちを睨んでるし・・・

「はぁ～、まぁいいけど。」

「はい。」

―――――――

呂律は、はっきりしているが、完全に絡み上戸になっているシグナム。さっきから、レイリスが絡まれていた。しかも、それだけならまだよかったのだが・・・

「マスタ～、私も構ってください・・・」

レイリスの服をちょんと摘まんで上目づかいで見つめてくるアイン。こっちも酔っていてレイリスに絡んできていた。しかも、シグナムみたいにではなく、普段よりも弱弱しくなって甘えてきてるのだ。

「はい、はい。アインは、可愛いな。」

「えへへ。マスタ～？」

「レ～イ～リ～ス～～（怒）」

アインばかり、構った為、シグナムが怒り心頭だった。それに、さっきからあっちの方で、魔法少女たちが、睨んできてるし・・・どうしたらいいのやら・・・

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「何てこともあったな。」

「マスター！それは、忘れてくださいとお願いしたはずです！」

「いいじゃないか。あの時のアイン、本当に可愛かったよ。」

「なっ／／／／／／」

アインをからかって、遊ぶレイリス。来年も楽しくなりそうだ。

年末特別記念（後書き）

はい、Ｔｈｅａｔｅｒです。

大晦日と言う事で更新しました。出来はよくありません。
それと、新年最初にまた似たような事をやります。

では、今年最後の更新でした。また来年で会いましょう。

新年特別記念

「みんな、あけましておめでとうございます。」

レイリス・ユースティアが、誰もいない所で1人、そう呟いた。
年が明け、新年を迎えた現在、ユースティア家では、レイリスが1人、朝食の準備をしていた。何で1人でそんな事をしているかと言うと、年越しを海鳴でしようと、はやての提案ですることになり、レイリスの家でやった。
そして、めでたく年を越したのはいいが、その場にいたみんなが、新年を迎えた直後に眠りについてしまった。本来なら、新年を迎えたら、それぞれの家に戻って、それから初詣に行こうと言う計画だったのが、睡魔に勝てなかったようだ。
そこで、レイリスは1人でその場にいた全員を客間に運んで布団の中に入れた。レイリスも自分の部屋で一眠りした後、今の状況と言う訳である。

「うう～マスター、おはようございます・・・」

「お、アインか。おはよう。」

そこにアインが、起きてきた。見るからに具合が悪そうだ。それそうだ、あれだけ酒を飲まされればな。ちなみに、こっちではなのは、フェイト、はやては、まだ飲酒できる歳じゃないので飲ませてはいない。

「すみません。寝坊してしまって・・・」

「いいよ。それより、具合はどうだ?まだ、辛いなら無理せず、寝ててもいいぞ。」

「いえ、そう言う訳にはいきません。」

そんな事を言うが、かなり辛そうなんだが・・・まぁ、俺のような体じゃないから仕方ないだろうけど。俺は、クリフォトの力のおかげで、酔ったとしても酔う前の状態に戻せるから、二日酔いなんて経験した事がない。

「初詣も、この調子じゃ午後になるから、寝て来い。嫌なら、マスター命令で無理矢理寝かせるけど。」

「ん・・・わかりました。おやすみなさい。」

「うん。おやすみ。」

そして、午前１１時を過ぎた。そろそろ誰かしら、起きてくるかと思っていると、予想通り誰か起きていた。

「レイ君、おはよう。」

「レイリス、おはよう。」

「レイ君、おはようや。」

起きてきたのは、魔法少女の3人だった。いい加減、少女って歳じゃないと思うけど。

「おはよう、3人とも。まずは、顔を洗ってこい。」

「「「は～い・・・」」」

3人に顔を洗うように言って、軽く食べる物の用意を始めた。そして、ちょうど、用意ができた頃に3人は戻ってきた。

「はい、少しでもいいから、食べておけ。」

「うん。」

「ありがとう。」

「いただきます。」

それにしても、酒を飲んだわけでもないのに、何で3人はこんなに調子が良くないんだ。ああ、もしかして、匂いに当てられたか？今更だけど、なのはの家族。桃子さんと士郎さんと美由希。そして、アリサにすずか。エイミィとその子供たちとアルフも来ていた。

その方々は、年が明けたらすぐに帰ってしまった。娘を置いて帰るなよと思った。それで、酒を飲む人数が多かったので、そこら中に酒の匂いが充満していた。たぶん、それで間接的に酔ったのかもしれないな。

「まぁ、初詣は午後からになるし、ゆっくりしてろ。」

12時になる頃には、全員起きてきた。みんなのケアをほとんど俺1人でやるはめになったのはいうまでもない。

「それじゃあ、出発するぞ。」

お昼は、食べずに初詣に行く事になっている。神社には、出店が出てるし、その後には翠屋に行く事になっているのでそれでよかった。

「着いたのはいいけど、混んでるな。」

さすが、新年と言う事でかなりの人が来ていた。最初は、みんなでお参りしてする予定になっているので、みんなでお願い事をした。そして、その後は少しの自由行動になった。

「それじゃあ、楽しみますか。」

それぞれのグループに別れて行動するはずなのだが、例によって俺の後にはなのは、フェイト、はやて、アリシア、アイン、シグナムが付いてきた。

たまに喧嘩したり、そのとばっちりが俺に来たりといろいろ大変だったが、そんな光景を見ていると、安心した。今年を良い年になればいいな。

新年特別記念（後書き）

はい、Ｔｈｅａｔｅｒです。

あけましておめでとうございます。

出来が悪い。いつも、こんな事を言って申し訳ない。
次回から、通常の更新に戻ります。

では、次回の話で会いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8466t/

魔法少女リリカルなのは〜Last Wizard〜

2012年1月1日18時50分発行